

広島城跡国保会館地点

—広島市中区東白島町所在—

2007

財団法人広島市文化財団

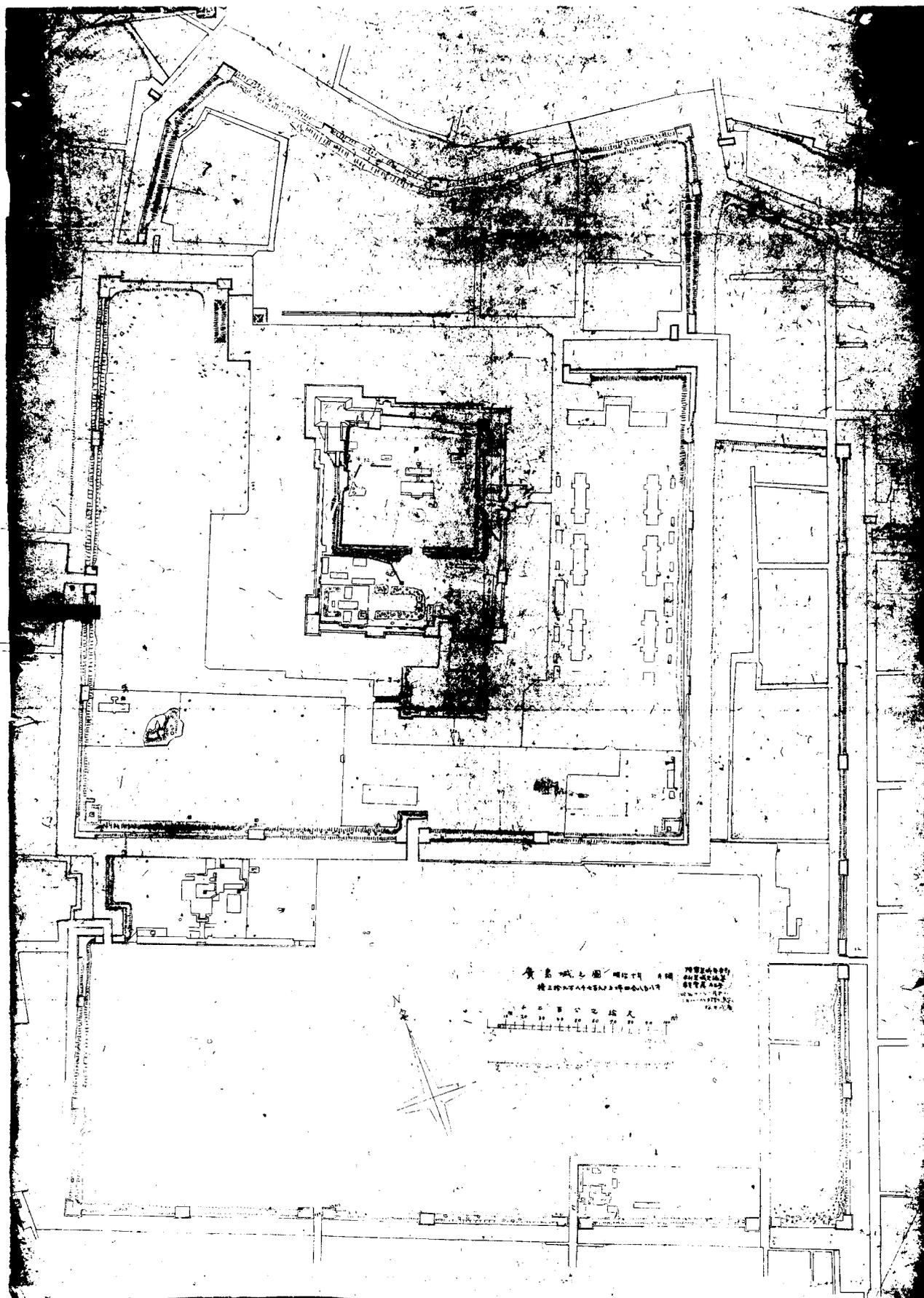
株式会社島田組



調査地点周辺



調査地点



「広島城之図」(坪井欣也氏蔵)

は し が き

広島城跡の北東部にあたる東白島地区は、江戸時代には武家屋敷が立ち並んでいたことが様々な記録に残されていますが、現在は日本郵政公社中国支社やK K R広島などのビルが林立しており、堀や櫓台を除き、広島城跡に伴う遺構群の大半は失われたものと考えられてきました。ところが、本調査地点より西にわずか130 mしか離れていない西白島町に位置する広島市立基町高等学校の新築工事に伴って平成9年度に実施された発掘調査で、武家屋敷群が良好な状況で遺存していることが明らかになりました。さらには平成15年度に実施した中区八丁堀の国土交通省太田川河川事務所の新築工事に伴う調査でも金箔瓦に代表される貴重な遺物群と極めて良好な遺構群が確認されました。これによってビルがところ狭しと立ち並ぶ市街地においても、戦後も大きな改変を受けることなく、その地下に江戸時代の遺構群が残されていることが判明したのです。

今回、国保会館建設工事に伴い発掘調査を行った場所は、江戸時代には広島城内堀と外堀にはさまれた「北の郭」と呼ばれていた地域の東端にあたります。調査面積は約1,320 m²でしたが、近世の様々な遺構や遺物が出土し、当時の広島の様子を知る上で貴重な資料を得ることができました。この報告書が少しでも多くの方々に活用され、郷土の歴史や文化について理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々並びに調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年6月

財団法人広島市文化財団
株式会社島田組

例 言

- 1 本書は、広島市中区東白島町において、広島県国民健康保険団体連合会の国保会館建設工事に伴い平成18年度に実施した広島城関連遺跡及び近代の軍関連遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は広島県国民健康保険団体連合会の委託を受けた株式会社島田組が、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課の指導のもと実施した。
- 3 現地調査は平成18年6月1日から10月6日まで行った。
- 4 本書は財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課の指導のもと川田秀治が編集・執筆を行った。Vのまとめは各担当者が執筆した。文責は末文に記した。
- 5 遺物実測の一部は株式会社イビソクに委託し、デジタル実測は株式会社シン技術コンサルに委託して行った。
- 6 遺物の写真撮影は川田秀治と株式会社摂陽文化財研究所が行った。
- 7 本報告書の挿図等に使用した遺構表記記号は以下のとおりである。
SK：土坑 SV：溝状遺構 SB：建物跡 SE：井戸 SA：柵列 SX：その他の遺構
- 8 本文中の遺物数は接合を行った後のものである。
- 9 遺構の写真測量・図面作成は株式会社テクノプランニングに委託して行った。
- 10 遺物の科学分析は有限会社武蔵野文化財修復研究所に委託して行った。
- 11 第1・2図は、広島市都市整備局都市計画課発行の地形図（平成15年3月修正）を複製した。
- 12 巻頭図版2は坪井欣也氏所蔵のものである。
- 13 本調査で得られた資料は、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目 次

I はじめに	7
II 位置と歴史的環境	11
III 調査の概要	17
IV 遺構と遺物	
1 近現代以降	19
2 近世遺構 1	32
3 近世遺構 2	42
4 近世遺構 3	55
V まとめ	193
付編 遺物科学分析	205

挿 図 目 次

第1図 広島城跡調査地点分布図	8	第26図 SV5他 実測図	113
第2図 調査地点周辺図	9	第27図 P104 実測図	115
第3図 調査区割図	15	第28図 近世遺構3遺構配置図	117
第4図 近現代以降遺構配置図	69	第29図 SA1・SK123他 実測図	119
第5図 SB1他 実測図	71	第30図 SA1・SK111他 実測図	121
第6図 SK4他 実測図	73	第31図 SA1・SV8他 実測図	123
第7図 SK17 実測図	75	第32図 SA2他 実測図	125
第8図 SK24・25 実測図	77	第33図 SA1・2他 実測図	127
第9図 焼土土坑群他 実測図	79	第34図 SK107他 実測図	129
第10図 近世遺構1遺構配置図	81	第35図 SK114他 実測図	131
第11図 SB4他 実測図	83	第36図 SK117他 実測図	133
第12図 SK65他 実測図	85	第37図 P130他 実測図	135
第13図 SK36他 実測図	87	第38図 P113他 実測図	137
第14図 SK48他 実測図	89	第39図 調査区横断トレンチ断面図	139
第15図 SK51他 実測図	91	第40図 調査区断面図	141
第16図 SV4他 実測図	93	第41図 遺構配置図	143
第17図 SK75・89 実測図	95	第42図 時代別遺構配置図(1)	145
第18図 近世遺構2遺構配置図	97	第43図 時代別遺構配置図(2)	147
第19図 SK55・63 実測図	99	第44図 時代別遺構配置図(3)	149
第20図 SE1他 実測図	101	第45図 時代別遺構配置図(4)	151
第21図 SV6他 実測図	103	第46図 SV2出土遺物	153
第22図 SK47他 実測図	105	第47図 SK34出土遺物	154
第23図 SK80他 実測図	107	第48図 SK36～38出土遺物	155
第24図 SK77他 実測図	109	第49図 SK39出土遺物	156
第25図 SK100他 実測図	111	第50図 SK47・50出土遺物	157

第51図	SK51出土遺物 (1) ……………	158	第68図	SK65出土遺物 (7) ……………	175
第52図	SK51出土遺物 (2) ……………	159	第69図	SK65出土遺物 (8) ……………	176
第53図	SK51出土遺物 (3) ……………	160	第70図	SK65出土遺物 (9) ……………	177
第54図	SK51出土遺物 (4) ……………	161	第71図	SK65出土遺物 (10) ……………	178
第55図	SK51出土遺物 (5) ……………	162	第72図	SK68・70・80出土遺物 ……………	179
第56図	SK51出土遺物 (6) ……………	163	第73図	SK81・82・89出土遺物 ……………	180
第57図	SK51出土遺物 (7) ……………	164	第74図	SK114・115出土遺物 ……………	181
第58図	SK54出土遺物 ……………	165	第75図	SK117出土遺物 ……………	182
第59図	SK54・SK63出土遺物 ……………	166	第76図	SK118・119・SE1出土遺物 ……	183
第60図	SK64出土遺物 (1) ……………	167	第77図	SK120・P129 ・SV8～11出土遺物……………	184
第61図	SK64出土遺物 (2) ……………	168	第78図	SV10出土遺物 ……………	185
第62図	SK65出土遺物 (1) ……………	169	第79図	銭貨・煙管出土遺物 ……………	186
第63図	SK65出土遺物 (2) ……………	170	第80図	「広島城之図」との合成図 ……	194
第64図	SK65出土遺物 (3) ……………	171	第81図	調査地周辺の絵図 ……………	196
第65図	SK65出土遺物 (4) ……………	172	第82図	遺構と遺物の分布 ……………	199
第66図	SK65出土遺物 (5) ……………	173			
第67図	SK65出土遺物 (6) ……………	174			

付 表 目 次

表-1	陶磁器観察表……………	187	表-6	軒平瓦観察表……………	191
表-2	土師質瓦質土器観察表……………	190	表-7	鬼瓦ほか観察表 ……………	192
表-3	土製品・土人形観察表 ……………	191	表-8	金属製品観察表……………	192
表-4	軒丸瓦観察表……………	191	表-9	石製品観察表……………	192
表-5	丸瓦観察表……………	191			

図 版 目 次

巻頭図版 1	調査地点遠景		h	SK15 (南より)	
巻頭図版 2	寛永年間広島城下図		図版 4 a	SK17 検出状況 (東より)	
図版 1 a	近現代以降全景 (西より)		b	SK17 南北断面 (東より)	
	b 近現代以降全景西側 (北より)		c	SK17 (東より)	
図版 2 a	SB2・3 検出状況 (南より)		d	SK18 (南より)	
	b SB2・3 検出状況 (北より)		e	SK8 (南より)	
図版 3 a	SK1 礫検出状況 (西より)		f	SK10 (南より)	
	b SK1 東西断面 (南より)		g	SK11 東西断面 (南より)	
	c SK2 礫検出状況 (西より)		h	SK11 (南より)	
	d SK2 (東より)		図版 5 a	SK12 (南より)	
	e SK3 礫検出状況 (西より)		b	SK14 東西断面 (北より)	
	f SK3 (南より)		c	SK14 (南より)	
	g SK4 (南より)		d	SK20 (西より)	

- 図版 6 a SK21 南北断面 (東より)
b SV3 西部 (西より)
- 図版 7 a SV1・SV2 (北より)
b SV1・SV2 (南より)
- 図版 8 a 近世遺構 1 全景 (東より)
- 図版 9 a SB5 (北より)
b SB6 (南より)
- 図版 10 a SB5・6 (北より)
b SB6 - P8 (東より)
c SK26 (南より)
d SK28 (西より)
e SK29 (南より)
- 図版 11 a SK30 (南より)
b SK31 (西より)
c SK32 (東より)
d SK33 (南より)
e SK34 (南より)
f SK35 (東より)
g SK36 (東より)
h SK37 (北より)
- 図版 12 a SK39 (北より)
b SK40 (南より)
c SK41 (西より)
d SK42 (西より)
e SK44 (北より)
f SK46 (南より)
g SK47 (北より)
h SK48 礫検出状況 (北より)
- 図版 13 a SK51 東西断面 (北より)
b SK51 (南より)
c SK52 (北より)
d SK53 (北より)
e SK54 (東より)
- 図版 14 a SV4 (西より)
- 図版 15 近世遺構 2 全景 (東より)
- 図版 16 a SK55 (東より)
b SK57 (北より)
c SK59 (北より)
d SK61 (南より)
e SK62 (東より)
- 図版 17 a SK63 (東より)
b SK64 (北より)
- 図版 18 a SK65 (北より)
b SK65 遺物出土状況 (北東より)
- 図版 19 a SK65 (東より)
b SK65 (西より)
- 図版 20 a SK66 (東より)
b SK67・P81 (南より)
c SK68 (南より)
d SK69 (西より)
e SK70 (南より)
- 図版 21 a SK71 (南より)
b SK72 (北より)
c SK75 (東より)
d SK76 (北より)
e SK77 (東より)
- 図版 22 a SK79 東西断面 (北より)
b SK80・81・82 (北より)
- 図版 23 a SK84 (北より)
b SK90 (西より)
c SK91 (西より)
d SK92 (西より)
e SK94 (南より)
f SK95 (西より)
g SK96 (北より)
h SK97 (南より)
- 図版 24 a SV6・SV7 (南より)
b SE1 上部分 (東より)
c P73 (北より)
d P74 (北より)
e P93 (東より)
f P94 (北より)
g P102 (北より)
- 図版 25 近世遺構 3 全景 (東より)
- 図版 26 a SA1 - P1 (南より)
b SA1 - P2 (南より)
c SA1 - P3 (南より)
d SA1 - P5 (北より)
e SA1 - P6 (北より)
f SA1 - P12 (南より)
g SA1 - P13 (南より)
h SA1 - P14 (南より)
- 図版 27 a SA1 - P17 (南より)
b SA1 - P21・P20 東西断面(南より)

- c SA1 - P21・P20 (北より)
- d SA1 - P23・P142 (東より)
- e SA1 - P24 (南より)
- f SA1 - P25 (北より)
- g SA1 - P26 (北より)
- h SA1 - P27 (北より)
- 図版 28 a SA1 - P28 (南より)
- b SA1 - P29 (南より)
- c SA1 - P31 (南より)
- d SA2 - P1 東西断面 (北より)
- e SA2 - P2 (南より)
- f SK102 (南より)
- g SK103 (南より)
- h SK104 (東より)
- 図版 29 a SK105 (北より)
- b SK106・SA2 - P1 (北より)
- c SK107 (西より)
- d SK108 (南より)
- e SK109 (東より)
- f SK110 (南より)
- g SK111 (北より)
- h SK112 (北より)
- 図版 30 a SK113 (南より)
- b SK115 (北より)
- c SK122・P137 (南より)
- d SK123 (東より)
- e SK125 (南より)
- 図版 31 a SK117 礫検出状況 (西より)
- b SK117 (北より)
- 図版 32 a SK119 東西断面 (北より)
- b SK119 (北より)
- 図版 33 a SV9 (西より)
- b SV10 (東より)
- 図版 34 a SV11 南北断面 (東より)
- b P105 (南より)
- c P110 (南より)
- d P111 (南より)
- e P120・P121 (東より)
- f P129 遺物出土状況 (南より)
- g P129・SK121 (南より)
- h P136 (北より)
- 図版 35 a P138 (南より)
- b P139 (北より)
- c P141 (東より)
- d P143 (南より)
- e 調査区東壁面1 (西より)
- 図版 36 a 調査区東壁面2 (西より)
- b 調査区東壁面3 (西より)
- 図版 37 a 調査区西壁面1 (東より)
- b 調査区西壁面2 (東より)
- 図版 38 a 調査区西壁面3 (東より)
- b 調査区北壁面1 (南より)
- 図版 39 a 調査区北壁面2 (南より)
- 図版 40 a SV2 (磁器)
- b SK34 (陶磁器・瓦)
- c SK36・37 (陶磁器・土器)
- 図版 41 a SK38 (陶磁器)
- b SK39 (陶磁器・土器)
- c SK47 (陶磁器・土器・瓦)
- d SK50 (陶磁器・土器)
- e SK51 (磁器)
- 図版 42 a SK51 (陶器)
- b SK51 (土器)
- 図版 43 a SK54 (陶磁器・焼締め)
- b SK63・64 (陶磁・土器・瓦)
- 図版 44 a SK65 (磁器)
- b SK65 (陶器)
- 図版 45 a SK65 (焼締め・他)
- b SK65 (土器)
- 図版 46 a SK65 (目板瓦)
- b SK65 (鬼瓦)
- 図版 47 a SK68 (陶磁器・他)
- b SK70 (土器)
- c SK80～82 (陶磁・砥石・他)
- d SK89 (陶磁器)
- 図版 48 a SK114 (陶器・土器)
- b SK115 (陶磁器・土器)
- c SK117 (陶磁器・焼締め・瓦)
- d SK118 (陶磁器・焼締め)
- 図版 49 a SK119・SE1 (陶器)
- b SK120・P129 (土器・他)
- c SV8・9 (陶磁器・焼締め)
- d SV10・11 (陶器・焼締め・瓦)
- 図版 50 SK11 他 (煙管)

I はじめに

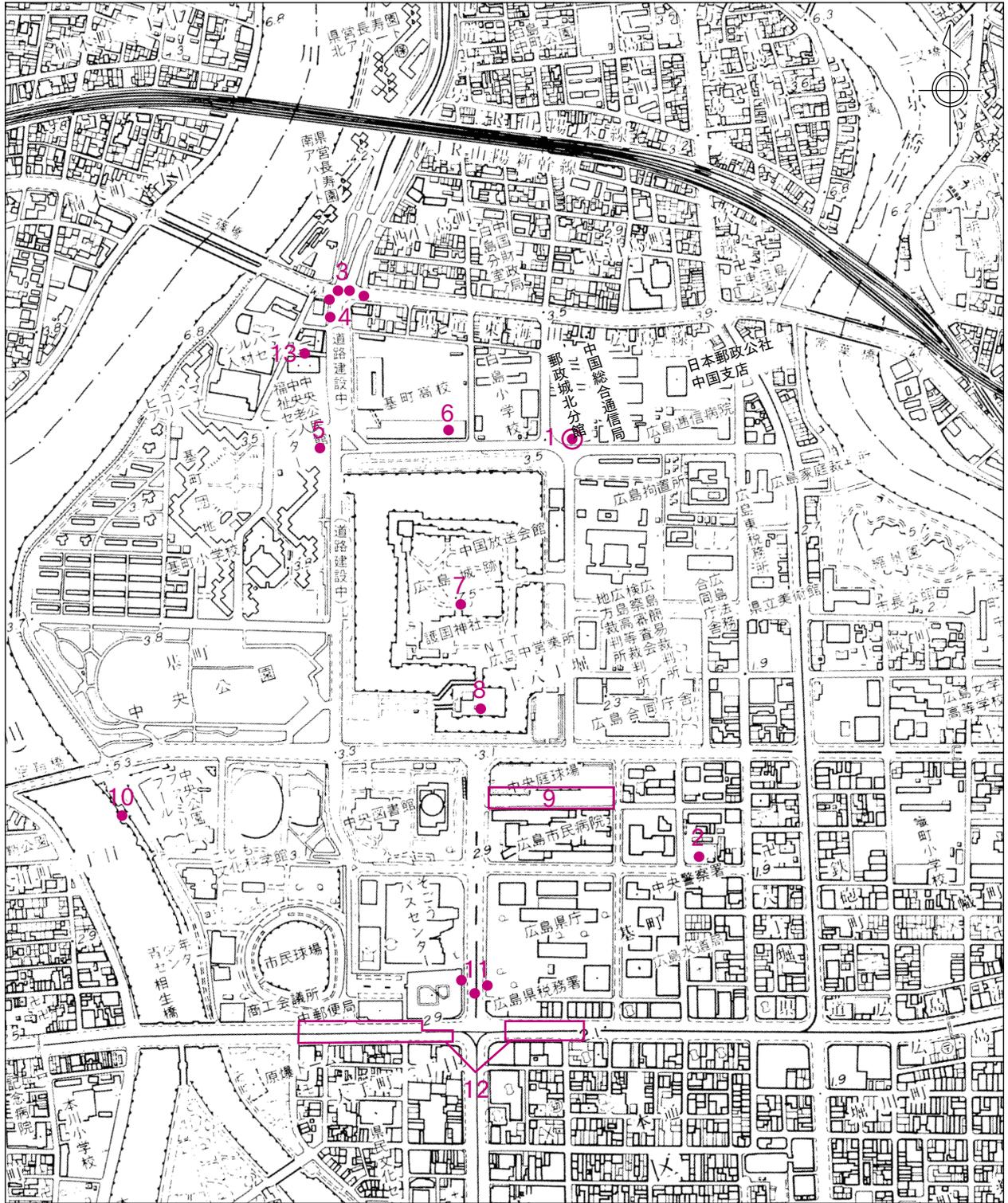
広島市教育委員会生涯学習課（以下「教育委員会」。平成18年度からは市民局文化スポーツ部文化財担当）は、平成17年10月25日に広島県国民健康保険団体連合会から、同会敷地内における埋蔵文化財の有無並びにその取り扱いについての照会を受けた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（広島城跡）に含まれていたため、教育委員会では試掘調査を実施したところ、少なくとも3時期の近世の遺構面を確認し、その旨を平成18年1月4日回答した。その後、広島県国民健康保険団体連合会が当該地を同会会館建設予定地としたことから、同会と当該遺跡の取り扱いについて協議を重ねたが、計画の変更は困難であるとの結論に達し、記録保存の措置を講ずることとなった。発掘調査は、広島県国民健康保険団体連合会から発掘調査業務を受託した株式会社島田組が、発掘調査の管理・指導業務は財団法人広島市文化財団がそれぞれ行うこととし、現地調査を平成18年6月から10月にかけて、報告書の作成を同年12月から平成19年3月にかけてそれぞれ実施した。発掘調査の関係者は、下記のとおりである。

調査委託者	広島県国民健康保険団体連合会
調査主体	財団法人広島市文化財団（調査管理）
調査実施	株式会社島田組
調査担当者	脇坂 光彦（広島市文化財団） 川田 秀治（株式会社島田組文化財調査室室長） 安田 貴憲（株式会社島田組文化財調査室調査員）
調査補助担当者	大塚 一彦、杉山 美穂、萩原 美香、深谷 泰雪、村上 奈々美、結城 香
調査補助員（順不同）	野間 勝信、高村 義則、石本 浩子、曾我 友里、原田 崇弘、霧山勝行、 柴田 清、明石 正蔵、吉本 明男、山村 雄三、御堂河内 幸夫、増田 孝之、 高谷 英吉、小谷 日出雄、山本 繁征、武田 正俊、土橋 勝次郎、 三宅 忠義

調査をすすめるにあたっては、広島県国民健康保険団体連合会、総務省中国総合通信局、株式会社中国放送、廿日市市教育委員会に、ご配慮とご協力をいただいた。また、発掘調査においては、社団法人広島市シルバー人材センター、有限会社たから美装にご協力をいただいた。

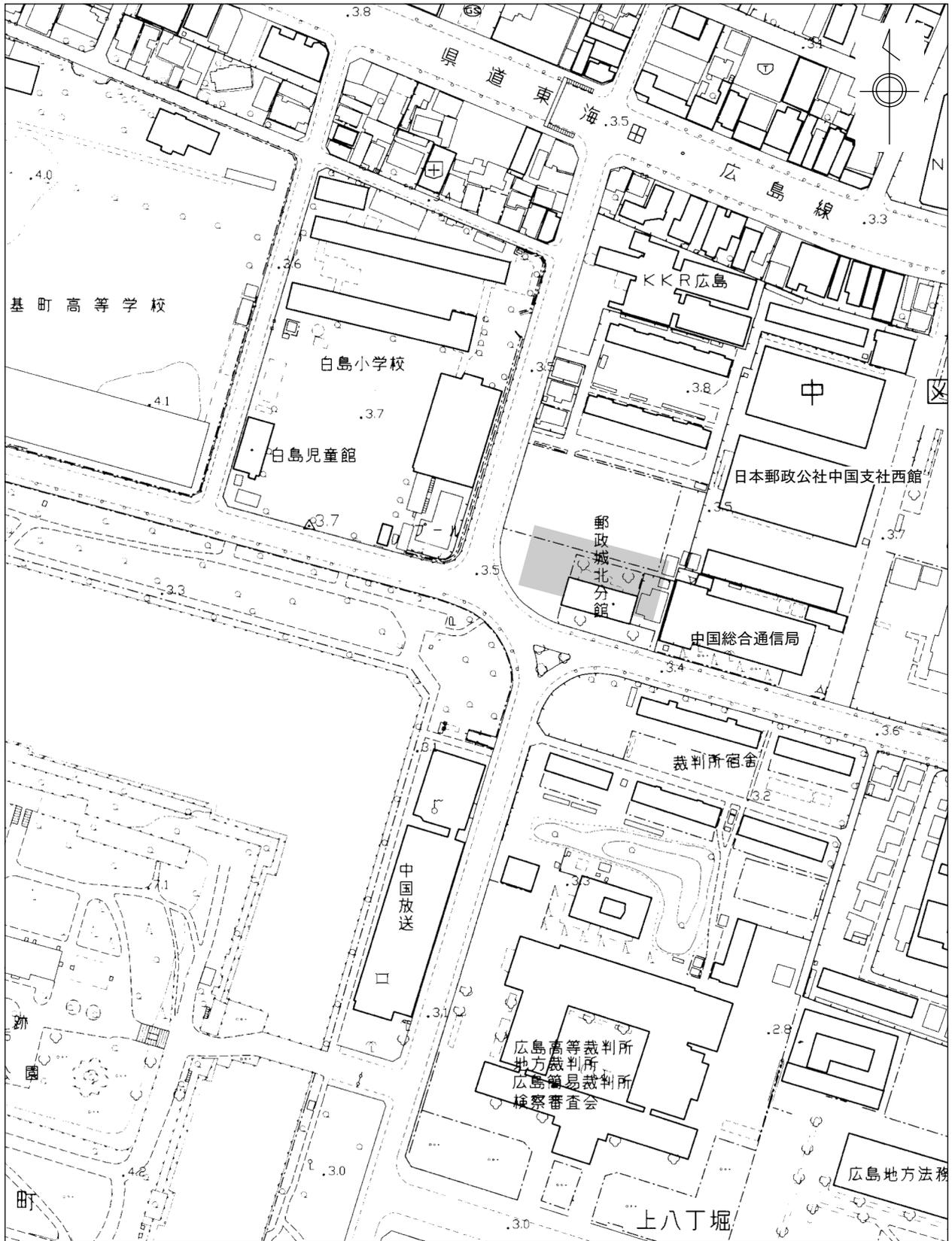
報告書の作成にあたっては、次の諸機関、諸氏から広範なご教示をいただいた。

陶磁器についてはNPO法人CUBIS文化財研究員 秋岡 礼子氏、有限会社フジテクノ主任調査員 井汲 隆夫氏、砥部焼については愛媛県歴史文化博物館主任学芸員 石岡ひとみ氏からご教示いただいた。また、砥部町および砥部焼伝統産業会館からは、巻末における胎土分析の資料をお貸しいただいた。胎土分析にあたっては、東京大学埋蔵文化財調査室 原 祐一氏、有限会社武蔵野文化財修復研究所 小泉 好延氏にご配慮とご教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。



1. 本地点
2. 太田川河川事務所地点
3. 城北駅北(旧西白島)交差点地点(外堀跡)
4. 城北駅北(旧西白島)交差点地点(櫓跡)
5. 基町高校前交差点地点
6. 基町高校グラウンド地点
7. 本丸
8. 二の丸
9. 中央庭球場地点
10. 外郭櫓台跡
11. 県庁前地点
12. 紙屋町・大手町地点
13. 西白島地点

第1図 広島城跡調査地点分布図 (S = 1 : 10,000)



第2図 調査地点周辺図 (S = 1 : 2,500)

II 位置と歴史的環境

広島城跡国保会館地点は広島市中区東白島町 19 - 15 に所在する。本遺跡は広島城に関連する遺跡であり、広島城を中心とした位置では内堀の北東隅部分にあたる。周辺地域は中国山地から流れる大田川によって形成された三角州域であり、広島城は、その中でも最も大きな「島」を利用して構築された平城である。「知新集」¹⁾によれば、「箱島ハ、白島ノ古名にして、広島土地往古海中なりし時も、此のあたりのミは神代よりの一山箱の如く方なりける故」とあり、調査地点が「箱島」あるいは「白島」という「島」の付く地名を冠しているのも大きな三角州を示した当時の名残であろう。

一方で、このような三角州での築城は洪水と洪水対策に悩まされることになる。元和三（1617）年の大洪水など文献資料や城郭関連の専門書などで洪水の記述が度々みられ、修復などに苦心していた様子が窺える。しかし、このように洪水が頻発すると予想される三角州地帯にあえて築城する利点は数多くあったようで、広い地域の確保、縄張りの容易性、河川・海路を利用した築城資材運搬、瀬戸内海における流通の利便性など、築城に限らず築城後にも地理・地形的な利点が大きく、広島城はこれらのことを熟考して築城されたと云われている。

広島城に関連する歴史的背景などは各種文献資料や歴史専門書に詳しく記載されており、詳細は専門書に譲るとして、ここでは広島城と関連すると思われる調査地点周辺を中心とした沿革を述べることとする。

歴史的に広島城は毛利氏時代、福島氏時代、浅野氏時代の三時代に分けられるのは、よく知られているところである。毛利氏時代は毛利元就の孫である毛利輝元による天正十七（1589）年頃の堀などの普請がその始まりとされている。毛利輝元による広島城築城の契機となったのは、諸説あるが一般的には、天正十七（1589）年7月、豊臣秀吉の招きに応じて小早川隆景・吉川広家らと京都聚楽第で歓待を受けた後、秀吉自らの案内で大阪城を見学し、その感激が築城の動機になったと云われている。また、縄張りは京都聚楽第を参考にしたようである。²⁾

天正年間から行われた毛利氏時代の広島城の築城は慶長三（1598）年頃には城の陣容がほぼ完成したものと考えられており、文禄元（1592）年には朝鮮出兵の指揮をとるために九州へ向かう秀吉が、途上で広島城に立ち寄り、城郭の出来栄えに賞賛している記述が『山県氏覚書』など複数の史料で確認されている。築城は慶長五（1600）年の関ヶ原の戦いに敗れて転封される直前まで整備は続けられていたようである。³⁾

この時代の縄張りが知られる絵図としては諸説指摘がなされているが、文禄三（1594）年から慶長二（1597）年頃の様子を描いたとされている『芸州広島城町割之図』と「知新集」所収の図で『毛利時代城郭内の図』⁴⁾などがある。いずれの絵図も“北の郭”⁵⁾は存在しておらず、現在の城北通りにあたる部分の“搦手の外堀”⁶⁾は大田川と京橋川をつなぐ自然流路となっている。

調査地点にあたる内堀の北東隅部分は『芸州広島城町割之図』では空白で屋敷の記載は認められない。また、『毛利時代城郭内の図』では「松原」と記されているのみである。

福島氏時代は関ヶ原の戦いの功勞によって尾張清洲城主であった福島正則が広島城主となった慶

長五（1600）年に始まる。正則は入城後、早い時期から広島城を含む領地内の改修・改変に着手している。特に広島城の改修は大規模なもので本丸・二の丸の石垣修築をはじめ、外郭部には櫓や門・塀を廻らして一新するとともに、洪水被害に対処するために城北方面の堤防補強・“搦手の外堀”等の整備している。また、それと同時に城下町の整備も進めていたようで、この時期の大幅な改修・改編によって近世広島城の体裁がほぼ完成したと云われている。この様な広島城を含む積極的な領地内の整備が徳川家康の不興を買うこととなり、慶長十四（1609）年に謹慎している。福島正則が改易される元和五（1619）年から遡る2年前に元和三（1617）年に大洪水があり、広島城は本丸・二の丸をはじめ城内全域に深刻な被害を被ったが、石垣の新規築造や無許可の修復などを禁じた『武家諸法度』の規定があったことから直ちに修復には着手できなかった。福島正則は修復許可の取次ぎを届け出たが、あまりの遅れに將軍の裁許を待たず修復を断行してしまい改易に追い込まれている。

文献史料では広島城を含む領地内の改修・改変の記録が残されているが、福島氏時代とされる絵図は非常に少ないようで、ひとつには「知新集」所収の図である『福島時代城郭内の図』⁷⁾があり、慶長十八（1613）年以前のもので云われている。この図も調査地点にあたる内堀の北東隅部分では前述した『毛利時代城郭内の図』と同様に城北部分には「松原」と記されているのみである。一方、表題に年号を記す『広島絵図（元和五年御入国之砌御城下絵図）』⁸⁾も存在する。この絵図については検討課題が多く指摘されるものであるが、調査地点付近を含めて堀や道など各所の寸法が記載されていることから参考としておきたい。同絵図の調査地点をみると西側の道の寸法が「切道筋九十三尺」とある。これは後述する『安芸国広島城所（絵図）』（『正保絵図』）に記されている寸法と同様であった。

浅野氏時代は福島正則改易後の元和五（1619）年、和歌山城主浅野長晟の入封以降、江戸時代を通じ、明治に至るまでの12代、約250年間続いている。福島正則が改易に追い込まれた『武家諸法度』は江戸時代中期頃まで度々発布されており、原則として石垣の新規築造や無許可の修復などは禁じられていた。このため、福島氏から受け継いだ広島城は殆ど改変されることはなく明治維新まで維持されている。ただ、福島正則改易後も洪水等の災害は繰り返し発生しており、幕府の許可を得た修復は行われている。主だった災害は元和六（1620）年の大雨・寛永元（1624）年の大地震・承応二（1653）年の大風雨と洪水・元禄十五（1702）年の大風雨と洪水・宝永四（1707）年の地震・宝暦八（1758）年の大火・安政元（1854）年の地震などで石垣・櫓・塀・堤などに被害を受けたため修復を行っている。

浅野氏時代初期の絵図としては『寛永年間広島城下図』と『寛永年間広島城下絵図』⁹⁾がある。『寛永年間広島城下図』は寛永二（1625）年から同九（1632）年頃と推定されるもので『寛永年間広島城下絵図』も同じ系統の原図を写したものと考えられている。両絵図ともに“北の郭”・“搦手の外堀”が既に記されており、櫓や塀なども完備した城郭の構えが整っている。調査地点にあたる内堀の北東隅部分では居住の屋敷割がなされ「長谷川久太郎」・「浅野平十郎」の名前がみられる。寛永年間から少し時代の下った史料では正保三（1646）年の『安芸国広島城所（絵図）』¹⁰⁾があり『正保絵図』として知られている。この絵図は幕府が定めた基準に基づいて諸藩に提出を命じたも

ので、広島城に関する最も信頼性が高い最古の絵図と考えられている。屋敷地には個人名ではなく「侍町」のみの表記になっているが、本丸を始め・石垣・櫓・塀などの様子が丁寧に描かれており、各所の寸法も記載されている。調査地点をみると西側の道の寸法が「切小路間（走？）九十三尺」とあり、道幅約28mであったことが記されている。江戸中期では寛保三（1743）年から宝暦四（1754）年頃の様子を描いた『家中屋敷割図』（現代の加筆による仮題）¹¹⁾がある。“北の郭”では表松原の侍屋敷が撤去され火災の類焼を防ぐための、いわゆる「火よけ地」となっている。調査地点の屋敷地には「伴十太夫」と「寺尾平八」の名前がみられる。江戸末期前後では元治元（1864）年頃の作成と考えられている『御家中屋敷絵図重宝記』と明治二（1869）年頃の作成と考えられている『家中屋敷割図』¹²⁾がある。両図ともに“北の郭”の表松原の「火よけ地」が練兵場である「松原講武所」となっている。調査地点の屋敷地は『御家中屋敷絵図重宝記』では「浅野左織」・「弓削熊之介」に、『家中屋敷割図』では「浅野左織」・「浅野昌克」となっている。

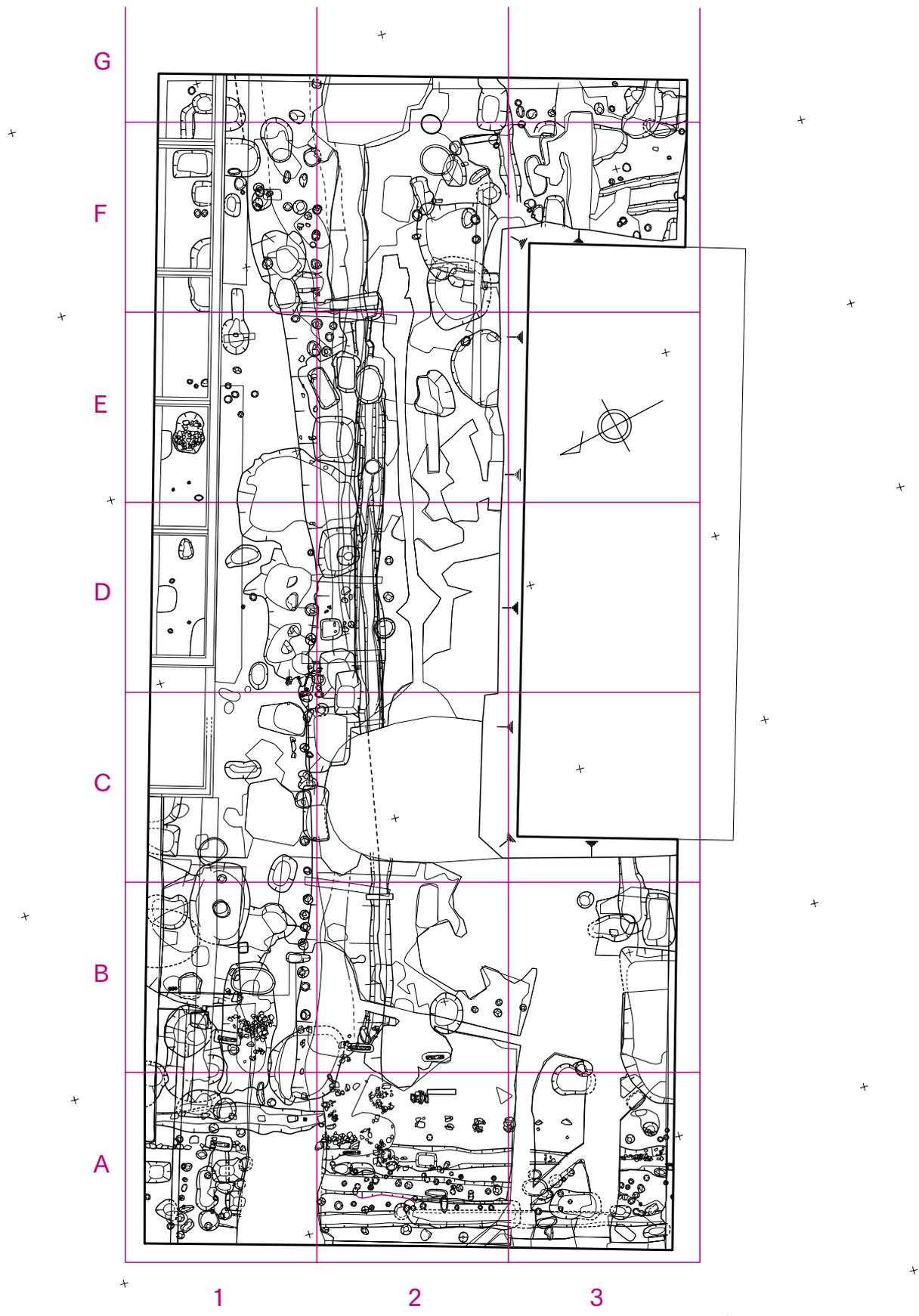
明治以降、広島城は本来的な中枢機能を失い、明治四（1871）年に広島城本丸に鎮西鎮台第一文營の設置に始まり、同五（1874）年、広島城内の櫓・門の解体、同八（1874）年、広島城内に練兵場を設置するなど次第に変貌を遂げていったようである。¹³⁾この頃の様子を示したものに陸軍による明治十（1876）年測量の『広島城之図』¹⁴⁾がある。この図は、前述してきた中では最も精度が高いと考えられるもので“北の郭”部分の区画の配置は『家中屋敷割図』など幕末期の絵図とほぼ同様である。調査地点の屋敷地については、この段階で既に軍の練兵場が設置されていると考えられることから区画のみの表記になったと思われる。

昭和になって同十一（1936）年は調査付近に新たに陸軍幼年学校が作られるが正確な位置を示す史料はない。同二十（1945）年には国宝指定として現存していた広島城の天守閣をはじめ数棟の建物も原子爆弾により灰燼に帰してしまう。戦後の広島城は昭和二十八（1953）年に城跡が国の史跡指定を受けたことを契機に天守閣をはじめ順次、復元・整備が進められ現在に至っている。

注

- 1) 広島市役所編『新修広島市史』第六巻資料編その一 1959
- 2) 広島市中央図書館編『広島城下町絵図集成』1990
- 3) 2) と同
- 4) 2) と同
- 5) 本丸の北側に位置する郭について、財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀西白島交差点地点』1993、財団法人広島市文化財団『広島城跡西白島地点』2005 で便宜上、呼称された仮称を用いている。
- 6) 5) と同様に本丸の北側に位置する堀について、財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀西白島交差点地点』1993、財団法人広島市文化財団『広島城跡西白島地点』2005 で便宜上、呼称された仮称を用いている。
- 7) 2) と同
- 8) 2) と同
- 9) 2) と同
- 10) 2) と同

- 11) 2) と同
- 12) 2) と同
- 13) 広島市教育委員会編『史跡広島城跡史料集成』第一巻 1989
- 14) 坪井欣也氏所蔵



第3図 調査区割図 (S=1 : 300)

0 5m

Ⅲ 調査の概要

1 調査の概要

本遺跡は広島城内堀、北東隅部の外側に位置する。調査区を含む周辺は古地図などの歴史史料によれば、近世の武家屋敷地ならびに近代の練兵場・陸軍地方幼年学校などの所在が窺える。調査以前は日本郵政公社の旧郵政城北分館が既存しており、今回国保会館建設に伴い東西 61.6m、南北 27.6m の内の既存構築物範囲を除く約 1,320 m²の発掘調査を行った。

調査にあたっては、まず表土を含む近代以降の整地層約 50 cmを重機で掘削した。この段階で硬質の整地層・石列・焼土などが確認され、出土遺物なども含めて近代と近世の遺構が複合していると判断し遺構検出と精査および攪乱除去作業に移行した。

遺構面は土管や浄化槽などの現代の既設埋設物が比較的多くみられ、少なくとも上面部分の遺存状況については安定したものではなかったが、建築物の密集している市街地で近世・近代の遺構の存在を示すことのできる量的な資料は十分に得られたと思われる。

遺構は廃棄土坑、溝状遺構、建物跡、柵列、井戸、その他の遺構が確認された。遺構番号は発掘調査時に確認順に通し番号を付けた後、種別遺構ごとに新たに記号番号を付した。また、発掘調査では攪乱除去と遺構確認を並行して行っており、部分的には遺構確認のレベルに大きな差が生じているものもあるが、記号番号も基本的には確認された順から付しているため時期の前後などは考慮していない。

遺物は陶磁器・土師質瓦質土器・瓦・金属製品・石製品・木製品・銭貨などが出土している。遺物は遺構ごとに述べている。

IV 遺構と遺物

1 近現代以降

基準とした層位は TP2.94m 付近に点在する 2～15 cm の焼土層の直下である。検出した遺構のほとんどは近代以降の廃棄土坑・建物跡が主体である。

(1) 建物跡

SB1 A-1～3

本建物跡は調査区西端部に位置する。検出状況から本建物跡は調査区外の北および南方向に延びていると考えられる。既設埋設物などの攪乱等による桁行の寸断が複数箇所みられるが、現状で南北桁行 27m、東西梁行 1.5m の 15 間×5 尺分を確認した。各柱穴は溝状遺構の SV1 を囲うように平行に配置している。

桁行の柱間寸法は心心の計測で 1.8m、梁行は 1.5m である。柱穴は 19 個確認した。

P1 A-1

本柱穴は調査区西側の北壁面に近接しており、完掘には至っていない。規模は長軸約 0.32m、短軸約 0.28m、深さ約 0.68m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P2 A-1

規模は長軸約 0.26m、短軸約 0.26m、深さ約 0.64m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P3 A-1

規模は長軸約 0.24m、短軸約 0.24m、深さ約 0.48m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P4 A-2

本柱穴は北側が攪乱によって失われている。また、P35 と切り合っており、切り合い関係から本柱穴に対して P35 が先行する。現状の規模は長軸約 0.27m、短軸約 0.24m、深さ約 0.4m 以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P5 A-2

規模は長軸約 0.25m、短軸約 0.25m、深さ約 0.62m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P6 A-2

規模は長軸約 0.24m、短軸約 0.20m、深さ約 0.51m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P7 A-2

本柱穴は西側で近代土坑と切り合っており、上部が遺存していない。また、SK26 と切り合っており、切り合い関係から本柱穴に対して SK26 が先行する。規模は長軸約 0.33m、短軸約 0.31m、深さ約 0.54m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P8 A-2

規模は長軸約 0.25m、短軸約 0.20m、深さ約 0.37m を測る。平面形は楕円形を呈する。本柱穴は SK26 と切り合っており、切り合い関係から本柱穴に対して SK26 が先行する。遺物は出土しなかった。

P9 A-2

規模は長軸約 0.29m、短軸約 0.25m、深さ約 0.40m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴は SK26 と切り合っており、切り合い関係から本柱穴に対して SK26 が先行する。遺物は出土しなかった。

P10 A-3

規模は長軸約 0.24m、短軸約 0.22m、深さ約 0.52m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P11 A-1

規模は長軸約 0.28m、短軸約 0.22m、深さ約 0.48m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P12 A-2

規模は長軸約 0.25m、短軸約 0.22m、深さ約 0.18m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P13 A-2

規模は長軸約 0.24m、短軸約 0.23m、深さ約 0.48m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴は SV1 と切り合っており、切り合い関係から本柱穴に対して SV1 が先行する。遺物は出土しなかった。

P14 A-2

規模は長軸約 0.24m、短軸約 0.22m、深さ約 0.41m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P15 A-2

規模は長軸約 0.23m、短軸約 0.23m、深さ約 0.36m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P16 A-3

規模は長軸約 0.23m、短軸約 0.22m、深さ約 0.24m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P17 A-3

規模は長軸約 0.28m、短軸約 0.25m、深さ約 0.60m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P18 A-3

規模は長軸約 0.24m、短軸約 0.24m、深さ約 0.48m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴からは遺物は出土しなかった。

P19 A-2

規模は長軸約 0.25m、短軸約 0.21m、深さ約 0.34m を測る。平面形は円形を呈する。本柱穴から

は遺物は出土しなかった。

本建物跡からは遺物が出土しなかった。しかし、後述する近代以降の廃棄土坑である SK26 に先行していることから、本遺構も近代以降の建物跡である。

SB2 A-1

本建物跡は調査区西端部に位置する石組みである。検出状況から本建物跡は調査区外の北および南方向に延びていると考えられる。既設埋設物などの攪乱等による寸断が複数箇所みられるが、現状で南北方向に 11 石、約 5.3m を確認した。各石の法量は小口縦約 20 ～ 30 cm、小口横は 25 ～ 40 cm、控え約 15 ～ 30 cm である。小口面は西側に面している。背面栗石などの充填は認められない。出土状況から幕末～近代以降の建物跡と考えられる。

SB3 A-2

本建物跡は調査区西端側に位置する石組みである。北側の攪乱を挟んで SB2 とほぼ同軸上にある。検出状況から本建物跡は北方向に延びていたと考えられる。現状で南北方向に 4 石、約 2.0m を確認した。各石の法量は小口縦約 30 cm 前後、小口横は約 40 ～ 70 cm、控え約 35 ～ 40 cm である。小口面は西側に面している。背面栗石の充填が認められる。

(2) 土坑

SK1 A-1

本土坑は調査区西側の北壁面に近接しており、完掘には至っていない。確認された規模は長軸約 1.36m、短軸約 1.10m、深さ約 0.92m を測る。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。本遺構の南側には、ほぼ同じ形態の SK2 と SK3 が位置しており、建物跡のように遺構が連続する可能性も考えられたが、本報告では土坑として扱う。

本土坑内からは拳大から人頭大の多量の石と、磁器 49 点、陶器 106 点、焼締め 15 点、土師質瓦質土器 96 点、貝 25 点及び 60 点以上の瓦が出土した。磁器は肥前系の碗・皿・鉢などが主体で一部に瀬戸・美濃系の蓋、人工コバルトを用いた砥部系の碗などが混在する。陶器は関西系の碗、瀬戸・美濃系の鉢類、肥前系の鉢、産地不明の土瓶、行平鍋など。焼締めは備前系の甕、堺系の播鉢など。土師質瓦質土器は大甕や鉢類が出土した。廃棄年代は人工コバルトを用いた砥部系の碗がみられることから本土坑は幕末から明治初頭の廃棄と考えられる。

近接する SK2 と SK3 の関連では、陶器の瀬戸・美濃系の皿が SK2 と、土師質瓦質土器の鉢類が SK3 と遺構間接合する。また後述する SK2 と SK3 の遺物も遺構間接合することからほぼ同時期の廃棄土坑と捉えられる。

SK2 A-1

規模は長軸約 1.62m、短軸約 1.16m、深さ約 0.73m を測る。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。

本土坑内からは SK1 と同様に拳大から人頭大の多量の石と、磁器 69 点、陶器 89 点、焼締め 19 点、土師質瓦質土器 106 点、金属製品 1 点、石製品 2 点、ガラス製品 1 点、貝 47 点及び 40 点以上の瓦が出土した。磁器は肥前系の広東碗・皿・鉢など。陶器は関西系の土瓶、瀬戸・美濃系の碗・鉢

類、肥前系の碗、産地不明の碗・土瓶、行平鍋など。焼締めは備前系の甕・灰落とし、堺系の播鉢などがみられる。土師質瓦質土器は焜炉・火鉢・羽釜・焼塩壺蓋などがみられる。金属製品は釘、ガラス製品はワインボトルの底部、石製品は砥石の小片が出土した。SK2 と SK3 の遺構間接合の遺物は肥前系磁器の広東碗・外面青磁の小碗、産地不明の焼締め甕、土師質瓦質土器の羽釜である。本土坑の廃棄年代は遺構間接合関係にある、SK1 と同じく幕末から明治初頭の廃棄と考えられる。

SK3 A-1

本土坑の南側は攪乱を受けていたため全容は明らかではないが、SK1・2 とほぼ同じ形態であろう。確認された規模は長軸約 1.04m、短軸約 0.82m、深さ約 0.64m を測る。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。

本土坑内からはSK1・2と同様に拳大から人頭大の多量の石と、磁器48点、陶器57点、焼締め11点、土師質瓦質土器31点、石製品3点、貝8点及び30点以上の瓦が出土した。磁器は肥前系の広東碗・皿・鉢・蓋物・薄手酒盃、関西系の小杯など。陶器は関西系の碗、瀬戸・美濃系の鉢類、肥前系の碗・鉢、産地不明の鉢類・行平鍋など。焼締めは備前系の播鉢・甕、堺系の播鉢など。土師質瓦質土器は甕・火鉢・内耳土器A群（内耳部穿孔・非穿孔）・不明蓋などがみられる。石製品は砥石の小片が出土した。

本土坑の廃棄年代は遺構間接合関係にある、SK1・2 と同じく幕末から明治初頭の廃棄と考えられる。

SK4 A-1

調査区北西側に位置する。規模は長軸約 1.25m、短軸約 1.18m、深さ約 0.31m を測る。平面形は円形を呈する。

本土坑内からは磁器9点、陶器16点、焼締め1点、貝2点が出土した。磁器は肥前系の碗・皿・鉢・大瓶など。陶器は関西系の爛徳利、瀬戸・美濃系の水鉢、産地不明の中瓶・柄杓形容器など。焼締めは堺系の播鉢が出土した。

出土遺物から、本土坑の廃棄年代は幕末から明治初頭と考えられる。

SK5 A-2

調査区北西側に位置する。P9 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して P9 が先行する。規模は長軸約 0.40m、短軸約 0.24m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK6 A-2

調査区西側中央に位置する。SV1 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV1 が先行する。規模は長軸約 0.89m、短軸約 0.36m、深さ約 0.15m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK7 A-2

調査区西側中央に位置する。SV1・P21 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV1・P21 が先行する。規模は長軸約 0.38m、短軸約 0.26m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK9 A-2

調査区西側中央に位置する。SV1・P33と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対してSV1・P33が先行する。規模は長軸約1.08m、短軸約0.62m、深さ約0.33mを測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK13 B-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約0.95m、短軸約0.43m、深さ約0.16mを測る。平面形は楕円形を呈する。

本土坑内からは磁器50点、陶器6点、焼締め1点、土師質瓦質土器2点が出土した。磁器は砥部系の人工コバルトの碗・皿が主体で、一部に肥前系の皿など。陶器は産地不明の土瓶など。焼締めは備前系の播鉢など。土師質瓦質土器は土師皿などが出土した。

出土遺物から、本土坑の廃棄年代は幕末から明治初頭と考えられる。

SK17 F-2・G-2

調査区南側中央に位置する漆喰土坑である。規模は長軸約1.06m、短軸約0.97m、深さ約0.05mを測る。平面形は円形を呈する。遺構形態から便槽の可能性もある。

本土坑内からは磁器4点、陶器5点、土師質瓦質土器10点、瓦2点、貝2点が出土した。磁器は肥前系の碗・薄手酒盃、瀬戸・美濃系の碗など。陶器は肥前系の鉢、産地不明の皿・袋物など。土師質瓦質土器は内耳土器A群・焼塩壺身など。瓦は4点が出土した。

出土遺物から、本土坑の廃棄年代は幕末から明治初頭と考えられる。

SK18 D-2

調査区のほぼ中央に位置する。SV3と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対してSV3が先行する。規模は長軸約1.12m、短軸約1.04m、深さ約0.32mを測る。平面形は環状円形を呈する植栽痕である。

本土坑内からは磁器1点、金属製品6点、瓦6点、懐中時計1点が出土した。瓦には「瓦業組合」などを記したと思われる刻印が認められる。

出土遺物から、本土坑の廃棄年代は近代以降と考えられる。

SK24 B-3

調査区西側南部分に位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.80m、深さ約0.31mを測る。平面形は円形を呈する。

本土坑内からは瓦60点以上が出土した。瓦には「瓦業組合」などを記したと思われる刻印が認められる。

出土遺物から、本土坑の廃棄年代は近代以降と考えられる。

SK25 A-3・B-3

調査区西側南部分に位置する。規模は長軸約0.89m、短軸約0.82m、深さ約0.24mを測る。平面形は円形を呈する。

本土坑内からは磁器1点、陶器1点、漆喰3点が出土した。磁器は肥前系の大瓶。陶器は肥前系の見込み蛇ノ目釉剥ぎの皿が出土した。

出土遺物が少ないことから、本土坑の廃棄年代は不明である。

SK26 A-2・3

調査区西端中央に位置する。規模は長軸約 5.50m、短軸約 1.40m、深さ約 0.63m を測る。平面形は隅丸長方形を呈する。SB1 - P7・8・9、SK6、SV1、P15・16・19 と重複または切り合い関係にあり、本土坑がもっとも先行している。

本土坑内からは肥前系磁器 1 点、肥前系陶器 1 点、瓦 3 点とともに磁製の碇子などが 12 点出土した。碇子などがみられることから、本土坑の廃棄年代は近代以降である。

SK28 A-2

調査区の西側中央部に位置する。規模は長軸約 1.28m、短軸約 0.61m、深さ約 0.45m を測る。平面形は不整長方形を呈する。

本土坑内からは最下部から 110 × 20 cm 前後の木材が出土した。陶磁器などの年代判定の指標となる遺物は出土しなかったが、遺構覆土および木材の遺存状況から本土坑の廃棄年代は近代以降と考えられる。他に同様の土坑が 4 基確認されている。

焼土土坑群

調査区のほぼ中央に位置する。本焼土土坑群は SK8・10・11・12・14・16・19・20・21・22・23、SV3 で構成され、いずれも焼土が多量に混入しており出土遺物の大部分には被熱痕が認められる。また、出土する遺物のほとんどは 19 世紀前半から中葉のものであるが、本焼土土坑群のなかで最大の SK21 の下層部から数字の「5」の陽刻印のあるガラス瓶のほか、SK16・23 からはマグカップ、薬品容器？などが相伴している。土坑によっては切り合い関係が認められ廃棄の前後は存在するが、ほぼ同質の土が大規模に廃棄されている状況から、各焼土の廃棄土坑は一連のものと捉えてもよいであろう。本焼土土坑群の廃棄年代は幕末から明治初頭と考えられる。土坑群の範囲は最大で東西に約 29.00m、南北に約 7.60m を測る。

SK8 C-2・D-2

焼土土坑群の西側に位置する。規模は長軸約 2.28m、短軸約 1.32m、深さ約 0.70m を測る。平面形は、ほぼ長方形を呈する。SK10・11 と切り合い関係にあり、本土坑に対して SK10・11 が先行している。

本土坑内からは磁器 136 点、陶器 146 点、焼締め 12 点、土師質瓦質土器 32 点、瓦 9 点、貝 3 点が出土した。他に、赤く被熱した石材 8 点も出土している。磁器の大半は肥前系の薄手酒盃・碗・皿などで、一部、瀬戸・美濃系の陰刻染付けの小皿、砥部系の碗など。陶器は関西系の碗・土瓶、肥前系の碗・皿、備前系の中瓶、産地不明の行平など。焼締めは、備前系・堺系の播鉢がみられる。

SK10 C-2・D-2

焼土土坑群の西側に位置する。規模は長軸約 2.61m、短軸約 1.84m、深さ約 0.72m を測る。平面形は長方形を呈していたと考えられる。SK8 と切り合い関係にあり、SK8 に対して本土坑が先行している。

本土坑内からは金属製品 3 点、瓦 3 点が出土した。瓦は鬼瓦の破片を含む。他に、赤く被熱し

た石材7点、漆喰9点が出土している。焼土土坑群のなかで陶磁器類がほとんど出土しない本土坑を含め、後述するSK14・15にも同様の傾向がみられた。

SK11 C-1・2

焼土土坑群の西側に位置する。規模は長軸約3.40m、短軸約2.28m、深さ約0.68mを測る。平面形は長方形を呈していたと考えられる。SK8と切り合い関係にあり、SK8に対して本土坑が先行している。

本土坑内からは磁器45点、陶器24点、焼締め1点、土師質瓦質土器1点、瓦30点以上、金属製品3点が出土した。他に、赤く被熱した漆喰9点、炭化材2点も出土している。磁器は肥前系の碗・皿・蓋が主体で、一部、産地不明の人工コバルトの急須蓋?など。陶器は関西系の碗、瀬戸・美濃系の火鉢、産地不明の水盤など。土師質瓦質土器は火鉢類など。金属製品は煙管の吸口などがみられる。

SK12 C-1・2

焼土土坑群の西側に位置する。規模は長軸約2.92m、短軸約1.18m、深さ約0.25mを測る。攪乱により南側が破損しているが、平面形は長方形を呈していたと考えられる。

本土坑内からは磁器3点、陶器4点、土師質瓦質土器2点、瓦が20点以上出土した。磁器は肥前系の碗・蓋、瀬戸・美濃系の碗など。陶器は瀬戸・美濃系の火鉢など。土師質瓦質土器は鉢類などがみられる。

SK14 E-1・2

焼土土坑群の東側に位置する。規模は長軸約2.38m、短軸約2.23m、深さ約0.70mを測る。SV3と切り合い関係にあり、本土坑に対してSV3が先行している。平面形は方形を呈する。

本土坑内からは焼締め1点、瓦6点が出土した。焼締めは産地不明の播鉢、瓦は鬼瓦の破片を含む。他に、赤く被熱した石材2点、漆喰3点も出土している。SK10と同様に、焼土土坑群のなかで陶磁器類がほとんど出土していない。

SK15 D-2

焼土土坑群の中央に位置する。規模は長軸約2.60m、短軸約1.92m、深さ約0.51mを測る。SK20・21、SV3と切り合い関係にあり、本土坑に対してSK20・21、SV3が先行している。平面形は不定方形を呈する。

本土坑内からは陶磁器類の出土は確認されていない。焼土のみの廃棄土坑である。

SK16 E-2

焼土土坑群の南側に位置する。規模は長軸約2.07m、短軸約1.06m、深さ約0.56mを測る。SK22と切り合い関係にあり、本土坑に対してSK22が先行している。平面形は不定方形を呈する。

本土坑内からは磁器17点、陶器10点、焼締め1点、金属製品1点、瓦30点以上が出土した。磁器は肥前系の碗・蓋・大瓶、産地不明の碗・マグカップ(SK23と接合)など。陶器は関西系の灰落とし、瀬戸・美濃系の水甕・大皿など。焼締めは備前系の灰落とし。金属製品は煙管の吸口が出土した。

SK19 E-2

焼土土坑群の中央に位置する。規模は長軸約 0.87m、短軸約 0.78m、深さ約 0.40m を測る。SV3 と切り合い関係にあり、本土坑に対して SV3 が先行している。平面形は円形を呈する。

本土坑内からは瓦 4 点が出土した。

SK20 D-1・2

焼土土坑群の中央に位置する。規模は長軸不明、短軸約 2.45m、深さ約 1.35m を測る。SK15・21 と切り合い関係にあり、SK15 に対する本土坑の先行は確認しているが SK21 との切り合い関係は不明である。平面形は不定形を呈する。

本土坑内からは磁器 24 点、陶器 12 点、焼締め 4 点、土師質瓦質土器 1 点、瓦 60 点以上、金属製品 1 点が出土した。磁器は肥前系の碗・皿・大瓶、関西系の蓋、産地不明の花生け？など。陶器は関西系の碗、産地不明の土瓶など。焼締めは備前系の甕類など。金属製品は鋸状のものが出土した。また底部からは 60～100 cm 前後の石が東西方向に 4 石出土した。

SK21 D-1・2、E-1・2

焼土土坑群の中央に位置する。規模は長軸約 5.90m、短軸不明、深さ約 1.10m を測る。SK15・20 と切り合い関係にあり、SK15 に対する本土坑の先行は確認しているが SK20 との切り合い関係は不明である。平面形は不定形を呈する。

本土坑内からは磁器 260 点、陶器 88 点、焼締め 18 点、土師質瓦質土器 23 点、瓦 260 点以上、金属製品 1 点、ガラス製品 2 点、貝 2 点が出土した。他に、赤く被熱した漆喰 4 点、石材 4 点、炭化した竹材も出土している。磁器は肥前系の碗・皿・大瓶などが主体で、一部に瀬戸・美濃系の蓋付き碗、関西系の角皿、産地不明の碗など。陶器は関西系の碗・土瓶、瀬戸・美濃系の水鉢、産地不明の甕・行平・土瓶など。焼締めは堺系の播鉢、産地不明の大甕など。土師質瓦質土器は甕・土瓶・土鍾など。瓦は平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦など。金属製品は棒状のものとゴムが溶着したプレート状のもの。ガラス製品は数字の「5」の陽刻印のあるガラス瓶が出土した。

SK22 E-2

焼土土坑群東側に位置する。規模は長軸約 2.03m、短軸約 1.39m、深さ約 0.70m を測る。SK16・SV3 と切り合い関係にあり、本土坑に対して SV3 が先行している。平面形は楕円形を呈する。

本土坑内からは磁器 9 点、陶器 2 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 2 点、瓦 30 点以上、金属製品 1 点、ガラス製品 2 点が出土した。他に、釘付きの板材 3 点も出土している。磁器は肥前系の広東碗・皿など。陶器は産地不明の大甕など。焼締めは備前系の灰落とし、産地不明の甕。土師質瓦質土器は皿など。金属製品は棒状のもの。ガラス製品は透明な板ガラスが出土した。

SK23 E-1・2

焼土土坑群東側に位置する。規模は長軸約 2.18m、短軸約 1.00m、深さ約 0.35m を測る。平面形は長方形を呈する。

本土坑内からは磁器 14 点、陶器 10 点、焼締め 5 点、土師質瓦質土器 3 点、が出土した。他に、モルタル 2 点も出土している。磁器は肥前系の碗・皿、瀬戸・美濃系の皿、産地不明のマグカップ（SK16 と接合）など。陶器は肥前系の碗・皿、瀬戸・美濃系の水鉢、産地不明の薬品容器？などが出土した。

SV3 C-2・D-2・E-2・F-2

焼土土坑群南側に位置する溝状遺構である。溝状遺構ではあるが一連のものと捉え、焼土土坑群の項目に記した。規模は長軸約 20.20m、短軸約 1.20m、深さ約 0.25m を測る。SK8・14・16・18・19・22 と切り合い関係にあり、本遺構が最も先行している。平面形は帯形を呈する。

本溝状遺構内からは磁器 15 点、陶器 8 点、土師質瓦質土器 1 点が出土した。磁器は肥前系の広東碗・鉢、中国系の皿・鉢など。陶器は瀬戸・美濃系の碗・織部の向付、信楽系の壺類、産地不明の大甕など。土師質瓦質土器は焼塩壺の身が出土した。焼土土坑群の中では 17 世紀前半の遺物の割合が多い遺構である。

(3) 溝状遺構

SV1 A-2・3

調査区西側に位置する。規模は長軸約 12.10m、短軸約 1.35m、深さ約 0.37m を測る。南北方向に帯状に延びる溝状遺構で攪乱により北側は寸断されている。北側の確認面および壁面に痕跡が認められないことから北側に延びていた可能性は少ない。南側については、本溝状遺構の軸線上にあたる検出面及び南壁面にコンクリートガラを含む溝状の廃棄土坑が確認されている。現地調査時には近代以降の攪乱で処理したが、本溝状遺構が近代以降の廃絶であることから一連の遺構の可能性はある。SK5・6・7・26、P9・10・17・20・21・22・30 と切り合い関係にあり、SK26 のみ本溝状遺構に対して先行している。平面形は帯形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃棄土坑である SK26 が先行していることから本溝状遺構は近代以降の廃絶である。

SV2 A-2・3

調査区西側に位置する。規模は長軸約 14.50m、短軸約 1.30m、深さ約 0.17m を測る。調査区南壁面から南北方向に帯状に延びる溝状遺構で攪乱により北側は寸断されている。北側の確認面および壁面に痕跡が認められないことから北側に延びていた可能性は少ない。P13 と切り合い関係にあり P13 に対して本溝状遺構が先行している。平面形は帯形を呈する。

本溝状遺構内からは磁器 188 点、陶器 25 点、焼締め 7 点、土師質瓦質土器 10 点、瓦 4 点、金属製品 3 点、ガラス製品 1 点が出土した。磁器のほとんどは砥部系端反碗 (1) ～ (5) と、蛇の目凹型高台の玉縁皿 (6) ～ (8) である。端反碗の外表面文様はいずれも多重圏線を基本としており、(1) から順に梅花笹文・芒笹文・松笹文・唐花文?・格子状文。蛇の目凹型高台の玉縁皿の見込み文様は (6) から順に源氏香文・振花文・帆掛舟文である。これらのなかで明確に人工コバルトの使用が認められるものは (3) (4) (7) である。他の磁器は肥前系の段重、瀬戸・美濃系の小碗などがある。陶器は瀬戸・美濃系の緑釉火鉢・水鉢、肥前系 (唐津) の胎土目皿、関西系の土瓶・灯明受皿、産地不明の大甕・土瓶など。焼締めは備前系の播鉢、堺系の播鉢、産地不明の大瓶など。土師質瓦質土器は焼塩壺身、五徳など。瓦は三つ巴紋の軒丸瓦、軒平瓦など。金属製品は釘・板状製品など。ガラス製品は六角形の小瓶などが出土した。人工コバルトを使用した磁器が出土していることから明治初頭の廃絶である。

(4) ピット

P1 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.38m、短軸約 0.35m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P2 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.55m、短軸約 0.45m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P3 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.33m、短軸約 0.30m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P4 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.41m、短軸約 0.25m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P5 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.20m、短軸約 0.12m、深さ約 0.10m 以上（推定値）を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P6 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.21m、短軸約 0.13m、深さ約 0.10m 以上（推定値）を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P7 A-1

調査区西側北部に位置する SK3 と近接する。規模は長軸約 0.12m、短軸約 0.11m、深さ約 0.10m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P8 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.31m、短軸約 0.28m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P9 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。北西部分を SK5 と切り合い、遺構全体が SV1 に重複している。本ピットに対して SV1 が先行する。規模は長軸約 0.31m、短軸約 0.26m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶である SV1 に先行していることから近代以降のピットである。

P10 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。遺構全体が SV1 に重複している。切り合い関係から本ピットに対して SV1 が先行する。規模は長軸約 0.28m、短軸約 0.28m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶である SV1 が先行していることから近代以降のピットである。

P11 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。規模は長軸約 0.36m、短軸約 0.33m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P12 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。規模は長軸約 0.27m、短軸約 0.23m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P13 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。南側が SV2 と切り合っており、切り合い関係から本ピットに対して SV2 が先行する。規模は長軸約 0.54m、短軸約 0.48m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶である SV2 が先行していることから近代以降のピットである。

P14 A-2

調査区西側の中央部に位置する。規模は長軸約 0.32m、短軸約 0.28m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P15 A-2

調査区西側の中央部に位置する。遺構全体が SK26 に重複しており、切り合い関係から本ピットに対して SK26 が先行する。規模は長軸約 0.35m、短軸約 0.30m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶である SK26 が先行していることから近代以降のピットである。

P16 A-2

調査区西側の中央部に位置する。遺構全体が SK26 に重複しており、切り合い関係から本ピットに対して SK26 が先行する。規模は長軸約 0.26m、短軸約 0.26m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶である SK26 が先行していることから近代以降のピットである。

P17 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。南側が SV1 と切り合っており、切り合い関係から本ピットに対して SV1 が先行する。規模は長軸約 0.29m、短軸約 0.28m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶である SV1 が先行していることから近代以降のピットである。

P18 A-2

調査区西側の中央部に位置する。規模は長軸約 0.19m、短軸約 0.18m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P19 A-2

調査区西側の中央部に位置する。遺構全体が SK26 に重複しており、切り合い関係から本ピットに対して SK26 が先行する。規模は長軸約 0.22m、短軸約 0.20m、深さ約 0.41m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶である SK26 が先行していることから近代以降のピットである。

P20 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。遺構全体がSV1に重複しており、切り合い関係から本ピットに対してSV1が先行する。規模は長軸約0.32m、短軸約0.25m、深さ約0.20m以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶であるSV1が先行していることから近代以降のピットである。

P21 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。SK7と切り合い関係にある。また遺構全体がSV1に重複している。切り合い関係から本ピットに対してSV1が先行する。規模は長軸約0.26m、短軸約0.26m、深さ約0.20m以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶であるSV1が先行していることから近代以降のピットである。

P22 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。遺構全体がSV1に重複しており、切り合い関係から本ピットに対してSV1が先行する。規模は長軸約0.29m、短軸約0.28m、深さ約0.20m以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶であるSV1が先行していることから近代以降のピットである。

P23 A-3

調査区西側の南部に位置する。規模は長軸約0.33m、短軸約0.29m、深さ約0.20m以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P24 A-3

調査区西側の南部に位置する。規模は長軸約0.21m、短軸約0.20m、深さ約0.20m以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P25 A-3

調査区西側の南部に位置する。西側部分をコンクリートガラの廃棄土によって攪乱されている。規模は長軸約0.18m、短軸約0.14m、深さ約0.20m以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P26 A-3

調査区西側の南壁付近に位置する。規模は長軸約0.30m、短軸約0.28m、深さ約0.20m以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P27 A-3

調査区西側の南壁付近に位置する。規模は長軸約0.26m、短軸約0.24m、深さ約0.20m以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P28 A-3

調査区西側の南壁付近に位置する。規模は長軸約0.21m、短軸約0.20m、深さ約0.20m以上(推定値)を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P29 A-3

調査区西側の南壁に近接するため完掘には至っていない。調査した遺構規模は長軸約0.25m、短

軸約 0.12m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P30 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。遺構全体が SV1 に重複しており、切り合い関係から本ピットに対して SV1 が先行する。規模は長軸約 0.24m、短軸約 0.20m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は三角形を呈することから、面取りした杭の先端部分の痕跡の可能性がある。遺物は産地不明の陶器の碗 1 点が出土した。近代以降の廃絶である SV1 が先行していることから近代以降のピットである。

P31 A-3

調査区西側の南部に位置する。規模は長軸約 0.34m、短軸約 0.34m、深さ約 0.58m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P32 A-2

調査区西側のほぼ中央部に位置する。遺構のほぼ全体が SV1 に重複しており、切り合い関係から本ピットに対して SV1 が先行する。規模は長軸約 0.26m、短軸約 0.23m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。近代以降の廃絶である SV1 が先行していることから近代以降のピットである。

P33 A-2

調査区西側の中央部に位置する。西側部分が SK9 と切り合っており、切り合い関係から SK9 に対して本ピットが先行している。規模は長軸約 0.27m、短軸約 0.25m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P34 A-2

調査区西側の中央部に位置する。規模は長軸約 0.44m、短軸約 0.42m、深さ約 0.62m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P35 A-2

調査区西側の中央部に位置する。遺構の北側が攪乱及び SB1 - P4 と切り合っており、切り合い関係から SB1 - P4 に対して本ピットが先行している。規模は長軸約 0.40m、短軸約 0.33m、深さ約 0.40m を測る。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P37 A-3

調査区西側の南部に位置する。遺構の北東部が土管の埋設跡によって攪乱されている。また南西部は SV1 に重複しており、切り合い関係から本ピットに対して SV1 が先行する。規模は長軸約 0.42m、短軸約 0.36m、深さ約 0.20m 以上（推定値）を測る。平面形は円形を呈する。本ピット内からは瓦 4 点が出土した。SV1 が先行していることから近代以降のピットである。

2 近世遺構 1

基準とした層位は TP2.65m 付近で西側壁面に広がる有機質を含む硬質面の直上である。当該面が確認されなかった範囲は、検出面の標高を基準とした。

検出した遺構は 19 世紀初頭から幕末を中心としている。

(1) 建物跡

調査段階で SB4・5・6 を明確に検出したのは近世遺構 2 からであるが、当該建物跡の上部構造の一部は近世遺構 1 の段階から点在するかたちで確認されていたことから、本遺構面に区分した。

SB4 A-2・3

本建物跡は調査区西端側に位置する。SB3 の南側から調査区南壁面まで同軸に石敷状のものが 4 箇所確認された。範囲は東西方向約 4.5m、南北方向約 15.7m である。検出状況から石組みなど建物跡の基礎石或いは栗石などの可能性があり、南方向に延びていると考えられる。現状で南北方向に約 16.4m のなかで確認した。石の大きさは 10 ～ 20 cm 前後である。南壁面に石組みの一部と考えられる石が確認できる。

SB5 A-1・2

本建物跡は調査区西端部に位置する。掘り方の規模は現状で長軸約 8.75m、短軸約 1.50m、深さ約 0.80m を測る。検出状況から本建物跡は調査区外の北および南方向に延びていると考えられる。当初、溝状遺構と考えていたが最下部から均等に据え置かれている石が出土し、建物跡の基礎石であることが想定された。ピット状の掘り方は確認されず遺構下部も平坦で起伏は認められないことから、溝状に掘削した後、均等に石を据えたものと考えられる。

現状で南北桁行 7.5m、東西梁行 1.5m の 5 間 × 5 尺分を確認した。本建物跡掘り方からは遺物は出土しなかった。

桁行の基礎石間寸法は心心の計測で 1.5m、梁行は 1.5m である。基礎石は 8 石確認した。

P1 A-2

本建物跡掘り方の南端に位置する。長軸約 35 cm、短軸約 30 cm の不整形を呈する。表面は平坦である。

P2 A-1

本建物跡掘り方の南側に位置する。長軸約 55 cm、短軸約 30 cm の長方形を呈する。表面は平坦である。

P3 A-1

本建物跡掘り方の中央部に位置する。長軸約 40 cm、短軸約 40 cm の不整形を呈する。表面は平坦である。

P4 A-1

本建物跡掘り方の中央部に位置する。長軸約 40 cm、短軸約 40 cm の不整形を呈する。表面は若干の起伏が認められるが、ほぼ平坦である。

P5 A-1

本建物跡掘り方の北側に位置する。1辺約40～50cmの三角形を呈する。表面は平坦である。

P6 A-1

本建物跡掘り方の北端に位置する。長軸約45cm、短軸約30cmの不整形を呈する。表面は平坦である。

P7 A-1・2

本建物跡掘り方の南側掘り方外、P1の西側に位置する。長軸約45cm、短軸約35cmの不整形を呈する。表面は平坦である。

P8 A-1

本建物跡掘り方の南側掘り方外、P6の西側に位置する。長軸約50cm、短軸約35cmの不整形を呈する。表面は平坦である。

SB6 A-2・3

本建物跡は調査区西端部に位置する基礎石列である。検出状況から本建物跡は調査区外の南方向に延びている可能性もある。既設埋設物などの攪乱等による桁行の寸断がみられるが、現状で南北桁行7.5m、東西梁行1.5mの5間×5尺分を確認した。

桁行の基礎石間寸法は心心の計測で1.5m、梁行は1.5mである。基礎石の周囲に明確な掘り方は確認できなかった。基礎石は7箇所確認した。基礎を構成する石は20～50cm前後のものが主体である。本建物跡からは遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

SK27 A-2

調査区の西側中央に位置する。規模は長軸約0.62m、短軸約0.50m、深さ約0.38mを測る。平面形は不整形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK29 A-3・B-3

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約1.80m、短軸約1.62m、深さ約0.52mを測る。南側が既設埋設物などの攪乱で失われている。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器4点、陶器3点、焼締め2点、土師質瓦質土器5点、瓦3点、漆喰1点が出土した。磁器は肥前系の碗・楼閣山水文の菊花形皿、関西系の碗など。陶器は関西系の碗・袋物、産地不明の碗など。焼締めは備前系の灯明皿、産地不明の播鉢。土師質瓦質土器は皿など。瓦は丸瓦・平瓦が出土した。出土遺物が少ないが、本土坑の廃棄年代は19世紀初頭から幕末までと考えられる。

SK30 A-3

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約2.20m、短軸約1.52m、深さ約1.08mを測る。南側が既設埋設物などの攪乱で失われている。平面形は不整形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK31 A-3

調査区の西側南壁に近接する。規模は長軸約0.56m、短軸約0.32m、深さ約0.53mを測る。平面

形は長方形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK32 A-3

調査区の西壁付近に位置する。規模は長軸約 1.08m、短軸約 0.50m、深さ約 0.17m を測る。平面形は不整楕円形を呈する。

本土坑内からは磁器 1 点、陶器 1 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 1 点、金属製品 1 点が出土した。磁器は肥前系の皿。陶器は産地不明の土瓶。焼締めは堺系の播鉢。土師質瓦質土器は焜炉・火鉢類。金属製品は釘が出土した。出土遺物が少ないことから、廃絶年代は不明である。

SK33 A-1

調査区の西側北部に位置する。北側を SK2、南側を攪乱により失われている。現存する規模は長軸約 0.77m、短軸約 0.38m、深さ約 0.18m を測る。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK34 A-1

調査区の西側北部に位置する。東側部分が SK38 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SK38 が先行する。規模は長軸約 2.15m、短軸約 1.45m、深さ約 0.48m を測る。平面形は不整形を呈する。

本土坑内からは磁器 11 点、陶器 5 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 19 点、瓦 40 点以上、金属製品 2 点、貝 1 点が出土した。磁器は肥前系の千鳥文碗 (1)・花唐草文碗 (陶胎染付け) (2)・仏飯器 (3) など。陶器は肥前系 (唐津) の刷毛目碗 (4) 刷毛目鉢・皿・他 (5) など。焼締めは堺系の播鉢。土師質瓦質土器は内耳土器 A 群が主体で、いずれも口縁部付近に内湾の認められない、内耳部の穿孔がしっかりと貫通しているものである。瓦は軒平・三つ巴紋の軒丸瓦 (6)・(7) など。金属製品は釘が 2 点である。出土遺物から 18 世紀前半の廃棄土坑と考えられる。

SK35 B-1

調査区の西側北部に位置する。遺構のほぼ全体が SK38 と重複している。切り合い関係から本土坑に対して SK38 が先行する。規模は長軸約 0.94m、短軸約 0.85m、深さ約 0.14m を測る。平面形は方形を呈する。

本土坑内からは陶器 1 点、瓦 3 点が出土した。陶器は肥前系 (唐津) の鉢。瓦は軒丸瓦などである。出土遺物が少ないことから、廃絶年代は不明である。

SK36 A-1・2、B-1・2

調査区の西側北部に位置する。南東部分が攪乱により失われている。現存する規模は長軸約 4.23m、短軸約 3.78m、深さ約 0.41m を測る。平面形は不整円形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 35 点、陶器 42 点、焼締め 5 点、土師質瓦質土器 12 点、瓦 40 点以上、金属製品 1 点が出土した。磁器は肥前系の広東碗 (1)・半球碗・小杯・蓋 (2) など。陶器は関西系の碗 (3) 瀬戸・美濃系の碗・植木鉢、産地不明の蓋 (4)・土瓶など。焼締めは堺系の播鉢。土師質瓦質土器は内耳土器 A 群・甕・壺類など。瓦は軒平瓦など。金属製品は釘が 1 点である。

近代以降の瓦が 1 点混入しているが南東側の攪乱の影響と判断した。19 世紀前半から中葉の廃棄土坑と考えられる。

SK37 A-1・B-1

本土坑は調査区西側の北壁面に近接しており、完掘には至っていない。また、SK38と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対してSK38が先行する。確認された規模は長軸約2.15m、短軸約1.00m、深さ約1.13mを測る。平面形は不整円形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器10点、陶器19点、焼締め1点、土師質瓦質土器8点、瓦7点が出土した。磁器は肥前系の花唐草文碗（陶胎染付け）(1) 皿・仏飯器・仏花瓶・水滴など。陶器は肥前系の刷毛目碗・中鉢・大皿、関西系の小碗、平碗(2)など。焼締めは備前系の甕など。土師質瓦質土器は皿(3)・火鉢・焜炉類などで、他に欄干部分を緑色（緑釉？）で装飾したミニチュアの橋が出土しており、同類のものがSK65でも出土している。瓦は丸・平瓦などである。出土遺物から、18世紀中葉の廃棄土坑と考えられる。

SK38 A-1・B-1

調査区西側の北壁に位置する。本土坑はSK34・35・37と切り合っており、いずれの土坑よりも先行する。確認された規模は長軸約4.60m、短軸約3.22m、深さ約0.57mを測る。平面形は不整形を呈する。

本土坑内からは磁器5点、陶器8点、焼締め1点、土師質瓦質土器6点、瓦4点、金属製品7点が出土した。磁器は肥前系の福字文の筒形碗(1) 鉄釉掛分け碗・皿、中国系の皿など。陶器は肥前系（唐津）の砂目積みの溝縁皿(2)・砂目積みの皿・碗、産地不明の大瓶など。焼締めは産地不明の播鉢、土師質瓦質土器は皿・甕類など。瓦は軒平瓦・軒丸瓦・丸瓦など。金属製品は銅版片である。出土遺物から、17世紀中葉の廃棄土坑と考えられる。

SK39 C-1

調査区西側の北壁に近接しており、完掘には至っていない。また、SK45と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対してSK45が先行する。確認された規模は長軸約1.57m、短軸約0.88m、深さ約0.70mを測る。現状の平面形は方形を呈する。

本土坑内からは磁器13点、陶器32点、焼締め1点、土師質瓦質土器140点、瓦20点以上、金属製品2点、貝1点が出土した。磁器は肥前系の碗・笹文の小杯(1)・外面青磁の筒形碗・赤絵栗葉文の合子(2)など。陶器は肥前系（唐津）の刷毛目碗、関西系の色絵菊花文の半球碗(3)・杉形碗、産地不明の甕、軟質陶器の灯火具(4)など。焼締めは備前系の小甕。土師質瓦質土器は皿(5)～(11)・甕類・内耳土器A群の、口縁部付近に内湾の認められない、内耳部の穿孔がしっかりと貫通しているものなど。金属製品は釘である。出土遺物から、18世紀後半の廃棄土坑と考えられる。

SK40 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約1.20m、短軸約0.35m、深さ約0.41mを測る。平面形は不整長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK41 B-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約1.14m、短軸約1.05m、深さ約0.14mを測る。平面形は不整方形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 1 点、陶器 2 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 1 点、瓦 4 点が出土した。磁器は肥前系の碗（初期伊万里）。陶器は肥前系（唐津）の溝縁皿など。焼締めは備前系の壺類。土師質瓦質土器は甕類。瓦はコビキ B の丸瓦が 3 点確認されている。出土遺物は少ないが、17 世紀中葉の廃棄土坑と考えられる。

SK42 B-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 1.23m、短軸約 0.53m、深さ約 1.05m を測る。平面形は不整長方形を呈する。

本土坑内からは磁器 6 点、陶器 7 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 4 点、貝 1 点が出土した。磁器は肥前系の碗・皿など。陶器は瀬戸・美濃系の植木鉢、産地不明の土鍋・行平蓋など。焼締めは備前系の播鉢。土師質瓦質土器は皿・鉢類である。出土遺物から、19 世紀初頭までの廃棄土坑と考えられる。

SK43 B-1

調査区西側の北壁に近接しており、完掘には至っていない。確認された規模は長軸約 1.82m、短軸約 1.27m、深さ約 0.40m を測る。現状の平面形は不整形を呈する。

本土坑内からは陶器 1 点、瓦 1 点が出土した。陶器は肥前系（唐津）の砂目積みの皿、瓦は三つ巴文の丸瓦である。出土遺物が少ないことから、廃棄時期は不明である。

SK44 B-3

調査区西側の南部に位置する。北側を攪乱により失われている。現状の規模は長軸約 2.15m、短軸約 1.37m、深さ約 0.48m を測る。平面形は不整長方形を呈すると思われる。

本土坑内からは陶器 1 点、瓦 3 点、金属製品 2 点が出土した。陶器は産地不明の皿・鉢類、瓦は平瓦・コビキ B の丸瓦 2 点、金属製品は釘・煙管吸口である。出土遺物が少ないことから、廃棄時期は不明である。

SK45 C-1

調査区西側の北壁に近接し、東側はコンクリート基礎により失われていることから完掘には至っていない。また、SK39 と切り合っており、切り合い関係から SK39 に対して本土坑が先行する。確認された規模は長軸約 1.49m、短軸約 1.05m、深さ約 0.67m を測る。現状の平面形は方形を呈する。

本土坑内からは磁器 1 点、陶器 1 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 1 点、瓦 1 点が出土した。磁器は肥前系の小碗。陶器は産地不明の筒状もの。土師質瓦質土器は甕・鉢類。瓦は平瓦である。

遺物は少ないが、切り合い関係から SK39（18 世紀後半）以前の廃棄土坑と考えられる。

SK46 D-1

調査区中央の北側、コンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 1.08m、短軸約 0.77m、深さ約 0.33m を測る。現状の平面形は不整方形を呈する。

本土坑内からは磁器 2 点、陶器 3 点、瓦 1 点が出土した。磁器は肥前系の大瓶。陶器は肥前系（唐津）の砂目積みの鉢、産地不明の皿・行平の蓋。瓦は丸瓦である。遺物は少ないが、19 世紀初頭以降の廃棄土坑と考えられる。

SK47 E-2

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約 2.61m、短軸約 2.11m、深さ約 0.35m を測る。平面形は不整形を呈する。

本土坑内からは磁器 6 点、陶器 6 点、焼締め 3 点、土師質瓦質土器 27 点、瓦 20 点以上、漆喰 40 点以上、貝 80 点以上が出土した。磁器は肥前系の若松文の碗 (1)・青磁の香炉など。陶器は肥前系 (唐津) の刷毛目碗 (2)・香炉 (3)・関西系の半球碗など。焼締めは備前系の播鉢・甕。土師質瓦質土器は皿・焼き塩壺身 (4)・内耳土器 A 群の、口縁部付近に内湾の認められないもの・人形の一部など。瓦は三つ巴紋の軒丸瓦 (5)、金属製品は釘である。出土遺物から、18 世紀中葉の廃棄土坑と考えられる。

SK48 E-1

調査区中央の北側、コンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 2.15m、短軸約 1.65m、深さ約 0.37m を測る。現状の平面形は不整形を呈する。

本土坑内からは拳大から人頭大の多量の石が出土した。陶磁器などの遺物は出土していない。廃棄時期は不明である。

SK49 E-2

調査区東側の南壁に近接し完掘には至っていない。また、西側に SK50・51・68 近接しており、それぞれ遺物の遺構間接合が認められることから、以下に列記する。

瀬戸・美濃系の水盤 (SK49・50)、肥前系 (唐津) の刷毛目碗、産地不明壺蓋 (SK50・68)、肥前系皿・碗・旬刊形鉢・蓋物 (SK50・51) などである。

本土坑は SK68 と切り合い関係にあり、切り合い関係から本土坑が先行する。現状の規模は長軸約 4.10m、短軸約 2.52m、深さ約 0.39m を測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 20 点、陶器 67 点、焼締め 2 点、土師質瓦質土器 59 点、瓦 20 点以上、貝 1 点、炭化材 2 点が出土した。磁器は肥前系の筒型碗・中・大皿・大瓶など。陶器は瀬戸・美濃系の碗・水鉢・水盤、関西系の碗、産地不明の鉢・土瓶・行平、萩系の碗など。焼締めは備前系の播鉢など。土師質瓦質土器は皿・火鉢・焜炉類・土瓶・内耳土器 A 群の、口縁部付近に内湾の認められるもの・ミニチュア・人形など。瓦は平瓦である。出土遺物から、19 世紀初頭の廃棄土坑と考えられる。

SK50 E-2・F-2

調査区東側の南壁に近接し完掘には至っていない。本土坑は SK51・68 と切り合い関係にあり、切り合い関係から本土坑に対して SK51・68 が先行する。現状の規模は長軸約 2.66m、短軸約 0.98m、深さ約 0.65m を測る。平面形は長方形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 74 点、陶器 22 点、焼締め 10 点、土師質瓦質土器 50 点、瓦 40 点以上、銭貨 1 点、金属製品 1 点、石製品 1 点、骨 1 点、漆喰 2 点が出土した。磁器は肥前系の花牡丹文の半球碗 (1) 皿・猪口・蓋・焼継ぎおよび焼継ぎ印のある飛鶴文の蓋物 (2)、瀬戸・美濃系の碗、関西系の爛徳利など。陶器は瀬戸・美濃系の碗・灰釉の腰折碗 (3) で高台内に墨書のあるもの、関西系の碗、産地不明の土瓶・蓋など。焼締めは備前系の中瓶・甕、堺系の播鉢など。土師質瓦質土器は皿・「泉州麻玉」の刻印を持つ焼塩壺身 (4) と蓋 (5)・火鉢・焜炉類・羽釜など。瓦は軒丸瓦・平瓦など。

金属製品は釘。石製品は砥石である。出土遺物から、19世紀初頭の廃棄土坑と考えられる。

SK51 F-2

調査区東側の南壁と攪乱に近接し完掘には至っていない。本土坑はSK50と切り合い関係にあり、切り合い関係からSK50に対してSK51が先行する。現状の規模は長軸約4.56m、短軸約4.45m、深さ約0.51mを測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器262点、陶器291点、焼締め36点、土師質瓦質土器629点、瓦60点以上、銭貨3点、金属製品6点、石製品1点、貝11点、骨6点、漆喰2点が出土した。磁器は肥前系の笹文の小杯(1)・菊花散し文の小碗(2)・草花文で高台内「元」銘の小碗(3)・格子文で見込み蛇ノ目釉剥ぎの端反碗(6)・折れ松葉花散し文で高台内崩し「大明年製」の中碗(7)・コンニャク印判の鶴丸若松文の中碗(8)・白磁の中碗(9)・丸文で見込み五弁花コンニャク印判の中碗(10)・唐草文(陶胎染付け)の中碗(11)・青磁の香炉(12)・蔦花文(初期伊万里)の型打菊花皿(13)・花唐草文の見込み五弁花、高台内「二重角渦福」銘の小皿(14)・口紅の青磁皿(15)・芙蓉花卉文の見込み三方割花文、高台内「二重角渦福」銘の大皿(16)・雨降り文の仏飯器(17)・合子(葉入れ?) (19)、産地不明の流水文の碗蓋(18)、牡丹貼付文、型打牡丹花形碗(4)・(5)など。陶器は関西系では筒形の碗(20)・鉄・呉須絵梅文の半球碗(21)・鉄絵藁束文の半球碗(22)・腰張形の腰折碗(26)・イッチン掛けの土瓶蓋(30)、瀬戸・美濃系では腰張形の腰鏝の拳骨碗(23)・(24)で、(23)は黒釉で高台の畳み付け部分に刻印(不明)があり、(24)は鉄釉の掛け分けである。いずれも長石釉で雪文状の装飾を施している。他に印花文の折縁皿(27)・水甕・植木鉢などがある。肥前系(唐津)では、見込み蛇ノ目釉剥ぎの皿(28)・砂目積みの皿(29)・刷毛目の碗・皿・鉢などがある。産地不明は鉄釉の腰折碗(25)・鉄釉の甕(31)・土瓶・行平および行平蓋などがある。焼締めは備前系の仏花瓶(32)・不明蓋(33)・搦鉢・甕で他に堺系の搦鉢(34)など。土師質瓦質土器は褐色系の皿(35)～(44)と白色系の皿(45)・(46)、羽釜(47)・内耳土器A群の口縁部付近に内湾の認められない内耳部の穿孔が貫通しているもの(48)、焼塩壺蓋(49)～(53)と焼塩壺身(54)・「大上々」の刻印のもの(55)、「泉州麻玉」の刻印のもの(56)・(57)、「泉湊伊織」の刻印のもの(58)などがある。他には土瓶・甕・火鉢・焜炉類などである。瓦は三つ巴紋の軒丸瓦(59)・丸瓦・軒平瓦など。金属製品は釘・針金など。石製品は砥石など。他に貝・骨・炭化材・漆喰などである。土管・スレートなども一部混入するが南側攪乱の影響であろう。SK50との切り合いと出土遺物から、19世紀初頭の廃棄土坑と考えられる。

SK52 F-2

調査区西側の南部に位置し、SK51に近接している。規模は長軸約1.13m、短軸約0.48m、深さ約0.27mを測る。平面形は円形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器3点、陶器5点、石製品1点が出土した。磁器は肥前系の網目文碗・千鳥文の猪口など。陶器は肥前系の碗、産地不明の鉄釉の蓋など。瓦は平瓦・丸瓦など。石製品は石臼?と考えられる。出土遺物から、17世紀後半の廃棄土坑と考えられる。

SK53 F-1・F-2

調査区西側の北部に位置し、南側の一部が攪乱によって失われている。規模は長軸約0.98m、短

軸約 0.95m、深さ約 0.26m を測る。平面形は円形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 9 点、陶器 7 点、土師質瓦質土器 9 点、貝 2 点が出土した。磁器は肥前系外面青磁の碗・猪口・爛徳利、関西系の龍文碗・扇文の端反碗、中国系の菊花文皿など。陶器は関西系の杉形碗・鉢・銅緑釉の片口、瀬戸・美濃系の水甕、産地不明の鉄釉の土鍋など。土師質瓦質土器は皿・火鉢・焜炉類の「さな」などである。出土遺物から、19 世紀前半の廃棄土坑と考えられる。

SK54 F-3

調査区東側の西壁に近接し完掘には至っていない。規模は長軸約 1.47m、短軸約 1.19m、深さ約 0.40m を測る。平面形は長方形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 28 点、陶器 14 点、焼締め 4 点、土師質瓦質土器 9 点、瓦 4 点、漆喰 4 点が出土した。磁器は肥前系では見込み花文で花散し文の小丸碗 (1)・見込み岩水文で山水文の小広東碗 (2)・草花文の朝顔形碗 (3)・見込み蛇ノ目釉剥ぎで草花文のくらわんか手の平形碗 (4)・丸に芒文の仏飯器 (5)・外面青磁碗・広東碗・広東碗蓋。陶器は関西系の半球碗・土瓶、肥前系の見込み蛇ノ目釉剥ぎの皿・刷毛目鉢、産地不明の土瓶・土瓶蓋、瀬戸・美濃系の灰釉植木鉢 (6)・鉄釉緑釉流しの水甕 (高台内不明墨書) (7) など。焼締めは備前系の灯明受皿 (8)、明石系の播鉢 (9) など。土師質瓦質土器は皿・火鉢類・内耳土器 A 群の口縁部付近に内湾の認められないもの・羽釜など。瓦は平瓦・軒丸瓦などである。出土遺物から、19 世紀初頭の廃棄土坑と考えられる。

(3) 溝状遺構

SV4 B-2・C-2・D-2・E-2

調査区の中央、SV3 の直下に西側に位置する。西側は SV3 の焼土を除去した後に検出し、東側は当該面で延伸が確認された。既設埋設物等の攪乱によって寸断されているが、総延長の規模は長軸約 38.50m、短軸約 1.37m、深さ約 0.49m を測る。東西方向に帯状に延びる溝状遺構で東西に延伸している可能性があるが、西側については当該面では現状までの確認であり、東側は攪乱で失われている。

本土坑内からは磁器 2 点、陶器 1 点、土師質瓦質土器 3 点、瓦 6 点が出土した。磁器は肥前系碗・蓋物蓋。陶器は肥前系 (唐津) の鉢。土師質瓦質土器は皿・不明土器である。出土遺物が少ないことから、廃棄時期は不明である。

(4) ピット

P38 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.44m、短軸約 0.30m、深さ約 0.35m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P39 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.36m、短軸約 0.29m、深さ約 0.30m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P40 A-3

調査区西側南部に位置する。規模は長軸約 0.30m、短軸約 0.24m、深さ約 0.13m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P41 A-3

調査区西側中央に位置する。北側の一部が埋設物等の攪乱と近接する。規模は長軸約 0.29m、短軸約 0.26m、深さ約 0.20m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P42 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.37m、短軸約 0.32m、深さ約 0.24m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P43 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.39m、短軸約 0.37m、深さ約 0.51m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P44 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.47m、短軸約 0.45m、深さ約 0.24m を測る。平面形は円形を呈する。本ピットからは丸瓦 1 点が出土した。

P45 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.52m、短軸約 0.49m、深さ約 0.17m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P46 A-3

調査区西側南部に位置する。北側を土管などの埋設で攪乱されている。現状の規模は長軸約 0.37m、短軸約 0.20m、深さ約 0.46m を測る。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P47 A-3

調査区西側南部に位置する。P46 と同じく北側を土管などの埋設で攪乱されている。現状の規模は長軸約 0.62m、短軸約 0.25m、深さ約 0.21m を測る。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P48 B-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.62m、短軸約 0.51m、深さ約 0.18m を測る。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P49 B-1

調査区西側北部に位置する。P50・51 と南北方向に近接し連なる。規模は長軸約 0.17m、短軸約 0.15m、深さ約 0.15m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P50 B-1

調査区西側北部に位置する。P49・51 と南北方向に近接し連なる。規模は長軸約 0.17m、短軸約 0.14m、深さ約 0.15m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P51 B-1

調査区西側北部に位置する。P49・50 と南北方向に近接し連なる。規模は長軸約 0.14m、短軸約 0.14m、深さ約 0.15m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P52 C-1

調査区やや中央寄りの西側北部に位置する。規模は長軸約 0.46m、短軸約 0.44m、深さ約 0.24m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P53 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.43m、短軸約 0.43m、深さ約 0.25m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P54 C-1・2

調査区の中央部に位置する。P55・56・57・58 と東西方向に連なるが、個々の規模にバラツキがみられることから便宜上ピットに分類している。西側部分が SK11 と切り合い関係にあり SK11 に対して本ピットが先行している。現状の規模は長軸約 0.66m、短軸約 0.43m、深さ約 0.79m を測る。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P55 C-1・2、D-1・2

調査区の中央部に位置する。規模は長軸約 0.43m、短軸約 0.32m、深さ約 0.32m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P56 D-1・2

調査区の中央部に位置する。規模は長軸約 0.26m、短軸約 0.25m、深さ約 0.35m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P57 D-1・2

調査区の中央部に位置する。南側部分が SK10 と切り合い関係にあり SK10 に対して本ピットが先行している。現状の規模は長軸約 0.59m、短軸約 0.47m、深さ約 0.60m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P58 D-1・2

調査区の中央部に位置する。北側部分が SK20 と近接し、南側部分が SK10 と切り合い関係にあり、SK10・20 に対して本ピットが先行している。現状の規模は長軸約 0.70m、短軸約 0.54m、深さ約 0.61m を測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P59 E-1

調査区の中央部、コンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 0.27m、短軸約 0.23m、深さ約 0.10m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P60 E-1

調査区の中央部、コンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 0.44m、短軸約 0.29m、深さ約 0.18m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

3 近世遺構 2

基準とした層位は TP2.50m 付近で西側壁面に広がる有機質を含む硬質面の直上である。当該面が確認されなかった範囲は、検出面の標高を基準とした。

検出した遺構は 18 世紀前半から 19 世紀初頭を中心としている。

(1) 建物跡

本遺構面からは明確な建物跡は確認されなかった。

(2) 土坑

SK55 A-3

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約 0.98m、短軸約 0.33m、深さ約 0.40m を測る。北東側を埋設物等の攪乱によって失われている。平面形は隅丸方形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK56 A-3

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約 0.66m、短軸約 0.37m、深さ約 0.17m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK57 A-3

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約 0.95m、短軸約 0.74m、深さ約 0.26m を測る。北側を埋設物等の攪乱によって失われている。また SV5 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV5 が先行する。平面形は不整形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK58 A-3

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約 0.68m、短軸約 0.43m、深さ約 0.12m を測る。SV5 と近接している。平面形は不整形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK59 A-3

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約 1.00m、短軸約 0.92m、深さ約 0.45m を測る。SK60 と近接しており、北側を埋設物等の攪乱によって失われている。平面形は楕円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK60 A-3

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約 0.51m、短軸約 0.49m、深さ約 0.39m を測る。SK59 と近接しており、北側を埋設物等の攪乱によって失われている。平面形は楕円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK61 A-2

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約 0.77m、短軸約 0.52m、深さ約 0.34m を測る。SV5 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV5 が先行する。南側を近代土坑の SK26 によって失われている。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK62 C-1

調査区の西側北部に位置する。規模は長軸約 1.56m、短軸約 1.25m、深さ約 0.76m を測る。平面形は不整円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK63 B-3・C-3

調査区の西側南部に位置する。SK64 と南部東壁に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約 4.07m、短軸約 1.54m、深さ約 0.93m を測る。平面形は溝状を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 52 点、陶器 16 点、焼締め 2 点、土師質瓦質土器 15 点、瓦 1 点、漆器片 1 点、石製品 1 点が出土した。磁器は肥前系の碗・猪口・蛸唐草文の蓋物 (1) など。陶器は肥前系 (唐津) の刷毛目碗 (2)、関西系の碗など。焼締めは備前系の播鉢、産地不明の甕など。土師質瓦質土器は褐色系の皿 (3)・(4)・内耳土器 A 群 (内湾しない) と思われる口縁部など。瓦は平瓦の一部が出土した。出土遺物から、本土坑の廃棄年代は 18 世紀の後半の廃棄と考えられる。

SK64 B-3

調査区の西側南部に位置する。規模は長軸約 2.76m、短軸約 1.67m、深さ約 0.59m を測る。SK63 と近接している。平面形は不整方形を呈する。

本土坑内からは磁器 49 点、陶器 35 点、焼締め 6 点、土師質瓦質土器 99 点、瓦 40 点以上が出土した。磁器は肥前系の不明文で見込み花文の広東碗 (1)・皿・段重蓋、中国系の皿など。陶器は肥前系 (唐津) の鉢・片口、関西系の碗、瀬戸・美濃系の水甕・植木鉢 (2)、産地不明の土鍋・甕類など。焼締めは備前系の播鉢、産地不明の播鉢など。土師質瓦質土器は白色系の皿 (3)・(4)・甕 (5)・大甕・内耳土器 A 群 (内湾する)・火鉢・朱塗りの焜炉類 (日下分類 II D) (6) など。瓦は桐文に下巻き、上巻きの唐草 2 転 (7) の軒平瓦などが出土した。出土遺物から、本土坑の廃棄年代は 19 世紀初頭の廃棄と考えられる。

SK65 A-3・B-3

調査区の西側南部に位置する。本土坑は西側南壁面と近接しており完掘には至っていない。また、東側の一部が既設埋設物で寸断されている。現状の規模は長軸約 8.05m、短軸約 2.81m、深さ約 1.05m を測る。平面形は不整方形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 315 点、陶器 265 点、焼締め 25 点、土師質瓦質土器 269 点、瓦 140 点以上、金属製品 3 点、石製品 1 点、貝 16 点が出土した。その他漆喰 23 点、窯道具 (磁器・焼締めを含む) が出土している。

磁器は肥前系では山水文の小碗 (1)・丸文散し高台内不明字銘の碗 (2)・外面草花に蝶文・見込み不明文の広東碗 (3)・山水文の型打ち小皿 (4)・格子文の見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿 (5)・白磁型打菊花皿 (6)・注連縄・酸漿文の仏飯器 (7)・爛徳利・青磁の香炉など。瀬戸・美濃系では花文の碗蓋 (8) がある。

陶器では関西系の灰釉の端反碗 (9)～(12) などで (9)・(10) は高台内墨書「山」字が書かれるもの・灰釉の半球碗 (13) など。肥前系では皿・刷毛目鉢・櫛刷毛目皿 (16) など。瀬戸・美濃系では天目碗・灰釉の半球碗 (14)・呉須絵梅文の丸碗 (15)・灰釉の中瓶の高田徳利 (17) で釘書き「○に石」・灰釉緑釉流しの水甕 (20) は中心に穿孔があり植木鉢に転用したと思われる

ものなどがある。産地不明のものでは鉄釉の土鍋（18）・土瓶・灰釉の立鼓形の灯明器台（19）・鉄釉の灯明受皿（22）（23）・ミニチュアの鉄釉流しの御神酒徳利（24）・（25）などがある。

焼締めは備前系の徳利・播鉢・灯明受皿（26）・「◇に一」印のある灰落とし（27）、堺系の播鉢（29）・明石系の播鉢（28）・（30）などである。その他では磁器質の環状形のハマ状のもの（31）がある。窯用具は環状ハマでは、黒斑の目跡（32）があるものと、上面にメズナ（アルミナ）を塗布しているもの（33）がある。4脚貼付けの足付きハマでは同じく、上面と脚先端部にメズナ（アルミナ）を塗布しているもの（34）～（41）があり、（37）には墨書「山～」がある。焼締めでは4脚（磁器質）貼付けの足付き（42）のものがあり、同様に上面と脚先端メズナ（アルミナ）を塗布している。磁器質・焼締めのハマのいずれも上面部・下面部ともに左回転糸切痕がみられる。

土師質瓦質土器は褐色系の皿（43）～（46）・白色系の皿（47）・へら削り底の白色系の皿（48）・内耳土器 A 類（内湾し口縁部に至るもの）で内耳部は一部未穿孔のもの（49）・火鉢類・さな・甕（52）・ミニチュアの羽釜（53）などがある。軟質施釉陶器はイッチンで波・鷗（千鳥か？）・蟹を描いた植木鉢（50）・（51）・鹿（54）・ミニチュアの橋（55）など。瓦は丸瓦・平瓦などの他に、海津袴あるいは御所降鬼瓦の一種と考えられる鬼瓦（56）・目板瓦の一種と考えられるもの（57）などである。金属製品は釘・銅板、石製品は砥石である。出土遺物から、本土坑の廃棄年代は 19 世紀前半までの廃棄と考えられる。

SK66 C-1

調査区の中央北部に位置する。規模は長軸約 1.89m、短軸約 0.90m、深さ約 0.90m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK67 F-1

調査区の東側北部に位置する。東側部分が P81 と切り合い関係にあり本土坑に対して P81 が先行している。規模は長軸約 1.15m、短軸約 1.03m、深さ約 0.27m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK68 E-2・F-2

調査区の東側南部に位置する。東部南壁に近接しており完掘には至っていない。また、東側は SK50・51 に対して先行している。現状の規模は長軸約 3.32m、短軸約 2.85m、深さ約 0.42m を測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 57 点、陶器 28 点、焼締め 2 点、土師質瓦質土器 16 点、瓦 30 点以上、石製品 1 点、骨 1 点が出土した。磁器は肥前系の白磁碗・中碗・山水文の碗（陶胎染付け）（1）・皿・コンニャク印判の蓋と蓋物など。陶器は肥前系の見込み蛇ノ目釉剥ぎの皿（2）肥前系（唐津）の刷毛目碗・鉢など、関西系は鉄絵の腰折碗・火入れなど。焼締めは備前系の底部「分銅紋」印の灰落とし（3）・徳利・灯明受皿、堺系の播鉢、産地不明の甕など。土師質瓦質土器は褐色系の皿・内耳土器 C 群・型合せと手捻りで巾着状に作る白色系の土鈴（4）など。瓦は平瓦・丸瓦など。石製品は砥石が出土した。出土遺物から、本土坑の廃棄年代は 18 世紀中葉と考えられる。

SK69 F-2

調査区の東側南部に位置する。西側は SK51 に対して本土坑が先行している。現状の規模は長軸

約 2.08m、短軸約 0.90m、深さ約 0.32m を測る。平面形は不整長方形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 5 点、陶器 3 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 7 点、骨 1 点が出土した。磁器は肥前系の碗・皿・香炉あるいは灰入れなど。陶器は関西系の鉄絵の腰折碗、産地不明の土鍋・土瓶など。焼締めは堺系の播鉢。土師質瓦質土器は褐色系の皿・焜炉類などが出土した。遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は 19 世紀前半の廃棄と考えられる。

SK70 F-3

調査区の東側北部に位置する。南側は既設埋設物等の攪乱により失われている。また SK90 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SK90 が先行する。現状の規模は長軸約 1.63m、短軸約 0.80m、深さ約 0.40m を測る。平面形は長方形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 1 点、陶器 2 点、土師質瓦質土器 6 点が出土した。磁器は肥前系の碗。陶器は肥前系（唐津）の櫛刷毛目皿、関西系の碗。土師質瓦質土器は褐色系の皿（1）～（4）で（4）はススの大量付着がみられるもの・その他器種不明のもの。遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は 18 世紀前半までの廃棄と考えられる。

SK71 F-1・G-1

調査区の東側北部に位置する。規模は長軸約 0.83m、短軸約 0.65m、深さ約 0.18m を測る。平面形は不整円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK72 F-1・G-1

調査区の東側南部に位置する。規模は長軸約 2.36m、短軸約 1.66m、深さ約 0.52m を測る。平面形は不整円形を呈する。

本土坑内からは磁器 24 点、陶器 28 点、焼締め 4 点、土師質瓦質土器 24 点、瓦 1 点、金属製品 4 点が出土した。磁器は肥前系の小丸碗・半球碗・皿・合子・仏飯器など。陶器は関西系の半球碗・鉄絵・色絵の腰折碗・杉形碗、肥前系の鉢、瀬戸・美濃系の腰張形碗、産地不明の甕・土瓶蓋など。焼締めは備前系の火入れ、堺系の播鉢など。土師質瓦質土器は褐色系の皿・焜炉類・内耳土器 A 群（内湾しないもの）・人形など。瓦は平瓦片。金属製品は釘が出土した。遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は 18 世紀後半の廃棄と考えられる。

SK73 G-1・2

調査区の東側東壁に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約 0.48m、短軸約 0.35m、深さ約 0.48m を測る。平面形は不整方形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK74 F-1・G-1

調査区の東側のコンクリート基礎に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約 1.69m、短軸約 1.30m、深さ約 0.65m を測る。平面形は不整円形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 8 点、陶器 8 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 24 点、瓦 1 点、金属製品 1 点が出土した。磁器は肥前系の碗・蛇ノ目凹形高台の皿・猪口・大瓶など。陶器は肥前系の刷毛目碗・見込み蛇ノ目釉剥ぎの銅緑釉皿・砂目積みの溝縁皿、関西系の半球碗など。焼締めは産地不明の土瓶。土師質瓦質土器は褐色系と白色系の皿・焜炉類・内耳土器 A 群（内湾しないもの）・焙烙など。瓦は軒丸瓦片。金属製品は釘が出土した。遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は 18 世紀後半の廃

棄と考えられる。

SK75 F-3・G-3

調査区の東側南部に位置する。東壁に近接しており完掘には至っていない。また、SK78・SK101と切り合っており、切り合い関係から本土坑が先行する。現状の規模は長軸約3.12m、短軸約1.63m、深さ約1.06mを測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器18点、陶器16点、焼締め1点、土師質瓦質土器21点と多量の貝と骨が出土した。磁器は肥前系の小杯・碗・蛇ノ目凹形高台の皿・猪口・大瓶など。陶器は肥前系の刷毛目碗、関西系の半球碗、瀬戸・美濃系の腰張碗など。焼締めは備前系の瓶。土師質瓦質土器は褐色系と白色系の皿・内耳土器A群（内湾しないもの）・内耳土器C群などが出土した。遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は19世紀前半の廃棄と考えられる。

SK76 F-3

調査区の東側南部に位置する。北側が既設埋設物等の攪乱によって失われている。現状の規模は長軸約2.18m、短軸約1.70m、深さ約0.22mを測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器1点、土師質瓦質土器1点、石製品1点出土した。磁器は肥前系の碗。土師質瓦質土器は白色系の皿。石製品は砥石が出土した。遺物が少ないため、本土坑の廃棄年代は不明である。

SK77 B-2

調査区の西側中央に位置する。西側の上端が既設埋設物等の攪乱によって失われている。規模は長軸約2.17m、短軸約1.72m、深さ約0.68mを測る。平面形は不整形を呈する。遺物は三つ巴紋の丸瓦2点が出土した。遺物が少ないため、本土坑の廃棄年代は不明である。

SK78 F-3・G-3

調査区の東側南部に位置する。東壁に近接しており完掘には至っていない。また、SK75・SK101と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対してSK101が先行する。現状の規模は長軸約1.78m、短軸約0.82m、深さ約1.07mを測る。平面形は不整形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK79 F-1

調査区の東側北部のコンクリート基礎に近接・分断されており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約3.84m、短軸約1.20m、深さ約0.73mを測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器7点、陶器18点、焼締め1点、土師質瓦質土器5点が出土した。磁器は肥前系の小杯・碗・蛇ノ目凹形高台の鉢など。陶器は肥前系の刷毛目の片口・鉢・砂目積みの溝縁皿、関西系の半球碗、瀬戸・美濃系の碗、産地不明の土瓶など。焼締めは備前系の灯明皿、堺系の播鉢、産地不明の土瓶。土師質瓦質土器は甕類などが出土した。出土遺物から、本土坑の廃棄年代は19世紀初頭と考えられる。

SK80 F-1

調査区の東側北部に位置する。SK81・SK82と切り合っており切り合い関係から本土坑が最も先行する。現状の規模は長軸約2.65m、短軸約2.22m、深さ約0.73mを測る。平面形は不整形を呈

すると思われる。

本土坑内からは磁器 8 点、陶器 6 点、焼締め 2 点、土師質瓦質土器 13 点、瓦 2 点、金属製品 3 点・石製品 1 点が出土した。磁器は肥前系の外面青磁の半球碗・くらわんか手の梅花文の丸形碗 (1)・青磁染付の朝顔形碗(2)・白磁朝顔形碗蓋(3)・皿など。陶器は関西系の色絵の半球碗・鉄絵の腰折(せんじ)碗、瀬戸・美濃系の腰張碗・徳利など。焼締めは備前系の播鉢、堺系の播鉢など。土師質瓦質土器は褐色系の皿 (4) と白色系の皿・内耳土器・不明土器など。瓦は不明小片、金属製品は釘・たがね状のもの。石製品は篆文で「松」字を陰刻した砥石 (5) が出土した。出土遺物から、本土坑の廃棄年代は 18 世紀後半と考えられる。

SK81 F-1・2

調査区の東側北部に位置する。SK80・SK82 と切り合っており切り合い関係から本土坑に対して SK80・SK82 が最も先行する。現状の規模は長軸約 1.57m、短軸約 1.10m、深さ約 0.33m を測る。平面形は溝状を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 1 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 1 点、瓦 3 点が出土した。磁器は肥前系の桜花散し文の蓋物 (1)。焼締めは備前系の小瓶。土師質瓦質土器は火鉢・焜炉類。瓦は平瓦・軒丸瓦が出土した。SK80・SK82 に先行することから、本土坑の廃棄年代は 18 世紀後半以降と考えられる。

SK82 E-1・F-1

調査区の東側北部に位置する。SK80・SK81 と切り合っており切り合い関係から本土坑に対して SK80 が先行する。現状の規模は長軸約 2.05m、短軸約 1.59m、深さ約 0.64m を測る。平面形は不整形円形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 6 点、陶器 5 点、焼締め 2 点、土師質瓦質土器 2 点、瓦 3 点が出土した。磁器は肥前系の小杯・碗・皿など。陶器は肥前系(唐津)の櫛刷毛目文の鉢 (1)・徳利、産地不明の土瓶・土瓶蓋など。焼締めは備前系の播鉢・灯明皿・小瓶、堺系の播鉢など。土師質瓦質土器は褐色系の皿 (2)・内耳土器 C 群・人形など。瓦は平瓦・軒丸瓦が出土した。SK80 との切り合いと出土遺物から、本土坑の廃棄年代は 18 世紀後半と考えられる。

SK83 F-1

調査区の東側北部のコンクリート基礎に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約 1.20m、短軸約 1.06m、深さ約 0.40m を測る。平面形は不整形円形を呈すると思われる。

本土坑内からは織部 1 点が出土した。出土遺物が少ないため、本土坑の廃棄年代は不明である。

SK84 D-1

調査区の中央北部に位置する。規模は長軸約 1.46m、短軸約 0.97m、深さ約 0.25m を測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK85 F-1

調査区の東側北部のコンクリート基礎に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約 1.32m、短軸約 0.82m、深さ約 0.29m を測る。平面形は不整形方形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK86 F-1

調査区の東側北部のコンクリート基礎に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約 1.90m、短軸約 1.40m、深さ約 0.76m を測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 4 点、陶器 1 点、土師質瓦質土器 2 点、瓦 2 点が出土した。磁器は肥前系の小杯・コンニャク印判の碗・初期伊万里の折縁皿など。陶器は産地不明の陶片。土師質瓦質土器は甕類。瓦は平瓦・丸瓦が出土した。出土遺物から本土坑の廃棄年代は 18 世紀前半と考えられる。

SK87 F-1・G-1

調査区の東側北部のコンクリート基礎に近接しており完掘には至っていない。また SK88 と切り合っており切り合い関係から SK88 に対して本土坑が先行する。現状の規模は長軸約 1.70m、短軸約 0.74m、深さ約 0.11m を測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 1 点、陶器 1 点が出土した。磁器は肥前系の皿。陶器も肥前系（唐津）の櫛刷毛目の小瓶が出土した。出土遺物が少ないため、本土坑の廃棄年代は不明である。

SK88 G-1

調査区の東側北部のコンクリート基礎に近接しており完掘には至っていない。また SK87 と切り合っており切り合い関係から本土坑に対して SK87 が先行する。現状の規模は長軸約 1.06m、短軸約 0.97m、深さ約 0.23m を測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 1 点、陶器 1 点、土師質瓦質土器 2 点が出土した。磁器は肥前系の碗。陶器も肥前系の見込み蛇ノ目釉剥ぎの皿。土師質瓦質土器は皿・不明土器が出土した。出土遺物が少ないため、本土坑の廃棄年代は不明である。

SK89 F-3

調査区の東側南部の南・西壁面に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約 1.13m、短軸約 0.75m、深さ約 0.47m を測る。現状の平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 3 点、陶器 5 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 3 点が出土した。磁器は肥前系の青磁皿・蓋物・唐花文の蓋物蓋（1）。陶器は瀬戸・美濃系の碗、関西系の鉄絵羽に二輪違い文の皿（2）と鉄・呉須絵柴束文の土瓶（3）などで、土瓶内には鉄屑が多量に入っており、鉄漿（お歯黒）壺に転用した可能性がある。焼締めは備前系の挿鉢・小瓶。土師質瓦質土器は皿・不明土器が出土した。出土遺物が少ないため、本土坑の廃棄年代は不明である。

SK90 F-3・G-3

調査区の東側南部に位置する。南側が既設埋設物等の攪乱により失われている。また SK70 と切り合っており、切り合い関係から SK70 に対して本土坑が先行する。現状の規模は長軸約 1.61m、短軸約 0.55m、深さ約 0.64m を測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 4 点、陶器 2 点、土師質瓦質土器 2 点、瓦 2 点、金属製品 4 点が出土した。磁器は肥前系の碗・皿など。陶器は産地不明の鉢類など。土師質瓦質土器は皿。瓦は平瓦。金属製品は釘などが出土した。出土遺物が少ないため、本土坑の廃棄年代は不明である。

SK91 A-1

調査区の西側北部に位置する。SV5 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV5

が先行する。規模は長軸約 1.15m、短軸約 1.10m、深さ約 0.20m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK92 A-1

調査区の西側北部に位置する。SV5 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV5 が先行する。規模は長軸約 0.64m、短軸約 0.55m、深さ約 0.36m を測る。平面形は不整円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK93 A-1

調査区の西側北部に位置する。SK96・SV5 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV5 が先行する。規模は長軸約 0.96m、短軸約 0.69m、深さ約 0.53m を測る。平面形は不整形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK94 A-1

調査区の西側北部に位置する。規模は長軸約 1.15m、短軸約 0.81m、深さ約 0.26m を測る。平面形は不整形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK95 A-1

調査区の西側北部に位置する。規模は長軸約 0.77m、短軸約 0.34m、深さ約 0.18m を測る。平面形は不整長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK96 A-1

調査区の西側北部に位置する。SK93・SV5 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV5 が先行する。規模は長軸約 2.37m、短軸約 1.17m、深さ約 0.35m を測る。平面形は不整形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK97 A-1

調査区の西側北部に位置する。規模は長軸約 0.74m、短軸約 0.45m、深さ約 0.19m を測る。平面形は不整形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK98 A-2

調査区の西側中央に位置する。規模は長軸約 1.16m、短軸約 0.40m、深さ約 0.53m を測る。平面形は不整長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK99 E-2

調査区の東側南部に位置する。規模は長軸約 0.55m、短軸約 0.44m、深さ約 0.12m を測る。平面形は不整円形を呈する。

本土坑内からは磁器 1 点、陶器 1 点、貝 2 点が出土した。磁器は瀬戸・美濃系の碗。陶器は肥前系の皿が出土した。出土遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は 19 世紀初頭以降と考えられる。

SK100 B-1

調査区の西側北部に位置する。規模は長軸約 2.72m、短軸約 2.37m、深さ約 0.55m を測る。平面形は不整円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK101 F-3・G-3

調査区の東側南部に位置する。南壁に近接しており完掘には至っていない。また、SK75・SK78

と切り合っており、切り合い関係から本土坑が最も先行する。現状の規模は長軸約 1.80m、短軸約 1.20m、深さ約 0.75m を測る。平面形は不整形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

(3) 溝状遺構

SV5 A-1 ～ 3

調査区西側の西壁に沿って南北方向に延び、北壁付近で同じく北壁に沿って東西方向に屈曲する。東端は SB2 によって寸断されており、東方向の延伸は確認されていない。南端は調査区外に延伸する可能性がある。SB2・SK57・SK58・SK61・SK91～93・SK96・P65・P66・P73・P74・P92 と切り合っており、切り合い関係から本土坑が最も先行する。また既設埋設物等の攪乱によって寸断されているが、総延長の規模は南北軸約 23.70m、東西軸約 3.95m、深さ約 0.21m を測る。遺物は出土しなかった。

SV6 F-3

調査区東側南部に位置する。SV7 とともに、ほぼ真北方向に平行して延びている。南端は調査区外に延伸する可能性がある。北端は既設埋設物等の攪乱によって寸断されており、北方向の延伸は確認されていない。現状の規模は南北軸約 2.65m、幅約 0.58m、深さ約 0.04m を測る。遺物は出土しなかった。

SV7 F-3

調査区東側南部に位置する。SV6 とともに、ほぼ真北方向に平行して延びている。南端は調査区外に延伸する可能性がある。北端は既設埋設物等の攪乱によって寸断されており、北方向の延伸は確認されていない。現状の規模は南北軸約 4.15m、幅約 0.55m、深さ約 0.04m を測る。遺物は出土しなかった。

(4) 井戸

SE1 (近世遺構 2) B-1

調査区西側北部に位置する。この段階で井戸中心部のみが確認されている。周辺部は貝の集積を含む盛り土の痕跡がみられることから、掘り方は近世遺構 3 からの検出となっている。詳細は近世遺構 3 の SE1 に記載する。規模は長軸約 0.92m、短軸約 0.83m、深さ約 0.64m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

(5) ピット

P61 A-3

調査区西側南部に位置する。規模は長軸約 0.48m、短軸約 0.44m、深さ約 0.28m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P62 A-3

調査区西側南部に位置する。規模は長軸約 0.43m、短軸約 0.37m、深さ約 0.30m を測る。平面形は不整形円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P63 A-3

調査区西側南部に位置する。規模は長軸約 0.35m、短軸約 0.32m、深さ約 0.16m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P64 A-3

調査区西側南部に位置する。規模は長軸約 0.36m、短軸約 0.31m、深さ約 0.13m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P65 A-3

調査区西側南部に位置する。P66 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して P66 が先行する。規模は長軸約 0.34m、短軸約 0.34m、深さ約 0.16m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P66 A-3

調査区西側南部に位置する。P66 と切り合っており、切り合い関係から P65 に対して本土坑が先行する。規模は長軸約 0.32m、短軸約 29m、深さ約 0.34m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P67 A-3

調査区西側南部に位置する。規模は長軸約 0.24m、短軸約 0.23m 深さ約 0.15m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P68 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.48m、短軸約 0.45m、深さ約 0.20m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P69 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.37m、短軸約 0.36m、深さ約 0.32m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P70 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.23m、短軸約 0.21m、深さ約 0.20m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P71 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.26m、短軸約 0.23m、深さ約 0.12m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P72 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.31m、短軸約 0.26m、深さ約 0.12m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P73 A-2

調査区西側中央に位置する。SV5 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV5 が先行する。規模は長軸約 0.57m、短軸約 0.54m、深さ約 0.26m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P74 A-2

調査区西側中央に位置する。SV5 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV5 が先行する。規模は長軸約 0.42m、短軸約 0.28m、深さ約 0.21m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P75 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.09m、短軸約 0.09m、深さ約 0.20m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P76 A-1

調査区西側北部に位置する。南側は既設埋設物等の攪乱によって失われている。規模は長軸約 0.57m、短軸約 0.46m、深さ約 0.17m を測る。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P77 B-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.35m、短軸約 0.31m、深さ約 0.12m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P78 B-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.45m、短軸約 0.31m、深さ約 0.23m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P79 B-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.35m、短軸約 0.31m、深さ約 0.18m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P80 B-3

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.37m、短軸約 0.32m、深さ約 0.14m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P81 F-1

調査区東側北部に位置する。SK67 と切り合っており、切り合い関係から SK67 に対して本ピットが先行する。規模は長軸約 0.53m、短軸約 0.40m、深さ約 0.18m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P82 F-2

調査区東側中央に位置する。SK51 と切り合っており、切り合い関係から SK51 に対して本ピットが先行する。規模は長軸約 0.46m、短軸約 0.27m、深さ約 0.18m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P83 G-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約 0.60m、短軸約 0.47m、深さ約 0.21m を測る。平面形は楕円形を呈する。

本ピット内からは陶器 1 点、土師質瓦質土器 13 点、瓦 3 点が出土した。陶器は肥前系(唐津)の鉢。土師質瓦質土器は褐色系の皿・白色系の皿など。瓦は丸瓦・平瓦が出土した。出土遺物が少ないた

め、本ピットの廃棄年代は不明である。

P84 F-1

調査区の東側北部のコンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 0.38m、短軸約 0.30m、深さ約 0.30m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P85 F-1

調査区の東側北部のコンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 0.43m、短軸約 0.33m、深さ約 0.22m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P86 G-1

調査区東側北部のコンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 1.95m、短軸約 1.44m、深さ約 0.14m を測る。平面形は円形を呈する。

本ピット内からは陶器 1 点が出土した。陶器は関西系の碗である。出土遺物が少ないため、本ピットの廃棄年代は不明である。

P87 D-1

調査区中央北部のコンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 0.24m、短軸約 0.23m、深さ約 0.12m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P88 D-1

調査区中央北部のコンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 0.15m、短軸約 0.15m、深さ約 0.05m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P89 D-1

調査区中央北部のコンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 0.26m、短軸約 0.22m、深さ約 0.14m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P90 E-1

調査区中央北部のコンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 0.14m、短軸約 0.10m、深さ約 0.06m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P91 E-1

調査区中央北部のコンクリート基礎内に位置する。規模は長軸約 0.14m、短軸約 0.12m、深さ約 0.08m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P92 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.25m、短軸約 0.20m、深さ約 0.14m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P93 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.56m、短軸約 0.38m、深さ約 0.20m を測る。平面形は不整形を呈する。遺物は出土しなかった。

P94 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.27m、短軸約 0.23m、深さ約 0.20m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P95 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.41m、短軸約 0.33m、深さ約 0.11m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P96 A-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約 0.42m、短軸約 0.40m、深さ約 0.12m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P97 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.40m、短軸約 0.37m、深さ約 0.20m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P98 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.21m、短軸約 0.18m、深さ約 0.11m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P99 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.46m、短軸約 0.34m、深さ約 0.25m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P100 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.17m、短軸約 0.16m、深さ約 0.10m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P101 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.21m、短軸約 0.21m、深さ約 0.06m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P102 A-2

調査区西側中央に位置する。規模は長軸約 0.52m、短軸約 0.45m、深さ約 0.52m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P103 E-1

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.21m、短軸約 0.18m、深さ約 0.13m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P104 E-1

調査区中央北部のコンクリート基礎内に位置する。コンクリート基礎に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約 0.40m、短軸約 0.27m、深さ約 0.33m を測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

(6) その他の遺構

SX1 E-1・F-1

調査区中央北部に位置する。コンクリート基礎に近接しており完掘には至っていない。規模は長軸約 3.45m、短軸約 1.32m、深さ約 0.48m を測る。平面形は不整形を呈する。遺物は出土しなかった。

貝集積 B-1

調査区西側北部に位置する。調査区北壁に近接しており完掘には至っていない。規模は長軸約 3.45m、短軸約 1.32m、深さ約 0.48m を測る。平面形は不整形を呈する。牡蠣・蛤を中心にコンテナ 17 箱相当を採取した。縁辺部分ではレンズ状の集積が多く確認されたことから、本貝集積は盛り土などの整地作業に伴う廃棄の可能性があり、本貝集積の周辺部も盛り土あるいは整地が行われた可能性が考えられる。

4 近世遺構 3

基準とした層位は TP2.16m 付近で近世遺構 2 以下の有機質層を除去した後に検出される細粒砂層の上面である。当該面が確認されなかった範囲は検出面の標高を基準とした。

検出した遺構は 17 世紀前半から後半を中心としている。

(1) 柵列

SA1 A-1 ~ F-1

本柵列は調査区北側に位置する。調査区のほぼ全域、東西方向に延びる。検出状況から東端部は調査区外に延びる可能性が考えられたが、当該面では延伸が確認されなかった。西端部は、ちょうど SB5・SB6 の南北方向の軸線上で終息しており、延伸は確認されなかった。

一部、攪乱による寸断が認められるが、柱穴 36 基、東西方向の全長約 46.50m を測る。本柵列を構成する各柱穴は底部に 15 ~ 30cm 前後の礎石を配置しており、その形態にあたるものを柵列とした。また、調査段階で礎石のみの検出になっているものでも軸線上に配置されていると判断したものには P No. を付した。柱間、約 1.5m の間隔で、柱穴 36 基のうち 26 基分と 9 基分の二軸が確認されていることから建替えなどの可能性も考えられたが、ほぼ同軸線上にあることから柵列としては同一のものと判断し、あえて分割していない。

26 基分 (P1 ~ 14・P16・P19・P21・P23 ~ 25・P27・P30・P31・P33 ~ 36)

9 基分 (P15・P17・P18・P20・P22・P26・P28・P29・P32)

P1 F-1・2

本柵列の東端に位置する。長軸約 0.51m、短軸約 0.45m、深さ約 0.25m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 25 × 15cm を測る。

P2 F-1・2

本柵列の東側に位置する。長軸約 0.57m、短軸約 0.41m、深さ約 0.22m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 15 × 10cm を測る。

P3 F-1・2

本柵列の東側に位置する。長軸約 0.59m、短軸約 0.50m、深さ約 0.06m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 30 × 15cm を測る。

P4 F-1・2

本柵列の東側に位置する。礎石径は約 10 × 10m を測る。

P5 E-1・2

本柵列の東側に位置する。長軸約 0.56m、短軸約 0.51m、深さ約 0.20m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 25 × 20cm を測る。

P6 E-1・2

本柵列の東側に位置する。長軸約 0.84m、短軸約 0.72m、深さ約 0.31m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 30 × 30cm を測る。本柱穴内からは磁器 1 点が出土した。磁器は肥前系の碗である。

P7 E-1・2

本柵列の東側に位置する。礎石径は約 30 × 20cm を測る。

P8 E-1・2

本柵列の東側に位置する。礎石径は約 30 × 20cm を測る。

P9 E-1

本柵列の東側に位置する。礎石径は約 20 × 20cm を測る。

P11 D-1

本柵列の東側に位置する。礎石径は約 15 × 15cm を測る。

P12 D-1

本柵列の東側に位置する。長軸約 0.34m、短軸約 0.30m、深さ約 0.09m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 10 × 10cm を測る。

P13 D-1

本柵列の中央に位置する。長軸約 0.68m、短軸約 0.66m、深さ約 0.15m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 20 × 15cm を測る。

P14 D-1

本柵列の中央に位置する。長軸約 0.60m、短軸約 0.55m、深さ約 0.24m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 20 × 15cm を測る。

P15 D-1

本柵列の中央に位置する。P16 と切り合っており、切り合い関係から本柱穴が先行する。長軸 0.88m、短軸約 0.44m、深さ約 0.26m を測る。平面形は長方形を呈する。礎石径は約 15 × 10cm を測る。本柱穴内からは志野・鉄絵皿が出土した。

P16 C-1・D-1

本柵列の中央に位置する。P15 と切り合っており、切り合い関係から P15 が先行する。長軸約 0.69m、短軸約 0.53m、深さ約 0.30m を測る。平面形は楕円形を呈する。礎石径は約 30 × 20cm を測る。

P17 C-1

本柵列の中央に位置する。長軸約 0.74m、短軸約 0.41m、深さ約 0.17m を測る。平面形は不整形を呈する。礎石径は約 25 × 15cm を測る。

P18 C-1

本柵列の中央に位置する。長軸約 0.48m、短軸約 0.45m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 30 × 20cm を測る。

P19 C-1

本柵列の中央に位置する。長軸約 0.35m、短軸約 0.30m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 20 × 15cm を測る。

P20 C-1

本柵列の中央に位置する。P21 と切り合っており、切り合い関係から P21 に対して本柱穴が先行する。長軸約 0.73m、短軸約 0.39m、深さ約 0.33m を測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。礎石径は約 25 × 15cm を測る。

P21

本柵列の中央に位置する。P20 と切り合っており、切り合い関係から本柱穴に対して P20 が先行する。長軸 1.03m、短軸 0.60m、深さ 0.20m を測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。礎石径は約 30 × 20cm を測る。

P22 C-1

本柵列の中央に位置する。長軸約 0.92m、短軸約 0.86m、深さ約 0.48m を測る。平面形は方形を呈する。礎石径は約 30 × 20cm を測る。

P23 C-1

本柵列の西側に位置する。長軸約 0.50m、短軸約 0.48m、深さ約 0.18m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 20 × 20cm を測る。

P24 C-1

本柵列の西側に位置する。長軸約 0.42m、短軸約 0.36m、深さ約 0.28m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 30 × 15cm を測る。

P25 B-1

本柵列の西側に位置する。長軸約 0.52m、短軸約 0.46m、深さ約 0.23m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 30 × 15cm を測る。

P26 B-1

本柵列の西側に位置する。長軸約 0.49m、短軸約 0.48m、深さ約 0.16m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 20 × 20cm を測る。本柱穴内からは瓦（平瓦）1点が出土した。

P27 B-1

本柵列の西側に位置する。長軸約 0.52m、短軸約 0.46m、深さ約 0.37m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 30 × 20cm を測る。

P28 B-1

本柵列の西側に位置する。長軸約 0.60m、短軸約 0.51m、深さ約 0.53m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 20 × 15cm を測る。

P29 B-1

本柵列の西側に位置する。長軸約 0.61m、短軸約 0.56m、深さ約 0.55m を測る。平面形は円形

を呈する。礎石径は約 30 × 20cm を測る。本柱穴内からは陶器 2 点、土師質瓦質土器（皿）1 点、瓦 2 点が出土した。陶器は信楽系の壺、土師質瓦質土器は皿、瓦は平瓦である。

P30 B-1

本柵列の西側に位置する。長軸約 0・49m、短軸約 0.45m、深さ約 0.42m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 50 × 30cm を測る。

P31 B-1

本柵列の西側に位置する。長軸約 0.53m、短軸約 0.49m、深さ約 0.64m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 30 × 20cm を測る。

P32 B-1

本柵列の西側に位置する。礎石径は約 35 × 30cm を測る。

P34 A-1

本柵列の西側に位置する。礎石径は約 30 × 20cm を測る。

P35 A-1

本柵列の西端に位置する。礎石径は約 25 × 25cm を測る。

SA2 F-2

本柵列は調査区東側南部に位置する。東西方向に 2 基確認された。検出状況から東西方向に延びる可能性が考えられたが、当該面では延伸が確認されなかった。

柱間、約 1.2m の間隔である。

P1 F-2

本柵列の東端に位置する。長軸約 0.38m、短軸約 0.34m、深さ約 0.27m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 40 × 30cm を測る。

P2 F-2

本柵列の西端に位置する。長軸約 0.45m、短軸約 0.43m、深さ約 0.25m を測る。平面形は円形を呈する。礎石径は約 30 × 25cm を測る。

SA3 F-1 ～ 3

SA2 の P1 を基点として北方向に P136・P141、南方向に SK105・SA2 の P1・P129・P121 など構成される軸である。それぞれ柱間、約 1.5m およびその倍数の間隔で位置する。等間隔で連続したかたちでの確認ではないが、SA1 の P1・SA2 の P1 の起点と考えられる軸に延伸する可能性があることから SA No. を付した。このため個々の記載は土坑・ピットの項で行う。

(2) 土坑

SK102 F-1

調査区の東側北部に位置する。規模は長軸約 0.65m、短軸約 0.34m、深さ約 0.16m を測る。平面形は不整長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK103 F-1

調査区の東側北部に位置する。規模は長軸約 0.71m、短軸約 0.38m、深さ約 0.28m を測る。平面

形は不整長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK104 F-1

調査区の東側北部に位置する。SK114 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SK114 が先行する。規模は長軸約 0.63m、短軸約 0.34m、深さ約 0.12m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK105 F-2

調査区の東側中央に位置する。規模は長軸約 0.45m、短軸約 0.37m、深さ約 0.14m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK106 F-2

調査区の東側中央に位置する。SA2 - P1 と切り合っており、切り合い関係から本土坑が先行する。規模は長軸約 0.80m、短軸約 0.52m、深さ約 0.20m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK107 D-1

調査区の中央北部に位置する。規模は長軸約 1.86m、短軸約 1.07m、深さ約 0.10m を測る。平面形は不整形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK108 F-2

調査区の東側中央に位置する。規模は長軸約 0.74m、短軸約 0.60m、深さ約 0.32m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK109 F-2

調査区の東側中央に位置する。規模は長軸約 1.25m、短軸約 0.48m、深さ約 0.24m を測る。平面形は不整長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK110 F-2

調査区の東側中央に位置する。北側は攪乱によって失われている。現状の規模は長軸約 1.75m、短軸約 1.28m、深さ約 0.43m を測る。平面形は不整長方形を呈する。

本土坑内からは陶器 1 点、瓦 2 点が出土した。陶器は産地不明（瀬戸・美濃系？）の皿、瓦は平瓦である。出土遺物が少ないため、本土坑の廃棄年代は不明である。

SK111 D-2

調査区の中央に位置する。SV10 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV10 が先行する。規模は長軸約 1.10m、短軸約 1.08m、深さ約 0.29m を測る。平面形は不整長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK112 F-2・G-2

調査区の東側南部に位置する。SV9 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SV9 が先行する。規模は長軸約 2.77m、短軸約 1.53m、深さ約 0.43m を測る。平面形は不整長方形を呈する。

本土坑内からは磁器 1 点、陶器 4 点、土師質瓦質土器 2 点、瓦 2 点、金属製品 1 点と貝が出土した。磁器は肥前系の中碗、陶器も肥前系（唐津）の大鉢（ニ彩唐津）・刷毛目皿、土師質瓦質土器は焼

塩壺の蓋と身、瓦は平瓦・軒丸瓦、金属製品は不明の鉄塊である。出土遺物から、本土坑の廃棄年代は17世紀後半と考えられる。

SK113 F-3

調査区の東側南部に位置する。南側の一部が攪乱によって失われている。規模は長軸約2.11m、短軸約0.95m、深さ約0.26mを測る。平面形は不整長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK114 F-1

調査区の東側北部のコンクリート基礎に近接しており完掘には至っていない。またSK104と切り合っており切り合い関係からSK104に対して本土坑が先行する。現状の規模は長軸約2.02m、短軸約1.84m、深さ約0.58mを測る。平面形は不整方形を呈すると思われる。

本土坑内からは陶器5点、土師質瓦質土器6点が出土した。陶器は肥前系の碗(1)、肥前系(唐津)の端反形碗・天目形碗・溝縁皿(2)、土師質瓦質土器は褐色系の皿(3)・不明土器が出土した。出土遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は17世紀前半である。

SK115 B-1・C-1

調査区西側北部に位置する。規模は長軸約1.93m、短軸約1.33m、深さ約0.58mを測る。平面形は方形を呈する。

本土坑内からは磁器1点、陶器4点、焼締め1点、土師質瓦質土器2点と貝が出土した。磁器は肥前系の高台内に砂目のある初期伊万里の碗(1)。陶器は総織部の銅緑釉小杯(2)、肥前系(唐津)の碗・砂目積みの溝縁皿(3)・(4)。焼締めは備前系の播鉢。土師質瓦質土器は皿・内耳土器A群(5)が出土した。出土遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は17世紀前半である。

SK116 B-2

調査区西側北部に位置する。SK117と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対してSK117が先行する。規模は長軸約2.25m、短軸約1.39m、深さ約0.26mを測る。平面形は不整長方形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK117 A-1・B-1

調査区西側北部に位置する。SK116・SK120と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対してSK120が先行する。土坑内には人頭大の石が多量に廃棄されていた。規模は長軸約6.50m、短軸約2.85m、深さ約0.97mを測る。平面形は方形を呈する。

本土坑内からは磁器3点、陶器14点、焼締め4点、土師質瓦質土器2点、金属製品1点、瓦3点が出土した。磁器は肥前系の一重網目文の碗(1)など。陶器は肥前系(唐津)の高台内施釉の灰釉碗(2)・天目形碗・砂目積みの溝縁皿(3)・壺・播鉢など。焼締めは備前系の播鉢・甕・端反建水(4)で底部「○に大」印あり。土師質瓦質土器は皿・壺類。瓦はコビキBの丸瓦で釘穴丸形(5)とコビキBの丸瓦で釘穴角形(6)のものなど。金属製品は釘が出土した。出土遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は17世紀中葉である。

SK118 A-1・B-1

調査区西側北部に位置する。北側はサブトレンチによって失われた。規模は長軸約1.60m、短軸約0.75m、深さ約0.53mを測る。平面形は方形を呈すると思われる。

本土坑内からは磁器 2 点、陶器 5 点、焼締め 2 点、土師質瓦質土器 2 点が出土した。磁器は肥前系の一重網目文の碗・文様不明の高台内に砂目のある初期伊万里の碗 (1)。青花碗など。陶器は肥前系 (唐津) の灰釉碗 (2)・口縁鉄釉の播鉢 (3)、志野の鉄絵皿など。焼締めは備前系の播鉢 (4)。土師質瓦質土器は皿などが出土した。出土遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は 17 世紀前半である。

SK119 (SE1 掘り方) B-1・C-1

調査区西側北部に位置する。SK120 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対して SK120 が先行する。規模は長軸約 4.34m、短軸約 3.15m、深さ約 1.30m を測る。平面形はややふくらみのある方形を呈する。

本土坑内からは陶器 7 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 3 点、瓦 1 点と漆器碗片が出土した。陶器は肥前系 (唐津) の天目形碗・砂目積みの灰釉皿 (1)・灰釉大皿 (2) (SE1 と接合) など。焼締めは備前系の甕類。土師質瓦質土器は皿など。瓦は平瓦片が出土した。出土遺物は少ないが、本土坑の廃棄年代は 17 世紀前半である。

SK120 B-1・C-1

調査区西側北部に位置する。北壁面と近接しており完掘には至っていない。また SK117・SK119・SK126 と切り合っており、切り合い関係から本土坑が最も先行している。現状の規模は長軸約 7.40m、短軸約 6.85m、深さ約 0.58m を測る。平面形は不整形を呈すると思われる。

本土坑内からは土師質瓦質土器 3 点が出土した。播り目のある播鉢(1)・鍋(2)・(3)と考えられる。出土遺物は少ないが、SK117・SK119・SK126 との切り合い関係から、本土坑の廃棄年代は 17 世紀前半以前と推定される。

SK121 F-3

調査区の東側南部に位置する。P129 と切り合っており、切り合い関係から P129 に対して本土坑が先行する。また、南側の一部が攪乱によって失われている。現状の規模は長軸約 0.87m、短軸約 0.54m、深さ約 0.16m を測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

SK122 F-3

調査区の東側南部に位置する。規模は長軸約 0.60m、短軸約 0.47m、深さ約 0.09m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK123 F-1

調査区の東側北部に位置する。規模は長軸約 0.74m、短軸約 0.72m、深さ約 0.61m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK124 F-1

調査区の東側北部に位置する。規模は長軸約 0.70m、短軸約 0.60m、深さ約 0.22m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

SK125 G-3

調査区の東側南部に位置する。規模は長軸約 0.59m、短軸約 0.38m、深さ約 0.28m を測る。平面形は楕円形を呈する。軒平瓦の一部が出土した。出土遺物が少ないため、本土坑の廃棄年代は不明である

SK126 B-1

調査区の西側北部に位置する。SK120 と切り合っており、切り合い関係から本土坑に対してSK120 が先行する。規模は長軸約0.56m、短軸約0.50m、深さ約0.24mを測る。平面形は方形を呈する。遺物は出土しなかった。

(3) 溝状遺構 (SV9)・溝状遺構群 (SV8・SV10・SV11)

調査区北側 SA1 と同軸線上に位置し、調査区中央付近から SV8・SV10・SV11 が交わる。本溝状遺構内の体積状況から先行順位は SV10・SV8・SV11 に位置づけられるが、流水を伴う堆積の可能性もあり、各溝状遺構の順位に対して人為的な介入を裏付ける明確な資料は得られなかった。

本溝状遺構の検出状況から西端部は調査区西壁外に延びる可能性が考えられたが、当該面では明確な延伸が確認されなかった。また、SV8・SV10・SV11 に近接および内包しているすべての遺構に対して当該溝状遺構群は最も後位にある。

SV8 A-1・2、B-1・2

既設埋設物等の攪乱によって寸断されているが、総延長の規模は東西方向で約 53.80m、南北幅は最大で約 4.50m、深さ約 0.40m を測る。

本溝状遺構内からは磁器 2 点、陶器 1 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 2 点が出土した。磁器は肥前系の文様不明の碗 (1) など。陶器は肥前系 (唐津) の藁灰釉流しの小杯 (2)。焼締めは備前系の播鉢。土師質瓦質土器は甕 (3) などが出土した。出土遺物は少ないが、本溝状遺構の廃絶年代は 17 世紀前半である。

SV9 F-2・3、G-2・3

調査区西側南部に位置する。東側が SK112 と切り合っており、切り合い関係から SK112 に対して本溝状遺構が先行する。検出状況から西端部は調査区西壁に延びる可能性が考えられたが明確な延伸は確認されなかった。総延長の規模は東西方向で約 5.50m、南北幅は最大で約 1.10m、深さ約 0.33m を測る。

本溝状遺構内からは陶器 1 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 1 点、瓦 1 点が出土した。陶器は肥前系 (唐津) の胎土目積みの灰釉皿 (1) など。焼締めは備前系の甕。土師質瓦質土器は皿。瓦は鬼瓦片が出土した。出土遺物は少ないが、本溝状遺構の廃絶年代は 17 世紀前半と考えられる。

SV10 D-1・2、E-1・2、F-1・2

調査区中央付近から SV8 と分岐する。総延長の規模は東西方向で約 30.00m 以上、南北幅は最大で約 4.50m、深さ約 1.20m を測る。

本溝状遺構内からは陶器 2 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 7 点、瓦 5 点が出土した。陶器は赤志野の草花文向付 (1)。焼締めは備前系の甕 (2)。土師質瓦質土器は中皿・甕類など。瓦は平瓦・軒丸瓦・コビキ B の丸瓦 (3) で吊り紐痕・叩き痕があるものなどが出土した。出土遺物は少ないが、本溝状遺構の廃絶年代は 17 世紀前半である。

SV11 C-2・D-2

調査区中央付近から SV8 と分岐する。西側は既設埋設物等の攪乱により失われている。総延長

の規模は東西方向で約 12.00m 以上、南北幅は最大で約 1.10m、深さ約 0.20m を測る。

本溝状遺構内からは陶器 1 点が出土した。陶器は瀬戸・美濃系灰釉印花文の折縁ソギ皿(1)である。出土遺物は少ないが、SV8 との先行順位から本溝状遺構の廃絶年代は 17 世紀前半と考えられる。

(4) 井戸

SE1 (近世遺構 3) B-1

調査区西側北部に位置する。井戸の直径は約 0.68m を測る。周辺砂層からの湧水が激しかったため人力掘削を断念し、機械掘削による井戸内の遺物および井戸側板の採取作業に移行した。良好に採取できた井戸の側板は長さ約 103cm、幅約 12cm、厚さ約 2cm を測る。

本井戸からは陶器 3 点、土師質瓦質土器 8 点が出土した。陶器は肥前系(唐津)の灰釉大皿(1)、文様不明の大皿(2)、信楽系の甕・壺類(3)。土師質瓦質土器は皿・内耳土器・焙烙類などが出土した。出土遺物は少ないが、本井戸の廃絶年代は 17 世紀前半から後半と考えられる。

(5) ピット

P105 E-2

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.46m、短軸約 0.44m、深さ約 0.48m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P106 E-2

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.40m、短軸約 0.37m、深さ約 0.44m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P107 D-1

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.20m、短軸約 0.15m、深さ約 0.19m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P108 D-1

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.40m、短軸約 0.34m、深さ約 0.28m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P109 D-2

調査区中央、SV8 の上層に位置する。ピット内には焼土が多量に混入しており、上部の焼土遺構群に伴うものと考えられる。規模は長軸約 0.48m、短軸約 0.42m、深さ約 0.18m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P110 D-2

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.43m、短軸約 0.41m、深さ約 0.26m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P111 D-2

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.52m、短軸約 0.50m、深さ約 0.30m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P112 D-2

調査区中央、SV8の上層に位置する。規模は長軸約0.37m、短軸約0.30m、深さ約0.24mを測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P113 F-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約0.30m、短軸約0.30m、深さ約0.13mを測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P114 F-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約0.18m、短軸約0.18m、深さ約0.17mを測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P115 G-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約0.33m、短軸約0.27m、深さ約0.19mを測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P116 G-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約0.30m、短軸約0.24m、深さ約0.38mを測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P117 F-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約0.25m、短軸約0.18m、深さ約0.29mを測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P118 F-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約0.37m、短軸約0.34m、深さ約0.17mを測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P119 F-3

調査区東側南部に位置する。西壁に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約0.39m、短軸約0.37m、深さ約0.11mを測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P120 F-3

調査区東側南部に位置する。P121と切り合っており切り合い関係からP121が先行する。規模は長軸約0.28m、短軸約0.28m、深さ約0.16mを測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P121 F-3

調査区東側南部に位置する。P120と切り合っており切り合い関係から本ピットが先行する。規模は長軸約0.39m、短軸約0.30m、深さ約0.15mを測る。平面形は円形を呈する。底部に基礎石を配置する。礎石径は約30×20cmを測る。遺物は出土しなかった。

P122 F-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約0.31m、短軸約0.28m、深さ約0.16mを測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P123 F-1

調査区東側北部に位置する。規模は長軸約 0.20m、短軸約 0.18m、深さ約 0.24m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P124 F-3

調査区東側南部に位置する。南壁に近接しており完掘には至っていない。現状の規模は長軸約 0.45m、短軸約 0.18m、深さ約 0.19m を測る。平面形は円形を呈すると思われる。遺物は出土しなかった。

P125 F-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約 0.43m、短軸約 0.41m、深さ約 0.25m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P126 F-3・G-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約 0.37m、短軸約 0.36m、深さ約 0.16m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P127 G-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約 0.55m、短軸約 0.48m、深さ約 0.31m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P128 G-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約 0.42m、短軸約 0.35m、深さ約 0.24m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P129 F-3

調査区東側南部に位置する。SK121 と切り合っており切り合い関係から本ピットに対して SK121 が先行する。規模は長軸約 0.19m、短軸約 0.19m、深さ約 0.16m を測る。平面形は円形を呈する。底部に基礎石状に播鉢が配置される。

本ピットからは焼締め 1 点 土師質瓦質土器 3 点が出土した。焼締めは備前系の播鉢 (1)。土師質瓦質土器は内耳土器 A 群 (内湾しないもの)・焙烙類。金属製品は釘が出土した。出土遺物が少ないため。本ピットの年代は不明である。

P130 E-1

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.40m、短軸約 0.40m、深さ約 0.12m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P131 E-1

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.39m、短軸約 0.32m、深さ約 0.16m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P132 E-1

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.32m、短軸約 0.31m、深さ約 0.24m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P133 E-1

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.36m、短軸約 0.34m、深さ約 0.12m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P134 F-1

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.33m、短軸約 0.26m、深さ約 0.26m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P135 F-1

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.49m、短軸約 0.47m、深さ約 0.21m を測る。底部から拳大の石が出土している。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P136 F-1

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.68m、短軸約 0.52m、深さ約 0.31m を測る。底部から拳大の石が出土している。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P137 F-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約 0.23m、短軸約 0.20m、深さ約 0.11m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P138 F-1

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.40m、短軸約 0.36m、深さ約 0.44m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P139 F-1

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.58m、短軸約 0.53m、深さ約 0.43m を測る。平面形は円形を呈する。

本ピットからは瓦 3 点が出土した。瓦は平瓦・軒丸瓦である。P138 の配置から SV10 に関連した遺物の可能性もある。

P140 E-1

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.45m、短軸約 0.36m、深さ約 0.19m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P141 F-1

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.46m、短軸約 0.44m、深さ約 0.34m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P142 C-1

調査区西側北部、SV8 の上層に位置する。規模は長軸約 0.21m、短軸約 0.19m、深さ約 0.15m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P143 E-2

調査区東側北部、SV10 の上層に位置する。規模は長軸約 0.52m、短軸約 0.47m、深さ約 0.31m を測る。平面形は円形を呈する。底部から拳～人頭大の石が出土している。遺物は出土しなかった。

P144 G-3

調査区東側南部に位置する。規模は長軸約 0.33m、短軸約 0.32m、深さ約 0.21m を測る。平面形

は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P145 F-2

調査区東側南部に位置する。SV9 と切り合っており、切り合い関係から本ピットに対して SV9 が先行する。規模は長軸約 0.31m、短軸約 0.27m、深さ約 0.20m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P146 E-1

調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.45m、短軸約 0.31m、深さ約 0.17m を測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

P147 E-1

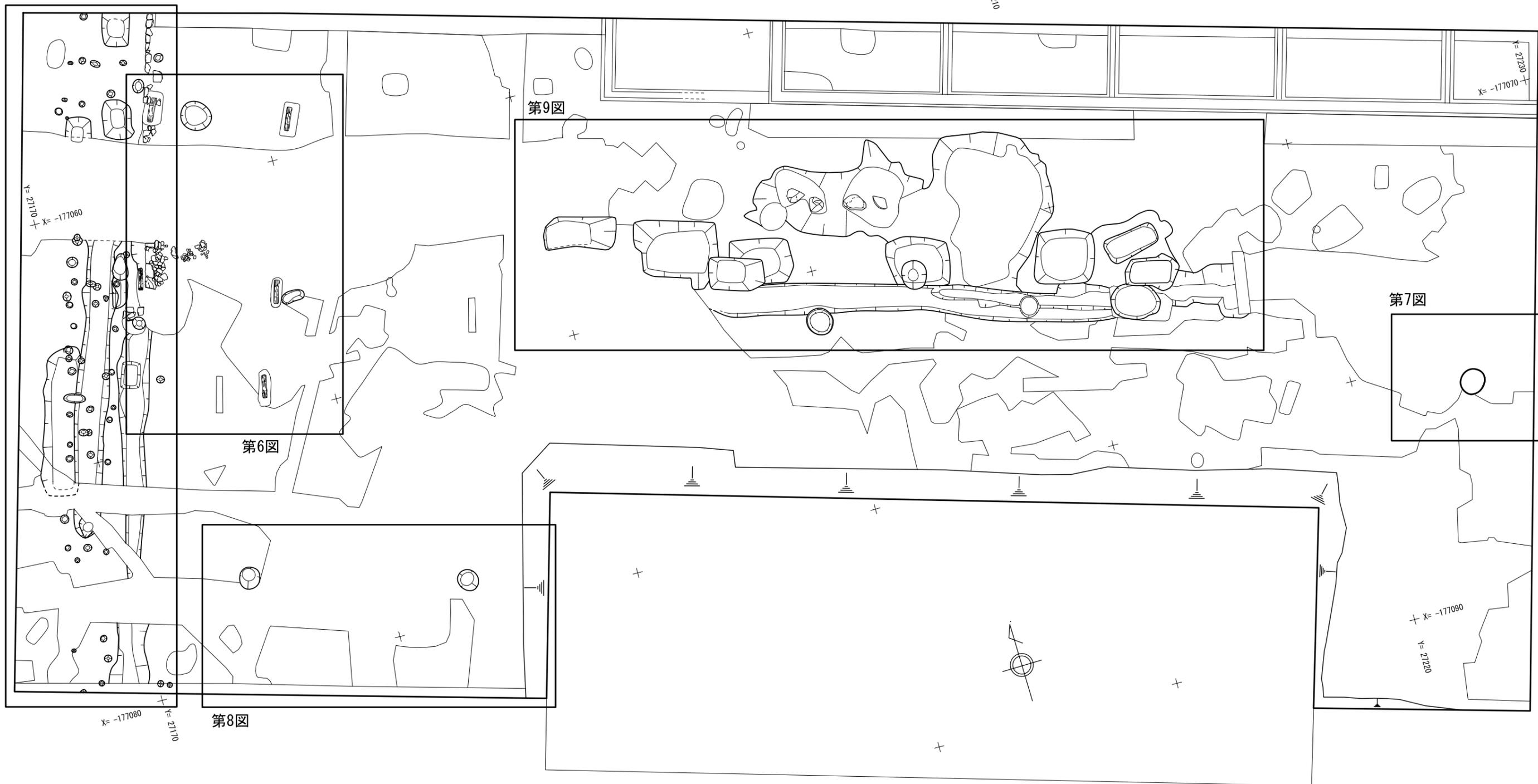
調査区中央北部に位置する。規模は長軸約 0.30m、短軸約 0.28m、深さ約 0.08m を測る。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

(6) その他の遺構

SX2 F-2

調査区東側中央に位置する。SV9 と切り合っており、切り合い関係から本遺構に対して SV9 が先行する。規模は長軸約 1.93m、短軸約 0.37m、深さ約 0.17m を測る。平面形は短冊形を呈する。遺物は出土しなかった。

第5図



第9図

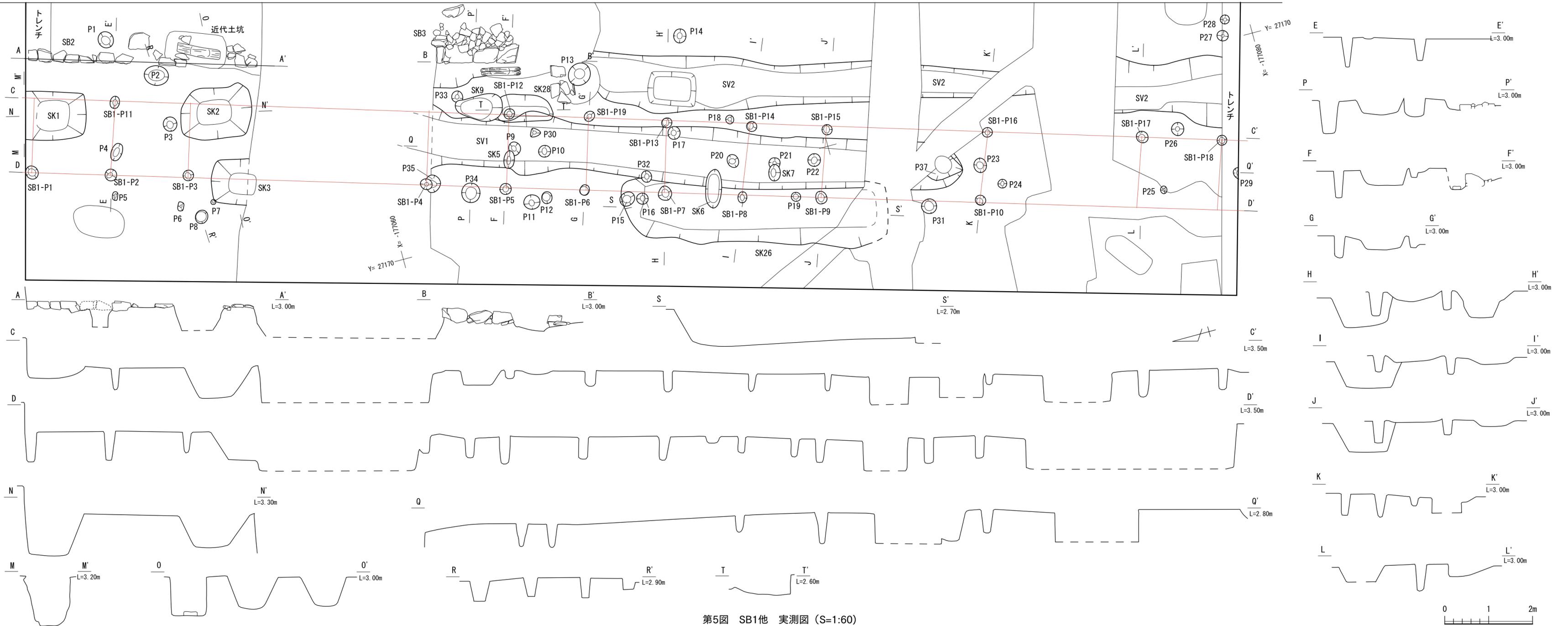
第6図

第8図

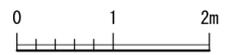
第7図

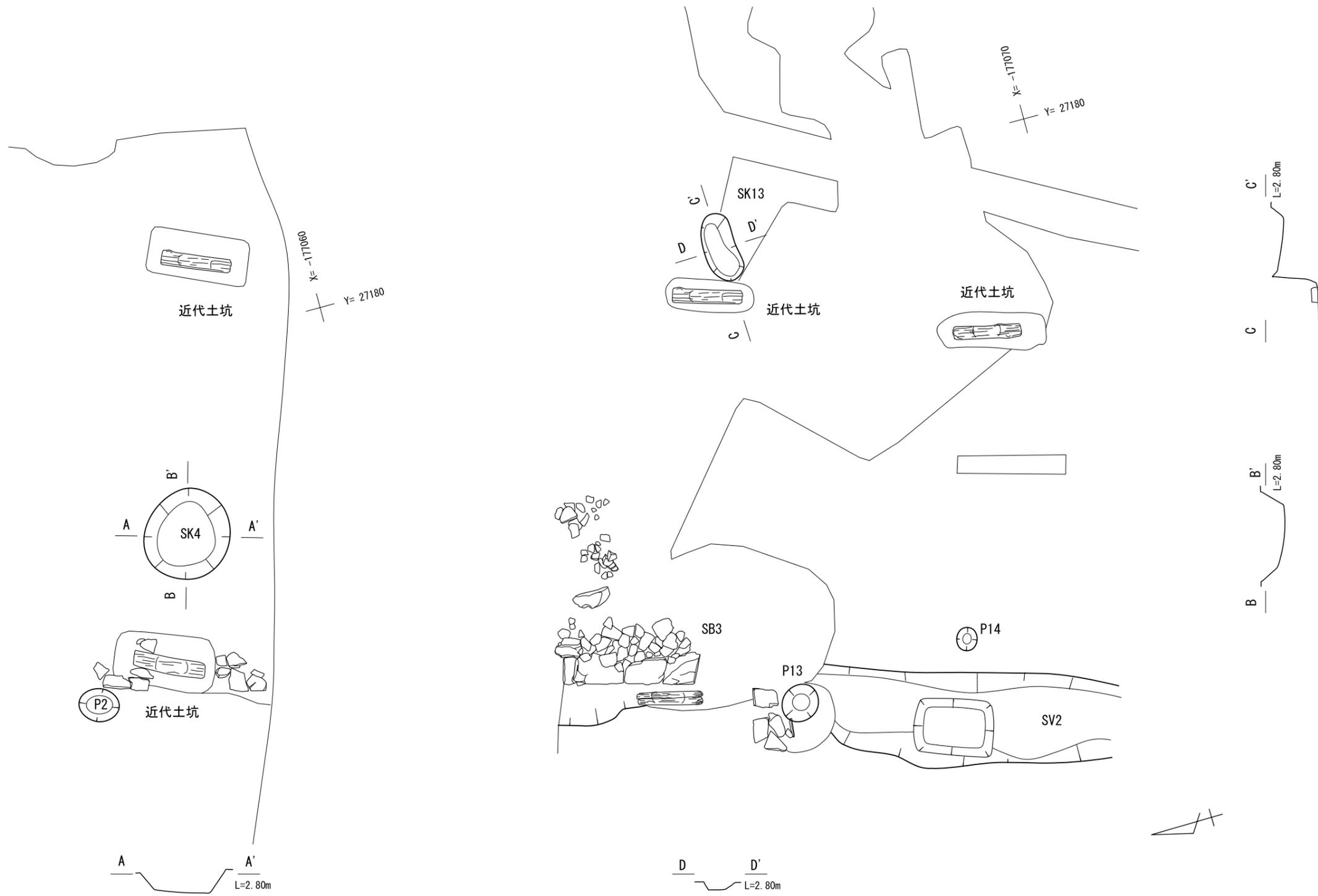
第4図 近現代以降遺構配置図 (S=1:160)





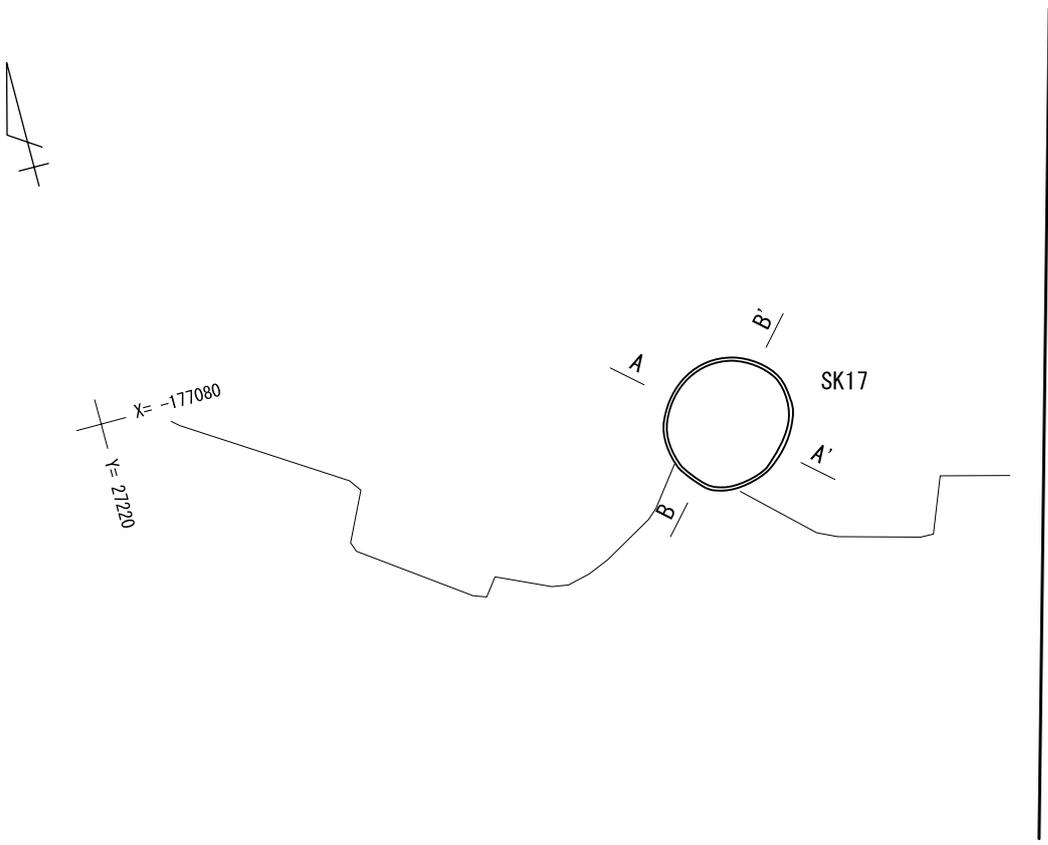
第5図 SB1他 実測図 (S=1:60)





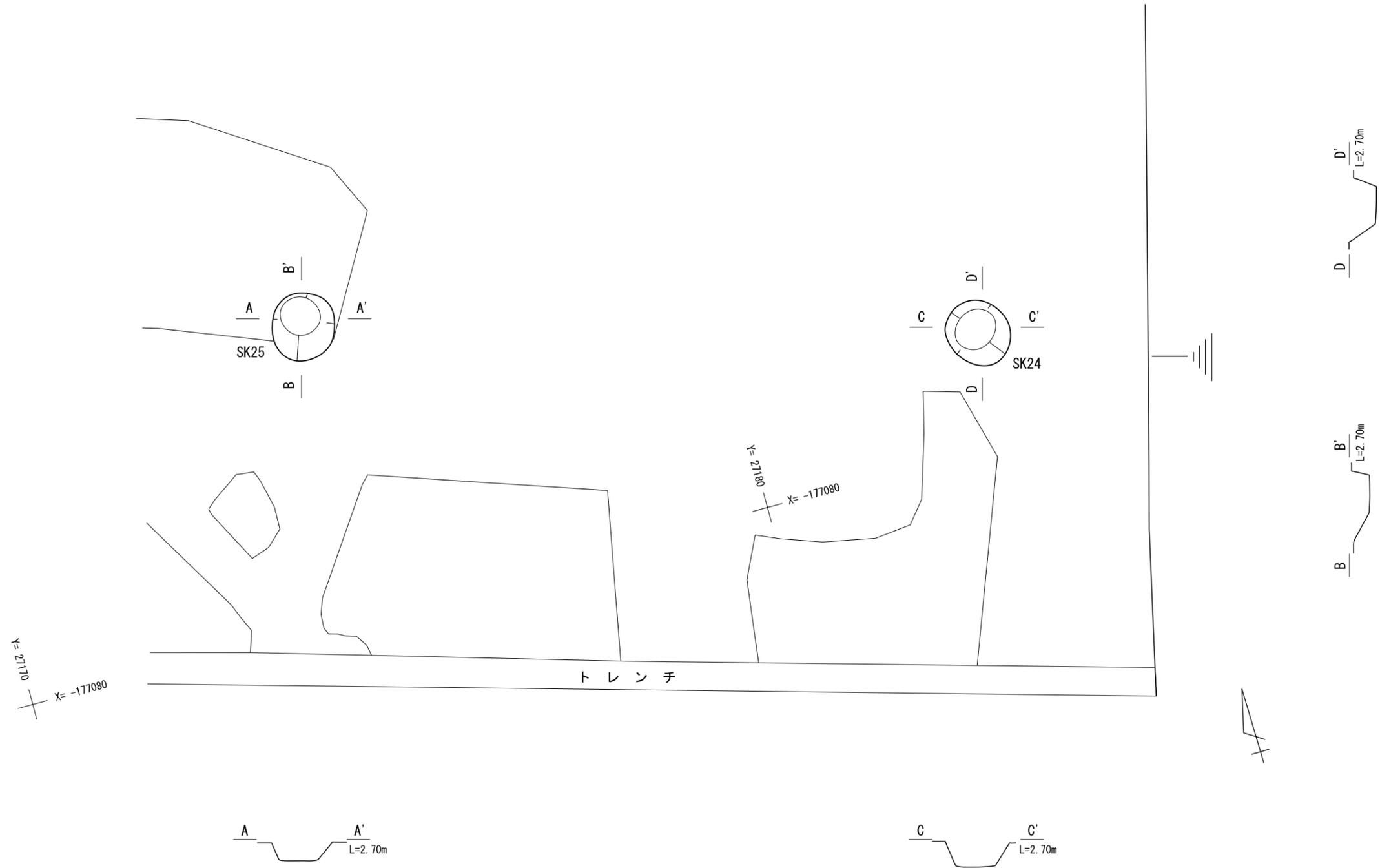
第6図 SK4他 実測図 (S=1:60)



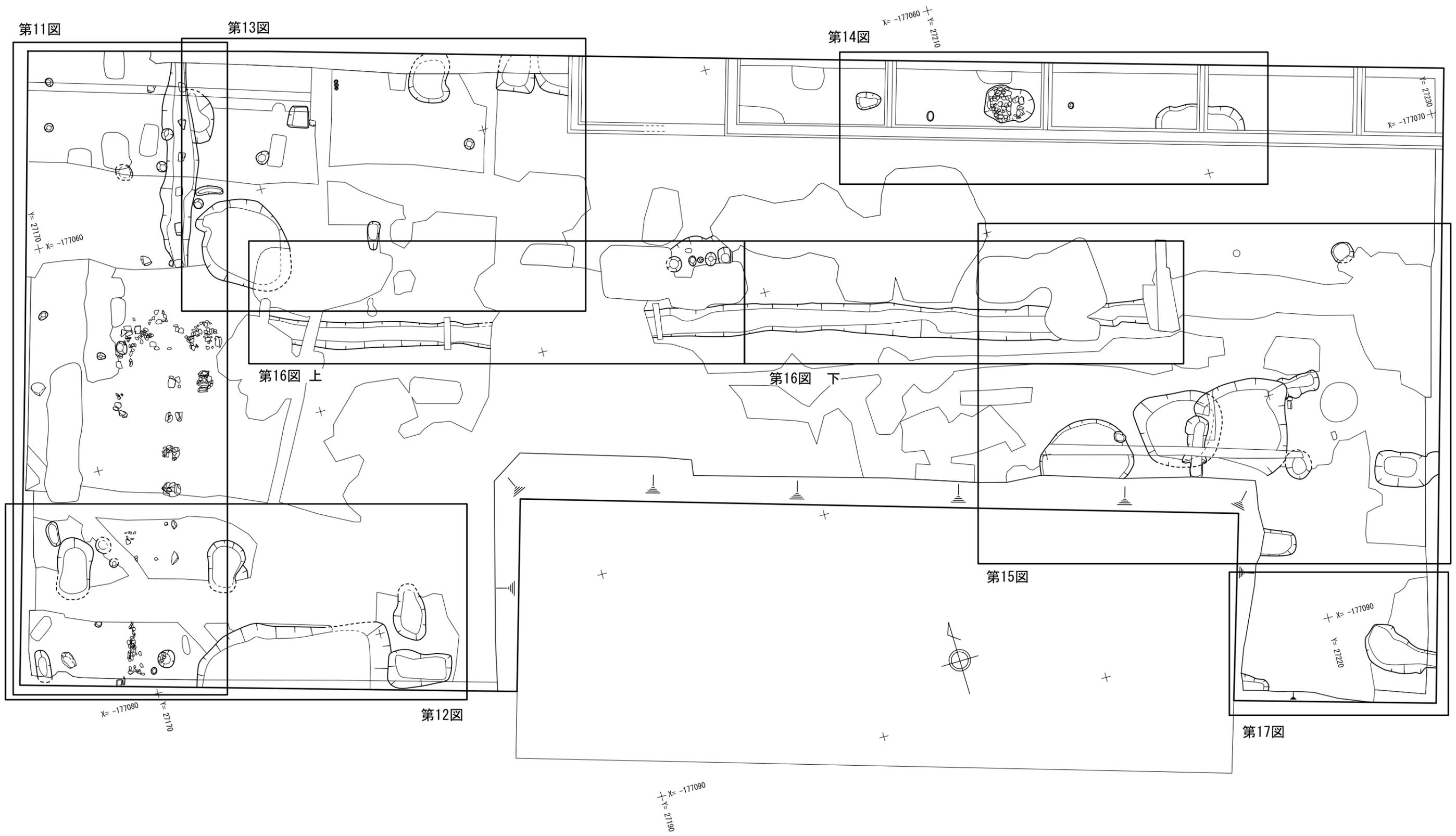


第7図 SK17 実測図 (S=1:60)



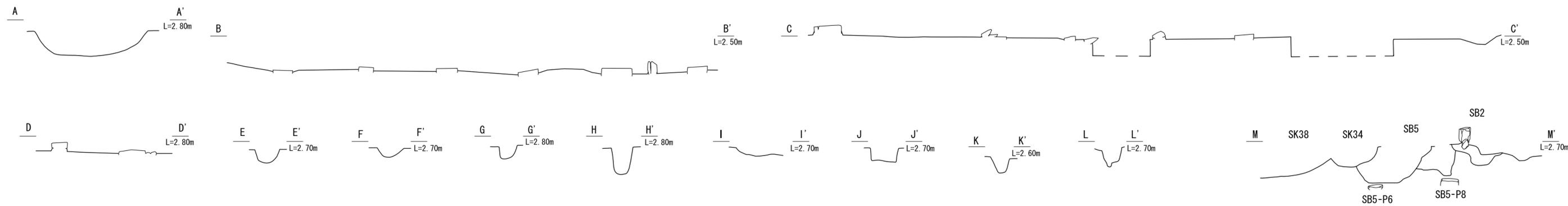
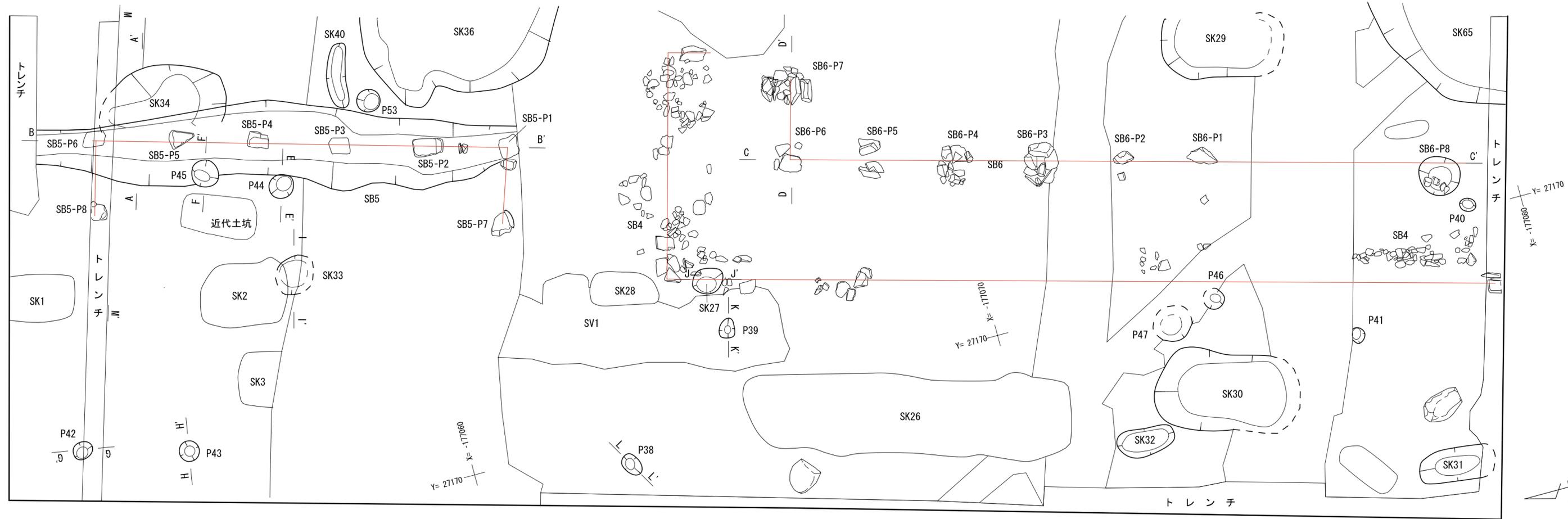


第8図 SK24・SK25 実測図 (S=1:60)



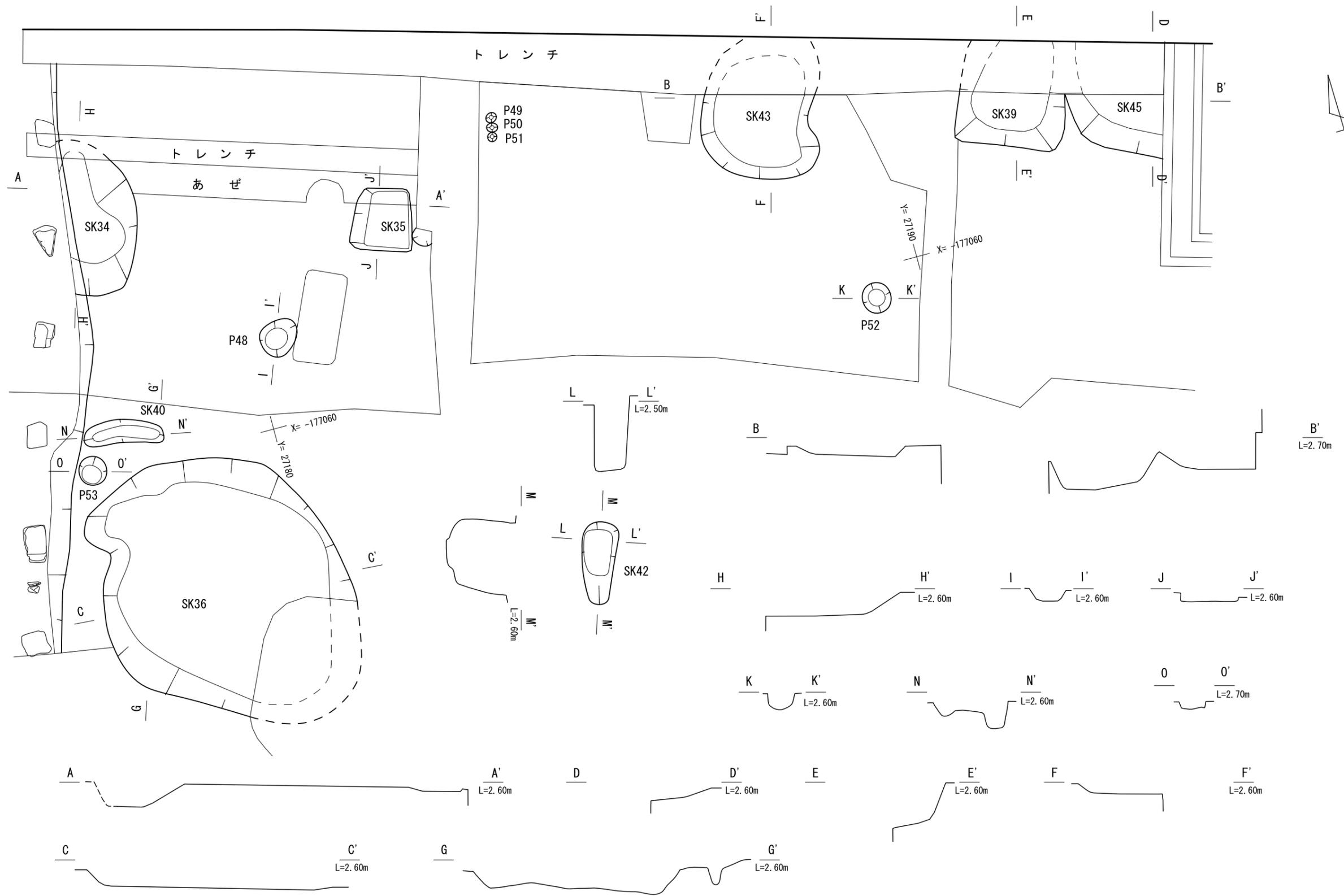
第10図 近世遺構1 遺構配置図図 (S=1:160)

0 5m



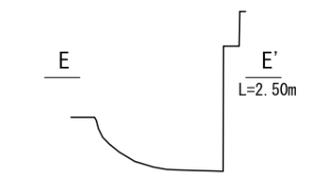
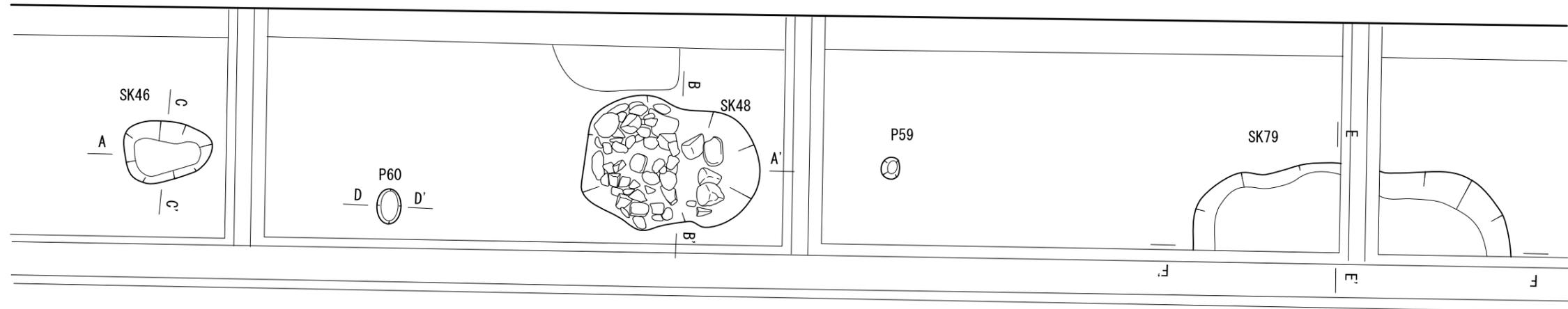
第 11 図 SB4 他 実測図 (S=1:60)



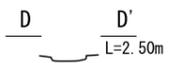


第13図 SK36他 実測図 (S=1:60)

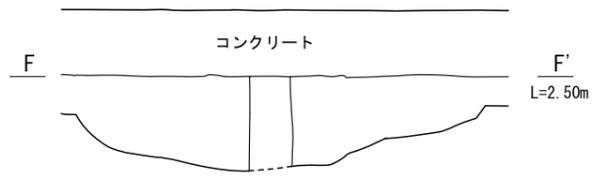
X = -177060
Y = 21210



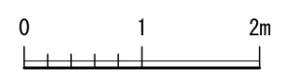
X = -177070
Y = 21220

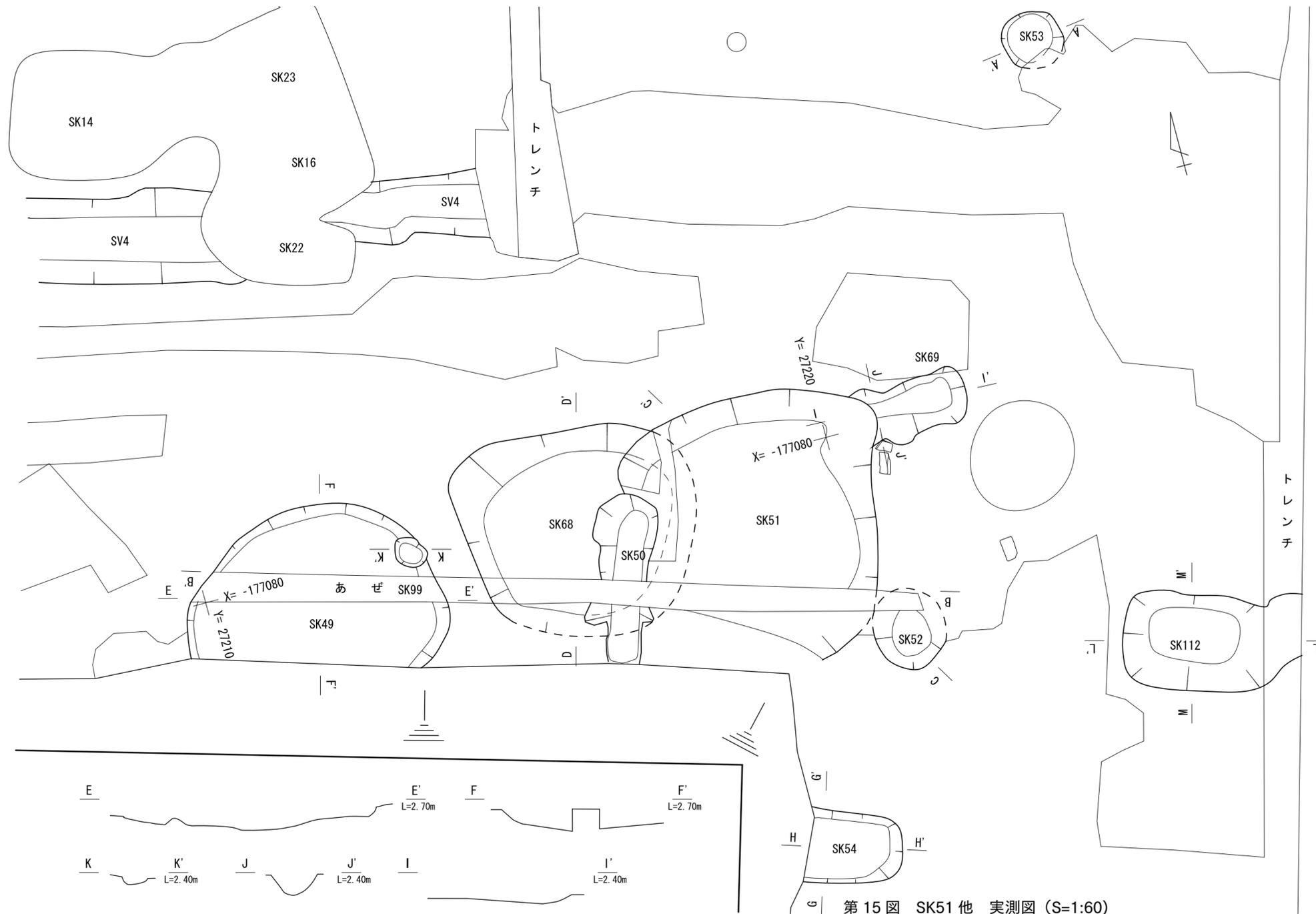


X = -177070
Y = 21210

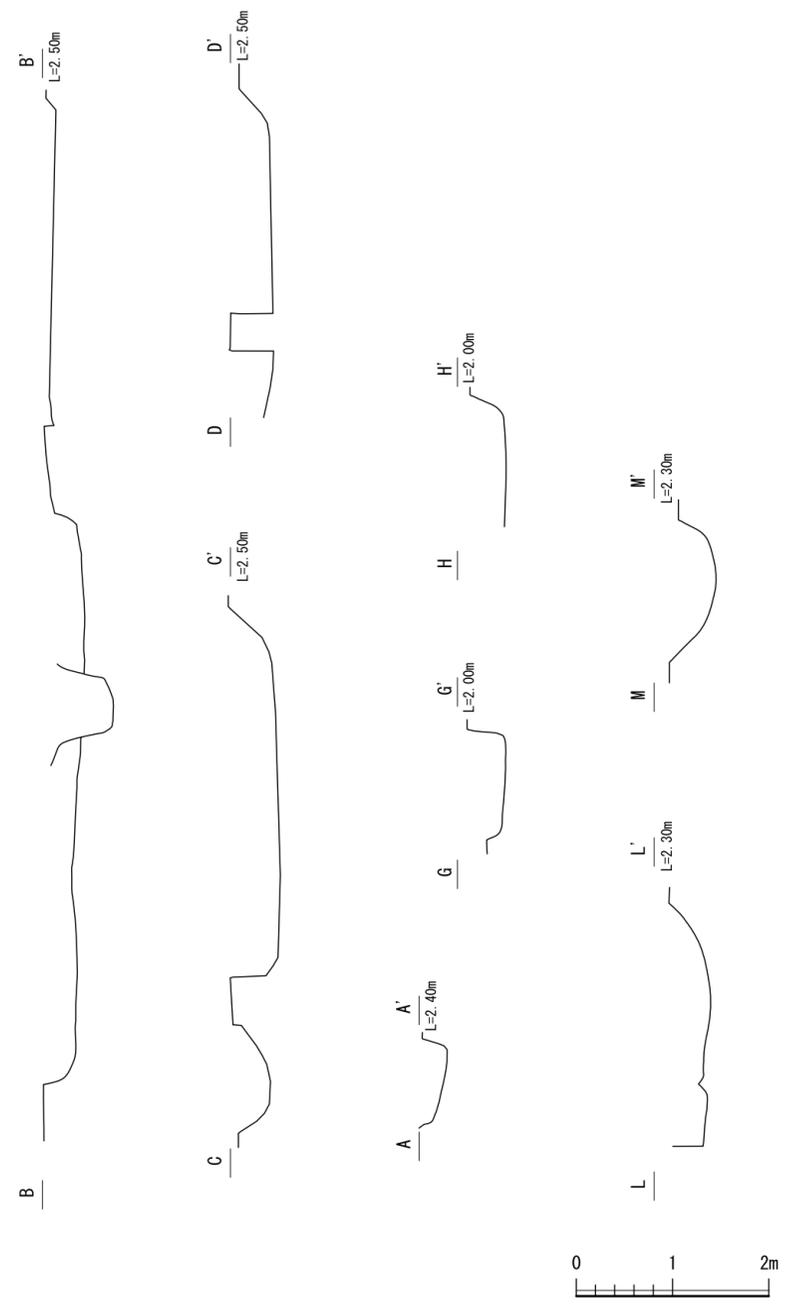


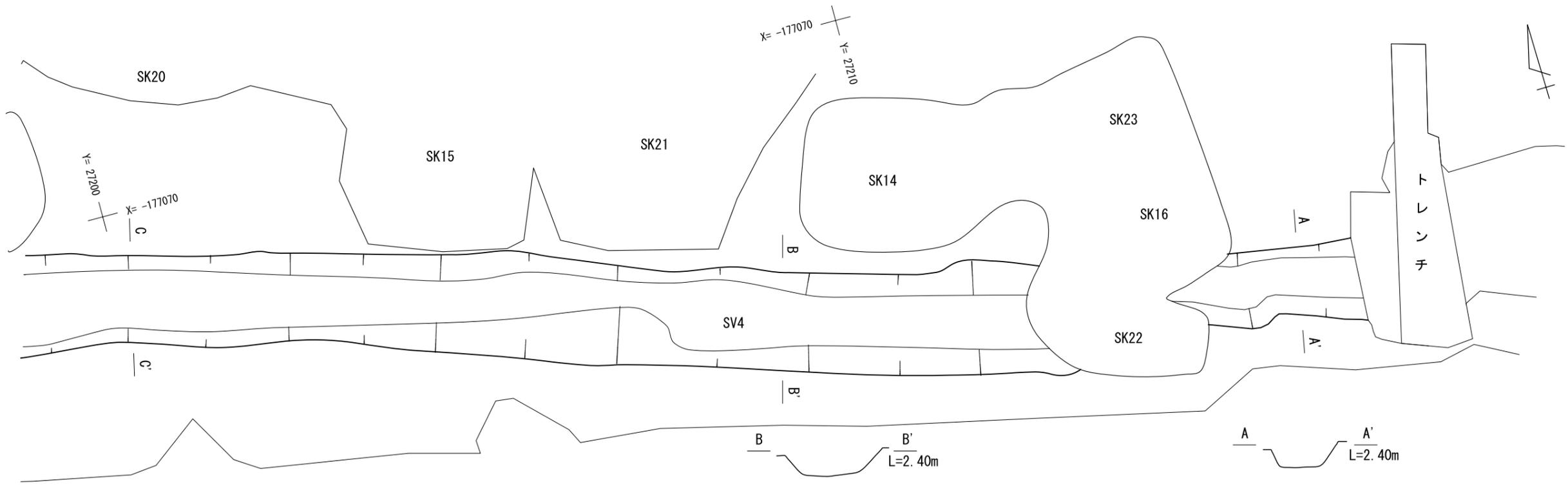
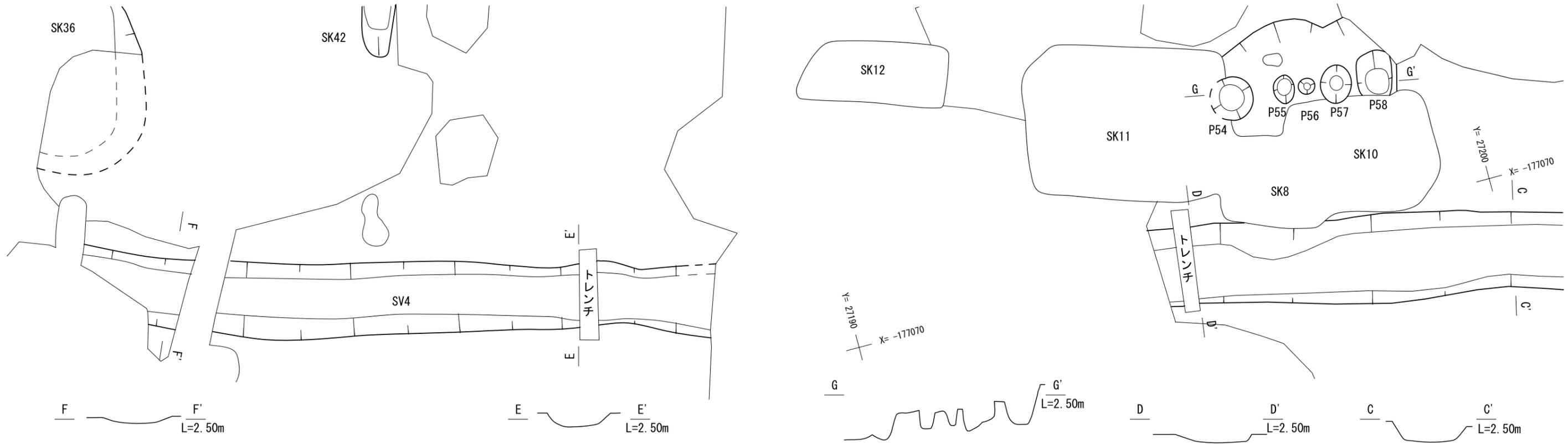
第14図 SK48他 実測図 (S=1:60)





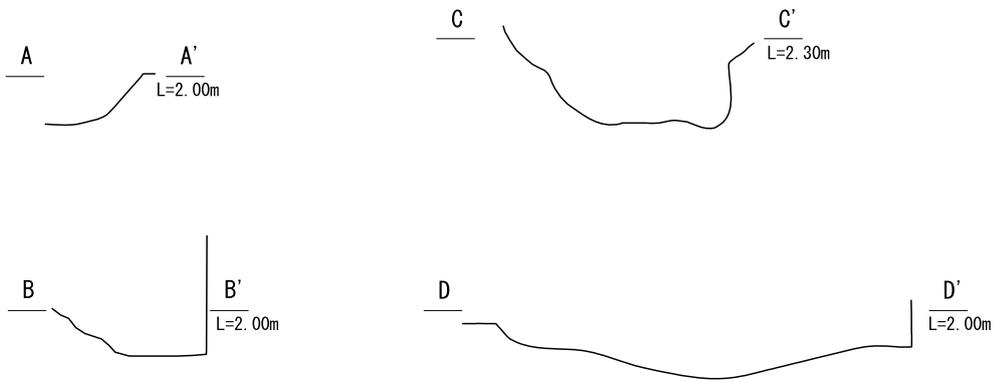
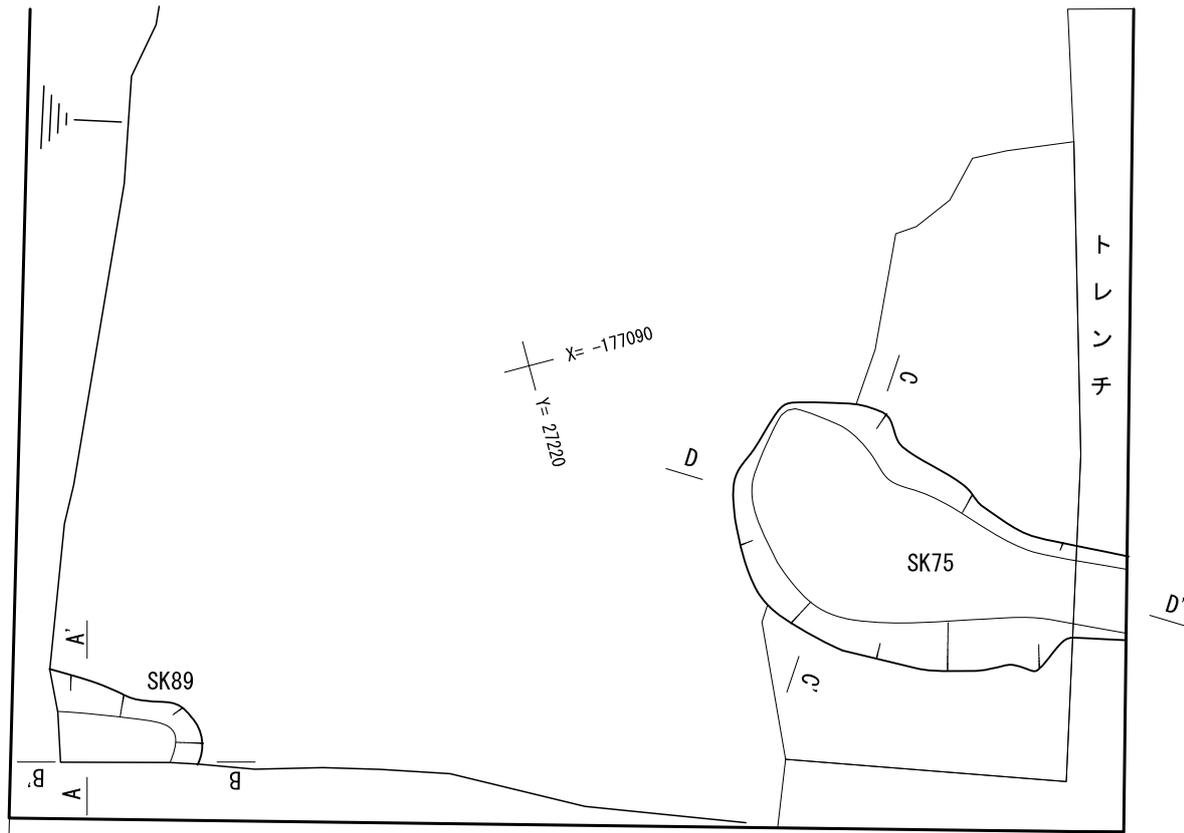
第 15 図 SK51 他 実測図 (S=1:60)





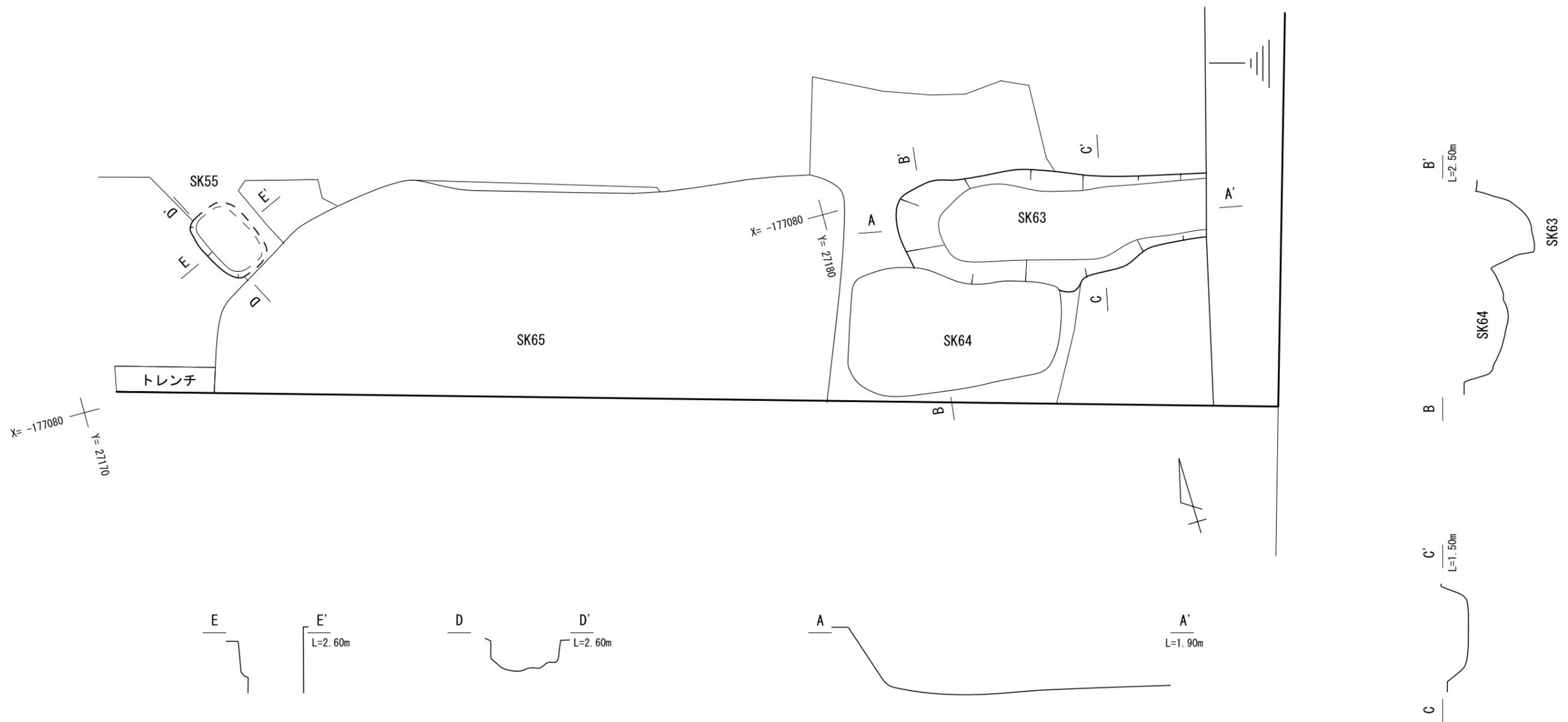
第16図 SV4他 実測図 (S=1:60)



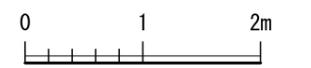


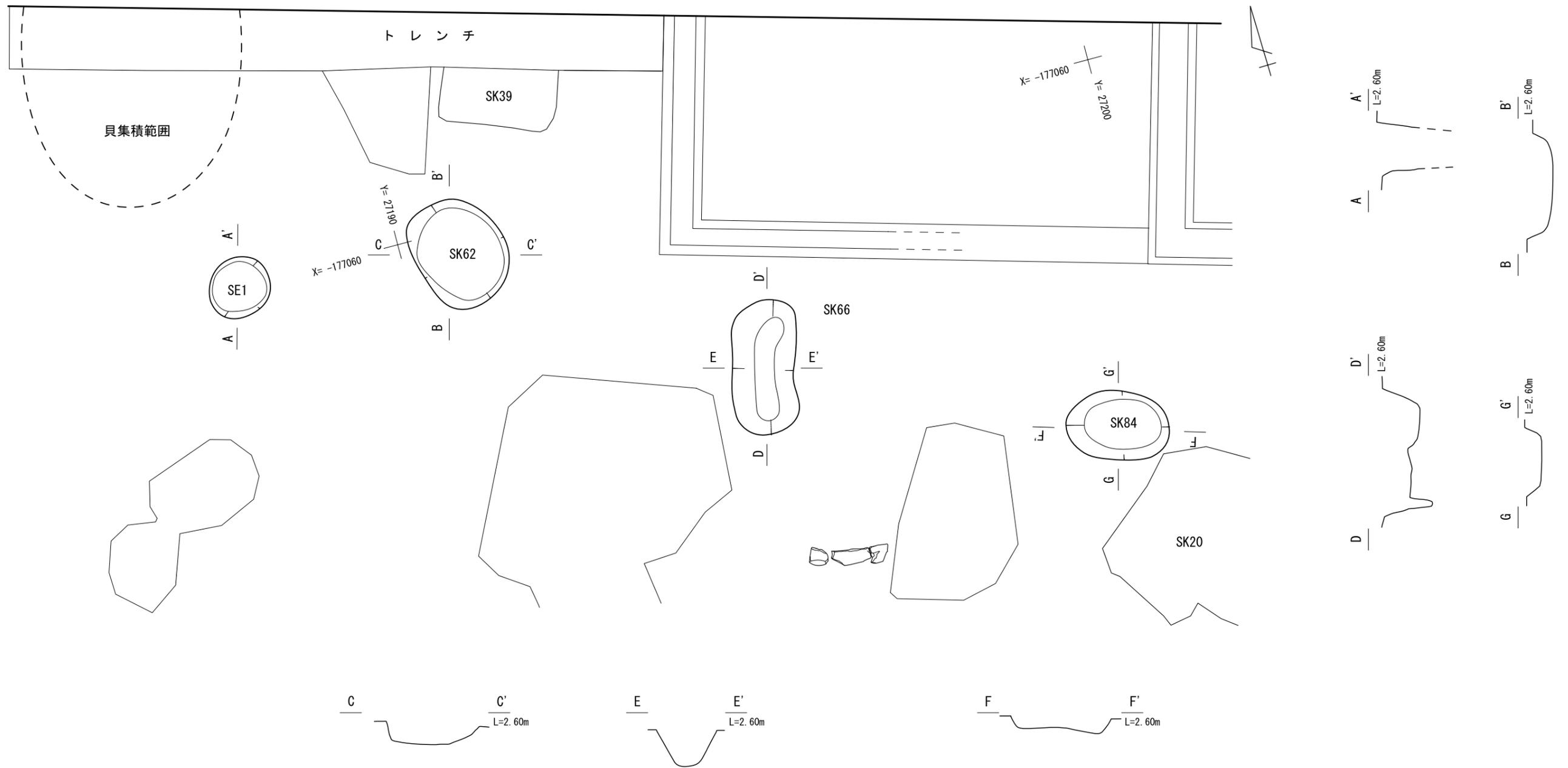
第 17 図 SK75・SK89 実測図 (S=1:60)



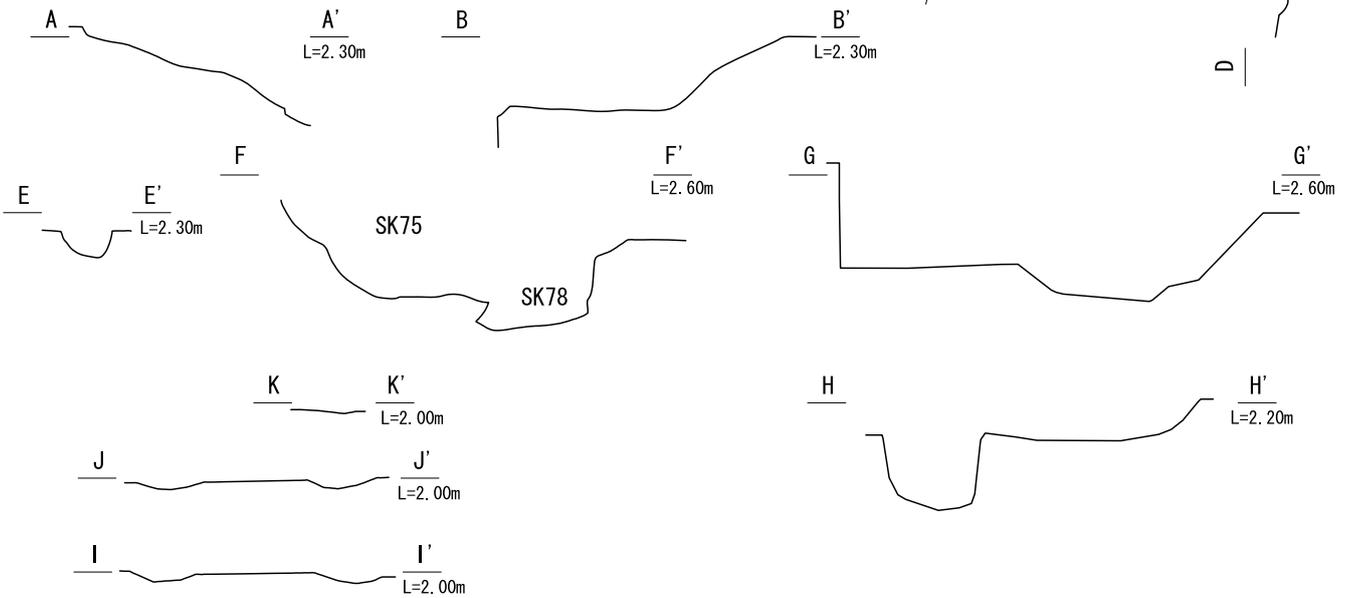
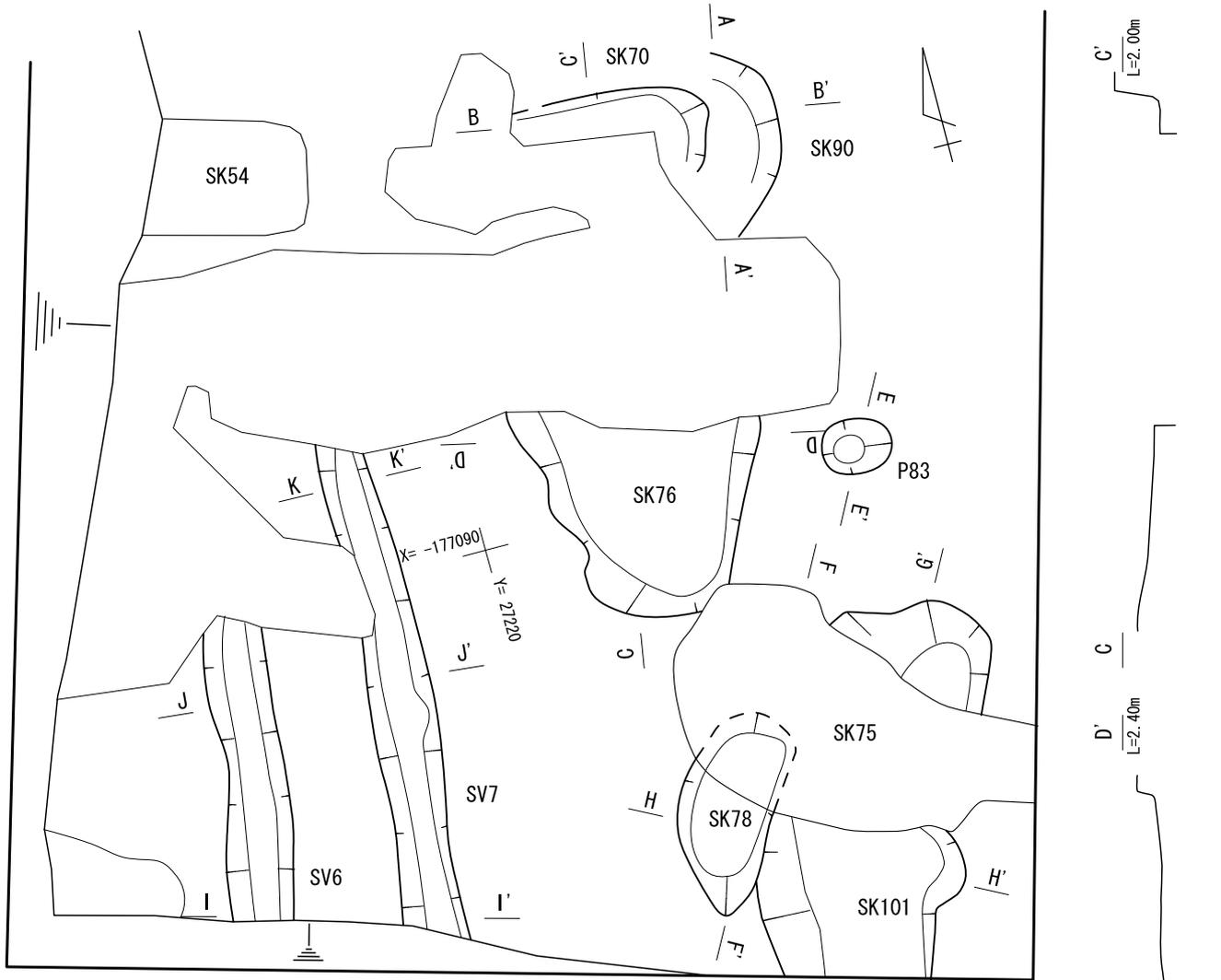


第 19 図 SK55・SK63 実測図 (S=1:60)



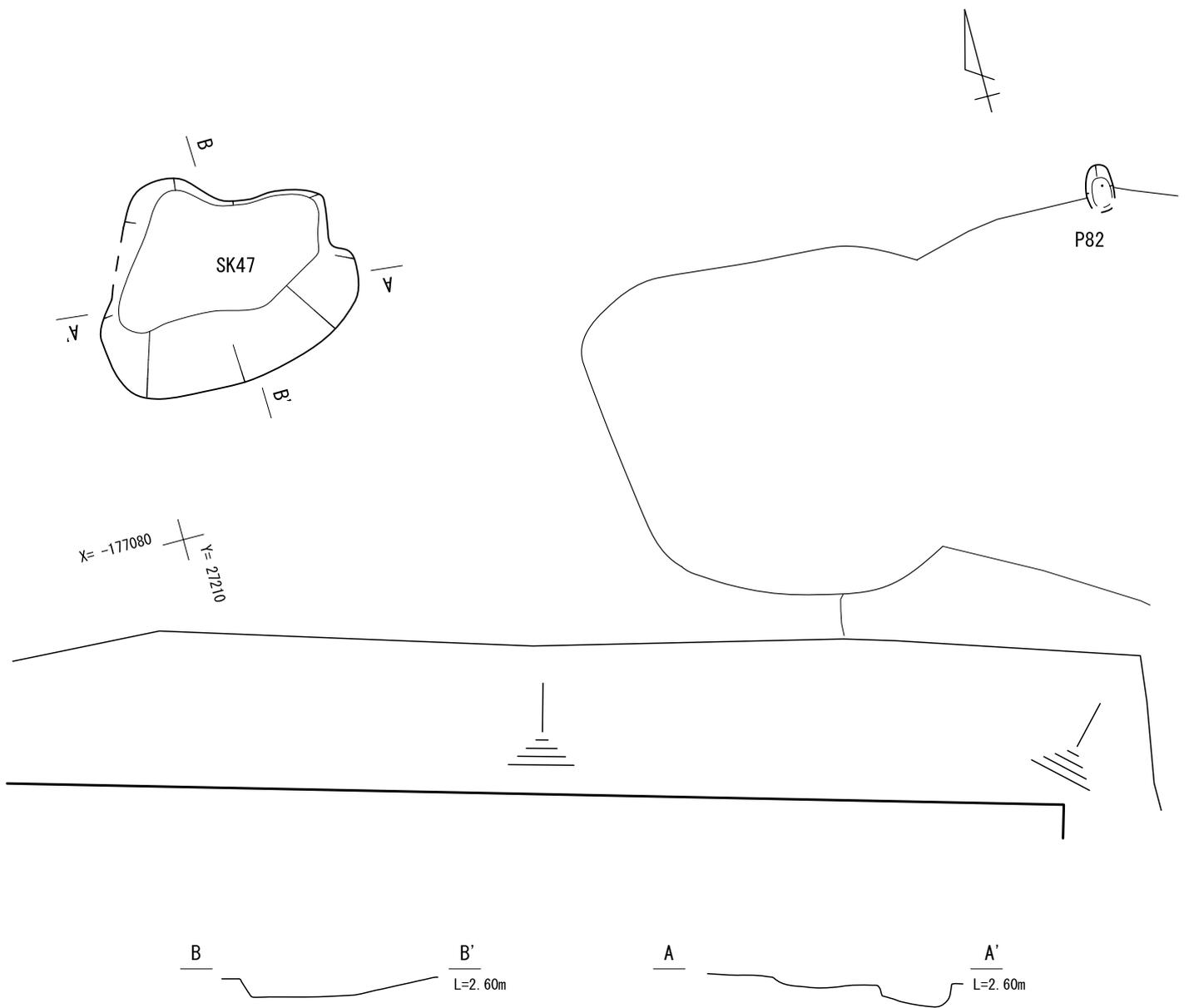


第 20 図 SE1 他 実測図 (S=1:60)



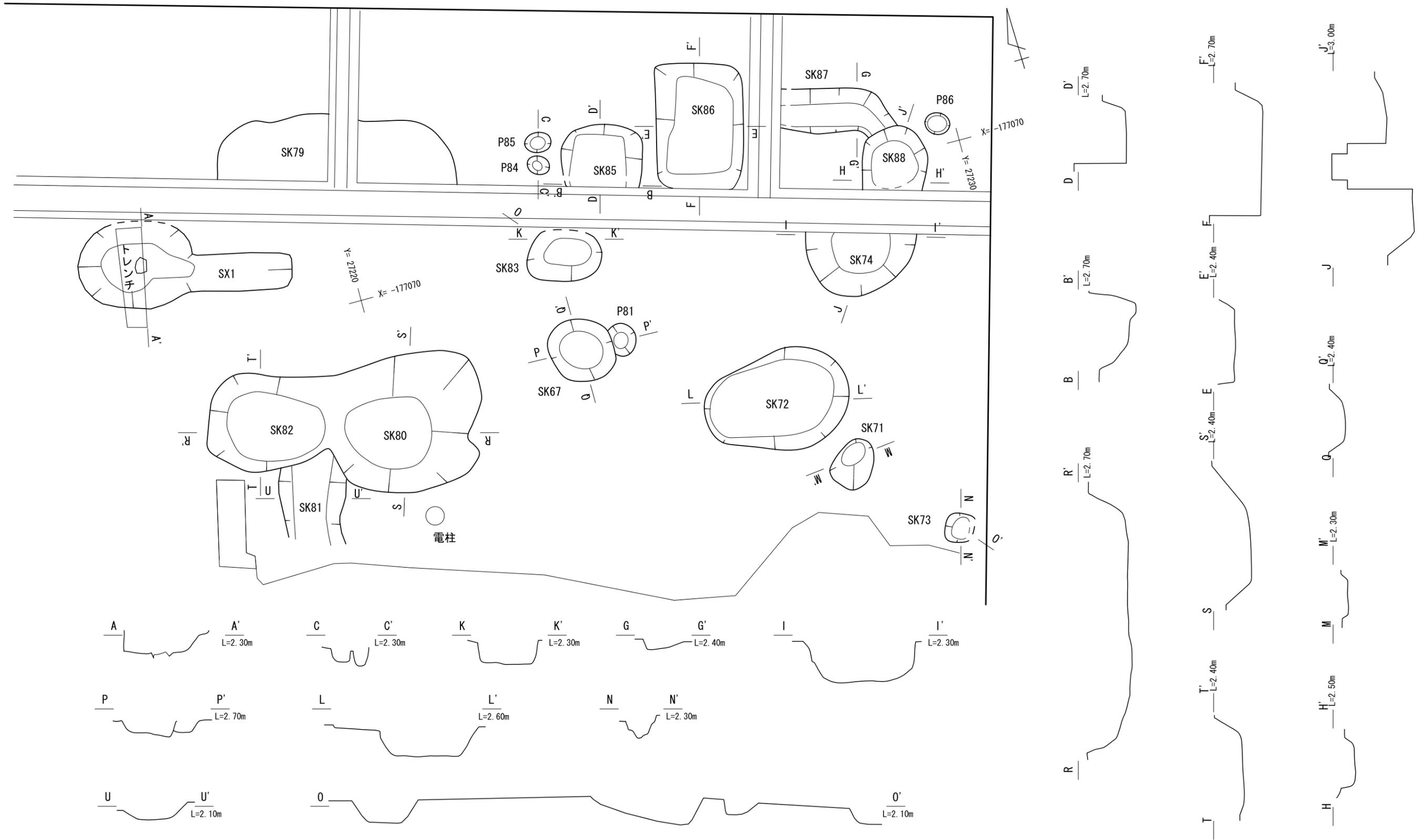
第 21 図 SV6 他 実測図 (S=1:60)



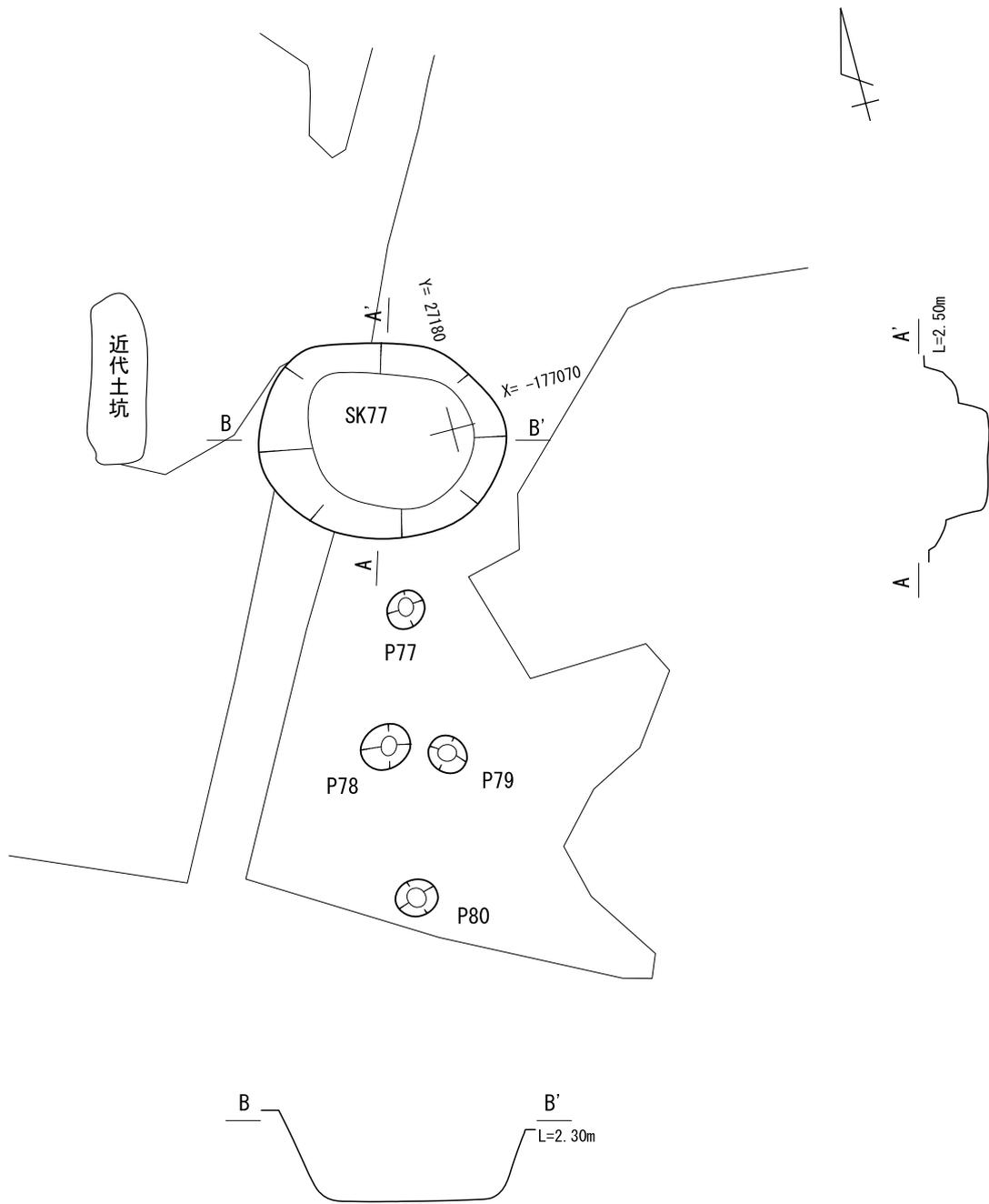


第 22 図 SK47 他 実測図 (S=1:60)



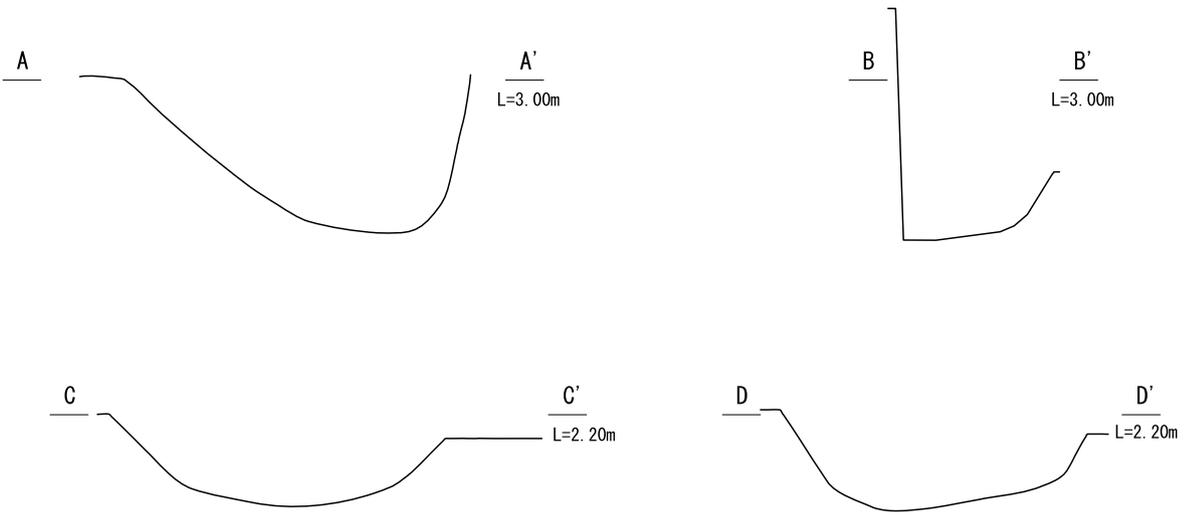
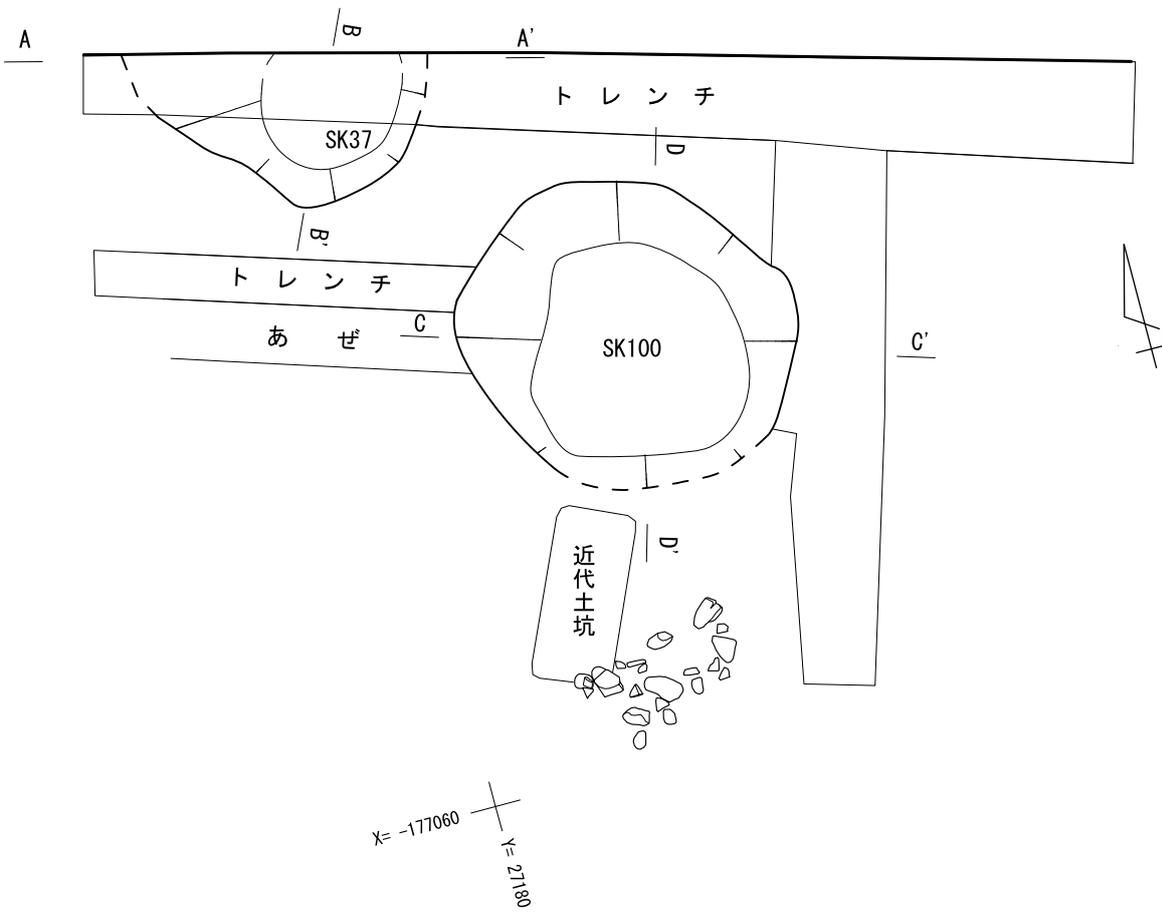


第 23 図 SK80 他 実測図 (S=1:60)



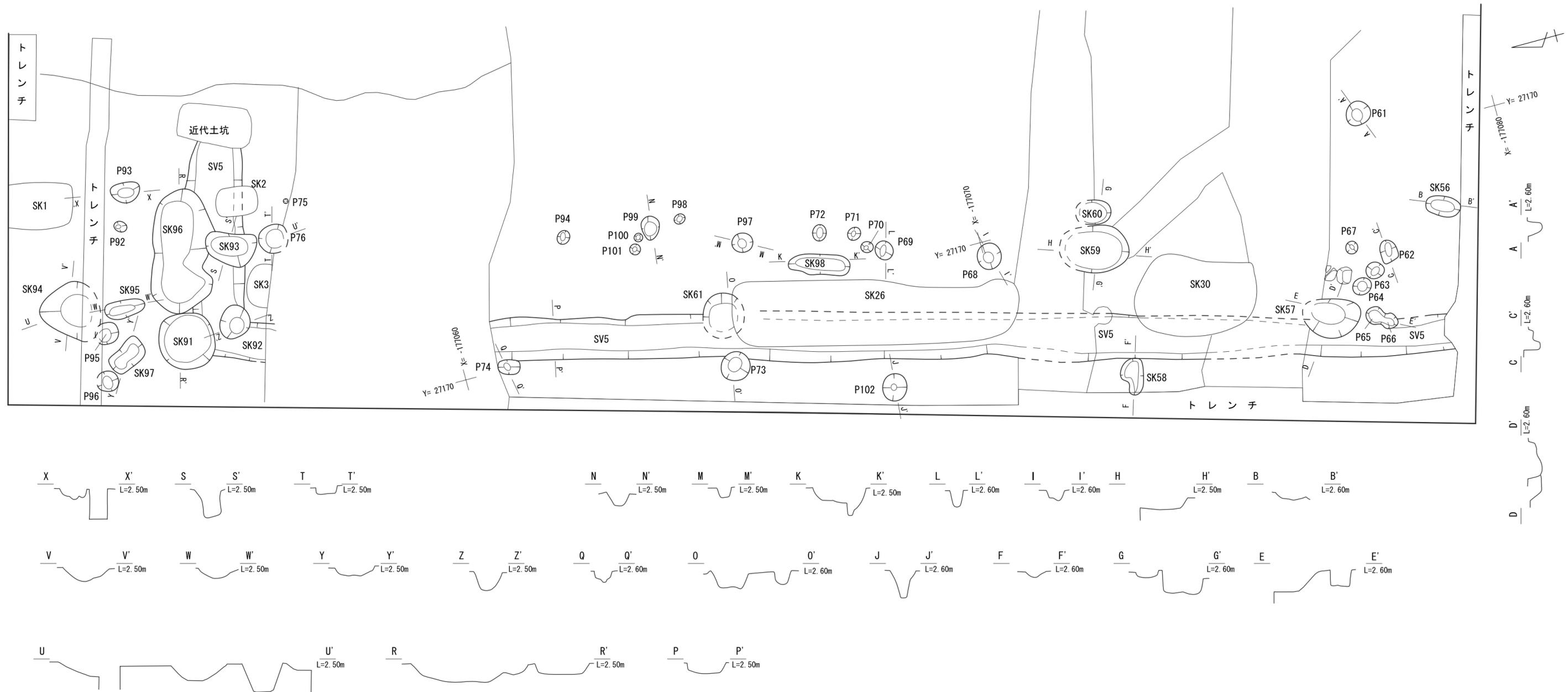
第 24 図 SK77 他 実測図 (S=1:60)





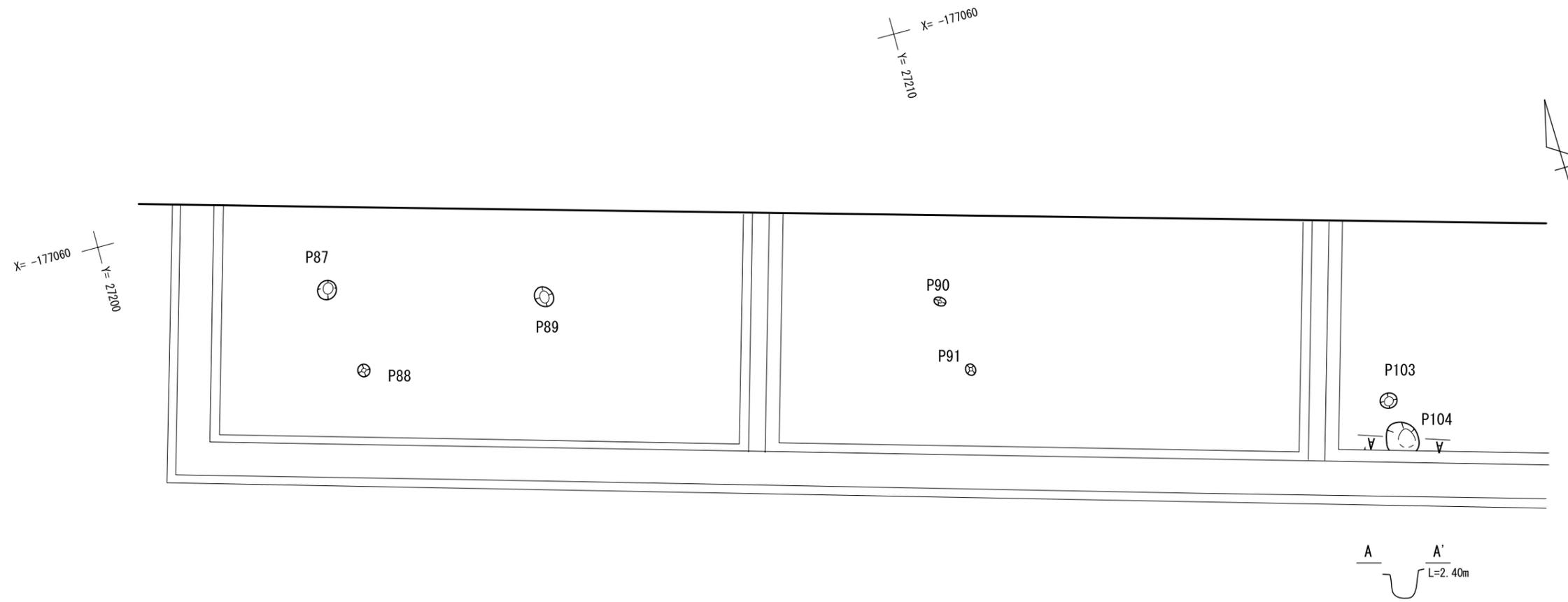
第 25 図 SK100 他 実測図 (S=1:60)



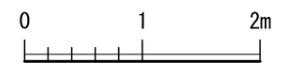


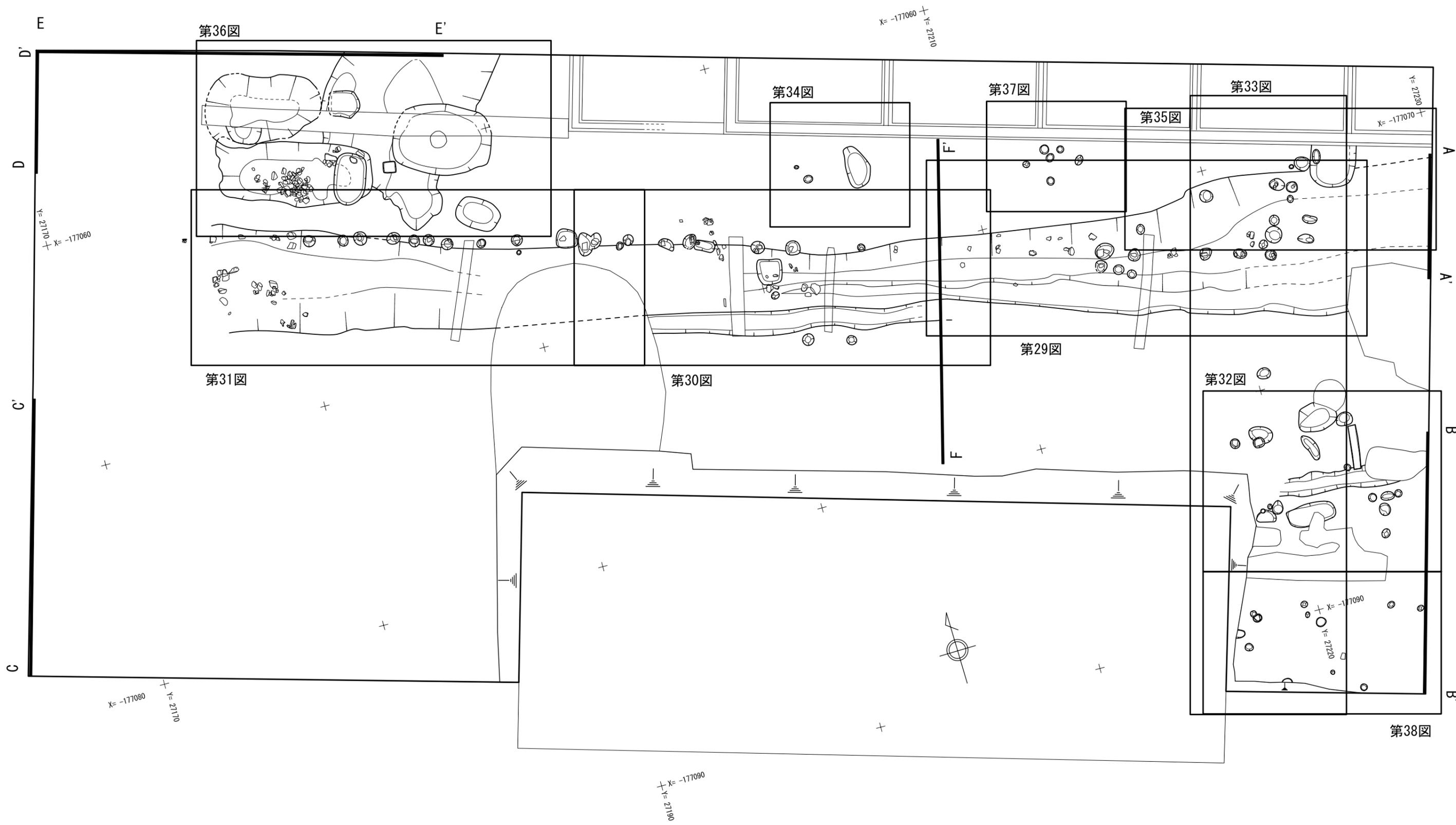
第 26 図 SV5 他 実測図 (S=1:60)





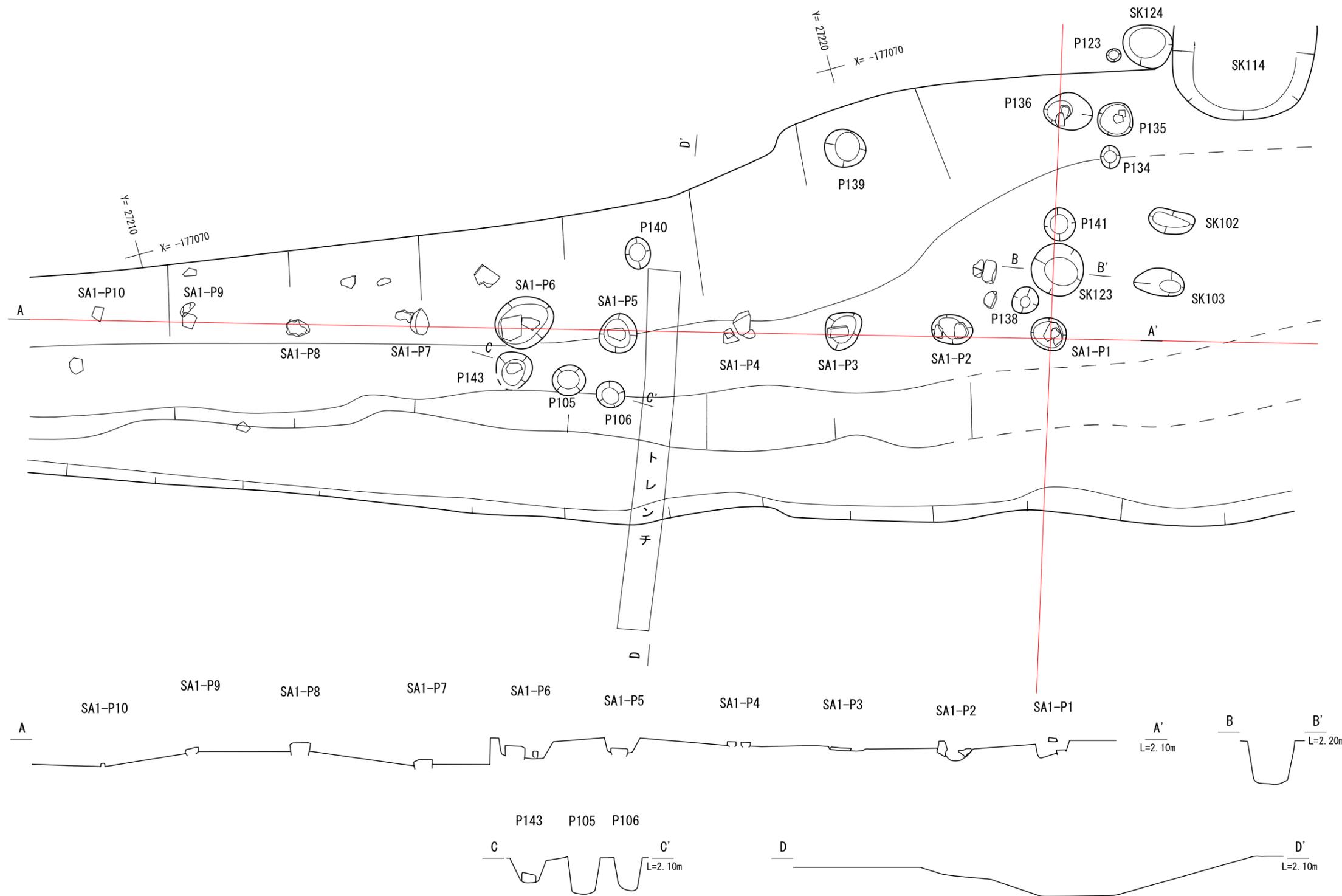
第 27 図 P104 他 実測図 (S=1:60)





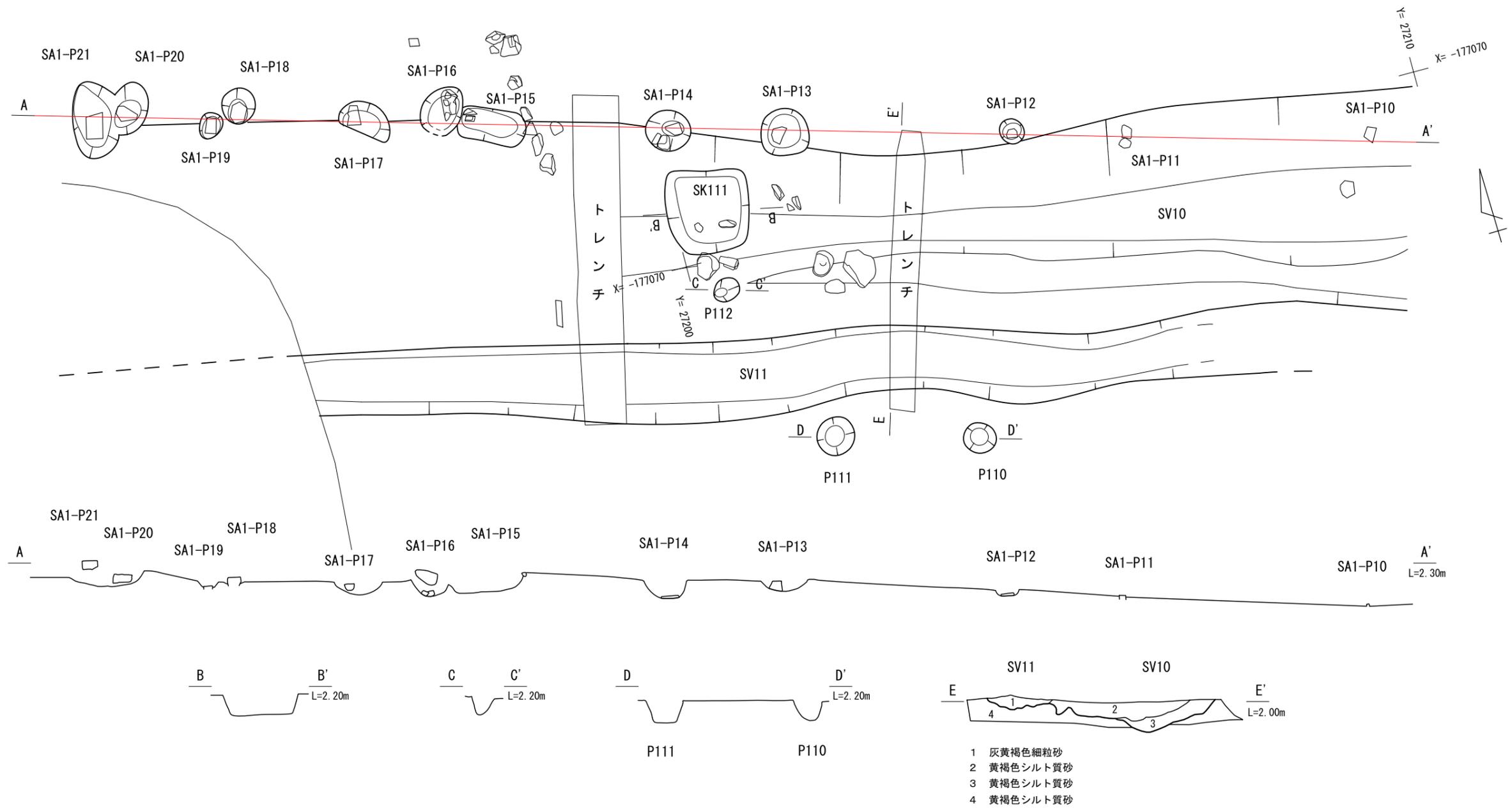
第 28 図 近世遺構 3 遺構配置図 (S=1:160)



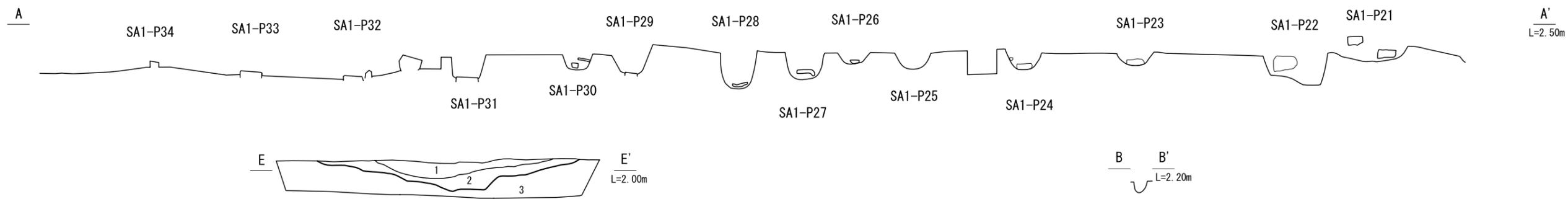
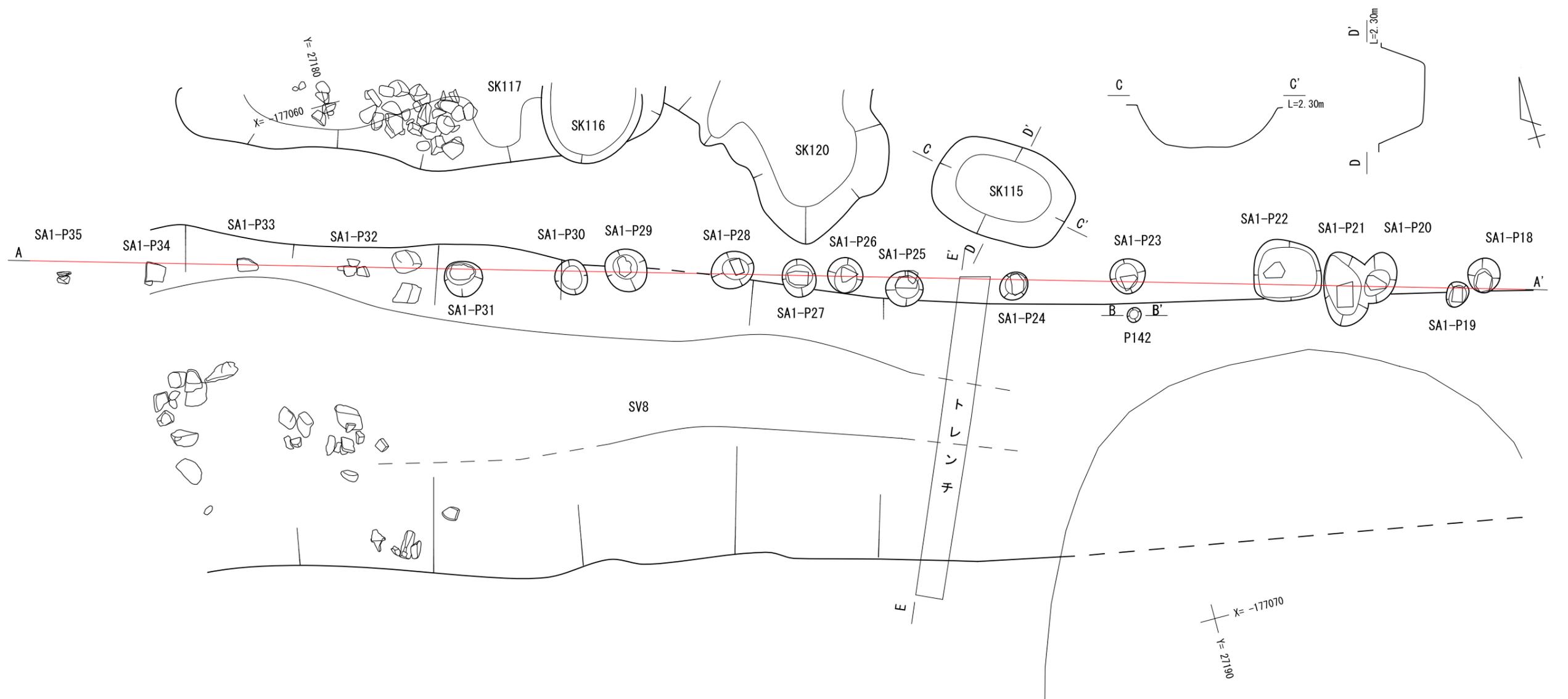


第 29 図 SA1・SK123 他 実測図 (S=1:60)





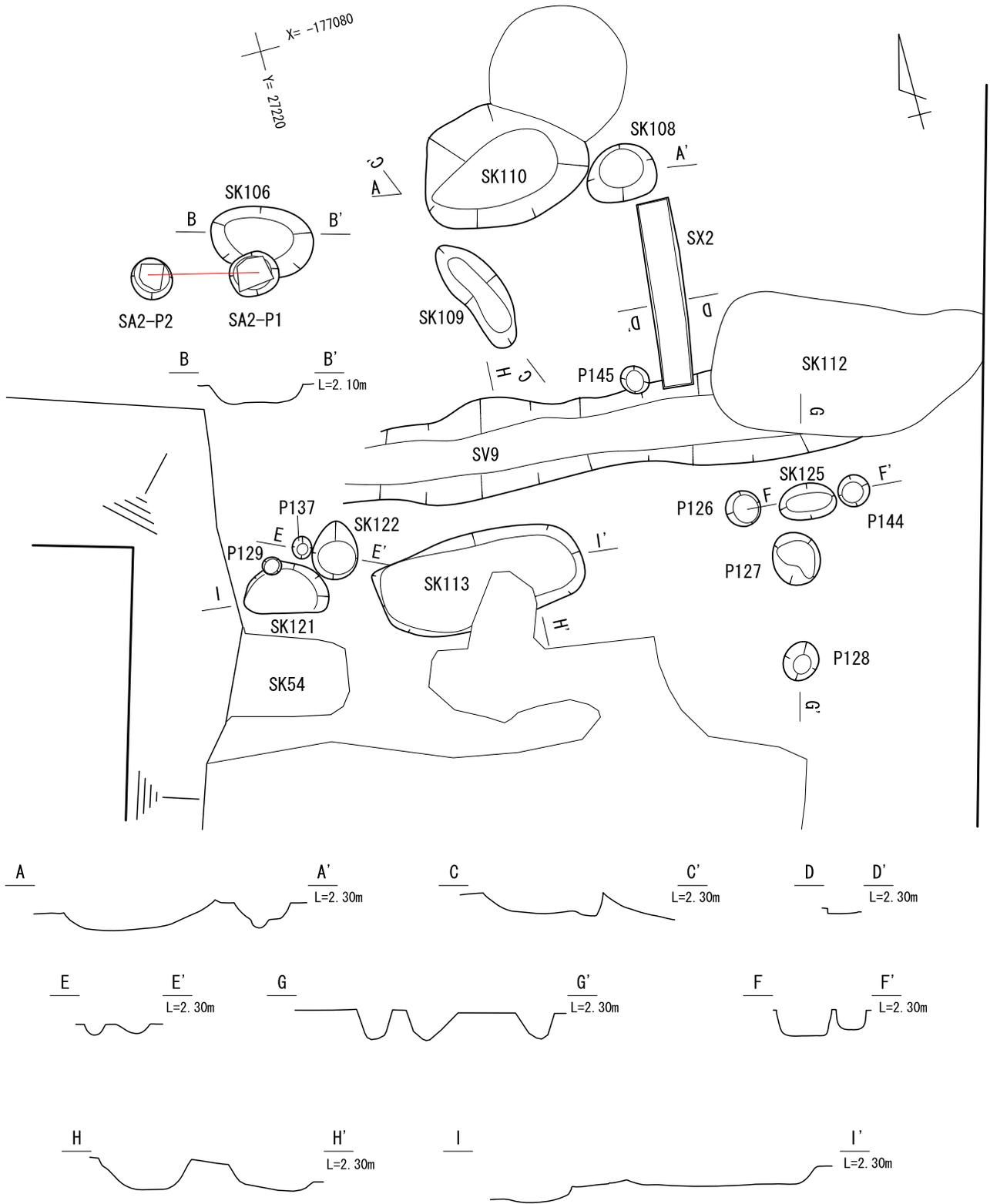
第30図 SA1・SK111他 実測図 (S=1:60)



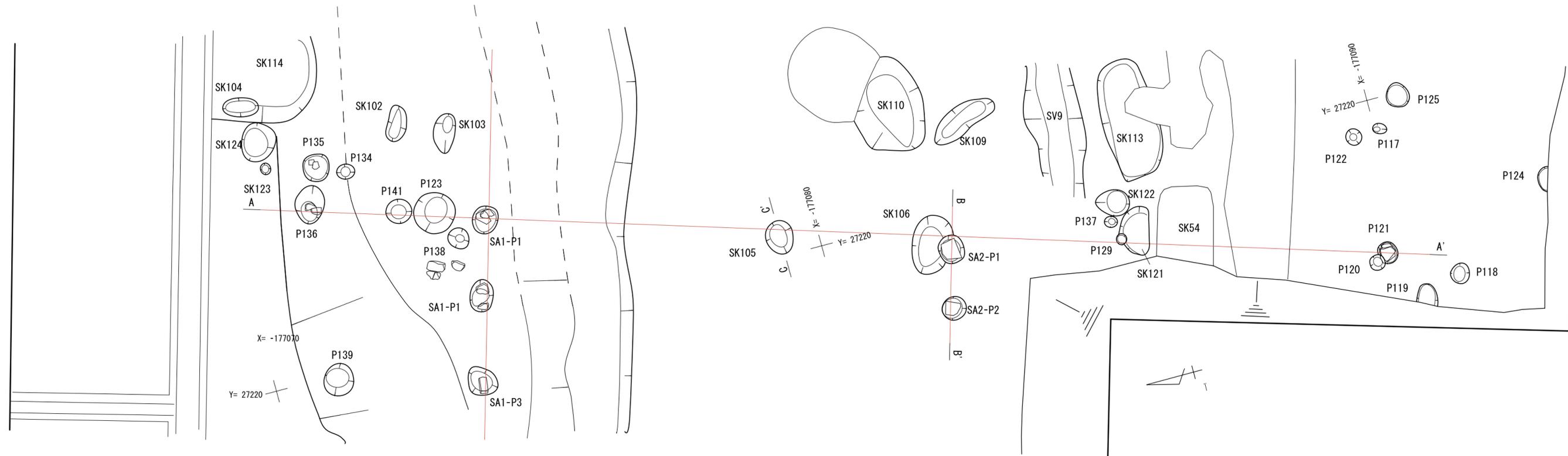
- 1 黄褐色細～中粒砂
- 2 灰黄褐色シルト質砂
- 3 黄褐色シルト質砂

第 31 図 SA1・SV8 他 実測図 (S=1:60)



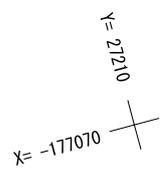
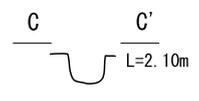
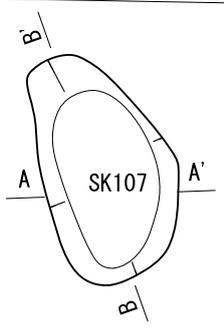
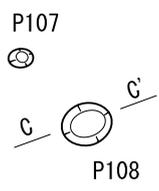


第 32 図 SA2 他 実測図 (S=1:60)



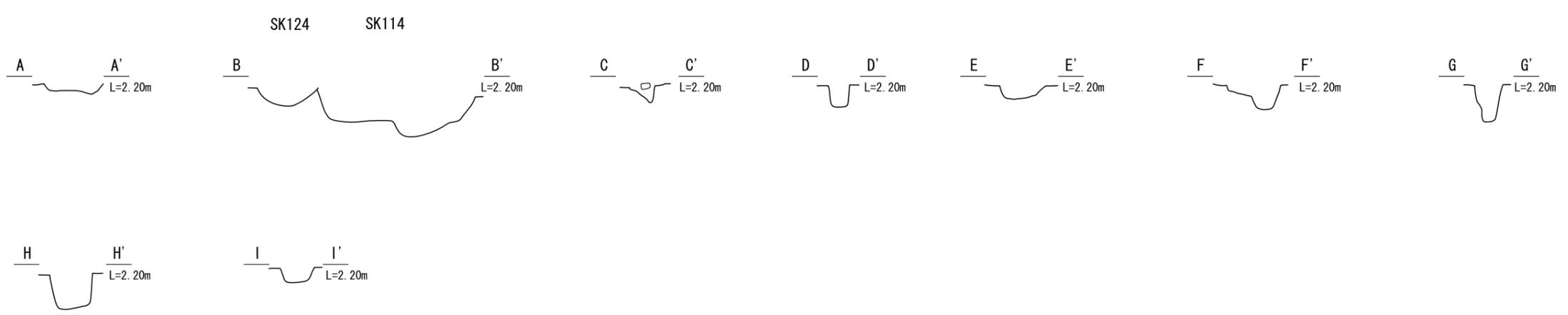
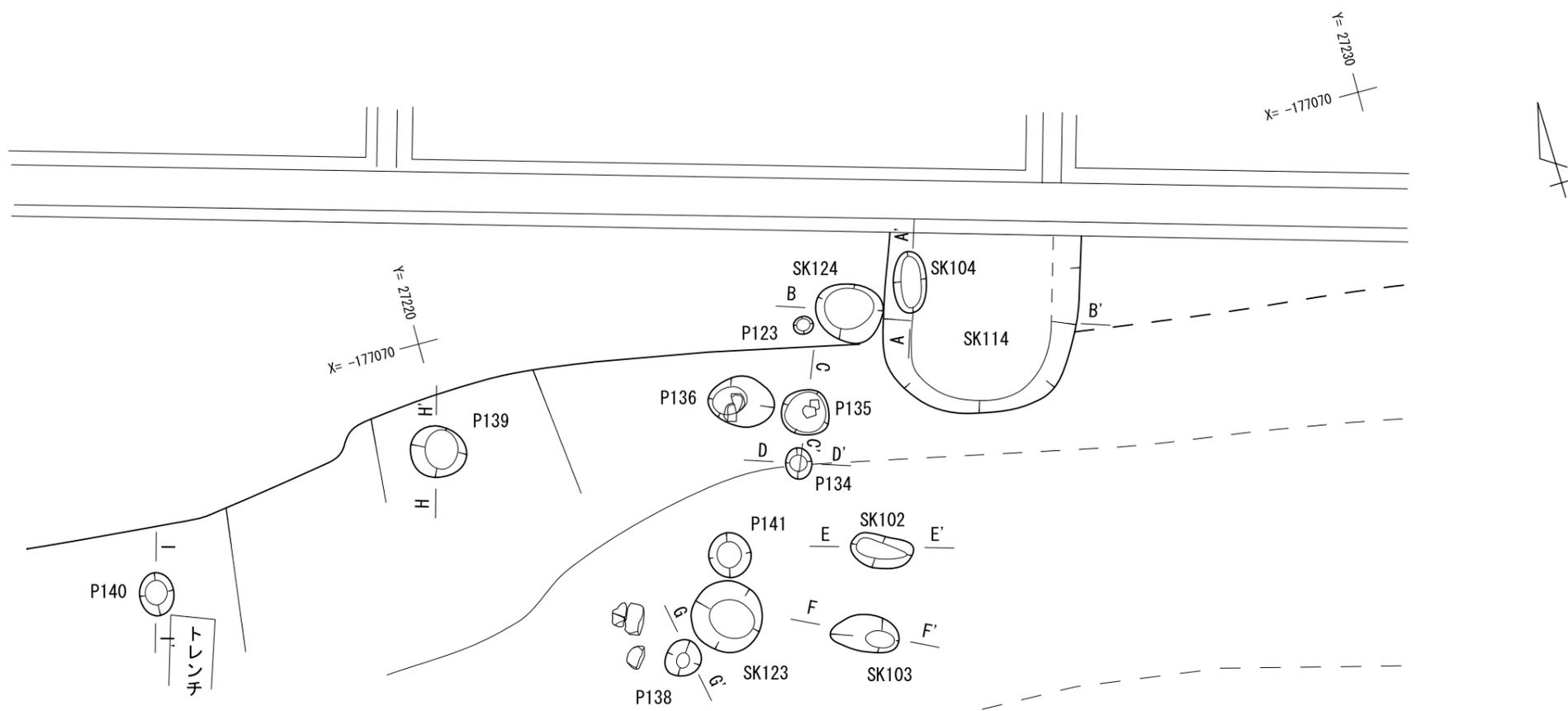
第 33 図 SA1・2 他 実測図 (S=1:60)



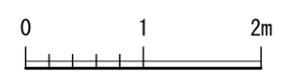


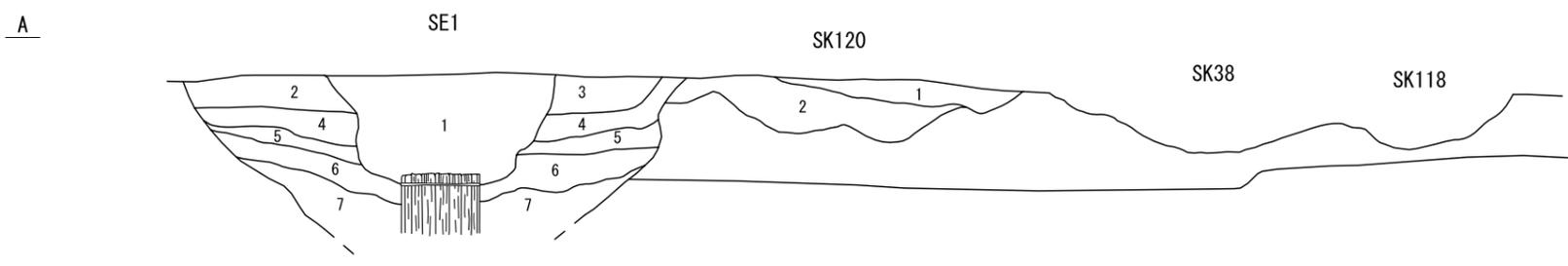
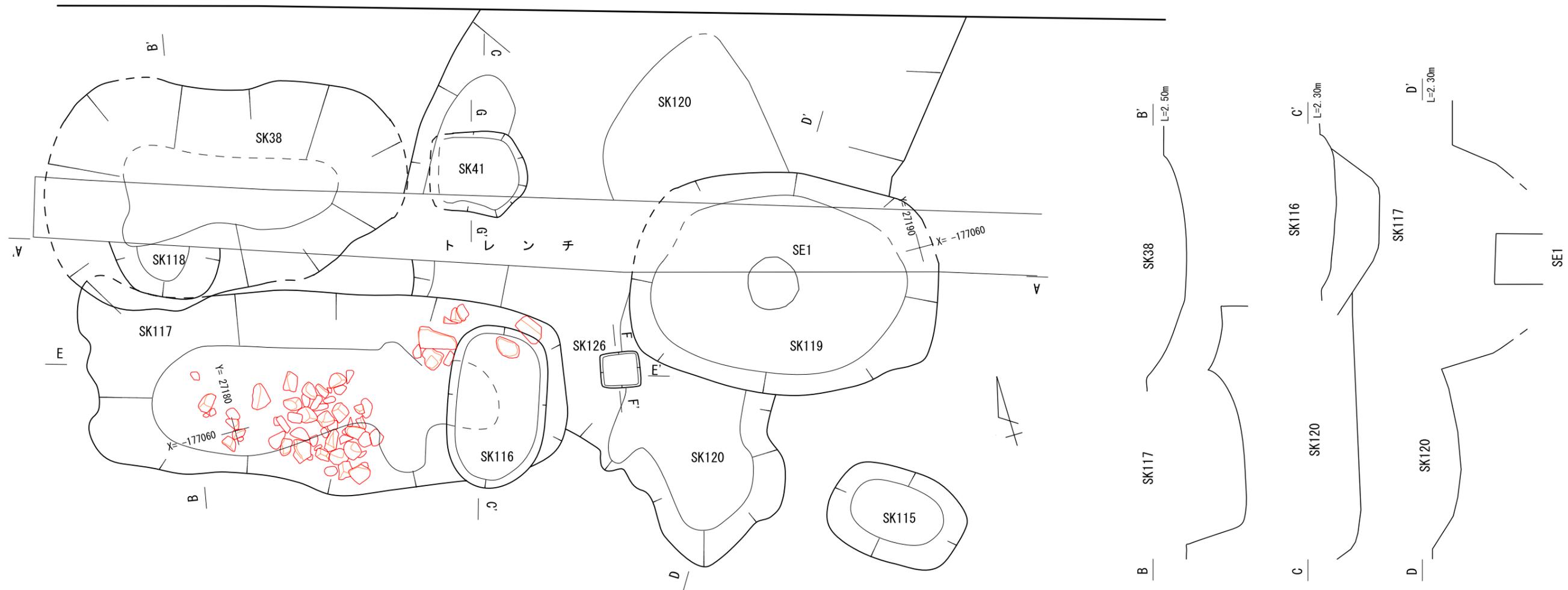
第 34 图 SK107 他 実測図 (S=1:60)





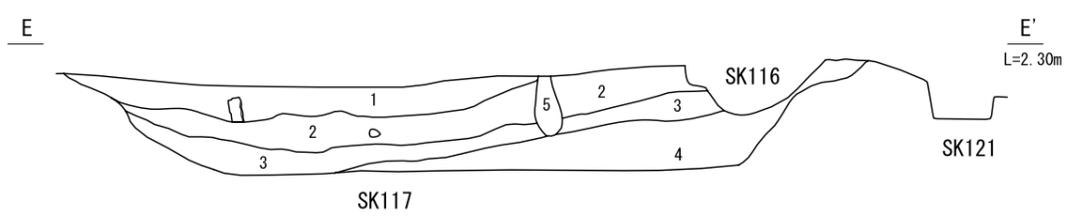
第 35 図 SK114 他 実測図 (S=1:60)





A'
L=2.50m

- | | | |
|----------------|----------------|----------|
| SK119 (SE1掘り方) | SK119 (SE1掘り方) | SK120 |
| 1 褐色細粒砂 | 6 灰色シルト | 1 黄褐色細粒砂 |
| 2 黄褐色細粒砂 | 7 黄橙色中～細粒砂 | 2 暗褐色細粒砂 |
| 3 黄褐色細粒砂 | | |
| 4 黄褐色細粒砂 | 井戸内 灰黄褐色細粒砂 | |
| 5 灰黄褐色シルト・細粒砂 | | |



E'
L=2.30m

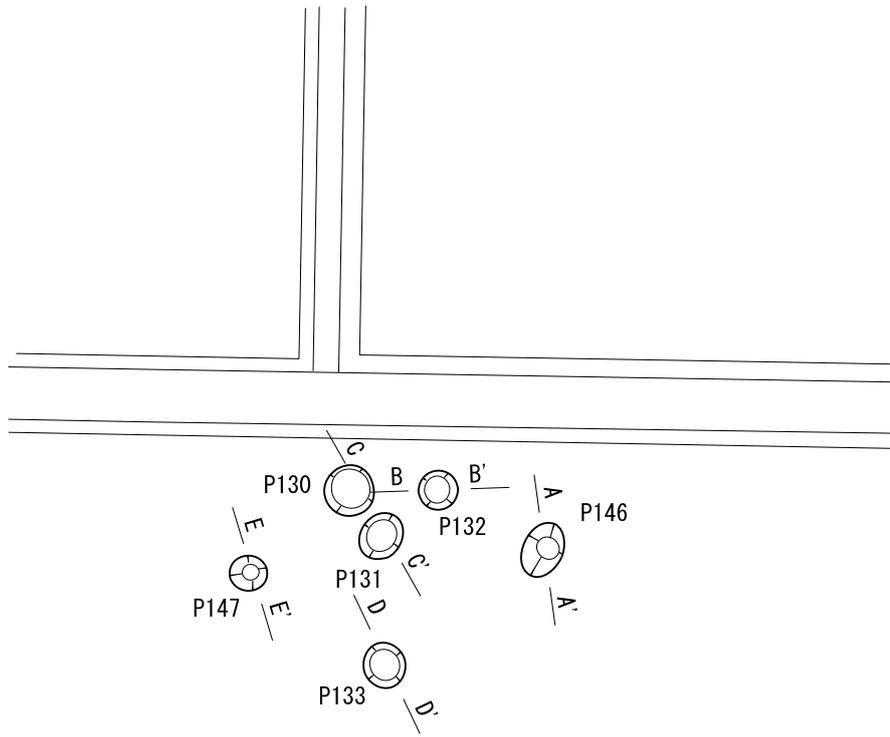
- SK117
- 1 黄褐色細粒砂
 - 2 黄褐色細粒砂
 - 3 緑黑色シルト
 - 4 緑黑色シルト
 - 5 明緑灰色細粒砂

F
F'
L=2.30m

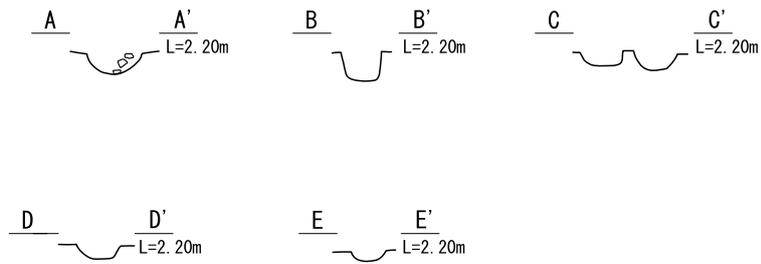
G
G'
L=2.80m

第36図 SK117他 実測図 (S=1:60)



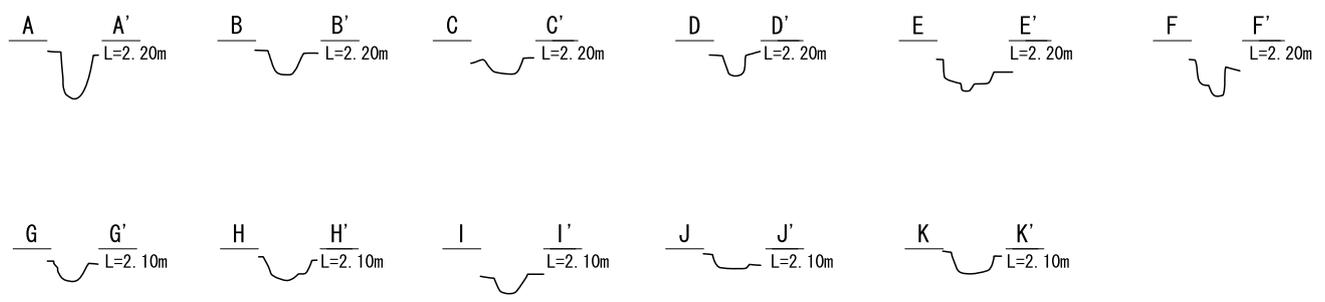
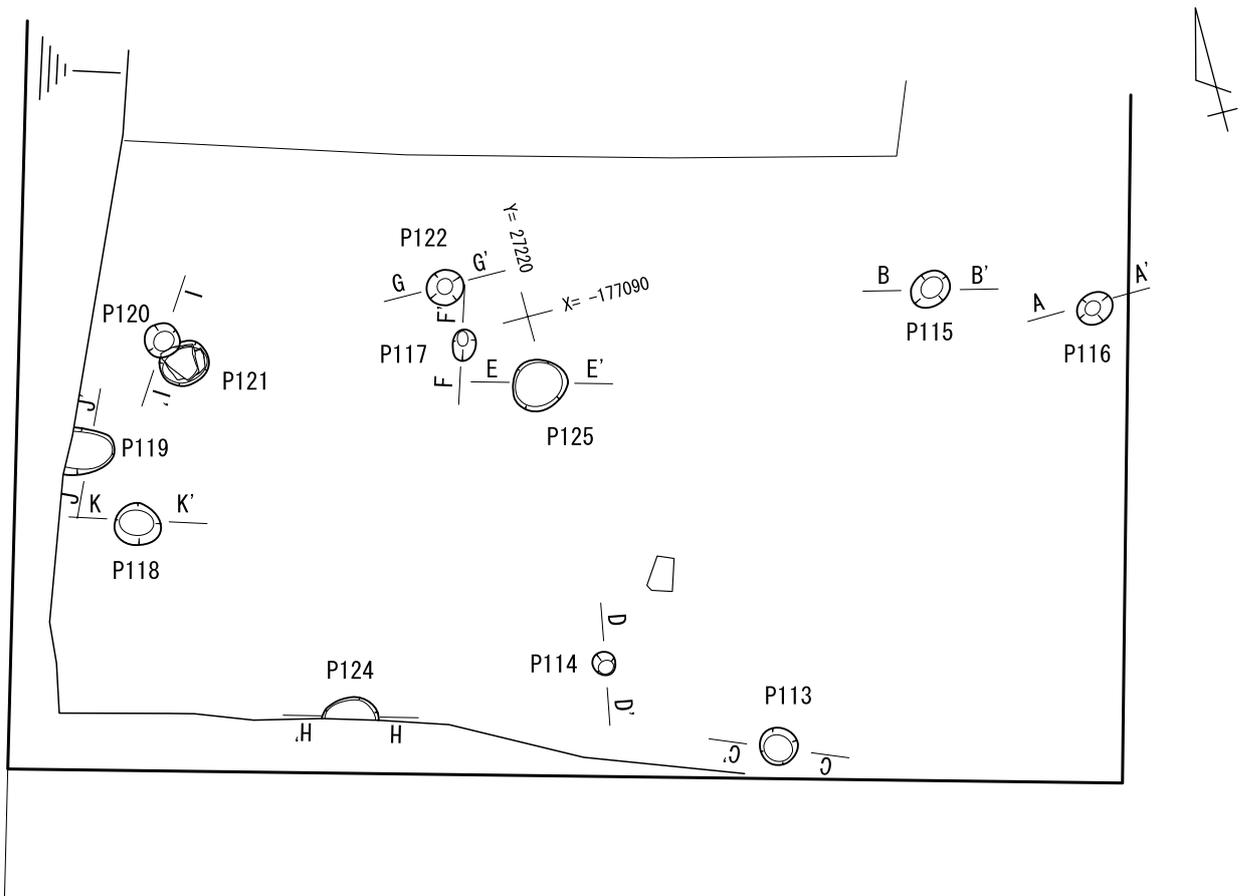


Y= 27210
X= -177070

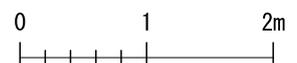


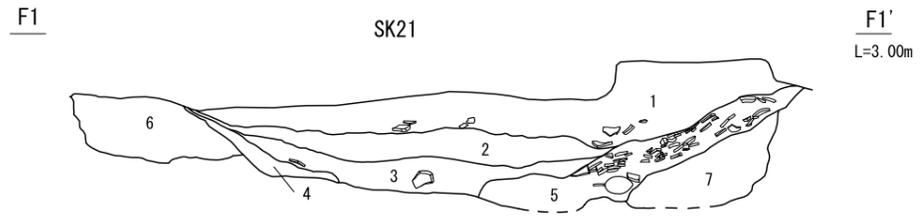
第 37 図 P130 他 実測図 (S=1:60)



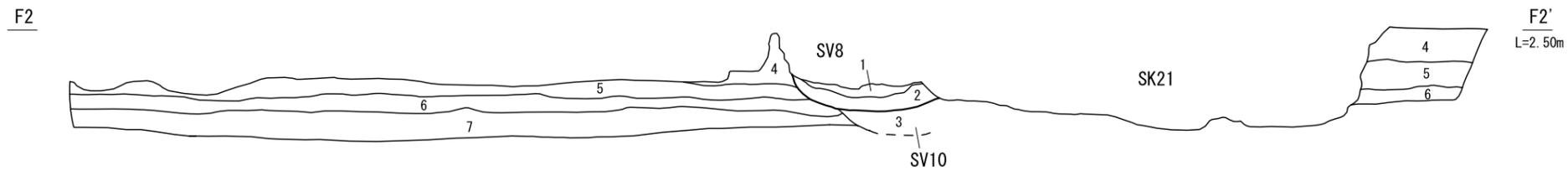


第 38 図 P113 他 実測図 (S=1:60)



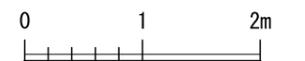


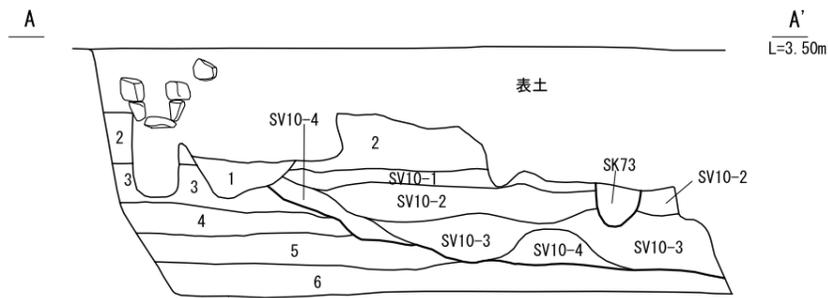
- | | |
|------------|-------------|
| SK21 (焼土) | SK21 (焼土) |
| 1 明褐色シルト質砂 | 6 赤褐色焼土 |
| 2 褐灰色シルト質砂 | 7 灰黄褐色シルト質砂 |
| 3 褐灰色シルト質砂 | |
| 4 赤褐色焼土 | |
| 5 褐灰色シルト質砂 | |



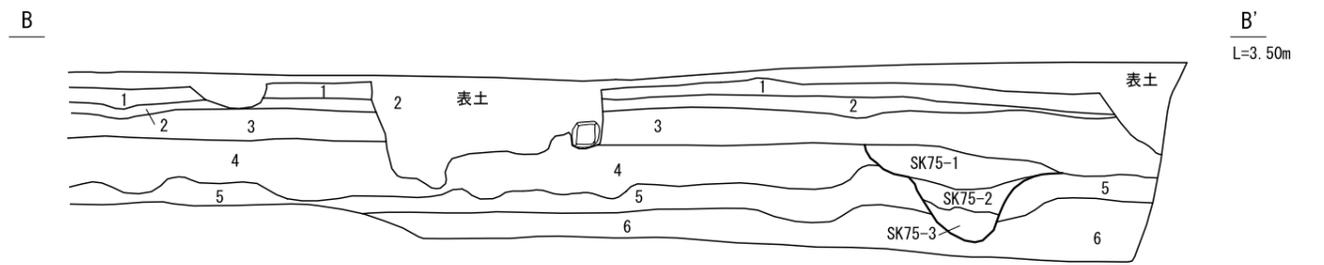
- | | |
|-------------|-------------|
| 調査区横断トレンチ | 調査区横断トレンチ |
| 1 褐灰色シルト質砂 | 6 灰黄褐色シルト質砂 |
| 2 灰黄褐色シルト質砂 | 7 黄橙色細粒砂 |
| 3 褐灰色シルト質砂 | |
| 4 黄橙色シルト質砂 | |
| 5 黄橙色細粒砂 | |

第 39 図 SK21・調査区横断トレンチ 土層断面図 (S=1:60)

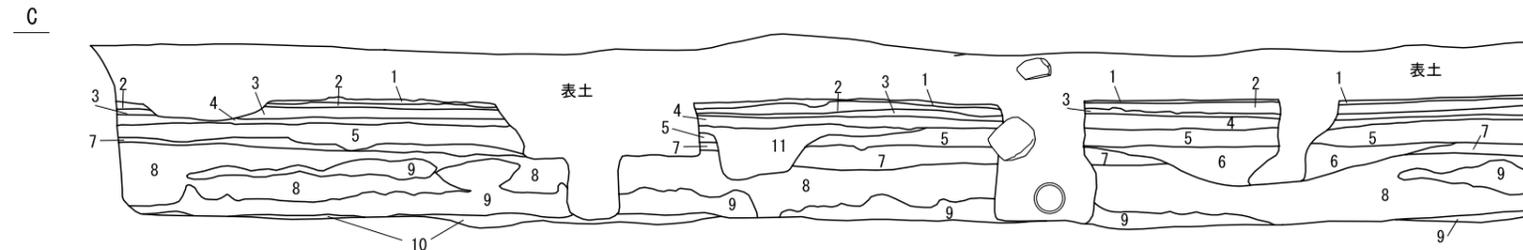




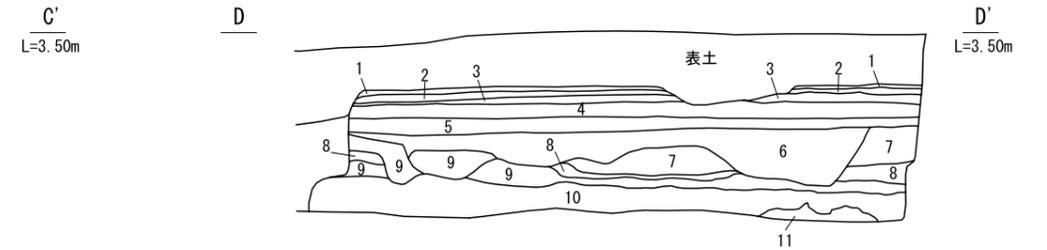
- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 東側 東壁 1 | SV10 | SK73 |
| 1 褐灰色砂質シルト | 1 灰黄褐色砂質シルト | 1 褐灰色砂質シルト |
| 2 褐灰色砂質シルト | 2 黄橙色シルト質砂 | |
| 3 灰黄褐色砂質シルト | 3 黄橙色細粒砂 | |
| 4 黄橙色シルト質砂 | 4 灰黄褐色シルト質砂 | |
| 5 灰黄褐色シルト質砂 | | |
| 6 褐灰色シルト | | |



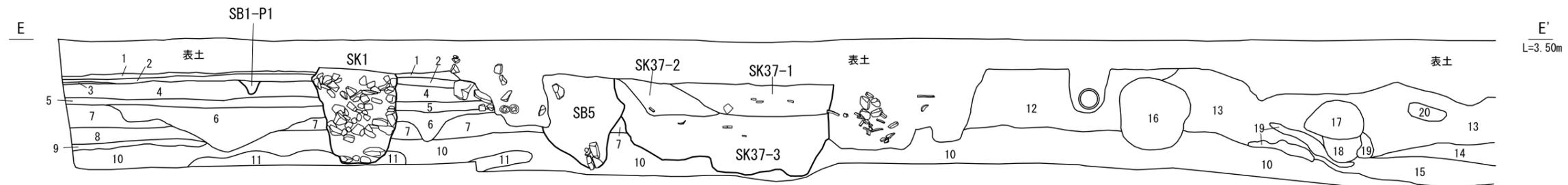
- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| 東側 東壁 2 | 東側 東壁 2 | SK75 |
| 1 褐灰色砂質シルト | 6 灰黄褐色砂質シルト | 1 灰黄褐色砂質シルト |
| 2 橙色焼土 | | 2 灰黄褐色砂質シルト |
| 3 褐灰色砂質シルト | | 3 褐灰色砂質シルト |
| 4 褐灰色砂質シルト | | |
| 5 黄橙色シルト質砂 | | |



- 西側 西壁 1
- ※ 西側西壁2と11層まで対応
- 1 2 灰白色シルト質砂



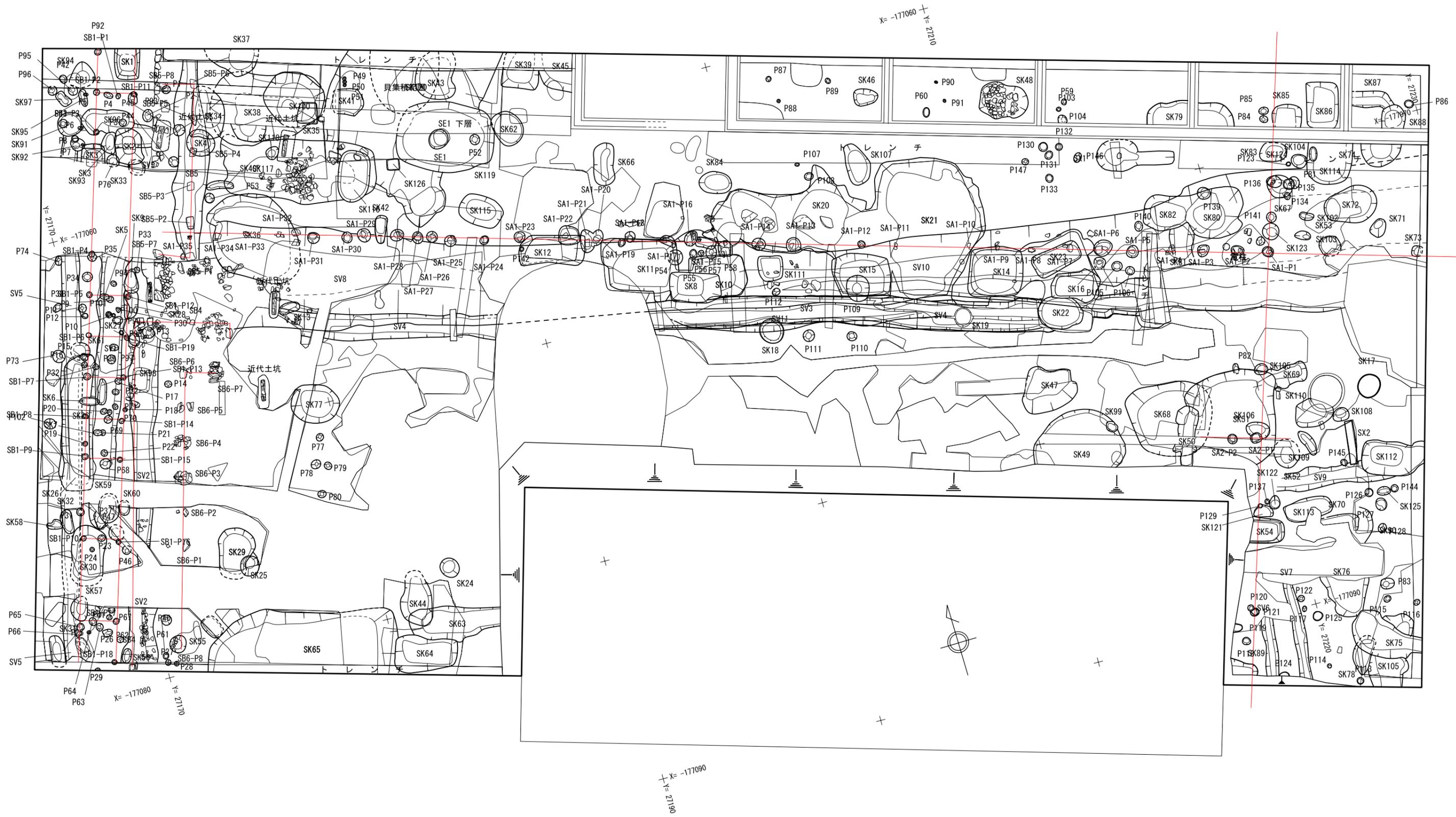
- 西側 西壁 2
- ※西側北壁と11層まで対応



- | | | | | |
|-------------|--------------|---------------|---------------|------------------|
| 西側 北壁 | 西側 北壁 | 西側 北壁 | 西側 北壁 | SK1 |
| 1 褐灰色礫 | 6 灰黄褐色砂質シルト | 1 1 灰白色細粒砂 | 1 6 灰黄褐色砂質シルト | SK1 灰黄褐色礫 |
| 2 灰黄褐色シルト質砂 | 7 灰黄褐色砂質シルト | 1 2 灰黄褐色砂質シルト | 1 7 赤褐色焼土 | SB5 暗褐色細粒砂 |
| 3 灰黄褐色シルト質砂 | 8 黄橙色シルト質砂 | 1 3 灰黄褐色砂質シルト | 1 8 灰黄褐色シルト質砂 | SK37-1 褐灰色砂質シルト |
| 4 黄橙色砂質シルト | 9 灰白色細粒砂 | 1 4 黄橙色シルト質砂 | 1 9 褐灰色シルト質砂 | SK37-2 灰黄褐色砂質シルト |
| 5 灰白色シルト質砂 | 1 0 黄橙色シルト質砂 | 1 5 褐灰色シルト質砂 | 2 0 褐灰色シルト | SK37-3 灰黄褐色砂質シルト |

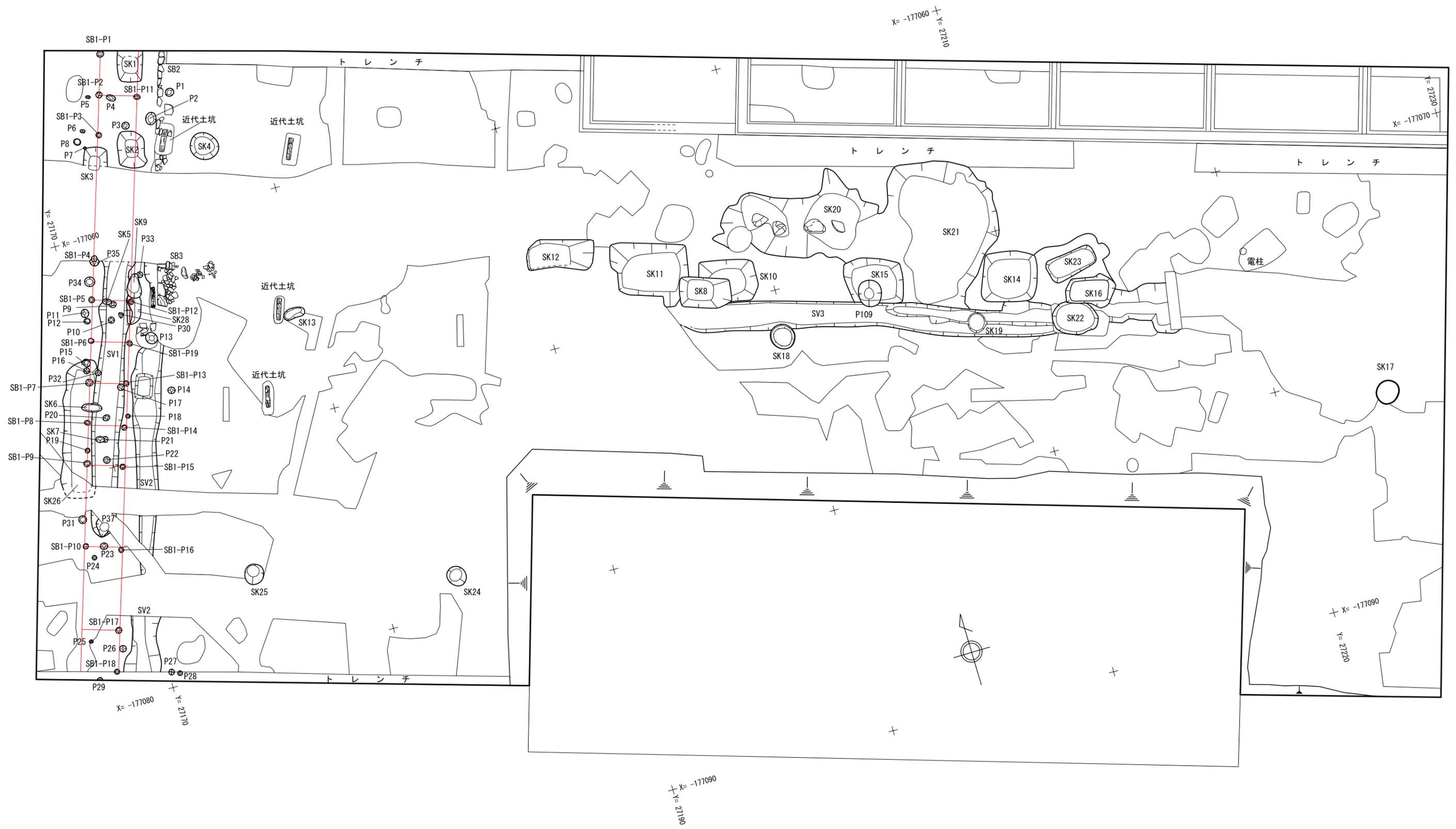
第 40 図 調査区土層断面図 (S=1:60)





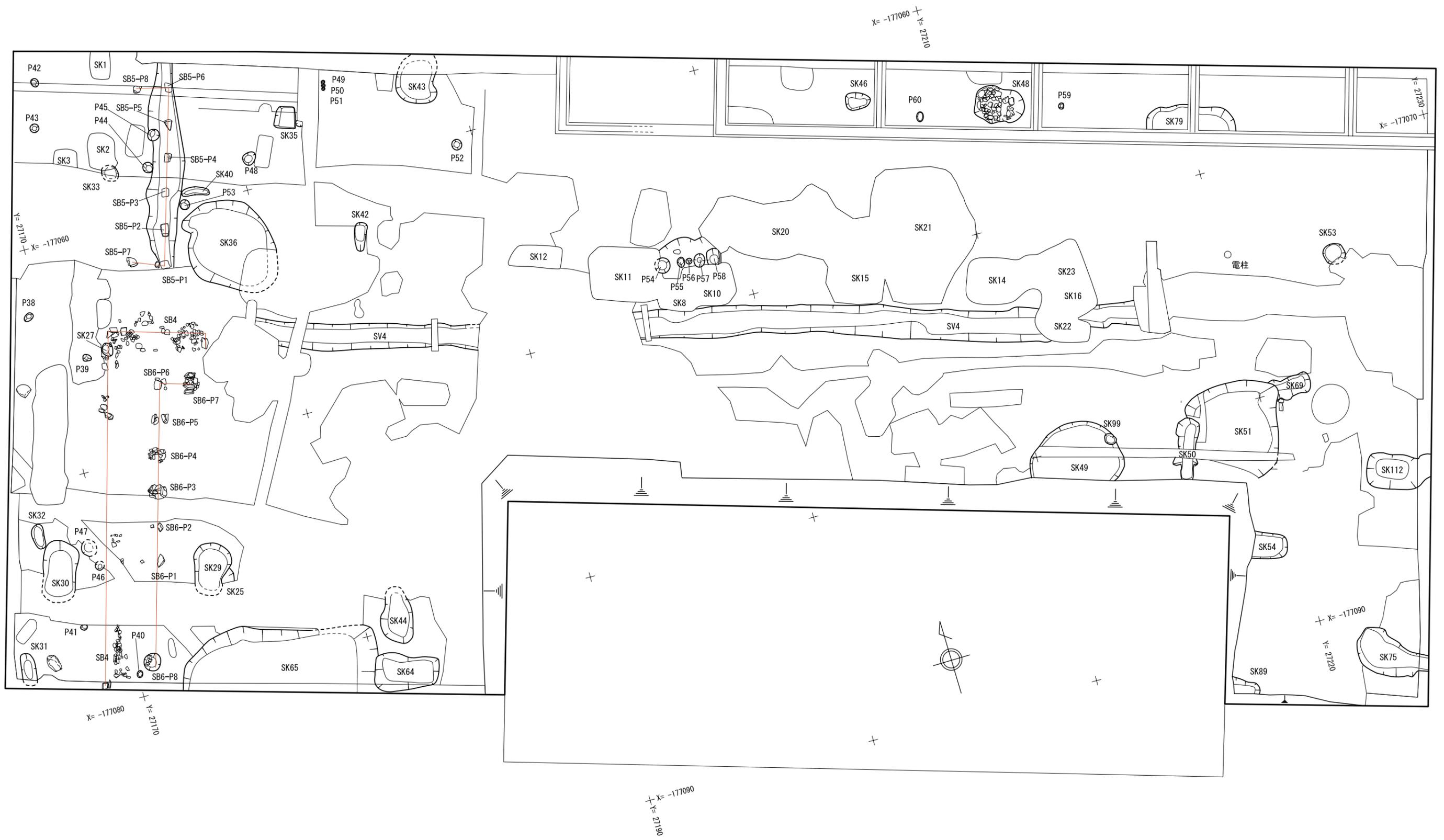
第 41 図 遺構配置図 (S=1:160)





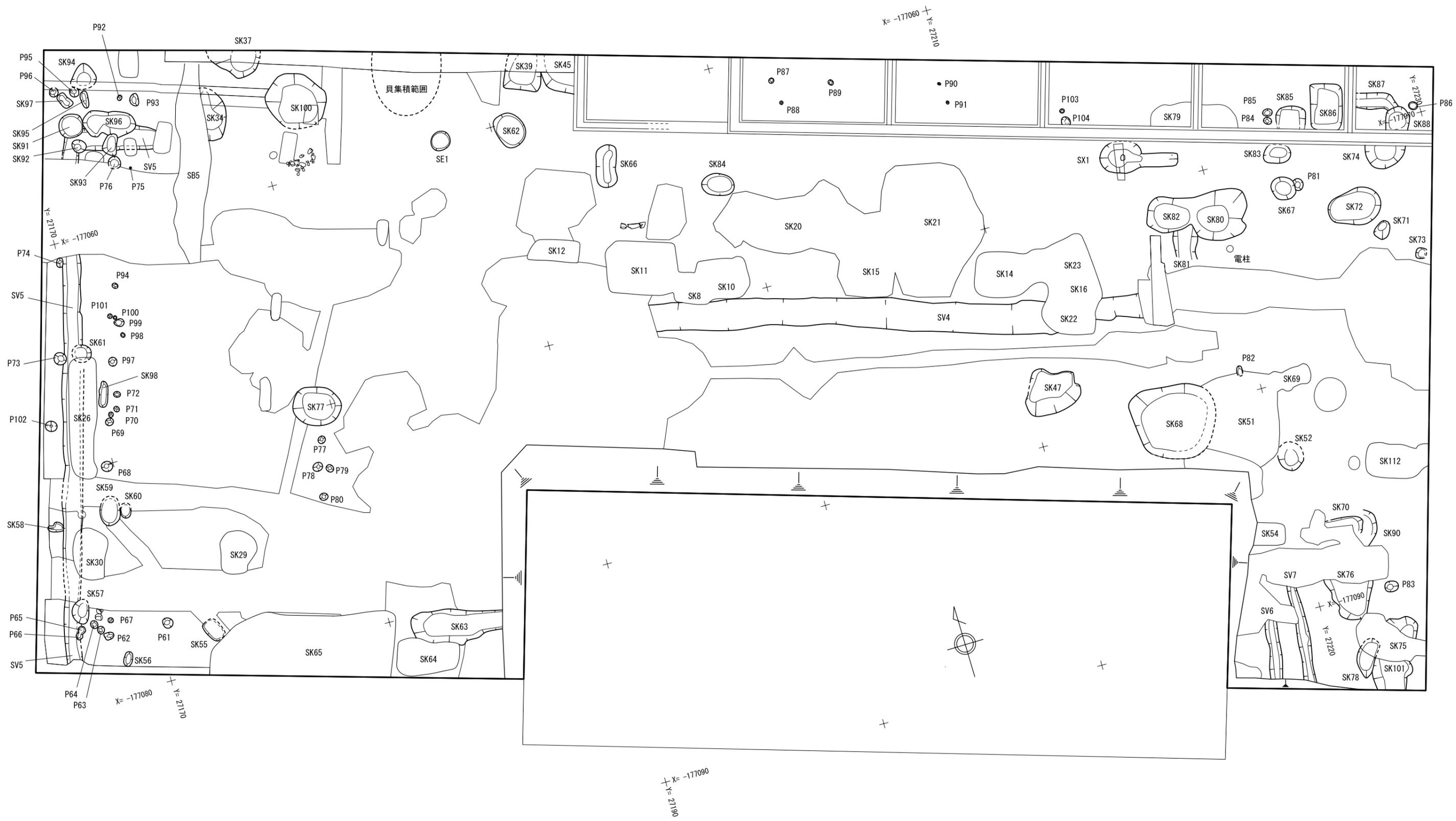
第 42 図 時代別遺構配置図 (1) 近現代以降 (S=1:60)

0 5m



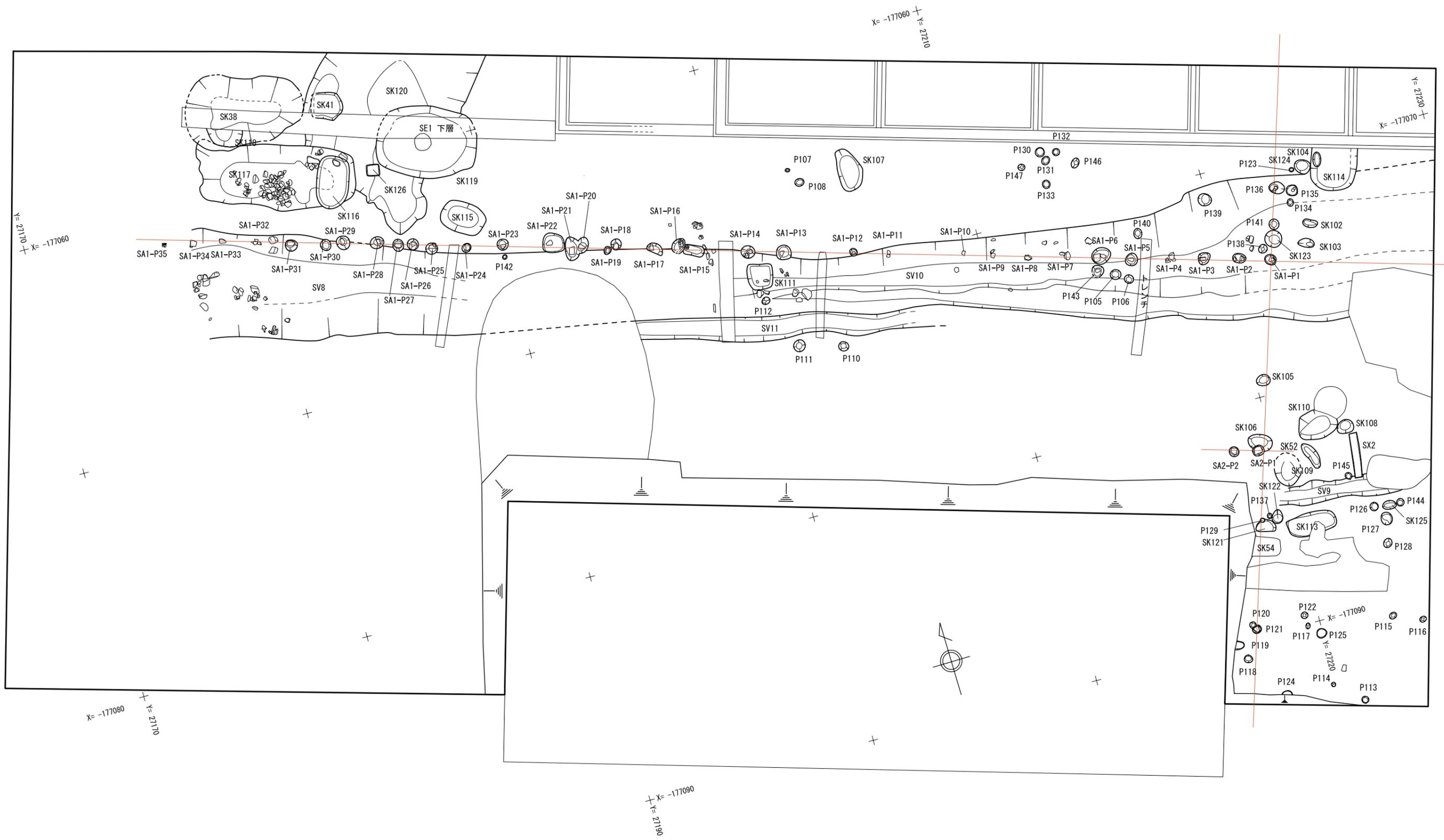
第 43 図 時代別遺構配置図 (2) 19 世紀代幕末まで (S=1:160)

0 5m



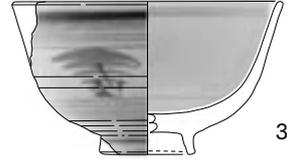
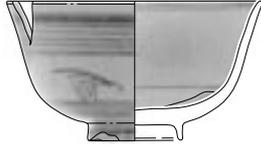
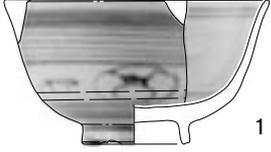
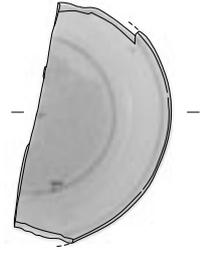
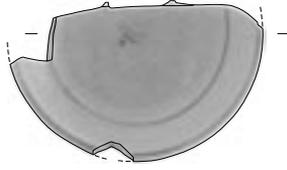
第 44 図 時代別遺構配置図 (3) 18 世紀代 (S=1:160)





第 45 図 時代別遺構配置図 (4) 17 世紀代 (S=1:160)

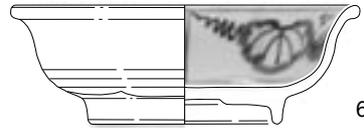
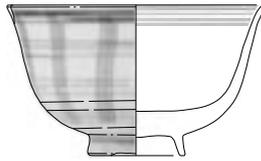
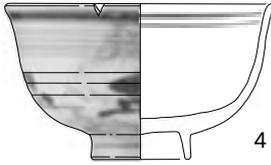
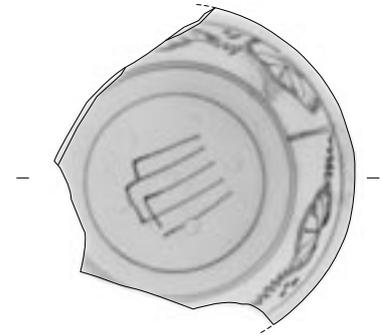
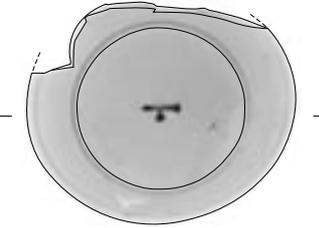




1

2

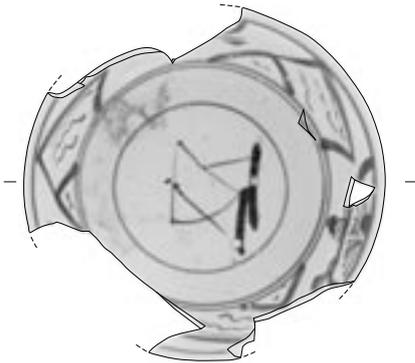
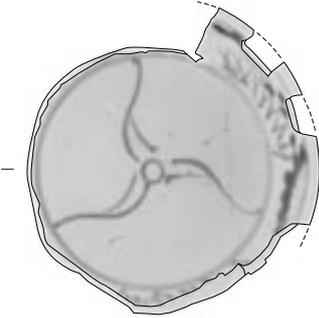
3



4

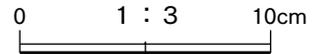
5

6

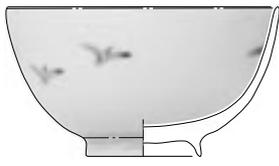


7

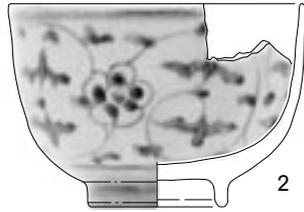
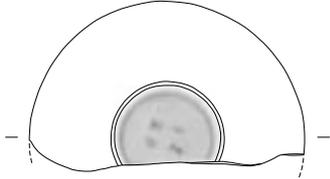
8



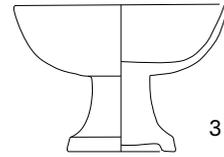
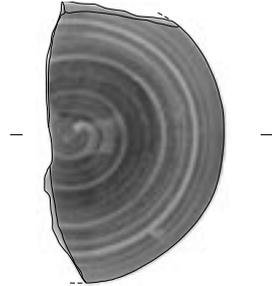
SV2



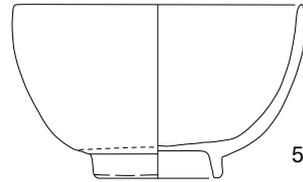
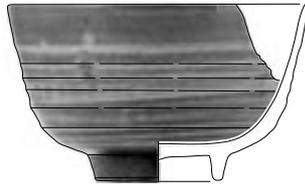
1



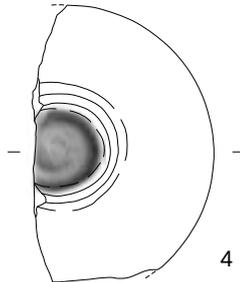
2



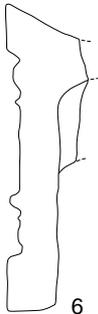
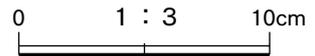
3



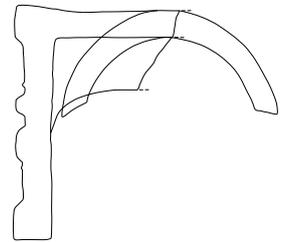
5



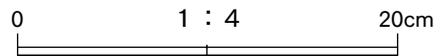
4



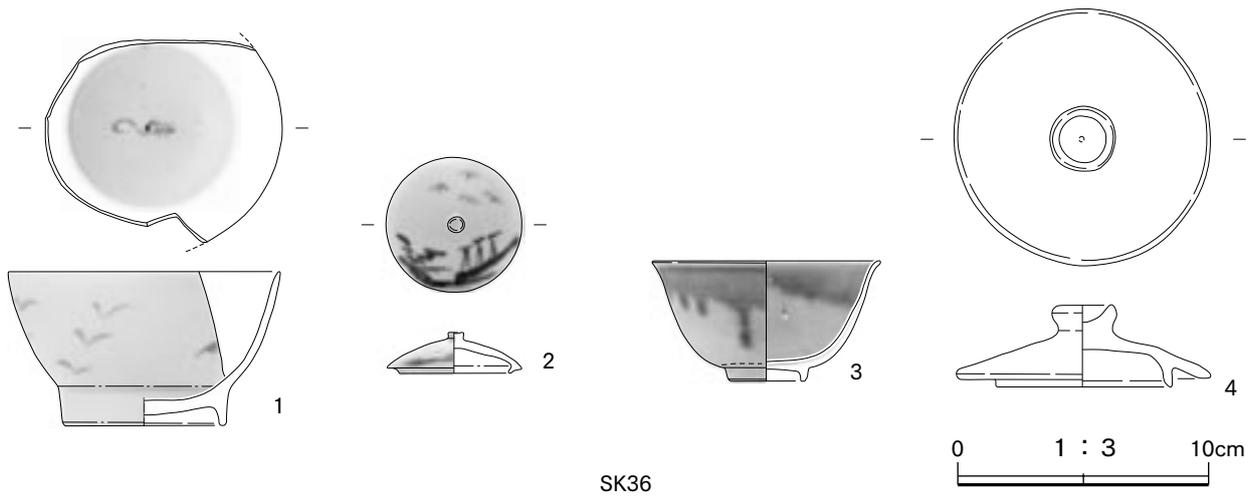
6



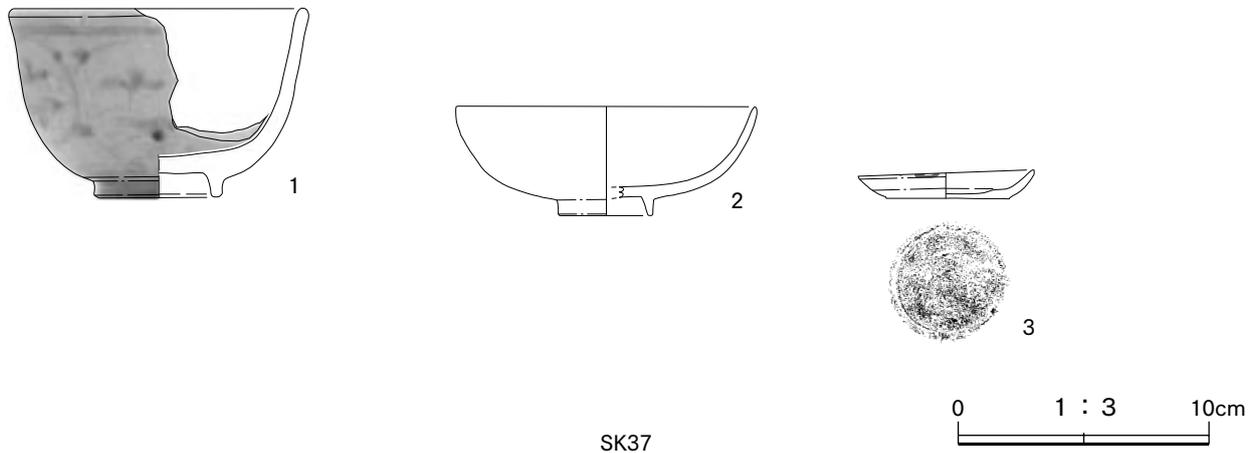
7



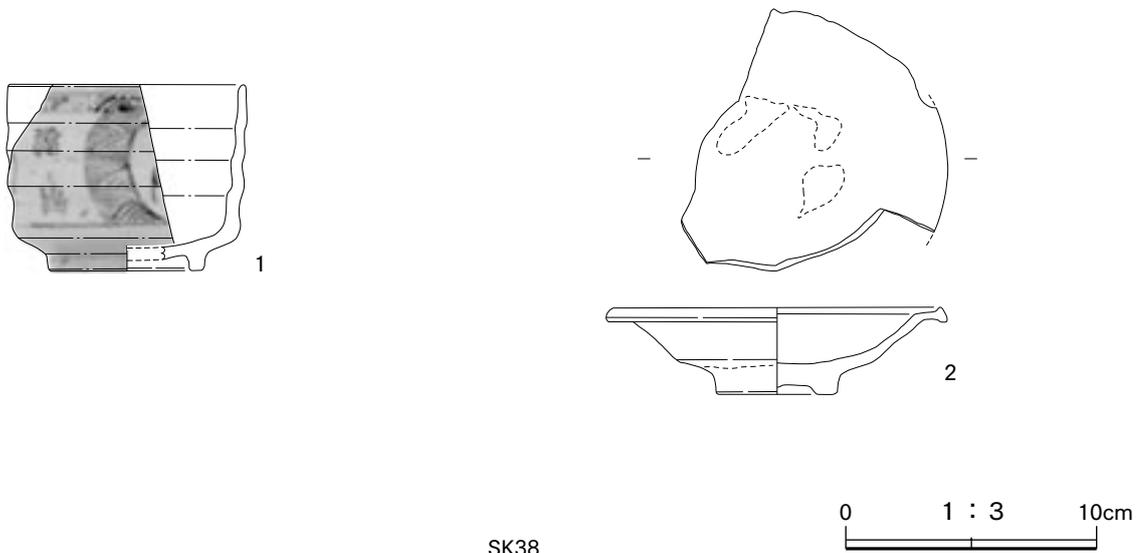
SK34



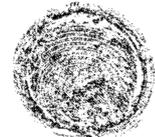
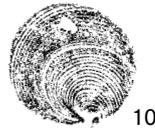
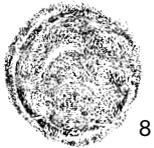
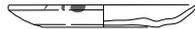
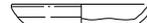
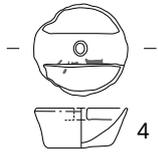
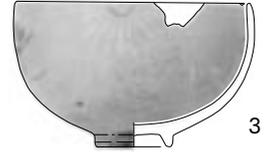
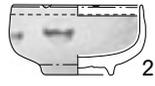
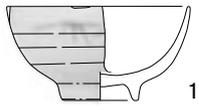
SK36



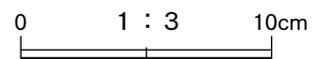
SK37

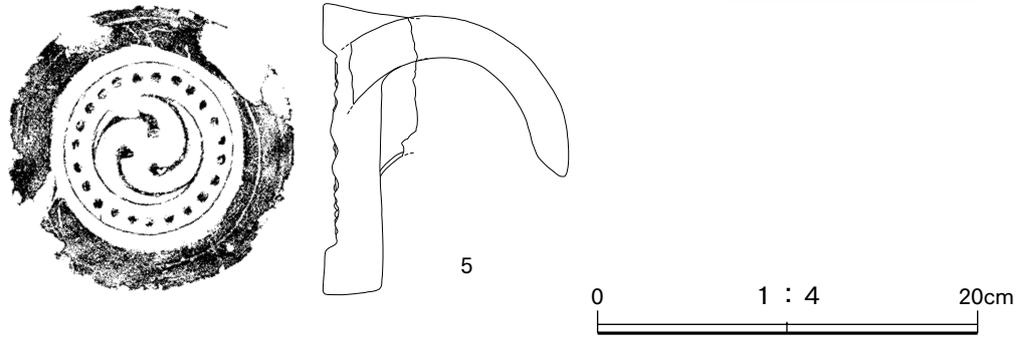
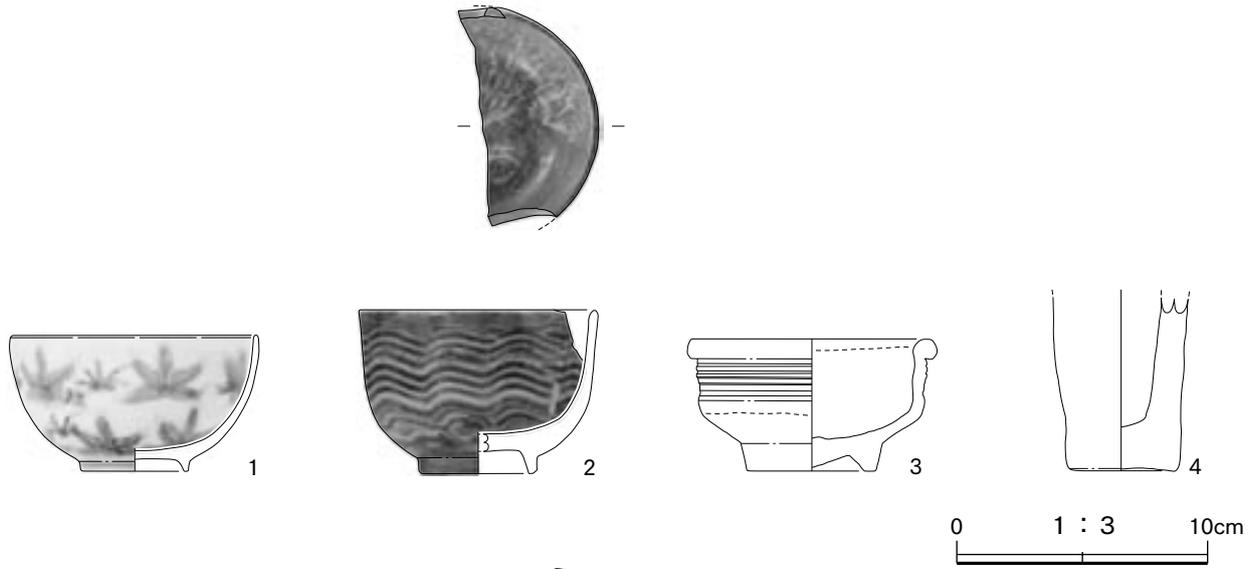


SK38

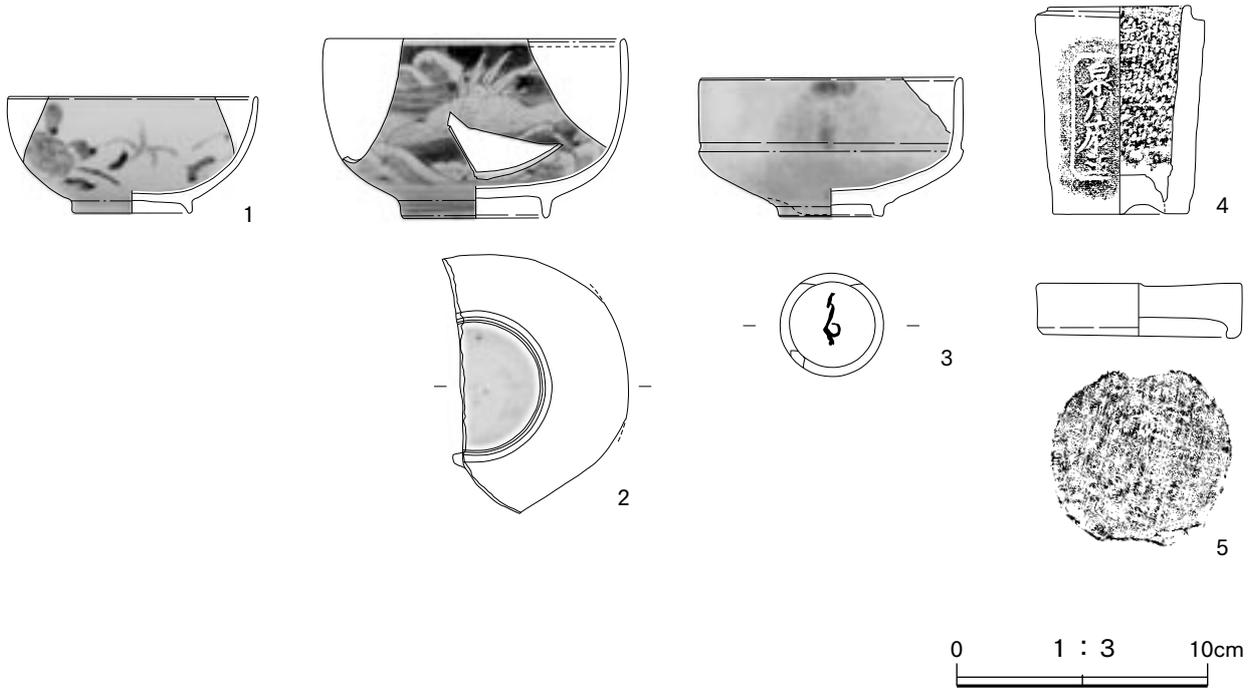


SK39

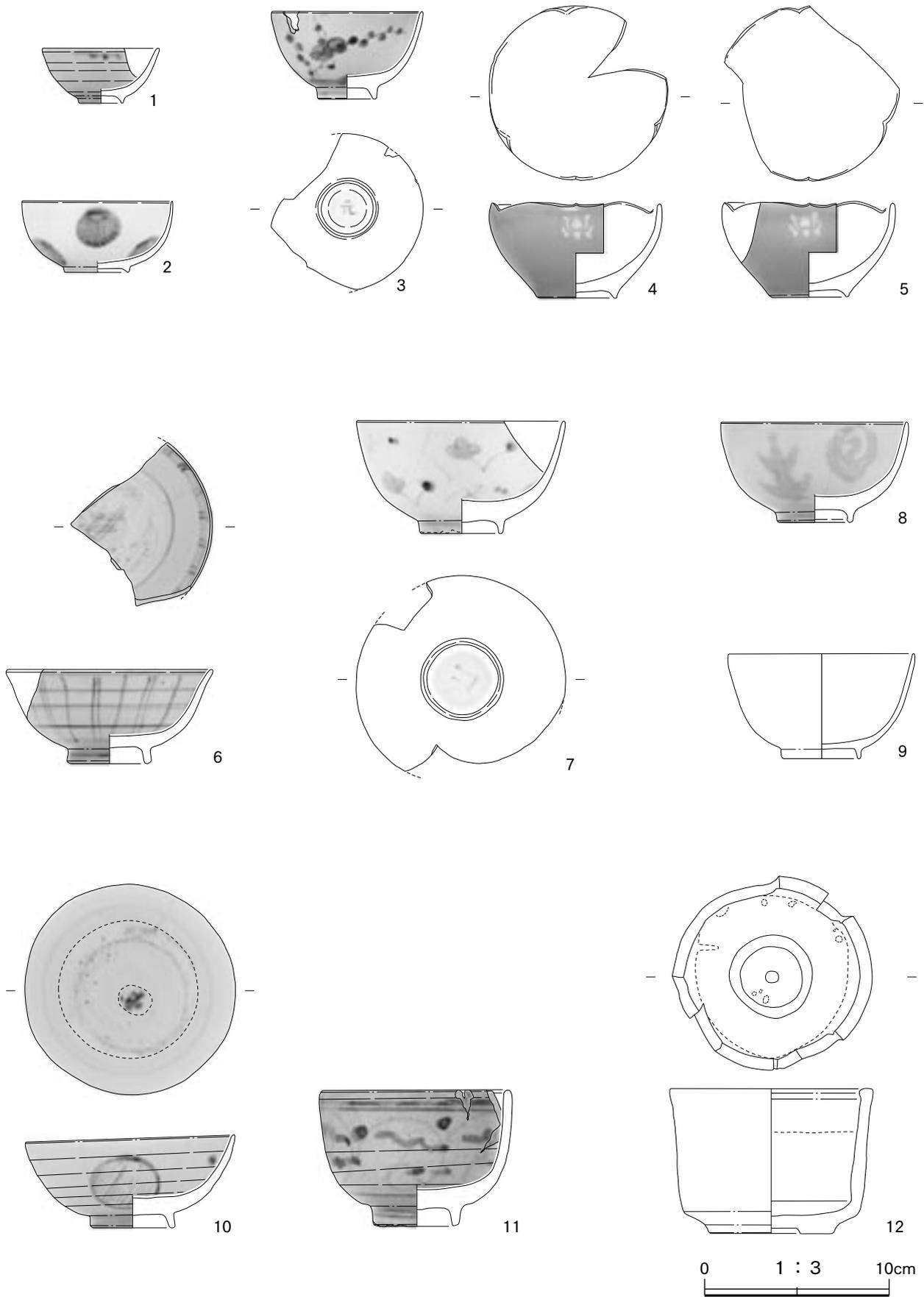




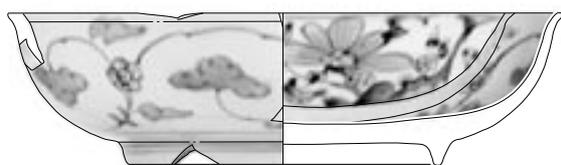
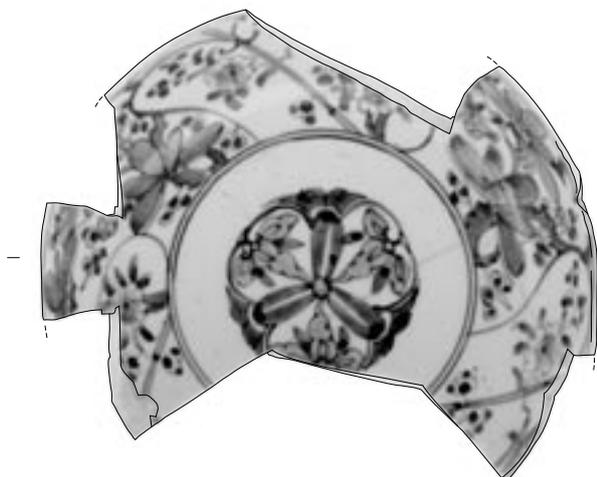
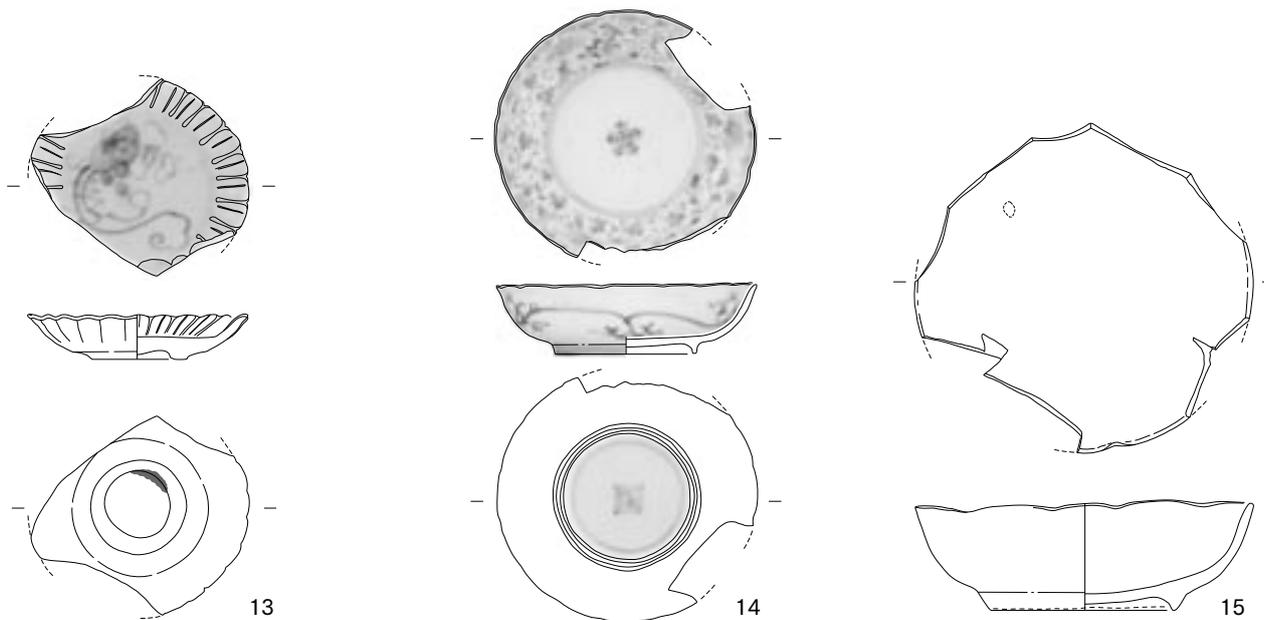
SK47



SK50



SK51



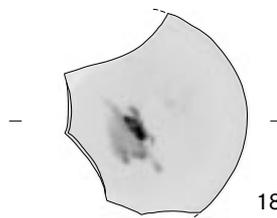
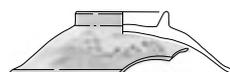
16



17



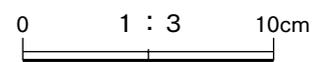
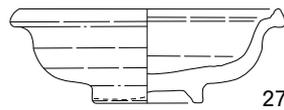
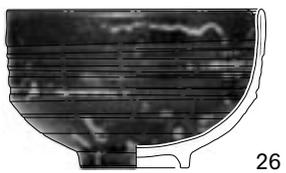
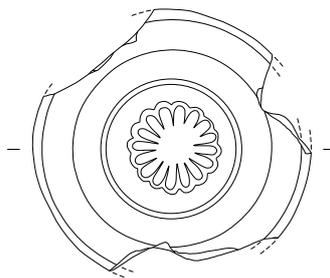
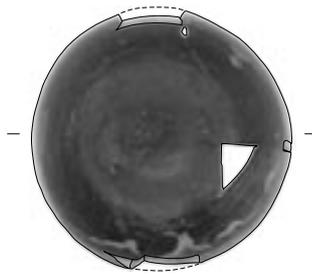
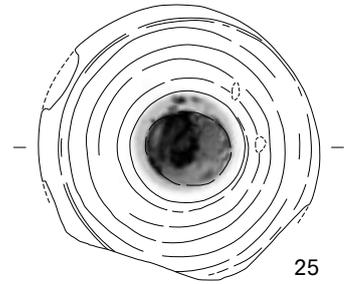
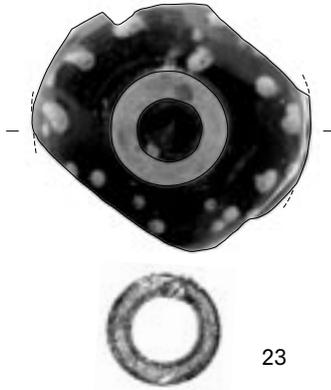
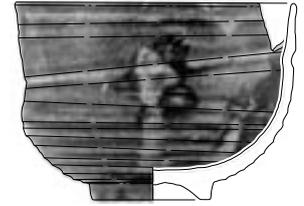
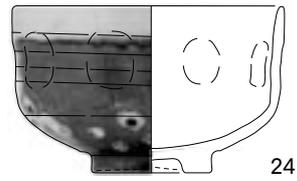
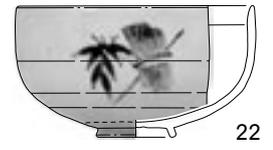
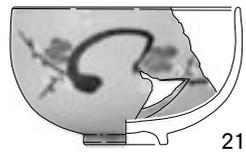
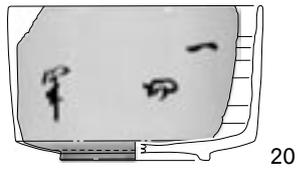
19



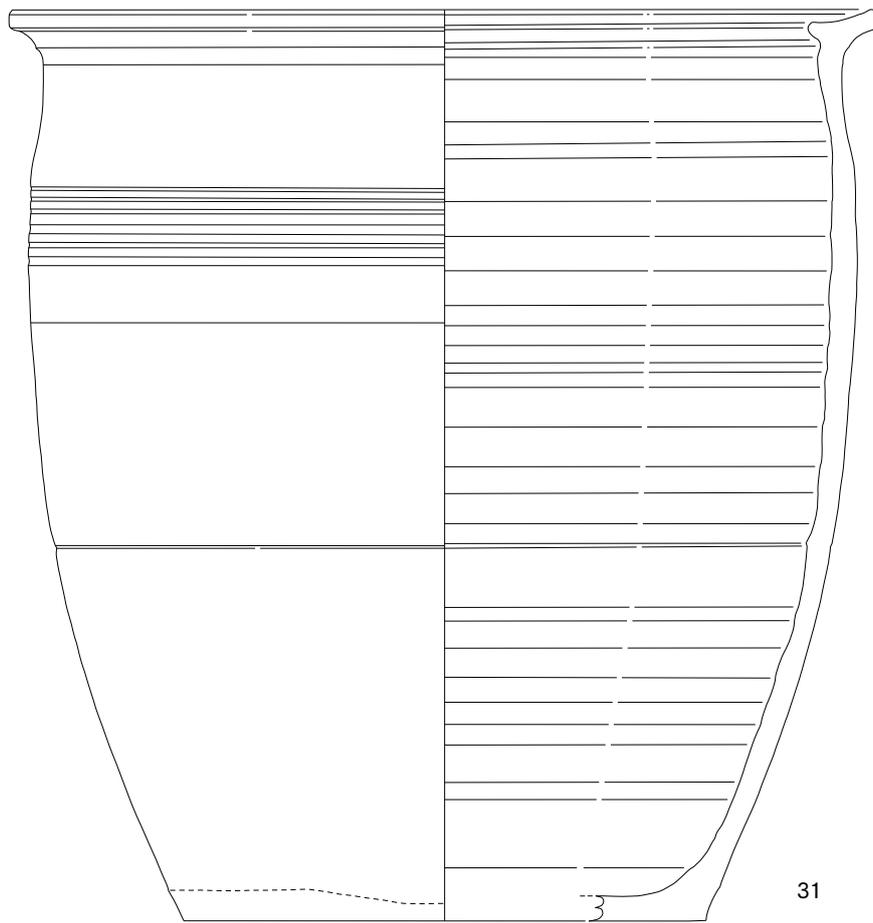
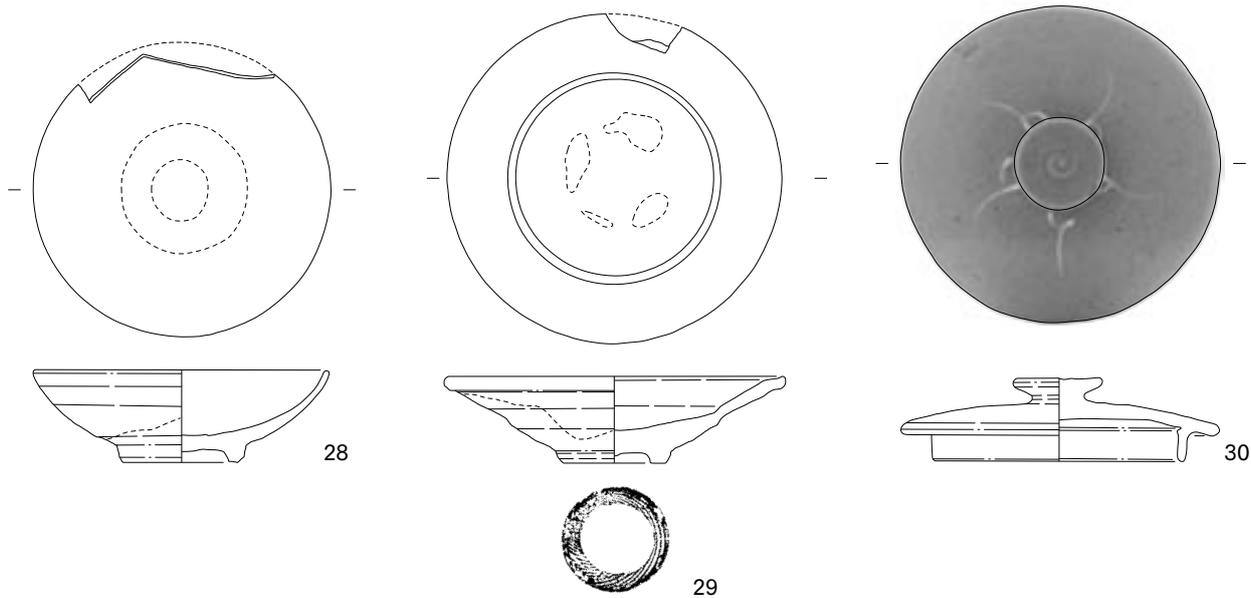
18

0 1 : 3 10cm

SK51

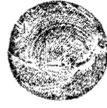
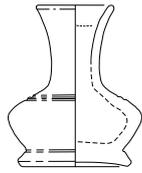
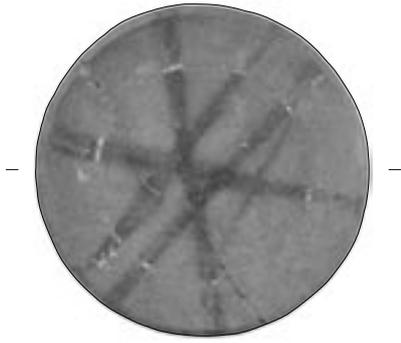


SK51

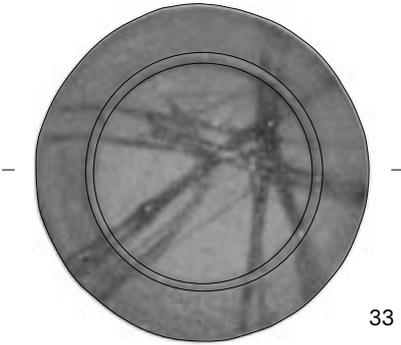
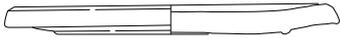


0 1 : 3 10cm

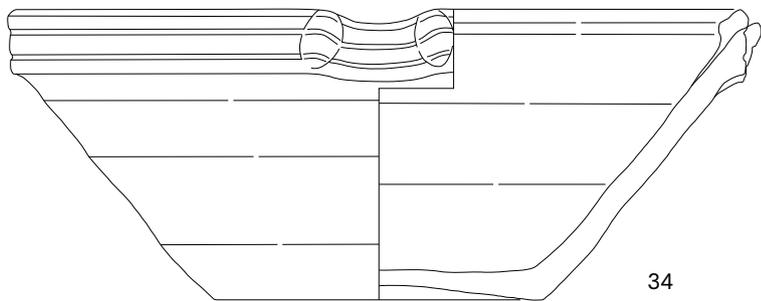
SK51



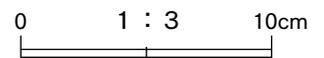
32



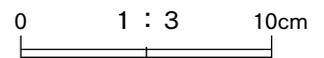
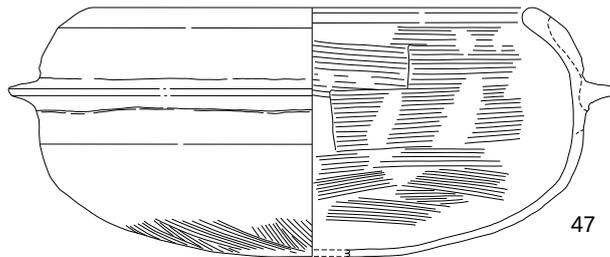
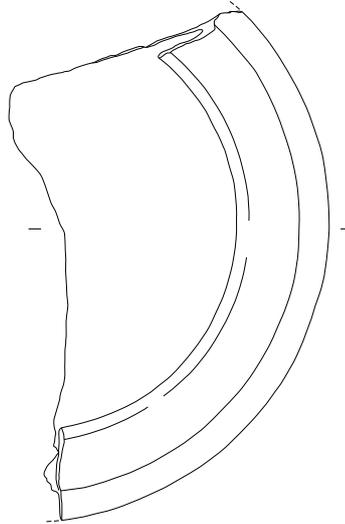
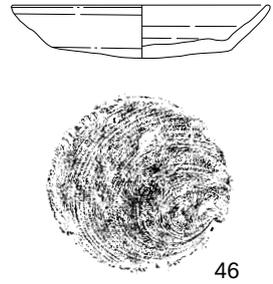
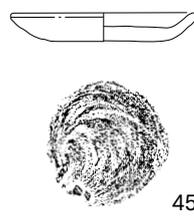
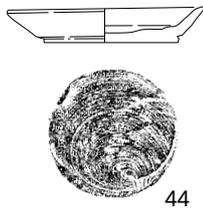
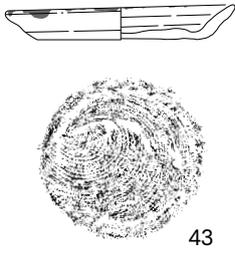
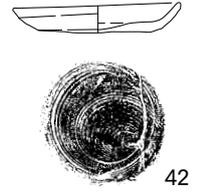
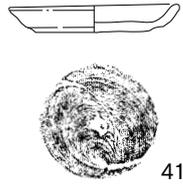
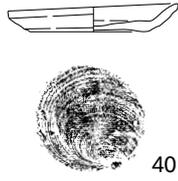
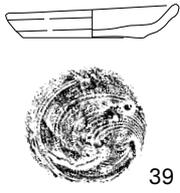
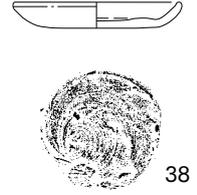
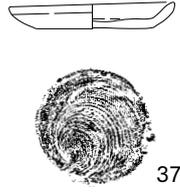
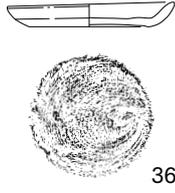
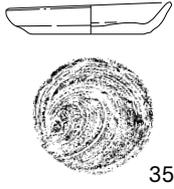
33



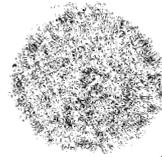
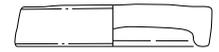
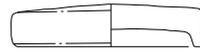
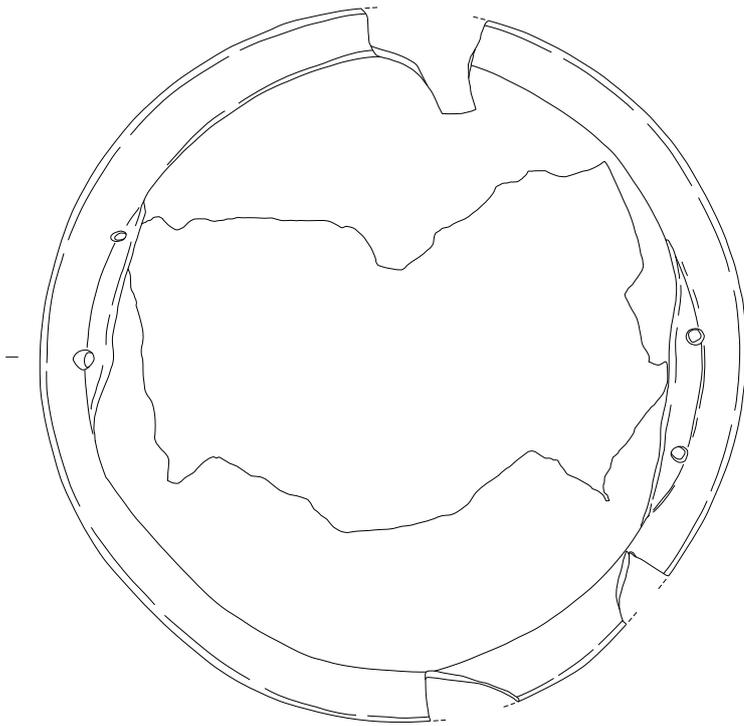
34



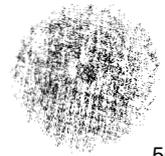
SK51



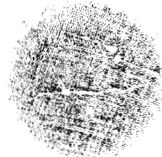
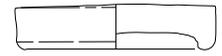
SK51



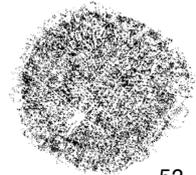
49



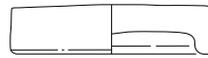
50



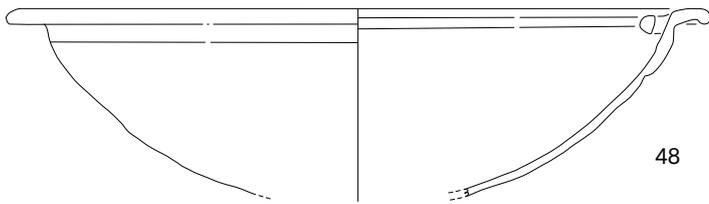
51



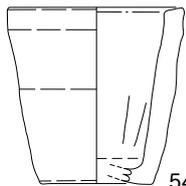
52



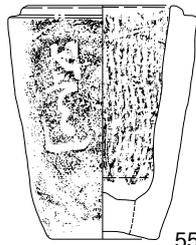
53



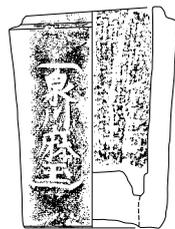
48



54



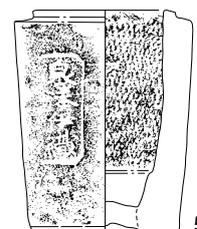
55



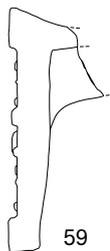
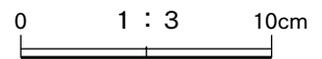
56



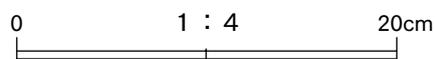
57



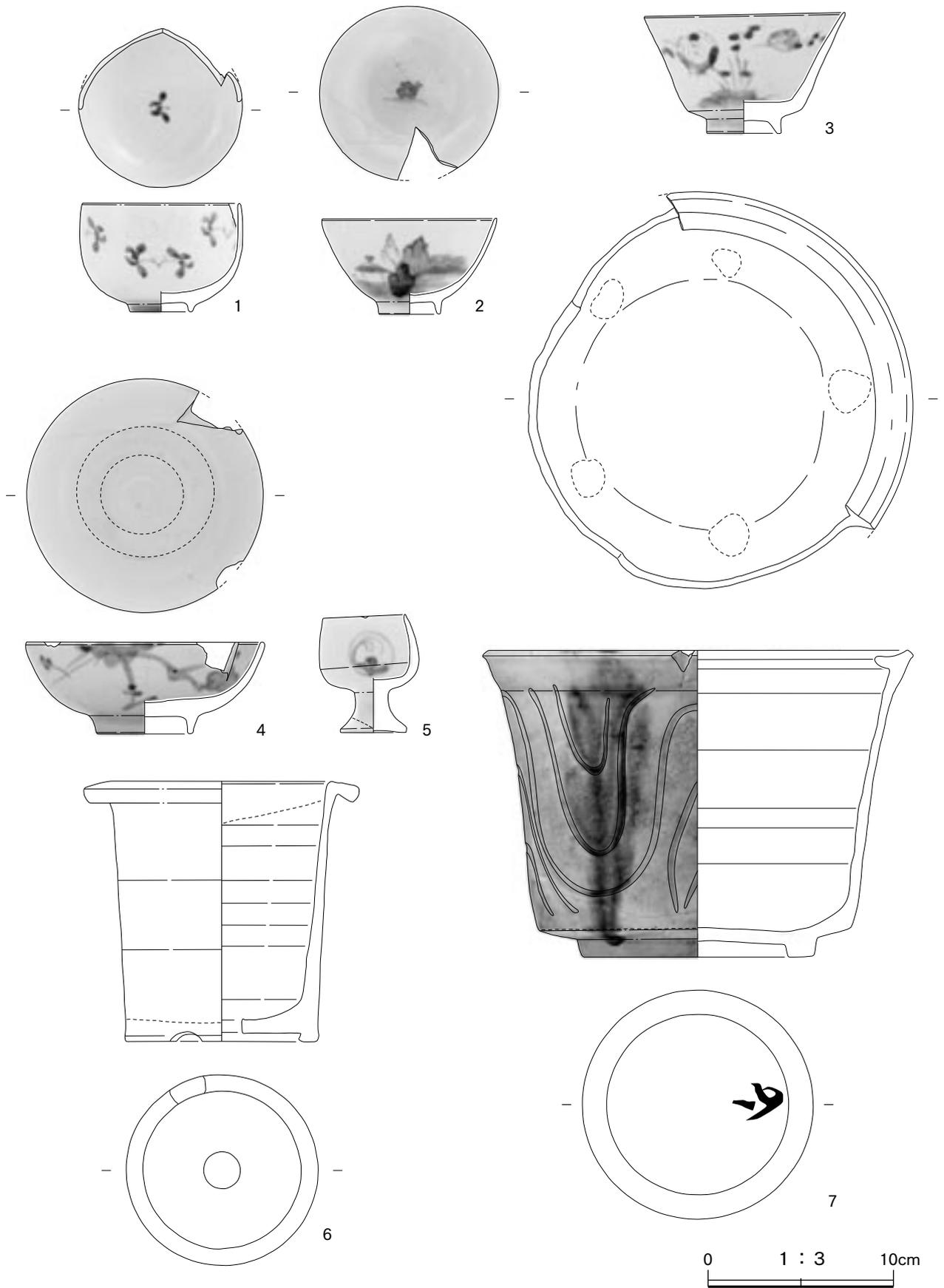
58



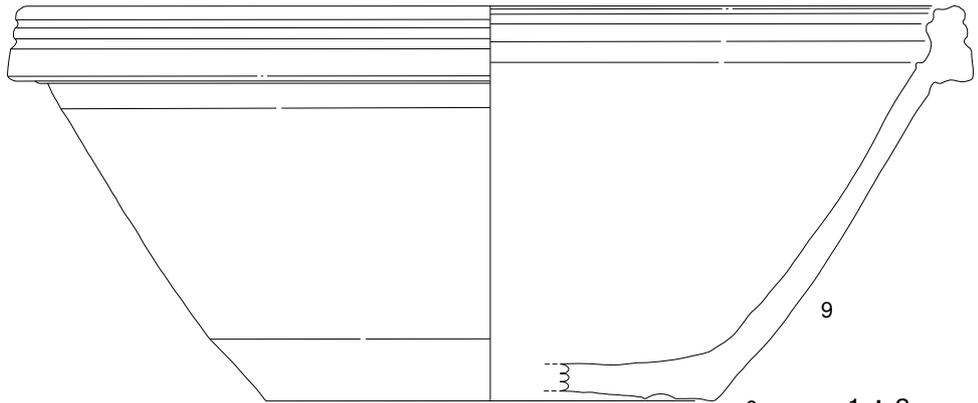
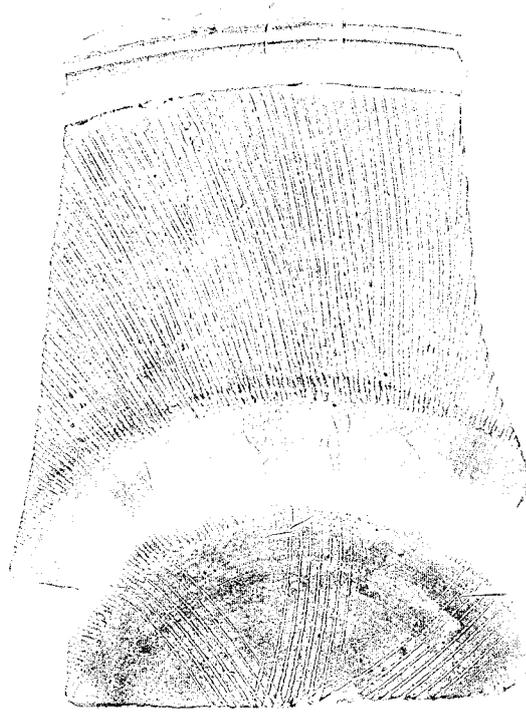
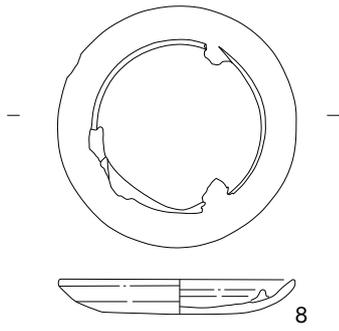
59



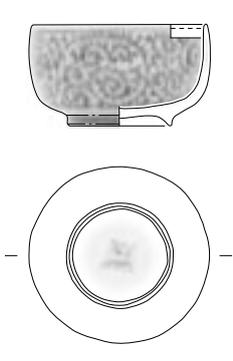
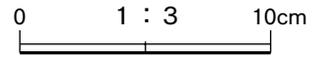
SK51



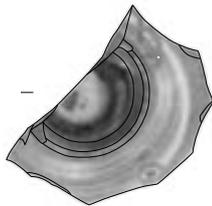
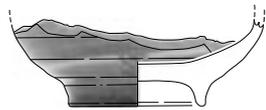
SK54



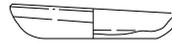
SK54



1



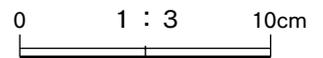
2



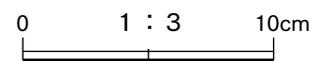
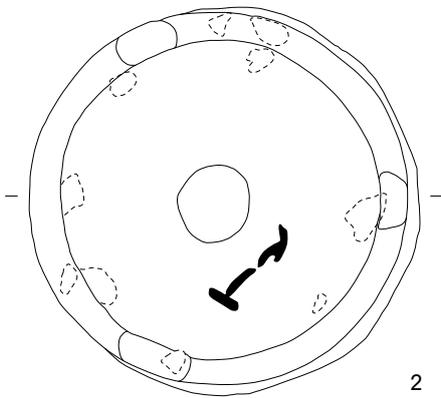
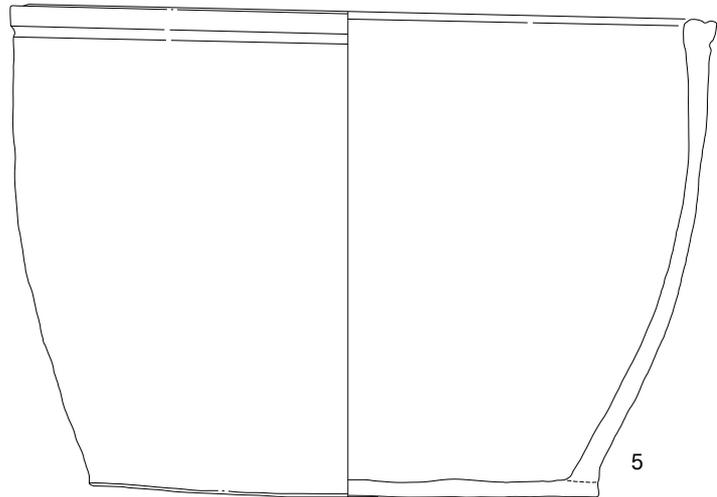
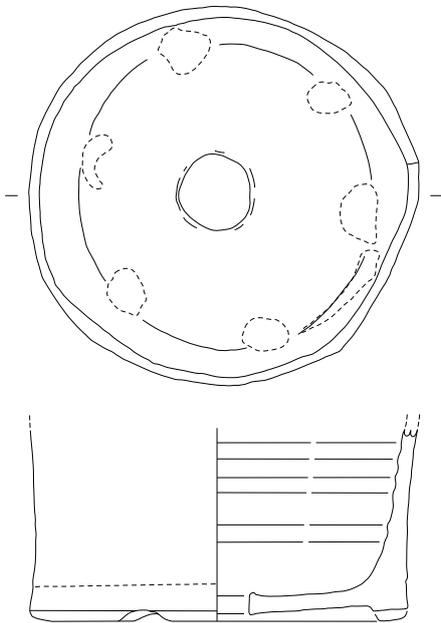
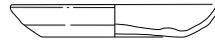
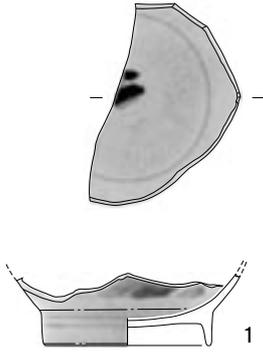
3



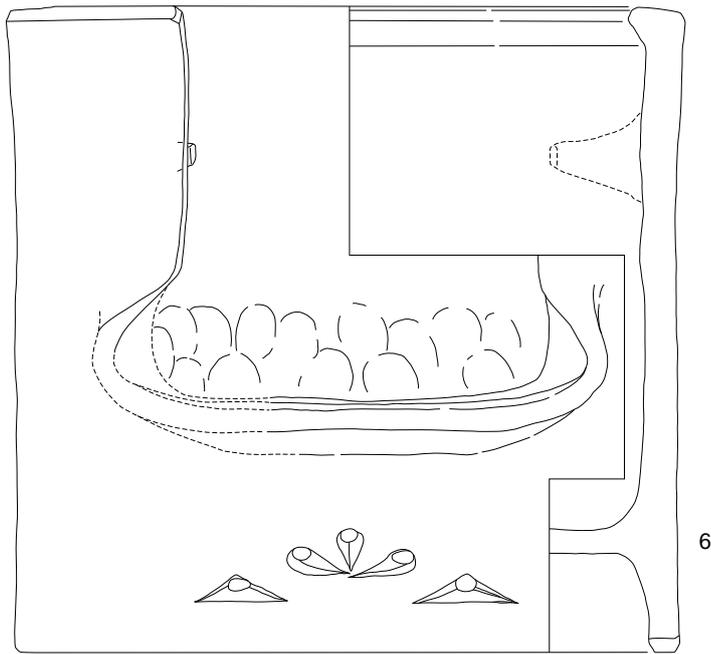
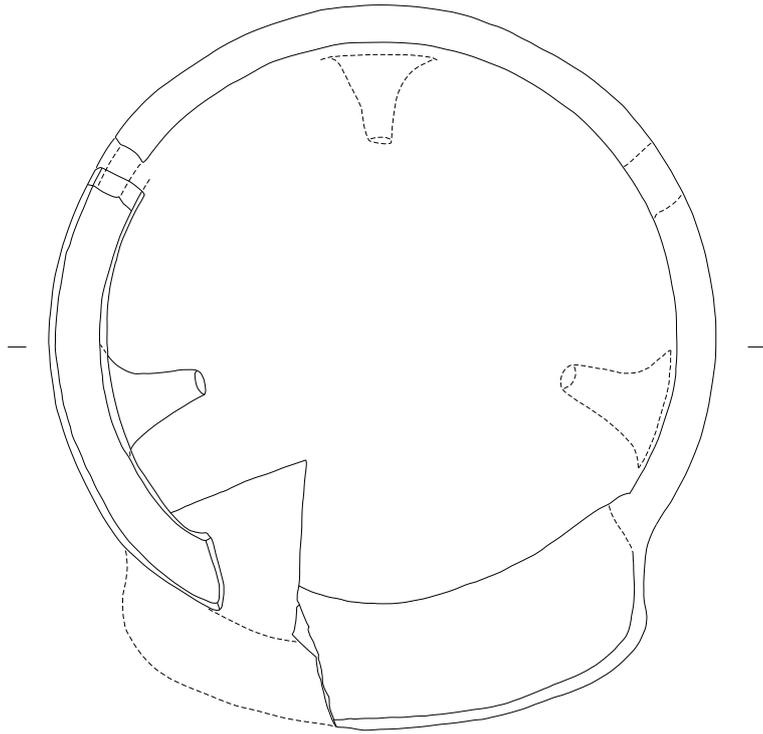
4



SK63



SK64



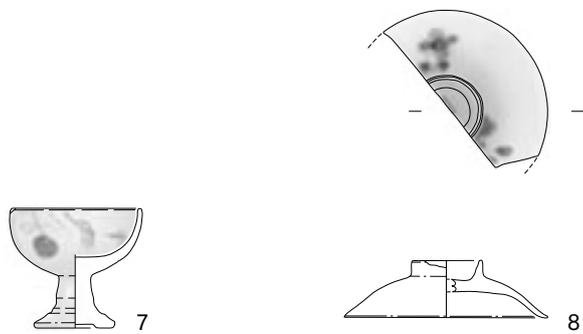
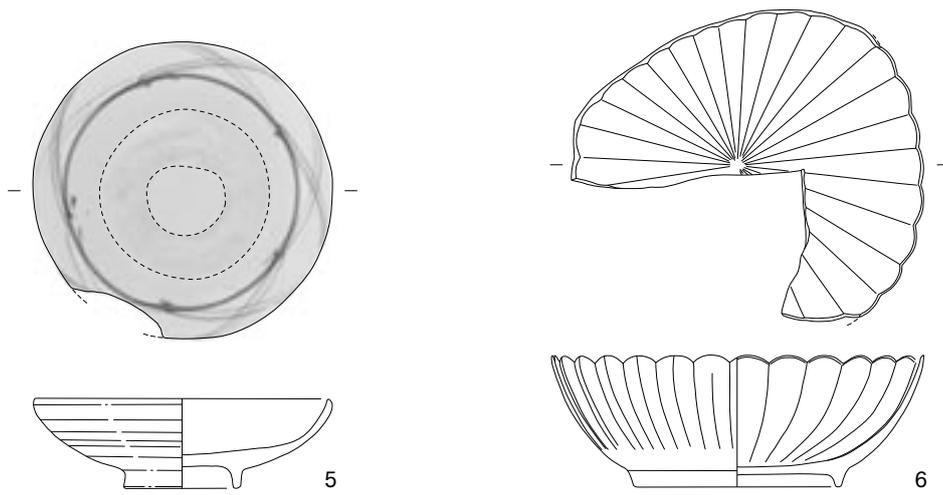
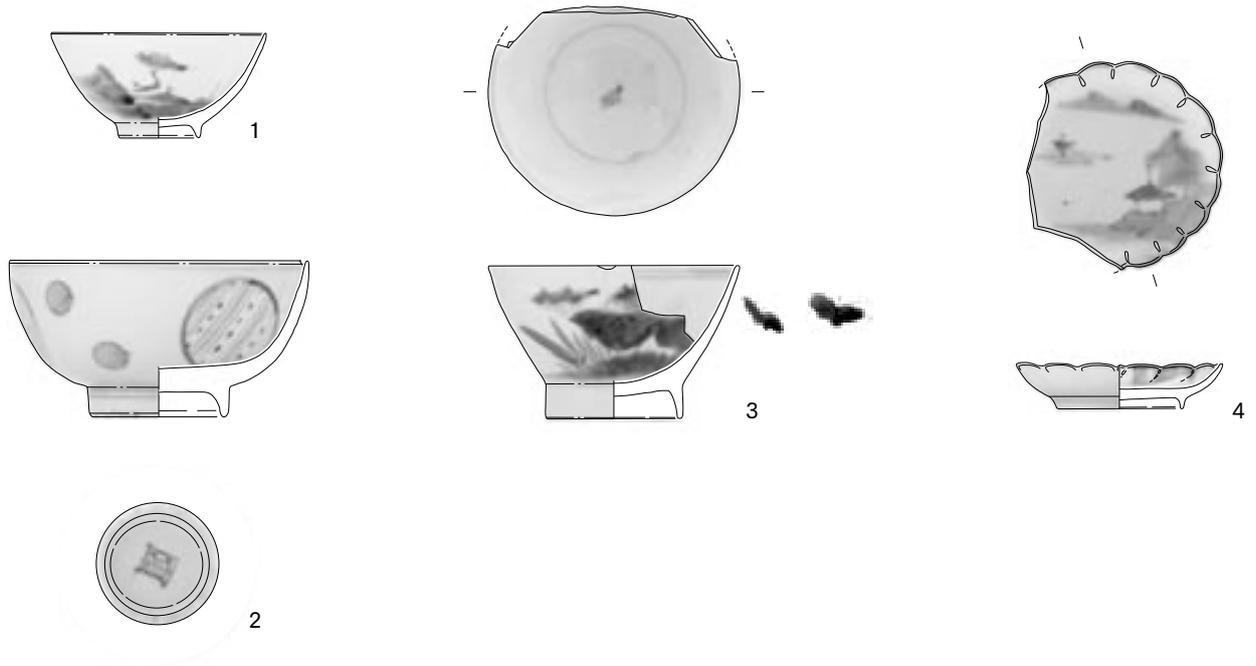
0 1 : 3 10cm



7

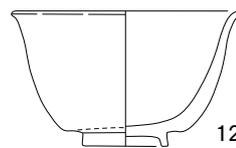
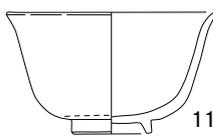
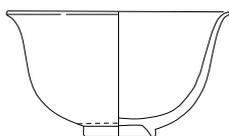
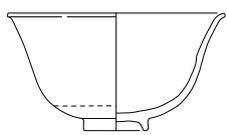
0 1 : 4 20cm

SK64



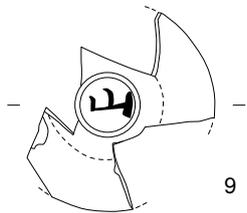
0 1 : 3 10cm

SK65

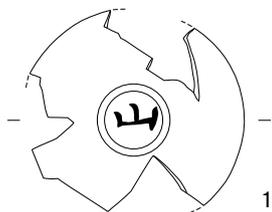


11

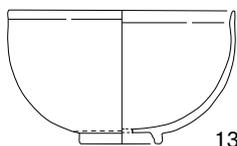
12



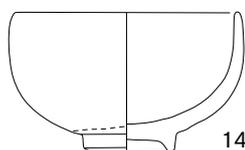
9



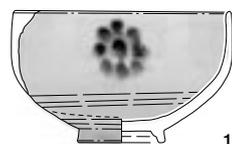
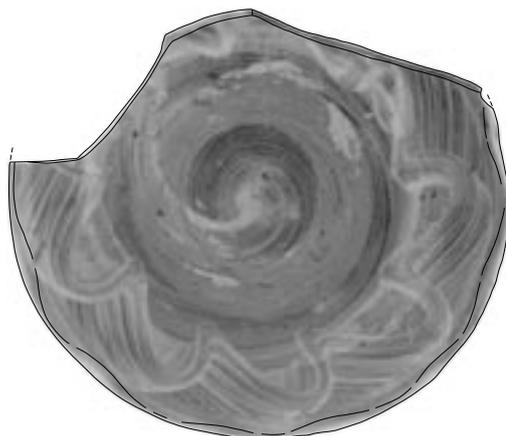
10



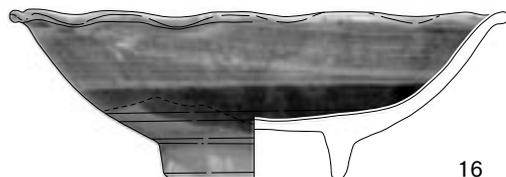
13



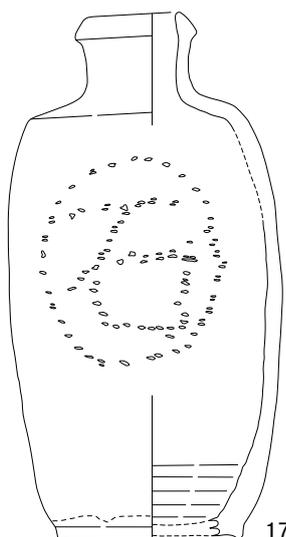
14



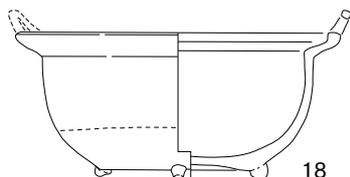
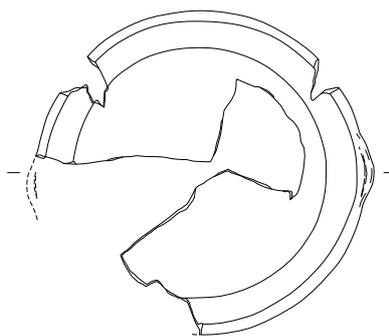
15



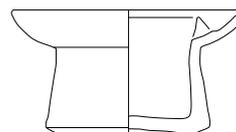
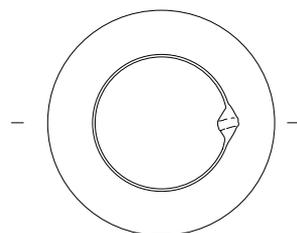
16



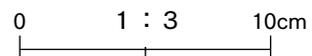
17



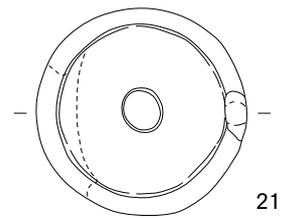
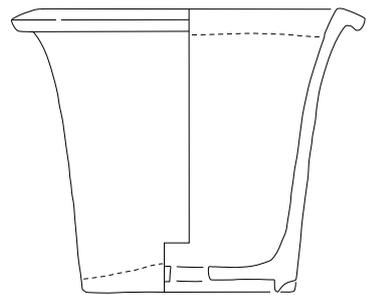
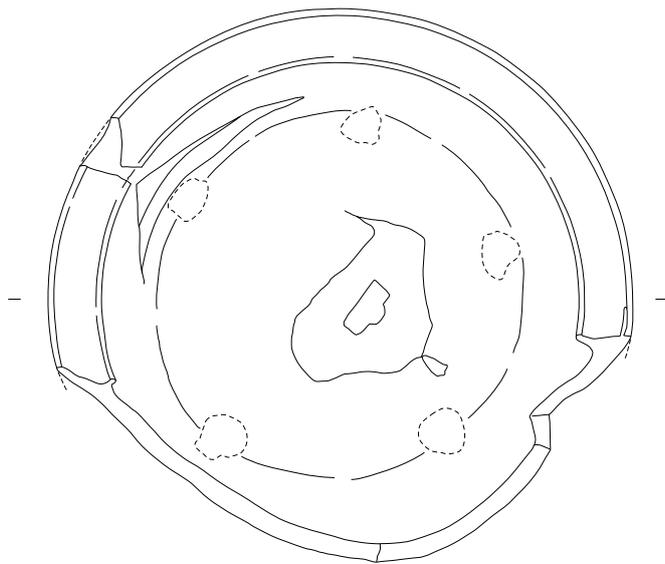
18



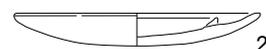
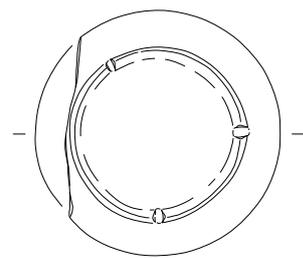
19



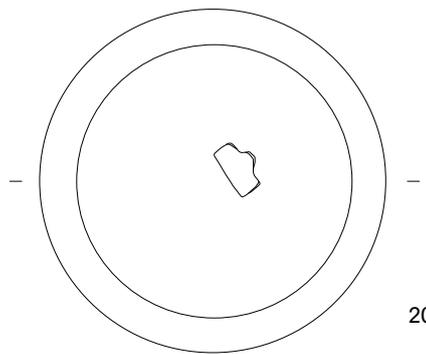
SK65



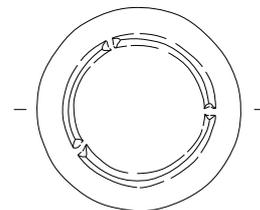
21



22



20



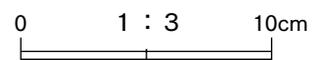
23



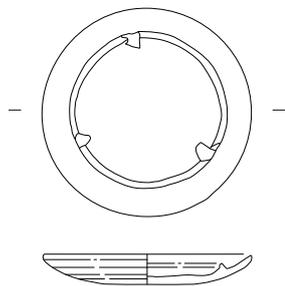
24



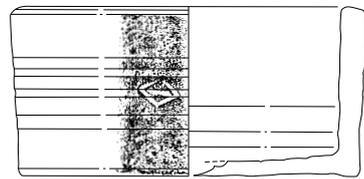
25



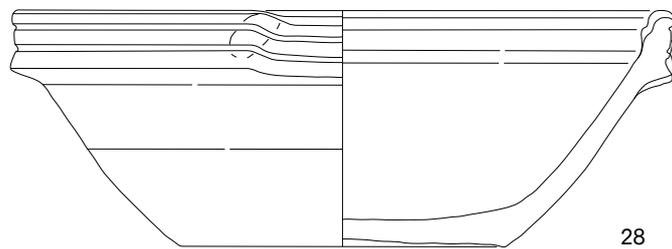
SK65



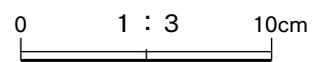
26



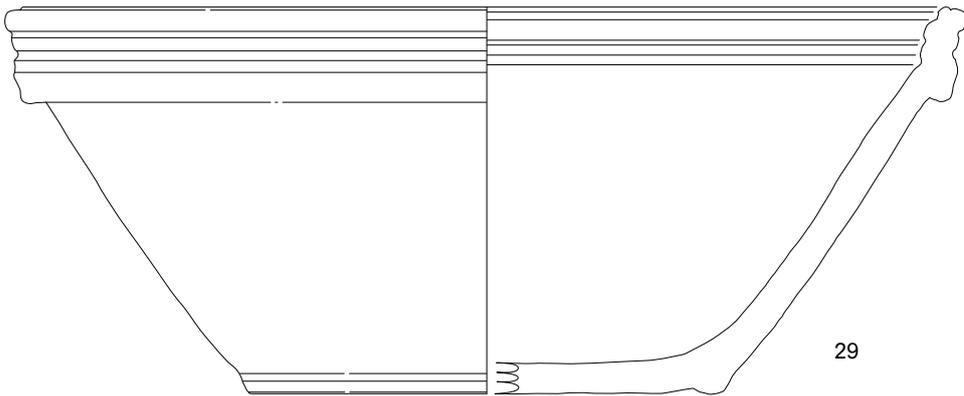
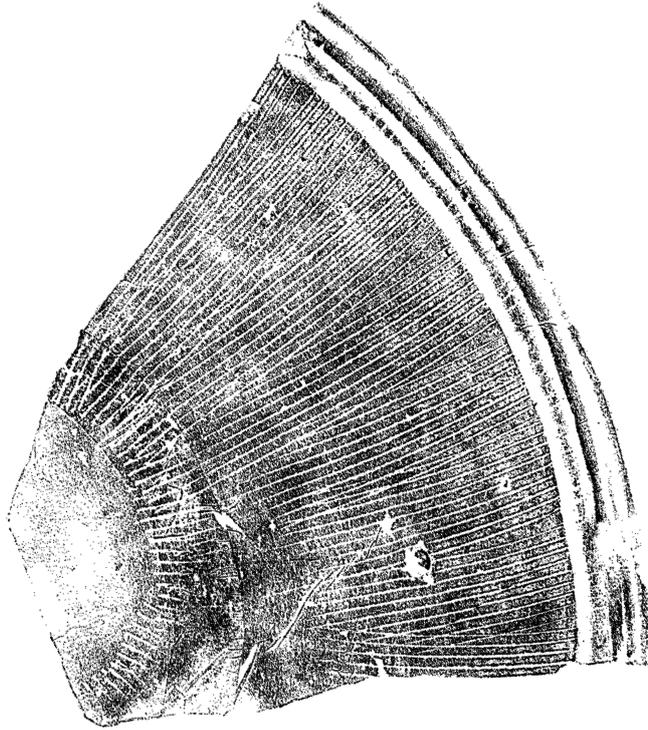
27



28



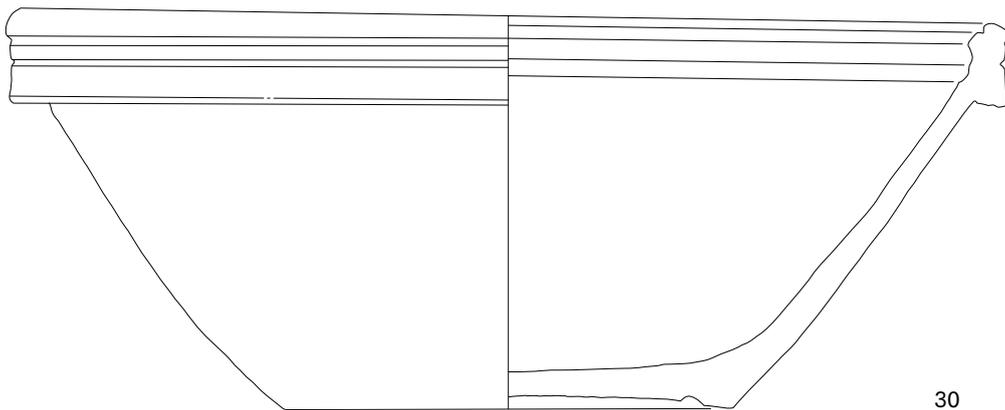
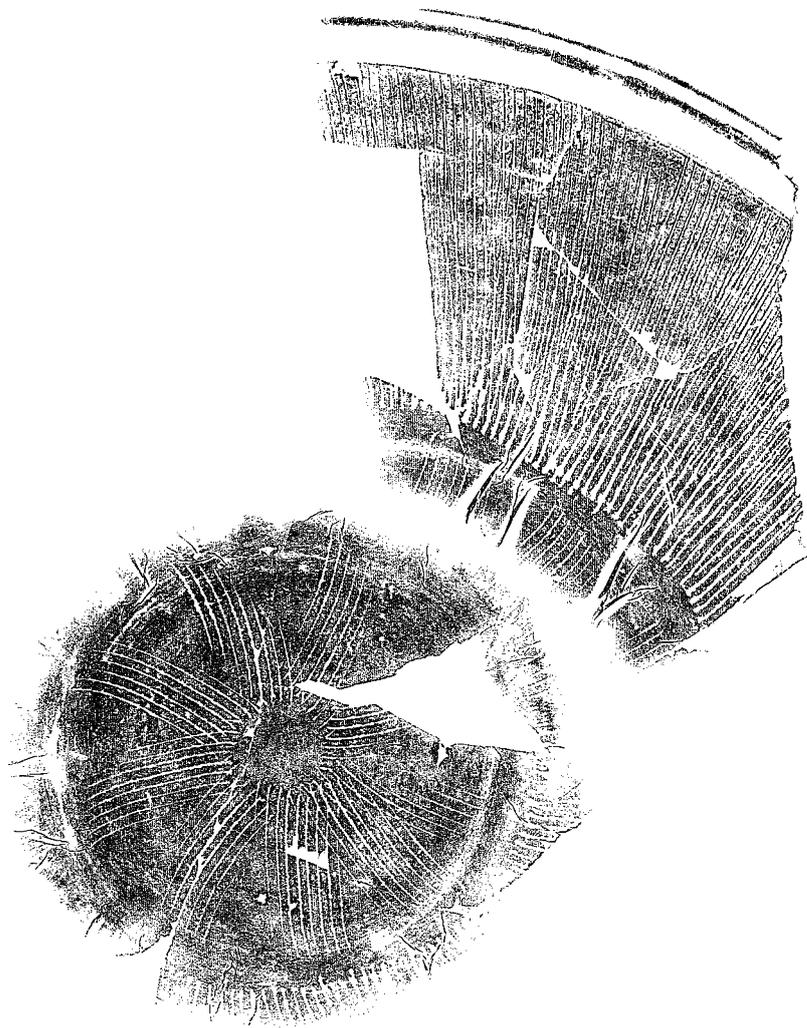
SK65



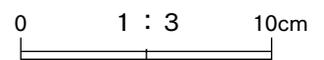
29

0 1 : 3 10cm

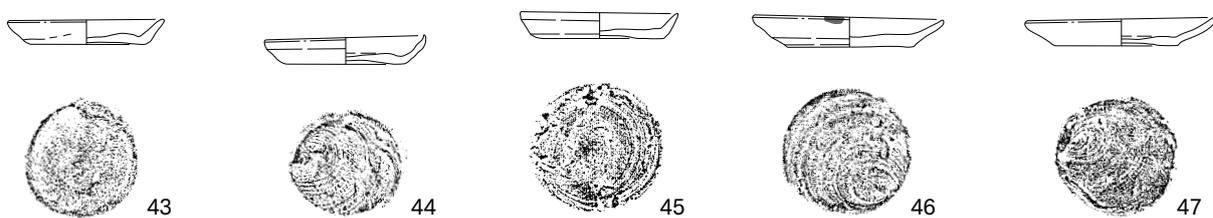
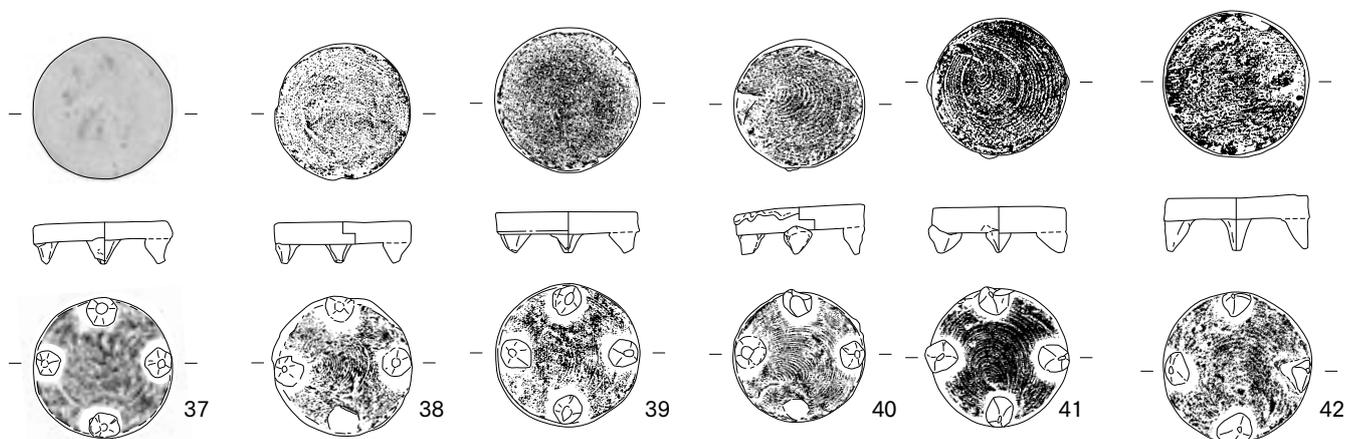
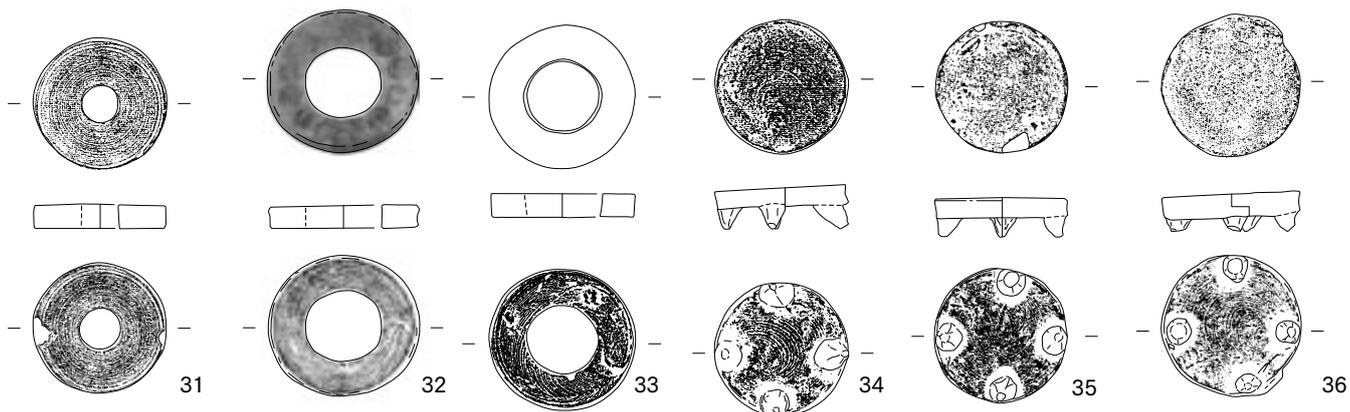
SK65



30

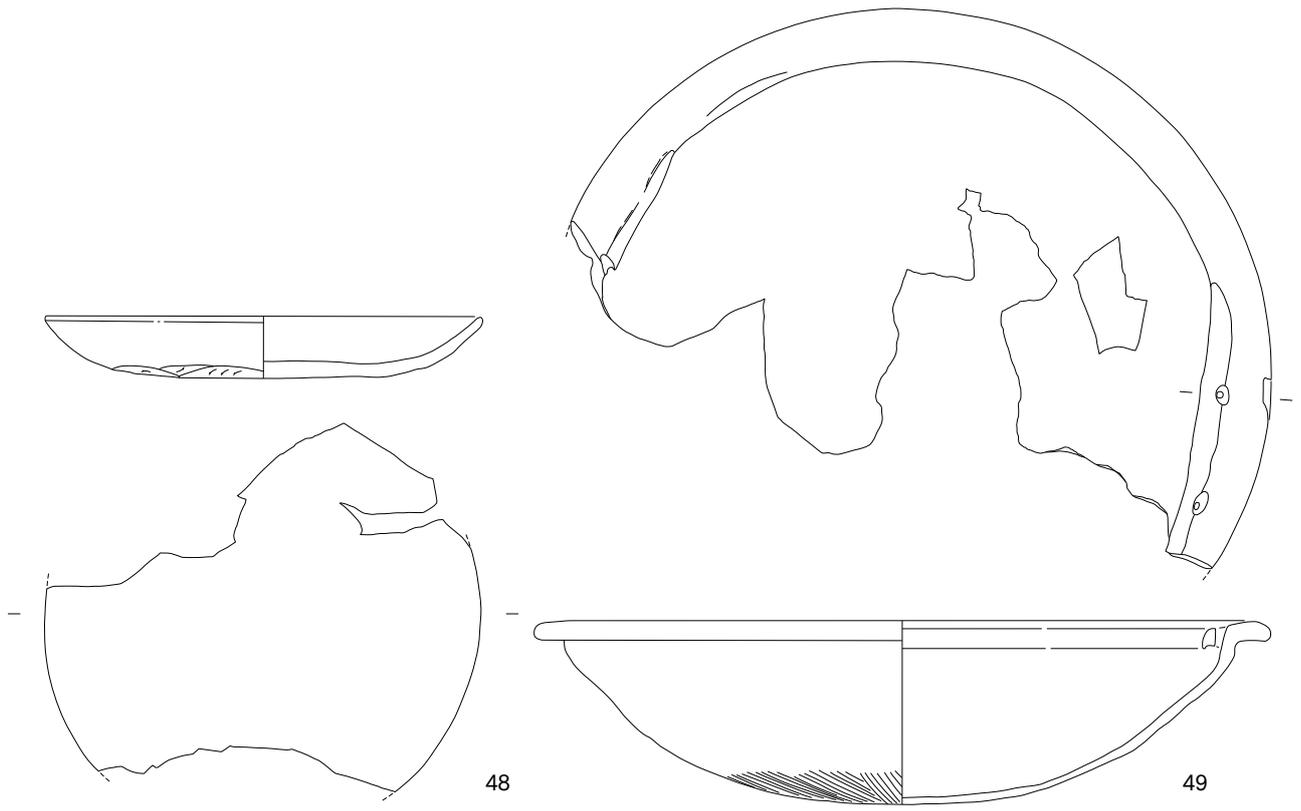


SK65



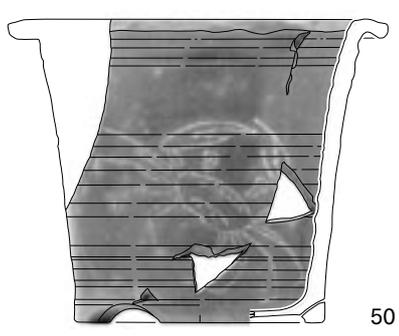
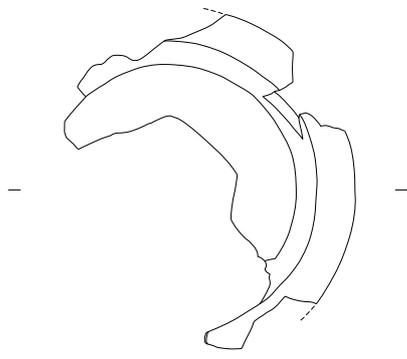
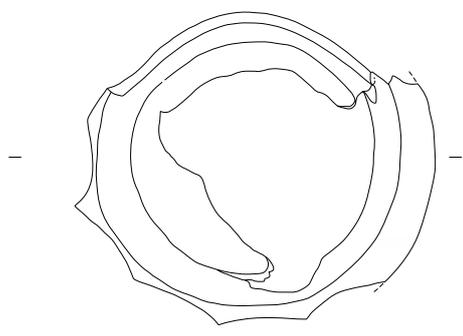
0 1 : 3 10cm

SK65

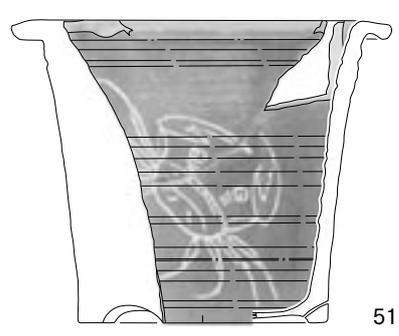


48

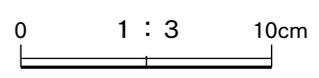
49



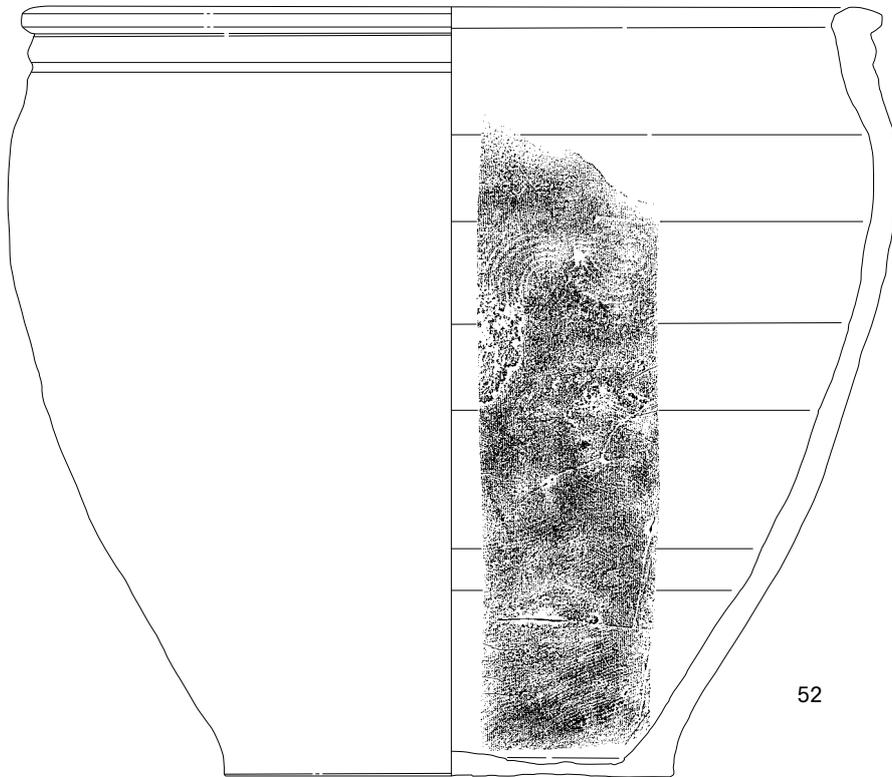
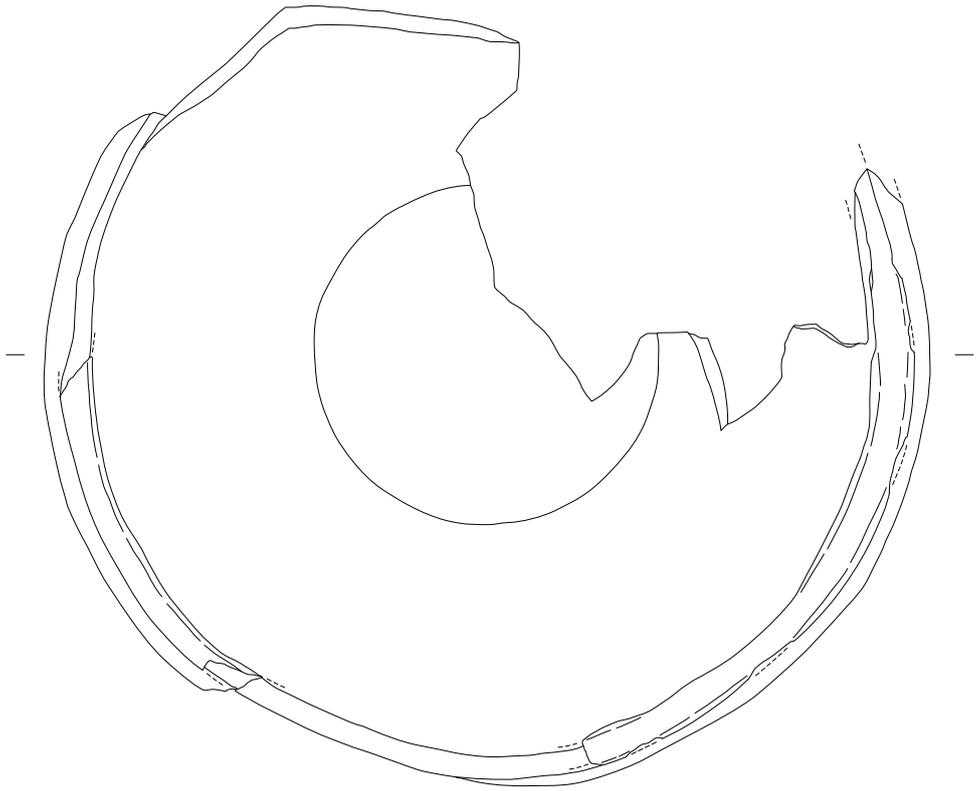
50



51



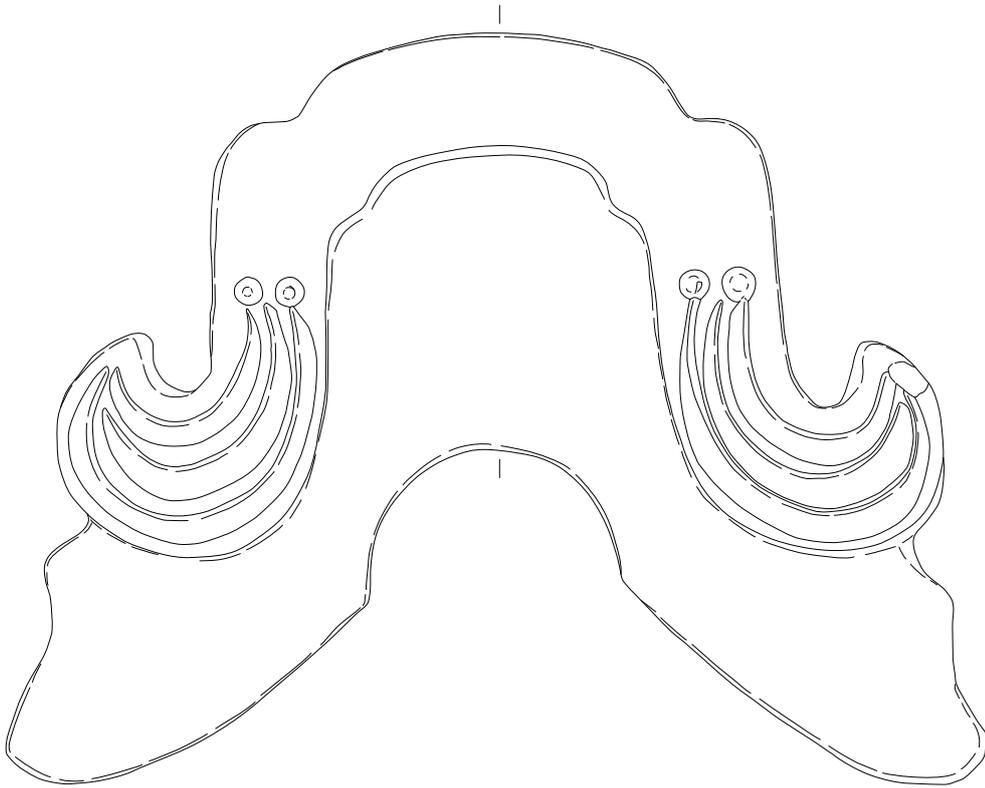
SK65



52

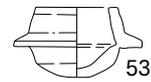
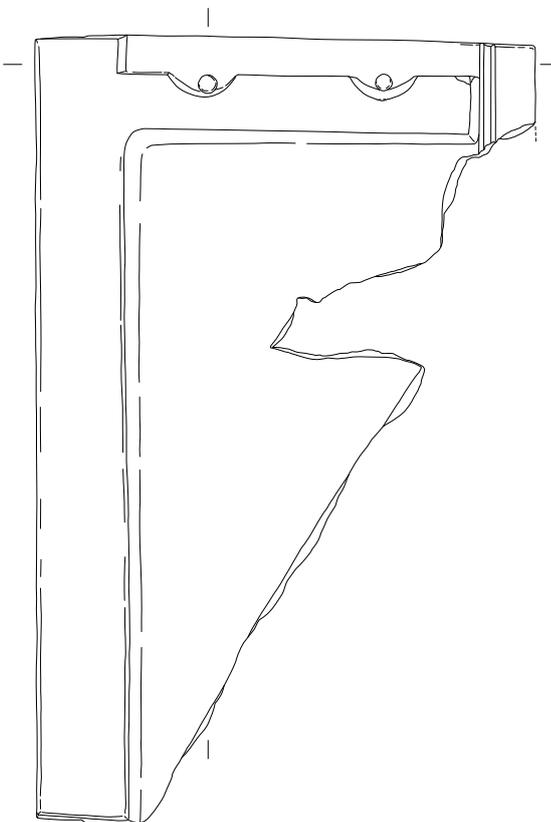
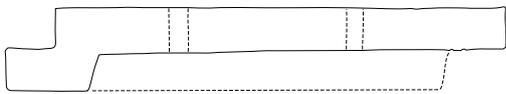
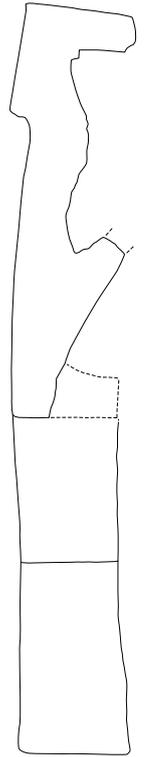
0 1 : 3 10cm

SK65



56

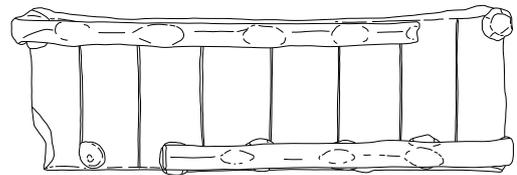
0 1 : 4 20cm



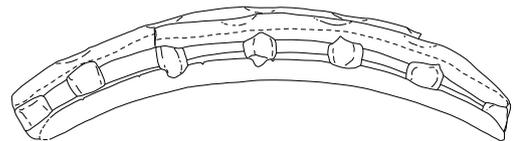
53



54



55

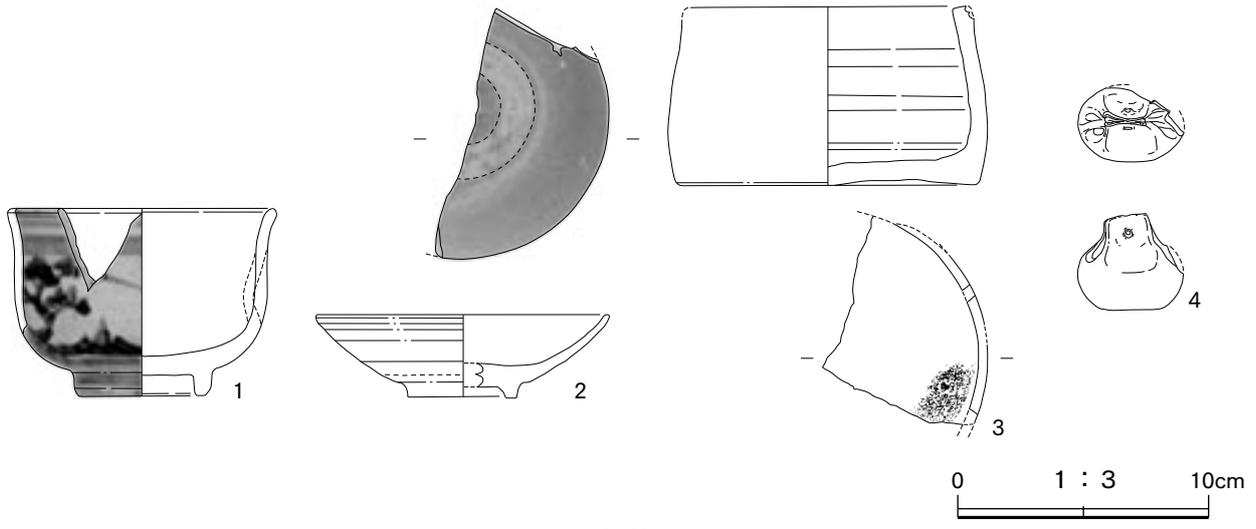


0 1 : 3 10cm

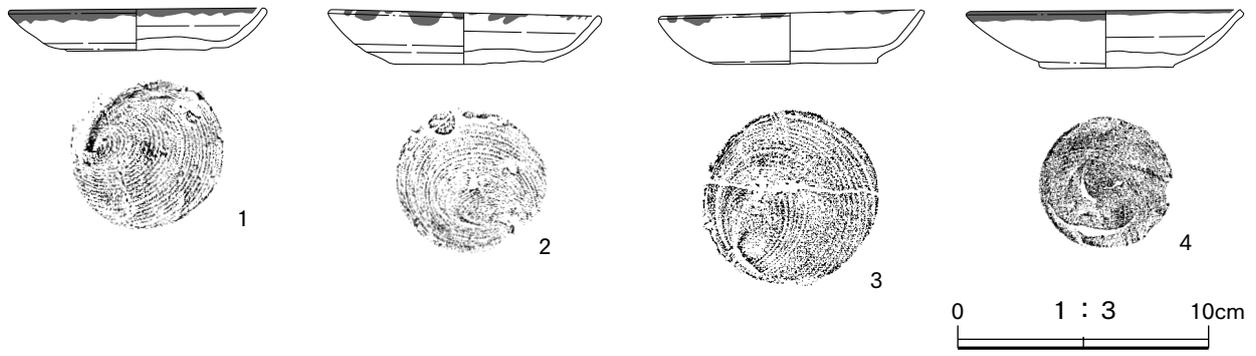
57

0 1 : 4 20cm

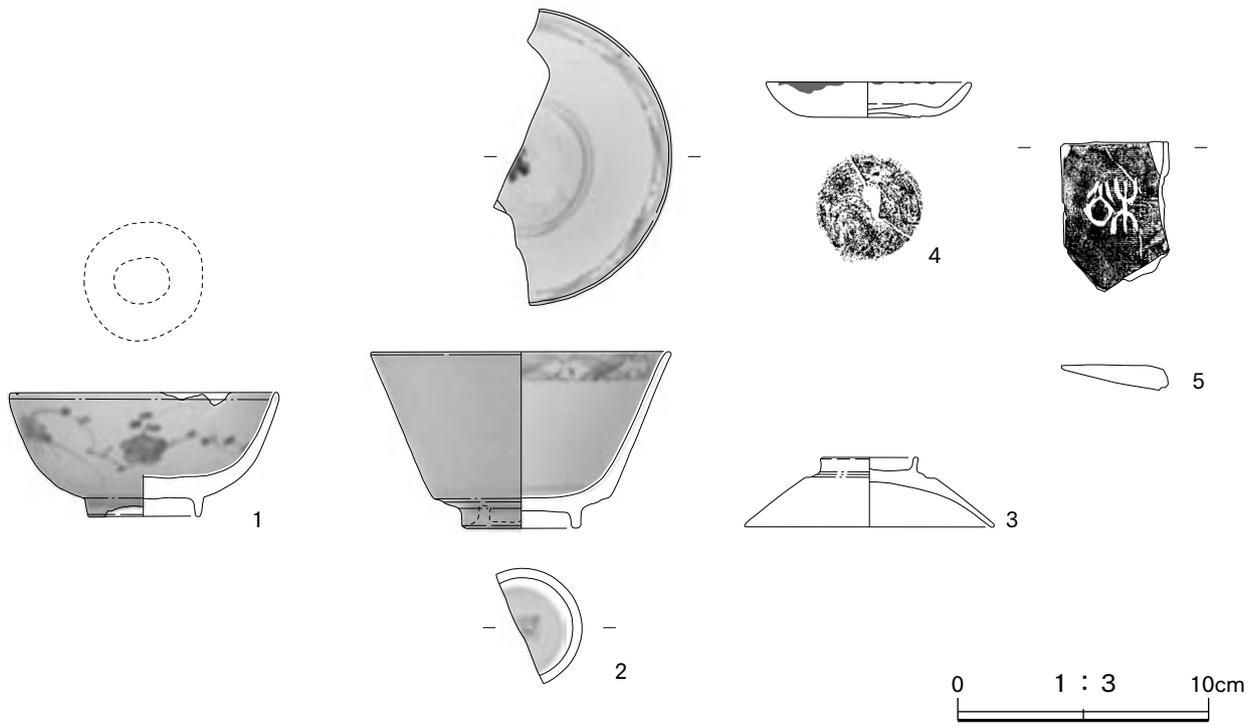
SK65



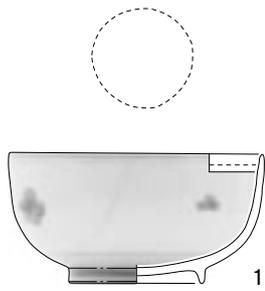
SK68



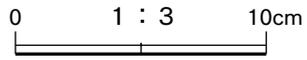
SK70



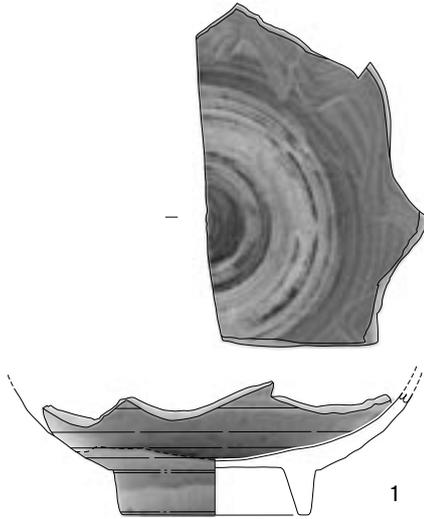
SK80



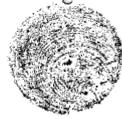
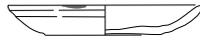
1



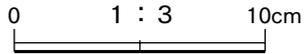
SK81



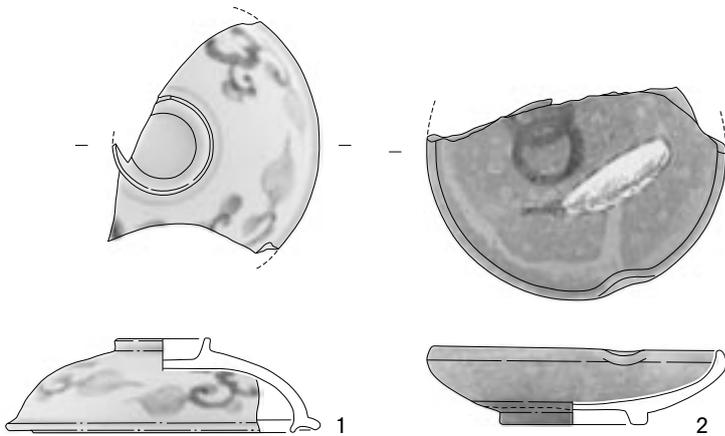
1



2

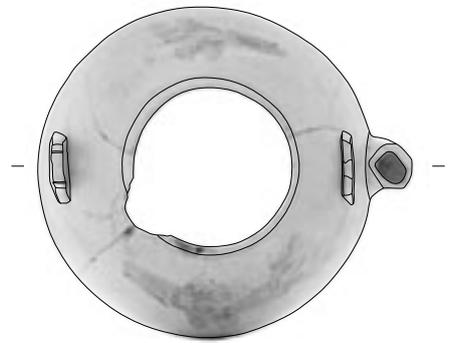


SK82

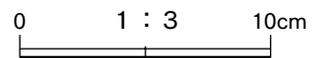


1

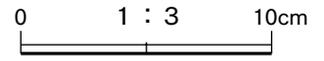
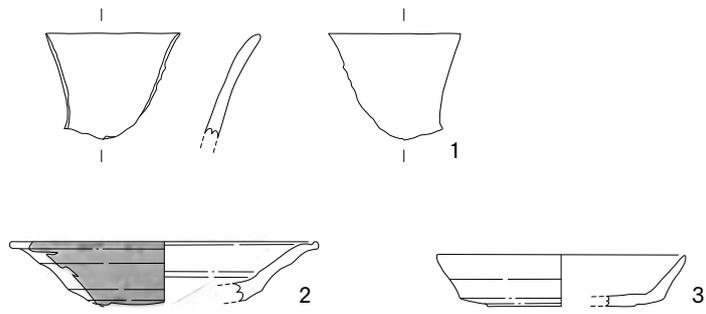
2



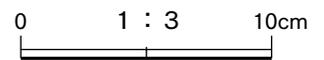
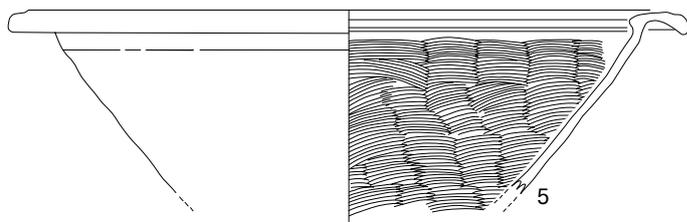
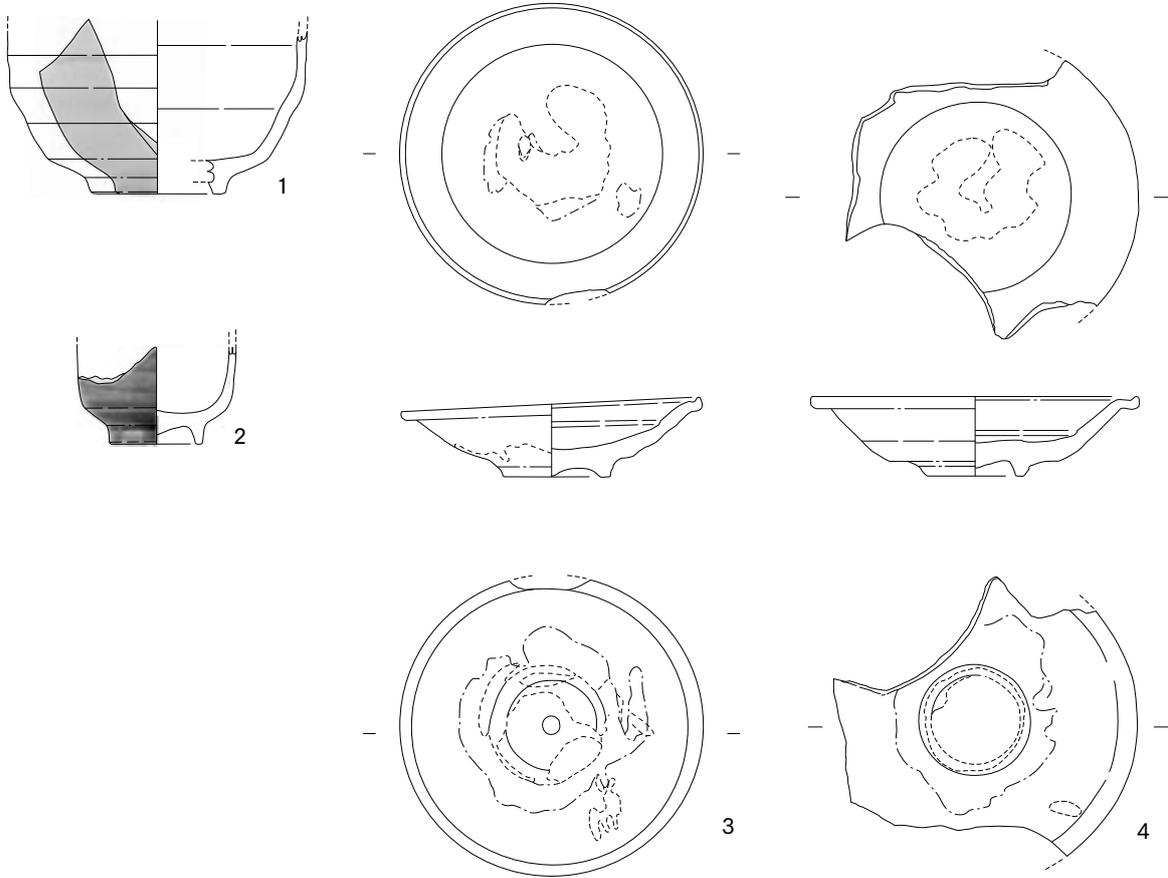
3



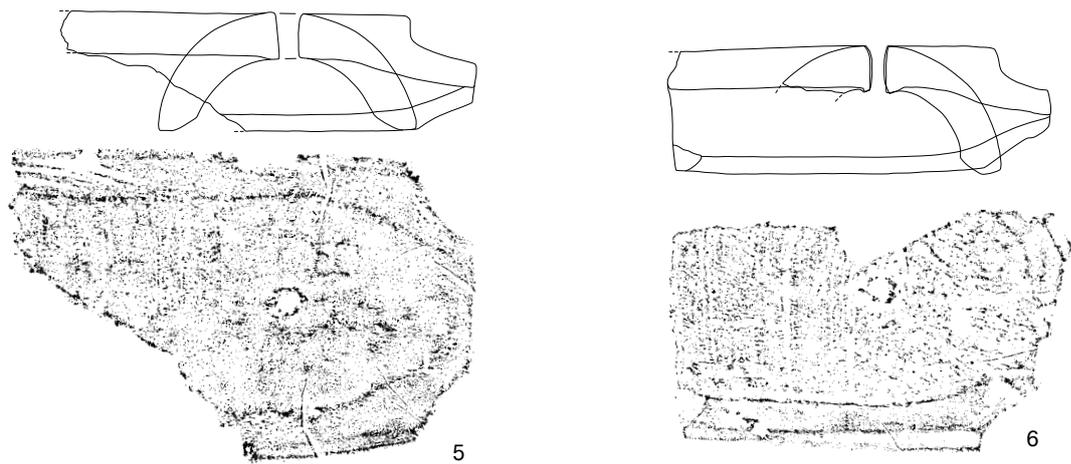
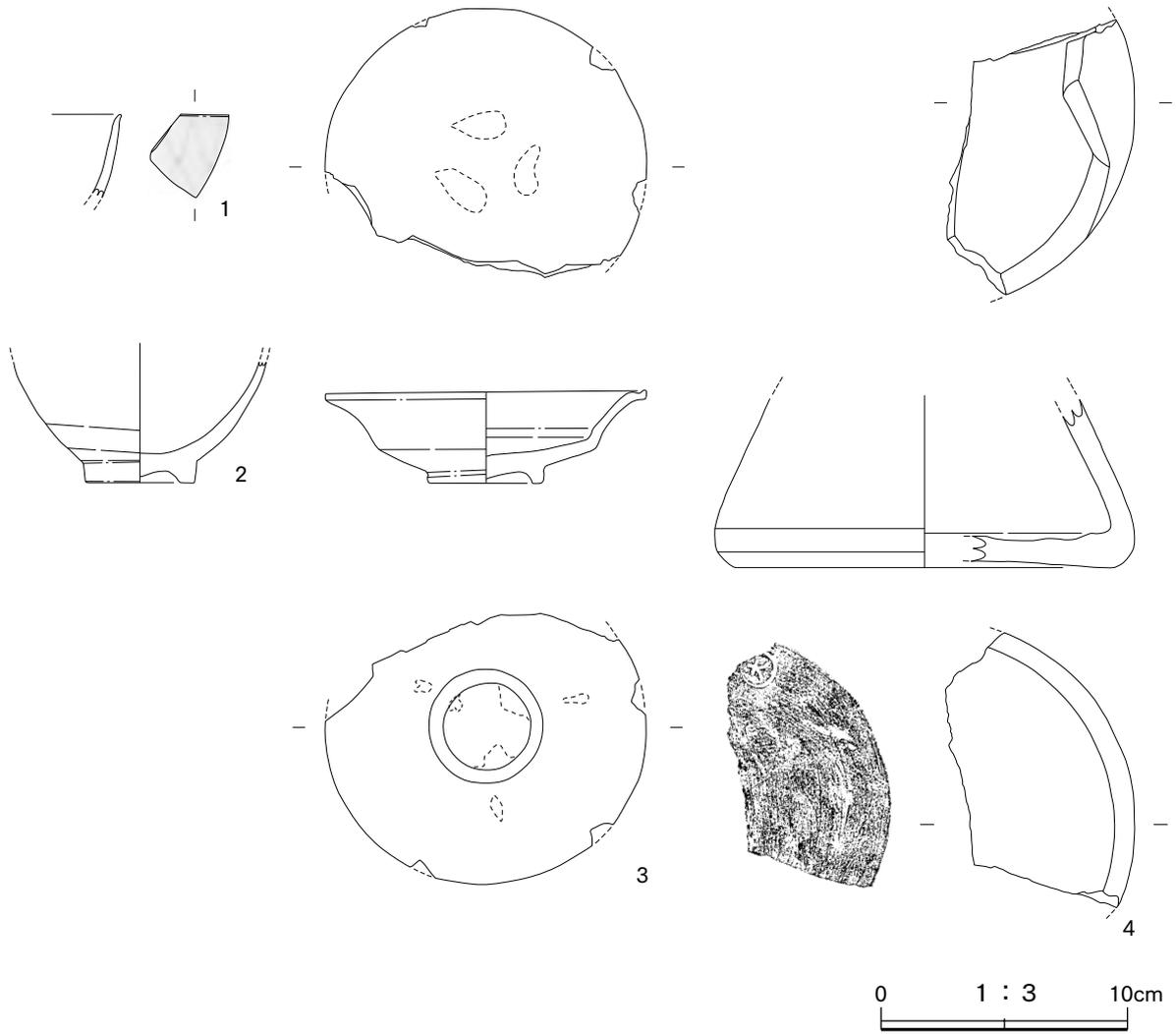
SK89



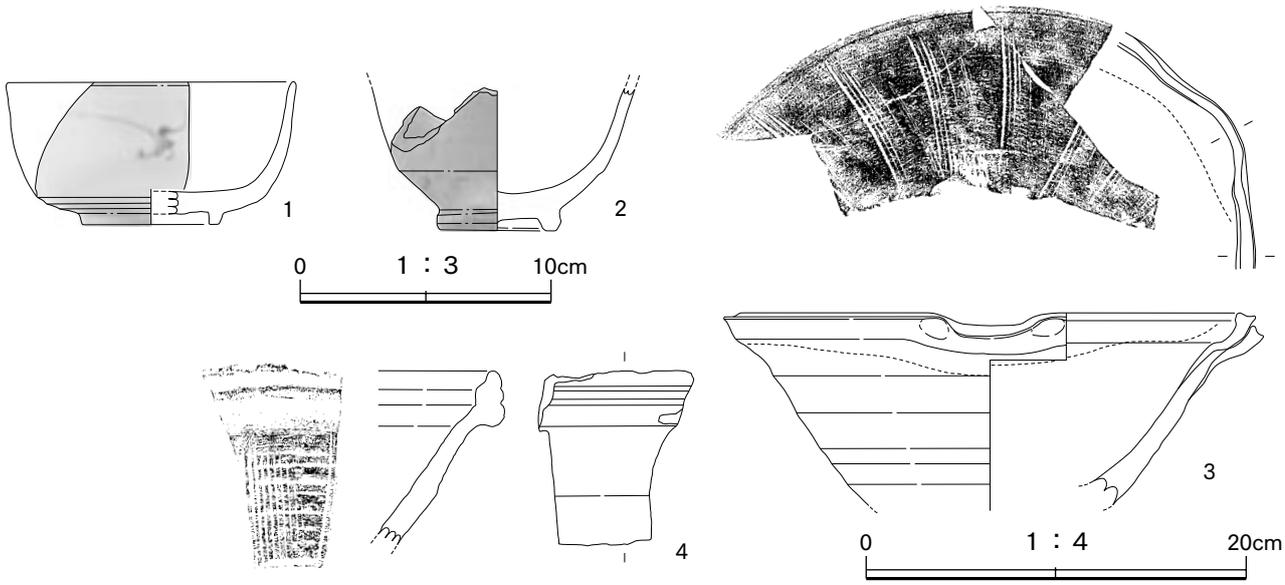
SK114



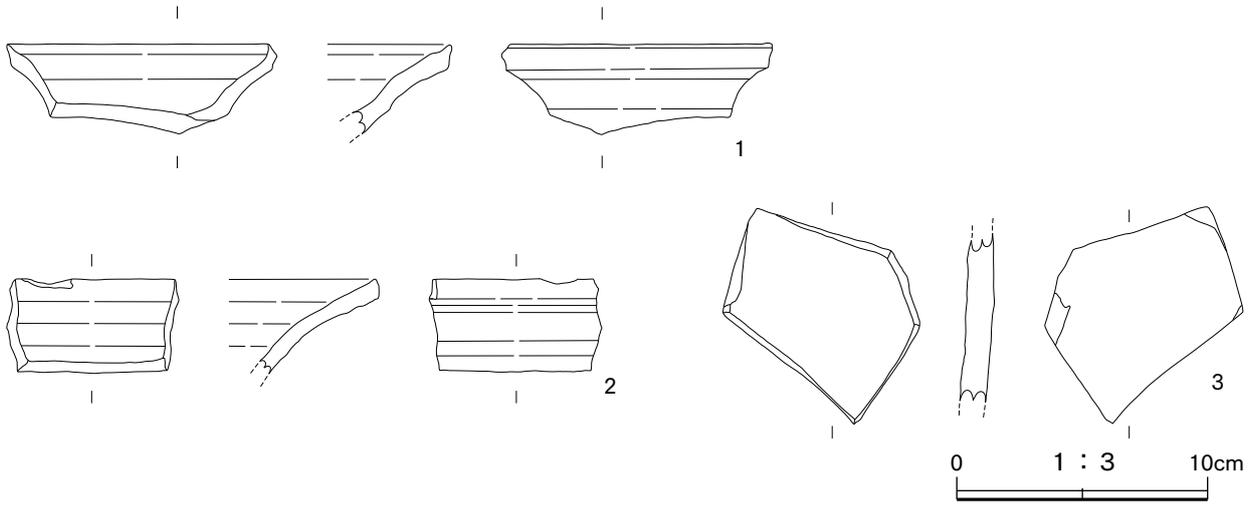
SK115



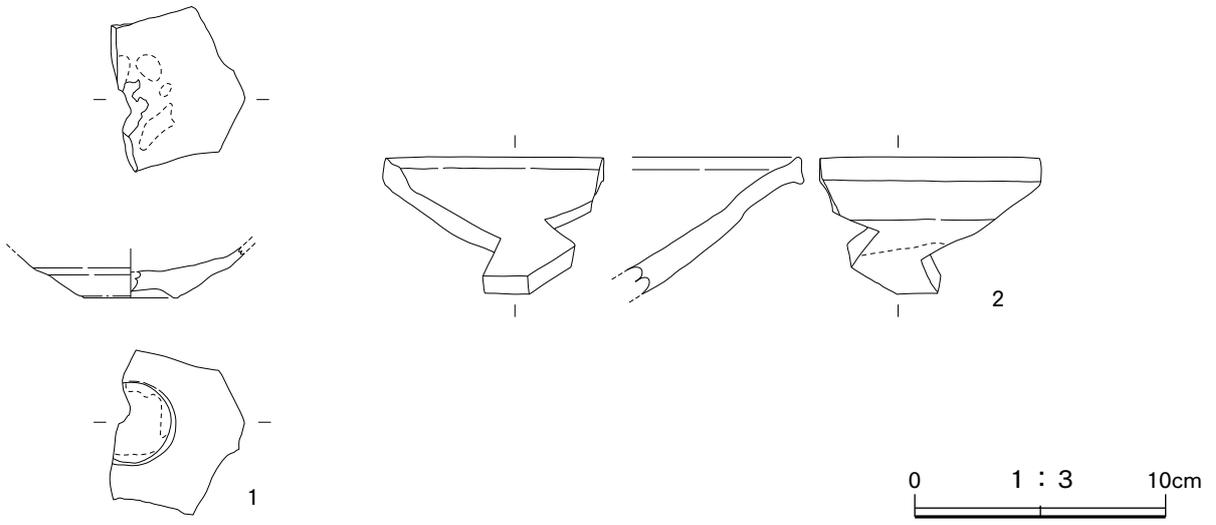
SK117



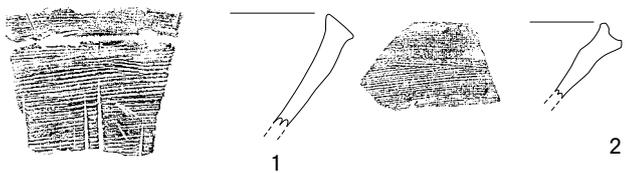
SK118



SE1



SK119

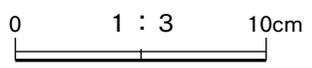


1

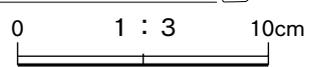
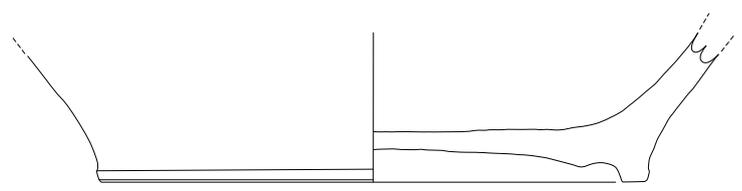
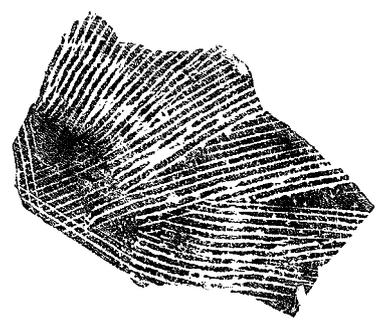
2



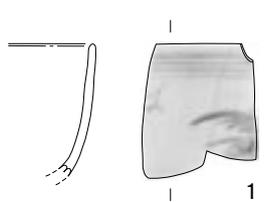
3



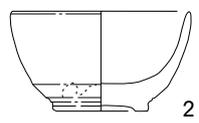
SK120



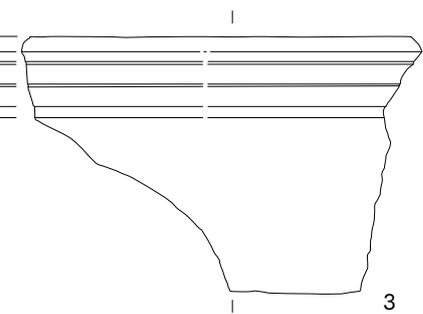
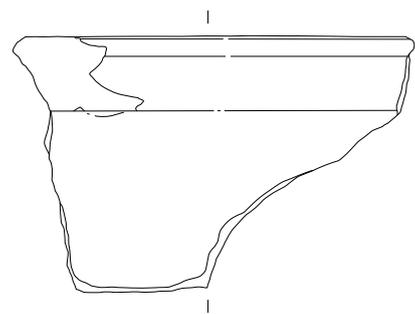
P129



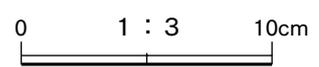
1



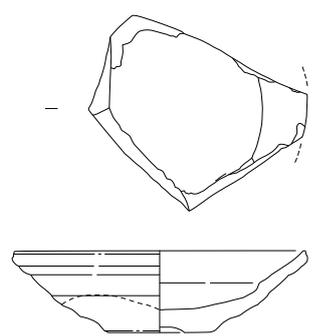
2



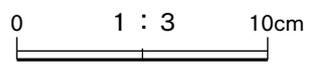
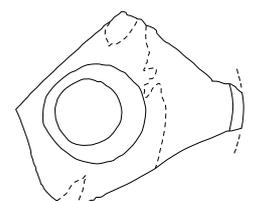
3



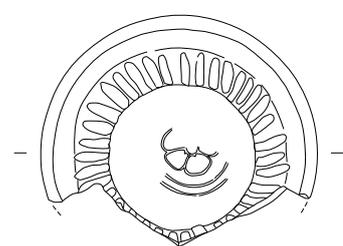
SV8



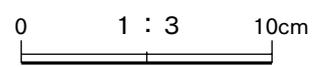
1



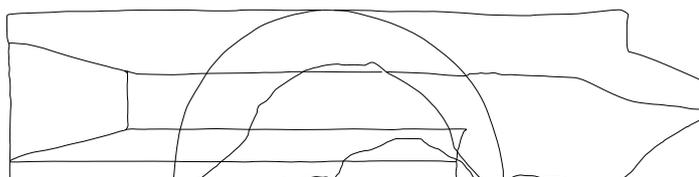
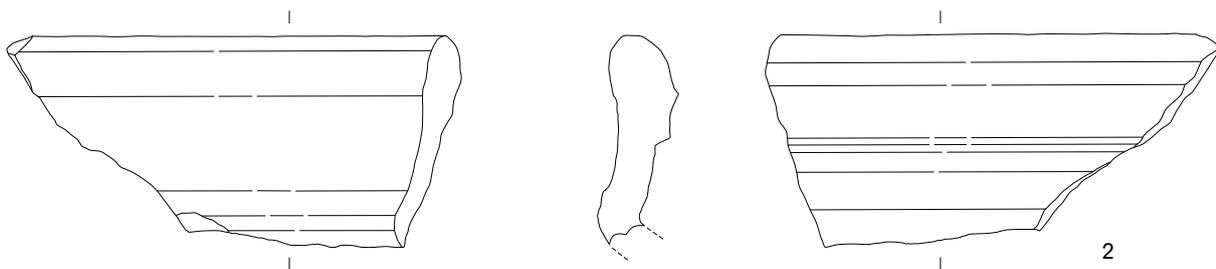
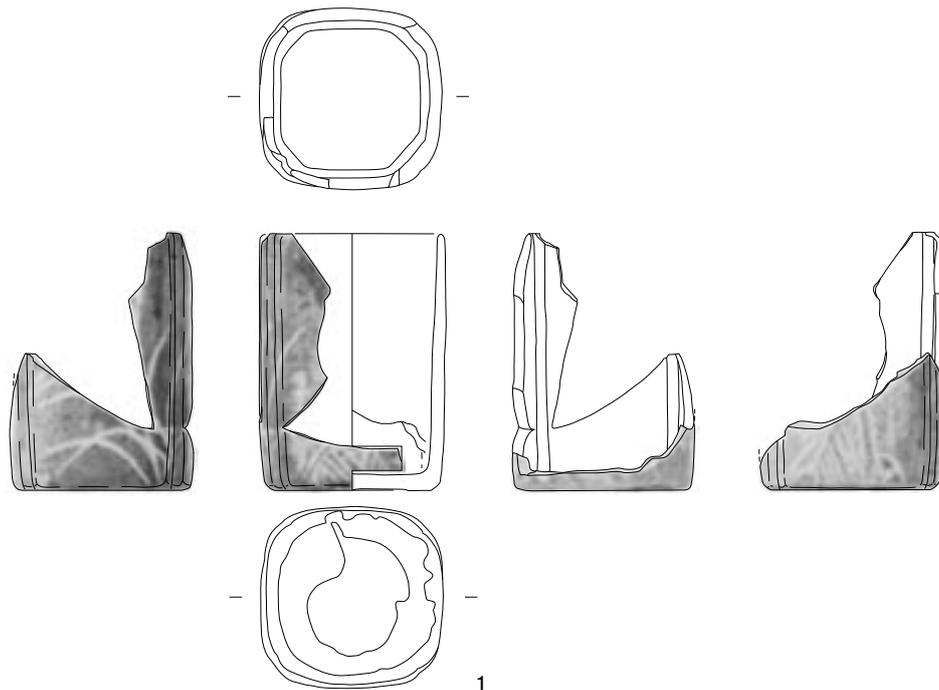
SV9



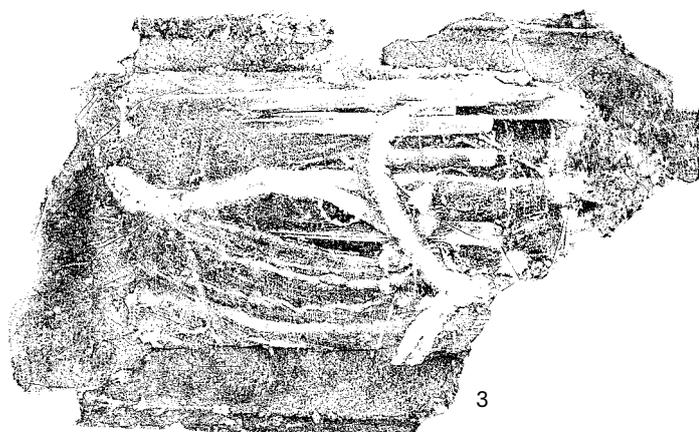
1



SV11



0 1 : 3 10cm



0 1 : 4 20cm

SV10



SK47



SK50



SK49・SK50・SK51 一括



SK51-1



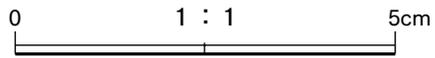
SK51-2



SK51-3



表土一括



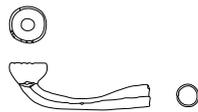
SK11



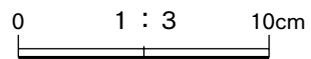
SK16



SK44



近世遺構 1 ベース層一括



銭・煙管

表-1 陶磁器観察表

単位は cm、() は復元値、- は不明、/ は該当部位なし

遺構	遺物番号	陶磁別	器種	口径	器高	底径	胴部最大径	文様	特徴	推定産地
SV2	1	磁器	端反碗	10.4	5.8	4.0	/	梅花笹文、多重圏線		砥部系
	2	磁器	端反碗	(10.2)	5.6	3.7	/	芒笹文、多重圏線		砥部系
	3	磁器	端反碗	(10.6)	6.2	(3.8)	/	松笹文、多重圏線		砥部系
	4	磁器	端反碗	(10.0)	6.3	3.8	/	唐花文?、多重圏線		砥部系
	5	磁器	端反碗	(10.2)	6.1	3.3	/	格子状文、多重圏線		砥部系
	6	磁器	皿	(13.6)	4.8	7.4	/	源氏香文	蛇ノ目凹型高台、玉縁	砥部系
	7	磁器	皿	(13.3)	4.4	7.0	/	振花文	蛇ノ目凹型高台、玉縁	砥部系
	8	磁器	皿	14.2	4.6	7.4	/	帆掛舟文	蛇ノ目凹型高台、玉縁	砥部系
SK34	1	磁器	碗	10.8	6.0	4.5	/	千鳥文		肥前系
	2	磁器	碗	11.8	8.2	5.4	/	花唐草文(陶胎染付け)		肥前系
	3	磁器	仏飯器	8.4	5.8	4.3	/		白磁	肥前系
	4	陶器	碗	(12.0)	7.2	5.0	/	刷毛目		肥前系(唐津)
	5	陶器	碗	11.5	7.0	5.0	/			肥前系(唐津)
SK36	1	磁器	広東碗	(10.8)	6.2	6.3	/	千鳥文、見込み寿字		肥前系
	2	磁器	蓋	4.4	1.7	/	5.4	海浜風景		肥前系
	3	陶器	碗	(9.0)	4.8	3.0	/		緑釉流し	関西系
	4	陶器	蓋	7.0	3.3	/	10.2			-
SK37	1	磁器	碗	(11.6)	7.6	5.1	/	花唐草文(陶胎染付け)		肥前系
	2	陶器	平碗	(12.0)	4.4	3.7	/			関西系
SK38	1	磁器	筒形碗	(9.3)	7.5	(6.0)	/	福字文		肥前系
	2	陶器	皿	(13.0)	3.5	4.8	/		砂目積み、溝縁	肥前系(唐津)
SK39	1	磁器	小杯	7.2	3.8	3.0	/			肥前系
	2	磁器	合子	(5.1)	2.8	(2.8)	/	赤絵栗葉文		肥前系
	3	陶器	半球碗	9.3	5.9	3.0	/	色絵菊花文		関西系
	4	軟質陶器	灯火具	3.6	1.6	2.6	/		内面施釉	-
SK47	1	磁器	碗	9.7	5.5	4.3	/	若松文		肥前系
	2	陶器	碗	(9.5)	6.7	(4.5)	/	刷毛目		肥前系(唐津)
	3	陶器	香炉	(10.0)	5.3	(5.1)	/			肥前系(唐津)
SK50	1	磁器	半球碗	(9.8)	4.7	(5.0)	/	花牡丹文		肥前系
	2	磁器	蓋物	(12.0)	7.2	5.8	/	飛鶴文	焼継ぎ、焼継ぎ印	肥前系
	3	陶器	腰折碗	(10.4)	5.6	4.0	(10.6)		高台内不明墨書	瀬戸・美濃系
SK51	1	磁器	小杯	6.3	3.0	2.4	/	笹文		肥前系
	2	磁器	小碗	8.2	3.9	3.6	/	菊花散し文		肥前系
	3	磁器	小碗	(8.1)	4.8	3.1	/	草花文、高台内「元」銘		肥前系
	4	磁器	碗	9.2	5.2	4.2	/	牡丹貼文付	青磁、型打牡丹花形	-
	5	磁器	碗	9.0	5.2	4.0	/	牡丹貼文付	青磁、型打牡丹花形	-
	6	磁器	碗	(11.0)	5.2	(4.2)	/	格子文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前系
	7	磁器	中碗	11.2	6.2	4.3	/	折れ松葉花散し文	高台内崩し「大明年製」	肥前系
	8	磁器	中碗	10.0	5.5	3.8	/	鶴丸若松文、コンニャク印判		肥前系
	9	磁器	中碗	10.2	5.7	4.2	/		白磁	肥前系
	10	磁器	中碗	11.3	5.1	4.3	/	丸文見込み五弁花コンニャク印判		肥前系
	11	磁器	中碗	10.1	7.5	4.6	/	唐草文(陶胎染付け)		肥前系
	12	磁器	香炉	(11.0)	7.9	6.6	/		青磁	肥前系
	13	磁器	小皿	(8.8)	1.8	3.8	/	蕪花文	型打菊花皿	肥前系
	14	磁器	小皿	10.4	2.8	5.6	/	花唐草文、見込み五弁花、高台内二重角渦福		肥前系
	15	磁器	皿	(13.5)	4.3	7.3	/		青磁、口紅	肥前系
	16	磁器	大皿	22.2	6.1	12.6	/	芙蓉花卉文、見込み三方割花文、高台内二重角渦福		肥前系
	17	磁器	仏飯器	7.5	5.7	4.1	/	雨降り文		肥前系
	18	磁器	蓋	(9.0)	2.5	/	/	流水文		-
	19	磁器	合子	2.1	0.9	2.4	2.9		白磁	肥前系
	20	陶器	碗	(10.0)	6.2	(5.9)	/	文字		関西系
	21	陶器	半球碗	9.1	5.6	3.3	/	鉄・呉須絵梅文		関西系
	22	陶器	半球碗	(5.4)	5.3	3.0	/	鉄絵葉束文		関西系
	23	陶器	腰張形碗(拳骨碗)	(11.2)	6.3	4.5	/	雪文?	高台に不明刻印、掛け分け	瀬戸・美濃系
	24	陶器	腰張形碗(拳骨碗)	12.2	6.7	4.7	/	雪文?	鉄釉掛け分け	瀬戸・美濃系
	25	陶器	腰折碗	11.0	8.0	4.7	/			不明
	26	陶器	腰張形碗(腰折碗)	10.1	6.4	4.3	/			関西系
	27	陶器	小皿	10.4	3.8	4.0	/	印花文	折縁	瀬戸・美濃系
	28	陶器	皿	11.7	3.7	4.6	/		見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前系(唐津)
	29	陶器	皿	13.4	3.5	4.0	/		砂目積み	肥前系(唐津)

	30	陶器	土瓶蓋	9.9	3.4	/	12.7	花文	イッチン掛け	関西系
	31	陶器	甕	34.4	36.6	(20.8)	32.6			—
	32	焼締め	仏花瓶	3.0	6.5	4.2	5.4			備前系
	33	焼締め	蓋	13.3	1.2	/	/		火襷	備前系
	34	焼締め	搦鉢	(29.0)	11.7	(13.2)	/			堺系
SK54	1	磁器	小丸碗	8.4	6.9	3.3	/	見込み花文、花散し文		肥前系
	2	磁器	小広東碗	9.4	5.2	3.4	/	見込み岩水文、山水文		肥前系
	3	磁器	朝顔型碗	(10.8)	6.6	4.0	/	草花文		肥前系
	4	磁器	平形碗	14.4	5.0	5.0	/	草花文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前系
	5	磁器	仏飯器	4.4	6.4	3.5	5.4	丸に芒文		肥前系
	6	陶器	植木鉢	(11.8)	14.2	10.2	/		中心部穿孔	瀬戸・美濃系
	7	陶器	水甕	(22.6)	16.7	12.4	/		鉄釉緑釉流し、高台内不明墨書	瀬戸・美濃系
	8	焼締め	灯明受皿	9.4	1.4	6.0	/			備前系
	9	焼締め	搦鉢	(39.0)	15.9	(18.0)	/			明石系
SK63	1	磁器	蓋物	6.8	4.1	4.0	/	蛸唐草文		肥前系
	2	陶器	碗	(10.0)	(3.3)	5.4	/	刷毛目		肥前系(唐津)
SK64	1	磁器	広東碗	—	—	6.7	/	不明文、見込み花文		肥前系
	2	陶器	植木鉢	—	—	15.0	/		高台内不明墨書、中心部穿孔	瀬戸・美濃系
SK65	1	磁器	小碗	8.6	4.2	3.3	/	山水文		肥前系
	2	磁器	碗	12.0	6.3	5.2	/	丸文散し	高台内不明字銘	肥前系
	3	磁器	広東碗	10.0	6.2	5.4	/	草花に蝶、見込み不明		肥前系
	4	磁器	小皿	8.0	1.8	5.0	/	山水文	口縁口紅型打ち	肥前系
	5	磁器	皿	11.7	3.6	4.7	/	格子文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前系
	6	磁器	皿	(14.8)	5.3	8.1	/		白磁、菊花形	肥前系
	7	磁器	仏飯器	5.2	4.8	3.1	/	注連縄、酸漿文		肥前系
	8	磁器	碗蓋	(8.1)	2.3	/	/	花文		瀬戸・美濃系
	9	陶器	端反碗	(8.6)	4.7	2.6	/		高台内墨書「山」字	関西系
	10	陶器	端反碗	8.8	5.0	2.8	/		高台内墨書「山」字	関西系
	11	陶器	端反碗	8.4	4.9	3.1	/			関西系
	12	陶器	端反碗	9.2	5.4	3.4	/			関西系
	13	陶器	半球碗	(9.0)	5.3	3.3	/			関西系
	14	陶器	半球碗	9.2	5.6	3.6	/			瀬戸・美濃系
	15	陶器	丸碗	8.6	5.3	3.4	/	呉須絵梅文		瀬戸・美濃系
	16	陶器	皿	20.0	6.8	7.0	/	櫛刷毛目		肥前系
	17	陶器	高田徳利	3.5	21.1	7.4	10.9		釘書き「〇に石」	瀬戸・美濃系
	18	陶器	土鍋	13.0	5.8	5.9	/		鉄釉	—
	19	陶器	灯明器台 (立鼓形)	9.2	5.0	5.0	/			—
	20	陶器	水甕	22.8	16.6	13.8	/		緑釉流し、中心部穿孔	瀬戸・美濃系
	21	陶器	植木鉢	(12.0)	11.4	8.4	/		中心部穿孔	瀬戸・美濃系
	22	陶器	灯明受皿	10.0	1.3	/	/			—
	23	陶器	灯明受皿	8.2	1.5	/	/			—
	24	陶器	御神酒 徳利ミニ チュア	1.0	4.4	2.4	3.0		鉄釉流し	—
	25	陶器	御神酒 徳利ミニ チュア	1.1	—	—	3.0		鉄釉流し	—
	26	焼締め	灯明受皿	8.4	1.2	3.4	/			備前系
	27	焼締め	灰落とし	(12.8)	6.8	(13.4)	/		「◇に一」印	備前系
	28	焼締め	搦鉢	(26.0)	9.5	(13.0)	/			明石系
	29	焼締め	搦鉢	(38.0)	15.5	(19.0)	/			堺系
	30	焼締め	搦鉢	38.7	16.1	18.0	/			明石系
	31	磁器質	不明	1.7	1.0	/	5.3		環状	—
	32	磁器質	環状ハマ	3.0	0.9	/	6.0		黒斑の目跡、上・下面部に左回転糸切痕	—
	33	磁器質	環状ハマ	2.9	1.0	/	5.8		上面メズナ(アルミナ)塗布、上・下面部に左回転糸切痕	—
	34	磁器質	4脚ハマ	/	1.8	/	5.2		上面と脚先端メズナ(アルミナ)塗布、上・下面部に左回転糸切痕	—
	35	磁器質	4脚ハマ	/	1.6	/	5.3		上面と脚先端メズナ(アルミナ)塗布、上・下面部に左回転糸切痕	—
	36	磁器質	4脚ハマ	/	1.6	/	5.5		上面と脚先端メズナ(アルミナ)塗布、上・下面部に左回転糸切痕	—

	37	磁器質	4脚ハマ	/	1.1	/	5.5		上面と脚先端メズナ(アルミナ)塗布、墨書「山〜」、上・下面部に左回転系切痕	—
	38	磁器質	4脚ハマ	/	1.7	/	5.9		上面と脚先端メズナ(アルミナ)塗布、上・下面部に左回転系切痕	—
	39	磁器質	4脚ハマ	/	1.6	/	5.7		上面と脚先端メズナ(アルミナ)塗布、上・下面部に左回転系切痕	—
	40	磁器質	4脚ハマ	/	2.0	/	5.2		上面と脚先端メズナ(アルミナ)塗布、上・下面部に左回転系切痕	—
	41	磁器質	4脚ハマ	/	1.9	/	5.5		上面と脚先端メズナ(アルミナ)塗布、上・下面部に左回転系切痕	—
	42	焼締め	4脚ハマ	/	2.2	/	5.8		4脚(磁器質)貼付け、上面と脚先端メズナ(アルミナ)塗布、上・下面部に左回転系切痕	—
SK68	1	磁器	碗	10.5	7.6	5.0	/	山水文(陶胎染付け)		肥前系
	2	陶器	皿	(11.6)	3.3	(4.4)	/		見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前系(唐津)
	3	焼締め	灰落とし	(11.0)	7.2	(11.8)	(12.5)		底部「分銅紋」印	備前系
SK80	1	磁器	丸形碗	10.6	5.0	4.4	/	梅花文		肥前系
	2	磁器	朝顔形碗	(11.8)	7.1	4.7	/	四方襷見込み五花弁コンニャク印判	青磁染付	肥前系
	3	磁器	朝顔形碗蓋	10.0	2.8	3.8	/		白磁	肥前系
SK81	1	磁器	蓋物	10.0	5.3	5.2	/	桜花散し文		肥前系
SK82	1	陶器	鉢	—	—	(7.6)	/	櫛刷毛目文	見込み釉剥ぎ	肥前系(唐津)
SK89	1	磁器	蓋物蓋	(12.2)	4.8	/	/	唐花文		肥前系
	2	陶器	皿	11.4	3.2	5.8	11.9	鉄絵羽、二輪違い文		関西系
	3	陶器	土瓶	6.4	10.0	4.6	13.3	鉄・呉須絵柴束文		関西系
SK114	1	陶器	碗	—	—	—	/			肥前系or瀬戸・美濃系
	2	陶器	皿	(12.2)	—	—	/		溝縁	肥前系(唐津)
SK115	1	磁器	碗	—	—	—	/	文様不明	高台内砂目	肥前系
	2	陶器	小杯	—	—	3.6	/		総織部、銅緑釉	瀬戸・美濃系
	3	陶器	皿	12.0	3.2	4.2	/		砂目積み、溝縁	肥前系(唐津)
	4	陶器	皿	(13.0)	3.2	3.8	/		砂目積み、溝縁	肥前系(唐津)
SK117	1	磁器	碗	—	—	—	/	一重網目文		肥前系
	2	陶器	碗	—	—	4.4	/		高台内施釉	肥前系(唐津)
	3	陶器	皿	13.0	3.8	4.5	/		砂目積み、溝縁	肥前系(唐津)
	4	焼締め	端反建水	—	—	(15.4)	/		底部「○に大」印	備前系
SK118	1	磁器	碗	(11.4)	5.8	(5.4)	/	文様不明	高台内に砂目、初期伊万里	肥前系
	2	陶器	碗	—	—	4.6	/			肥前系(唐津)
	3	陶器	搦鉢	(26.3)	—	—	/		口縁鉄釉	肥前系(唐津)
	4	焼締め	搦鉢	—	—	—	/			備前系
SK119	1	陶器	皿	—	—	3.7	/		砂目積み	肥前系(唐津)
	2	陶器	大皿	—	—	—	/			肥前系(唐津)
SV8	1	磁器	碗	—	—	—	/	文様不明		肥前系
	2	陶器	小杯	(7.0)	—	—	/		藁灰釉流し	肥前系(唐津)
SV9	1	陶器	灰釉皿	(11.6)	3.3	4.0	/		胎土目積み	肥前系(唐津)
SV10	1	陶器		(7.1)	10.4	6.9	/	草花文	赤志野	瀬戸・美濃系(志野)
	2	焼締め	甕	(38.0)	—	—	—			備前系
SV11	1	陶器	皿	10.4	2.0	5.9	/	印花文	折縁	瀬戸・美濃系
SE1	1	陶器	大皿	(37.0)	—	—	/			肥前系(唐津)
	2	陶器	大皿	(30.0)	—	—	/	文様不明		肥前系(唐津)
	3	陶器	甕・壺類	—	—	—	—			信楽系
P129	1	焼締め	搦鉢	—	—	(23.6)	/			備前系

表-2 土師質瓦質土器観察表

単位は cm、() は復元値、- は不明、/ は該当部位なし

遺構	遺物 番号	器種	口径	器高	底径	特徴	色調	胎土	焼成
SK37	3	皿	7.0	1.2	4.9		橙色	微量の金雲母を含む。	良好
SK39	5	皿	5.5	6.0	4.5	右回転糸切り底。	橙色	1mm大内の砂粒を含む。微量の雲母あり。	良好
	6	皿	5.6	0.7	4.1	口縁部にスス付着。	橙色		良好
	7	皿	5.6	0.9	4.4		橙色	1mm大内の砂粒を含む。	良好
	8	皿	7.5	1.2	5.2	口縁部にスス付着、右回転糸切り底。	橙色	1mm大内の砂粒を含む。	良好
	9	皿	7.6	0.9	4.7	口縁部にスス付着。	橙色		良好
	10	皿	8.0	1.0	5.0	口縁部にスス付着、右回転糸切り底。	橙色		良好
	11	皿	7.8	1.1	4.5	口縁部にスス付着、右回転糸切り底。	浅黄橙色		良好
SK47	4	焼塩 壺身	-	-	4.0	全体に摩滅、底外面に指頭圧痕あり。	橙色		良好
SK50	4	焼塩 壺身	5.7	8.4	5.5	内面に布目圧痕、底面外部に指頭圧痕、胴部外面に「泉州麻玉」の刻印あり。	橙色	少量の雲母を含む。	良好
	5	焼塩 壺蓋	8.2	2.2	7.6	内面に布目圧痕あり。	橙色	2mm大内の砂粒を含む。	良好
SK51	35	皿	6.5	1.3	4.9	右回転糸切り底。	橙色		良好
	36	皿	6.6	1.0	4.8	右回転糸切り底。	橙色		良好
	37	皿	6.5	1.1	4.7	右回転糸切り底。	橙色		良好
	38	皿	6.1	1.1	4.7	右回転糸切り底。	橙色		良好
	39	皿	6.8	1.4	4.8	右回転糸切り底。	橙色	微量の金雲母を含む。	良好
	40	皿	6.8	1.1	4.7	右回転糸切り底。	橙色	微量の金雲母を含む。	良好
	41	皿	6.8	1.1	4.6	右回転糸切り底。	橙色	微量の金雲母を含む。	良好
	42	皿	6.7	1.2	4.7	右回転糸切り底。	明黄褐色	微量の金雲母を含む。	良好
	43	皿	9.0	1.4	6.3	口縁部にスス付着、右回転糸切り底。	橙色		良好
	44	皿	7.8	1.4	5.3	右回転糸切り底。	橙色		良好
	45	皿	7.2	1.2	4.7	右回転糸切り底。	灰白色		良好
	46	皿	10.2	2.1	7.1	右回転糸切り底。	灰白色		良好
	47	羽釜	(17.3)	10.0	-		灰白色		良好
	48	内耳 土器	28.2	-	-		にぶい黄色	1~2mmの砂粒を含む。	良好
	49	焼塩 壺蓋	7.5	1.2	7.3	蓋内面に布目圧痕あり。	橙色	微量の金雲母を含む。	良好
	50	焼塩 壺蓋	7.5	1.7	7.6	蓋内面に布目圧痕あり。	橙色		良好
	51	焼塩 壺蓋	8.1	2.0	8.2	蓋内面に布目圧痕あり。	橙色		良好
	52	焼塩 壺蓋	8.0	1.8	7.4	蓋内面に布目圧痕あり。	橙色	微量の金雲母を含む。	良好
	53	焼塩 壺蓋	7.9	2.0	7.7	蓋内面に布目圧痕あり。	橙色		良好
	54	焼塩 壺身	7.0	7.1	4.4	底部外面にスス付着、内面に絞り痕あり。	橙色	微量の金雲母を含む。	良好
	55	焼塩 壺身	6.4	9.4	4.2	内面に布目圧痕、胴部外面に「大上々」の刻印あり。	橙色	少量の金雲母を含む。	良好
	56	焼塩 壺身	5.6	8.9	5.4	内面に布目圧痕、底部外面に指頭圧痕、胴部外面に「泉州麻玉」の刻印あり。	橙色	微量の金雲母を含む。	良好
	57	焼塩 壺身	5.6	8.9	5.4	内面に布目圧痕、底部外面に指頭圧痕、胴部外面に「泉州麻玉」の刻印あり。	橙色	微量の金雲母を含む。	良好
	58	焼塩 壺身	5.4	8.9	5.8	内面に布目圧痕、底部外面に指頭圧痕、胴部外面に「泉湊伊織」の刻印あり。	橙色	微量の金雲母を含む。	良好
SK63	3	皿	6.8	1.4	4.6		橙色		良好
	4	皿	7.0	1.3	4.7	底部にかすかな糸切り痕あり。	橙色		良好
SK64	3	皿	8.3	1.2	5.8	右回転糸切り底。	浅黄橙色	1mm大内の砂粒を含む。	良好
	4	皿	8.3	1.2	5.9	口縁部にスス付着、右回転糸切り底。	灰白色	1mm大内の砂粒を含む。	良好
	5	甕	(28.2)	19.2	20.2	巻き上げ痕、板具調整痕あり。	橙色	5mm大内の白礫を含む。微量の金雲母を全体に含む。	良好
	6	焜 炉 類	(23.4)	26.0	26.0	側面風穴、底部持ち手2ヶ所あり。丹塗り。	橙色	2mm大内の砂粒を含む。	良好
SK65	43	皿	6.2	1.0	4.6	全体に摩滅、一部スス付着。	橙色		良好
	44	皿	6.3	1.2	4.7	右回転糸切り底。	橙色		良好
	45	皿	6.2	1.1	5.1	右回転糸切り底。	橙色		良好
	46	皿	7.5	1.3	5.1	口縁一部にスス付着、右回転糸切り底。	にぶい橙色		良好
	47	皿	7.6	1.2	4.9	口縁部にスス付着、右回転糸切り底。	浅黄橙色		良好
	48	皿	17.4	2.5	12.4	全体にゆがみ、底部にヘラ削り痕あり。	淡黄色	1mm大内の砂粒を含む。	良好
	49	内耳 土器	(29.3)	7.3	-	底部外面に刷毛目痕あり。	灰白色		良好
	50	植木 鉢	(12.4)	12.2	10.0	胴部外面にイッチンで波・鳥・蟹の絵。	橙色	軟質施釉陶器	良好

	51	植木鉢	(12.4)	12.2	(10.0)	胴部外面にイッチンで波・鳥・蟹の絵。	橙色	軟質施釉陶器	良好
	52	甕	(31.5)	34.0	12.7	内面に付着物あり。	灰白色	1～2mm大内の白礫を含む	良好
SK68	4	土鈴	最大径 4.2	3.9	/		灰白色		良好
SK70	1	皿	10.1	1.7	6.4	口縁内外面にスス付着、右回転糸切り底。	にぶい橙色		良好
	2	皿	10.7	2.3	6.1	口縁内外面約8cmにスス付着、右回転糸切り底	にぶい橙色		良好
	3	皿	(10.3)	2.2	6.8	口縁内外面にスス付着、右回転糸切り底。	にぶい橙色		良好
	4	皿	10.8	2.3	5.3	口縁内外面全体にスス付着、全体に黒化、右回転糸切り底。	にぶい黄橙色		良好
SK80	4	皿	8.2	2.4	4.2	口縁部にスス付着、右回転糸切り底。	浅黄橙色	1～2mmの砂粒を含む。	良好
SK82	2	皿	7.7	1.2	4.7	口縁部にスス付着、右回転糸切り底。	橙色		良好
SK114	3	皿	—	—	—	全体に摩滅。	橙色	1mm大以内の礫と金雲母を含む。	良好
SK115	5	内耳土器	(26.4)	—	—	内面に横向刷毛目、外面に指押さえスス付着。	黄褐色		良好
SK120	1	播鉢	—	—	—		灰白色		良好
	2	鍋	—	—	—		灰白色		良好
	3	鍋	—	—	—		灰白色		良好
SV8	3	甕	—	—	—		オリーブ黒色	3mm大内の礫を含む。	良好

表-3 土製品・土人形観察表

単位は cm、() は復元値、— は不明、/ は該当部位なし

遺構	遺物番号	種類	高さ	幅	厚さ	特徴	色調
SK65	53	羽釜ミニチュア	2.8	口径 3.3 底径 0.7 最大系 5.1	/		にぶい橙色
	54	鹿	2.7	3.2	1.2	鹿の子模様白色、軟質施釉陶器	橙色
	55	橋ミニチュア	5.3	20.1	6.3	欄干部緑色、軟質施釉陶器	にぶい橙色

表-4 軒丸瓦観察表

単位は cm、() は復元値、— は不明、/ は該当部位なし

遺構	遺物番号	瓦当											全長	丸瓦厚	湾曲比%	特徴
		直径	文様区径	内区		外区内縁				外区外縁		瓦当厚				
				径	巴巻	幅	珠紋		幅	高さ						
							数(個)	径			高					
SK34	6	16.3	11.1	6.5	左	2.5	14	1.0	0.3	2.5	0.6	2.6	—	(2.0)	—	三つ巴紋
	7	12.4	8.8	4.5	右	1.4	9	0.4	—	1.5	0.4	2.0	—	1.4	48.2	三つ巴紋
SK47	5	15.4	11.0	5.9	左	1.7	23	0.5	—	2.7	—	3.1	—	2.3	—	三つ巴紋
SK51	59	13.0	9.0	5.2	左	2.3	15	0.6	0.1	1.9	0.3	2.1	—	1.2	—	三つ巴紋

表-5 丸瓦観察表

単位は cm、() は復元値、— は不明、/ は該当部位なし

遺構	遺物番号	全長	幅	厚さ	湾曲比(%)	特徴
SK117	5	—	13.5	2.5	46.7	コビキ B、釘穴丸形。
	6	20.1	—	2.5	—	コビキ B、釘穴角形。
SV10	3	36.5	—	2.8	32.6	コビキ B

表-6 軒平瓦観察表

単位は cm、() は復元値、— は不明、/ は該当部位なし

遺構	遺物番号	瓦当									全長	顎部厚	平瓦厚	特徴	
		上弧幅	下弧幅	上下幅	紋様区		周縁幅		脇区左	脇区右					周縁高
					左右幅	上下幅	上部	下部							
SK64	7	—	—	5.0	—	3.2	1.0	0.8	—	1.2	0.4	—	2.2	1.6	桐文に下巻き、上巻きの唐草2転

表-7 鬼瓦他観察表

単位は cm、() は復元値、- は不明、/ は該当部位なし

遺構	遺物 番号	縦	幅	厚さ	特徴
SK65	56	39.8	51.7	6.0	海津袴あるいは御所降鬼瓦の一種と考えられる鬼瓦。
	57	41.8	26.3	4.4	目板瓦の一種と考えられる。

表-8 金属製品観察表

単位は cm、() は復元値、- は不明、/ は該当部位なし

遺構	遺物 番号	種類	長さ	幅/径	特徴
SK11		煙管吸口	6.9	小口径 1.0、口付径 0.5	
SK16		煙管吸口	15.0	小口径 0.8、口付径 3.5	
SK44		煙管吸口	6.5	小口径 0.9、口付径 0.4	
近世1 ベース 層一括		煙管雁首	5.7	火皿径 1.5、小口径 1	

表-9 石製品観察表

単位は cm、() は復元値、- は不明、/ は該当部位なし

遺構	遺物 番号	種類	径	厚さ	特徴
SK80	5	砥石	6.0 × 4.3	1.0	篆文で「松」字を陰刻。

V まとめ

1 広島城跡国保会館地点における区画と屋敷割の変遷について

はじめに

今回、広島城国保会館地点の調査では比較的初期段階から調査区西側に整地層が確認された。範囲は調査区西壁から幅約 5.00m 前後で硬質の砂礫層などが広がっている。整地層東側には石組みや溝状遺構・建物跡が同軸方向に平行して複数、検出しており、整地層の範囲以外で検出した溝状遺構や建物跡・柵列跡も原則として、並行あるいは直行して位置している。

このような検出状況から、調査地点には何らかの区画や屋敷割などの存在が想定された。このことから、本稿では発掘調査で得られた成果と絵図などの文献史料を比較し、広島城跡国保会館地点における区画・屋敷割と変遷について検討していきたい。

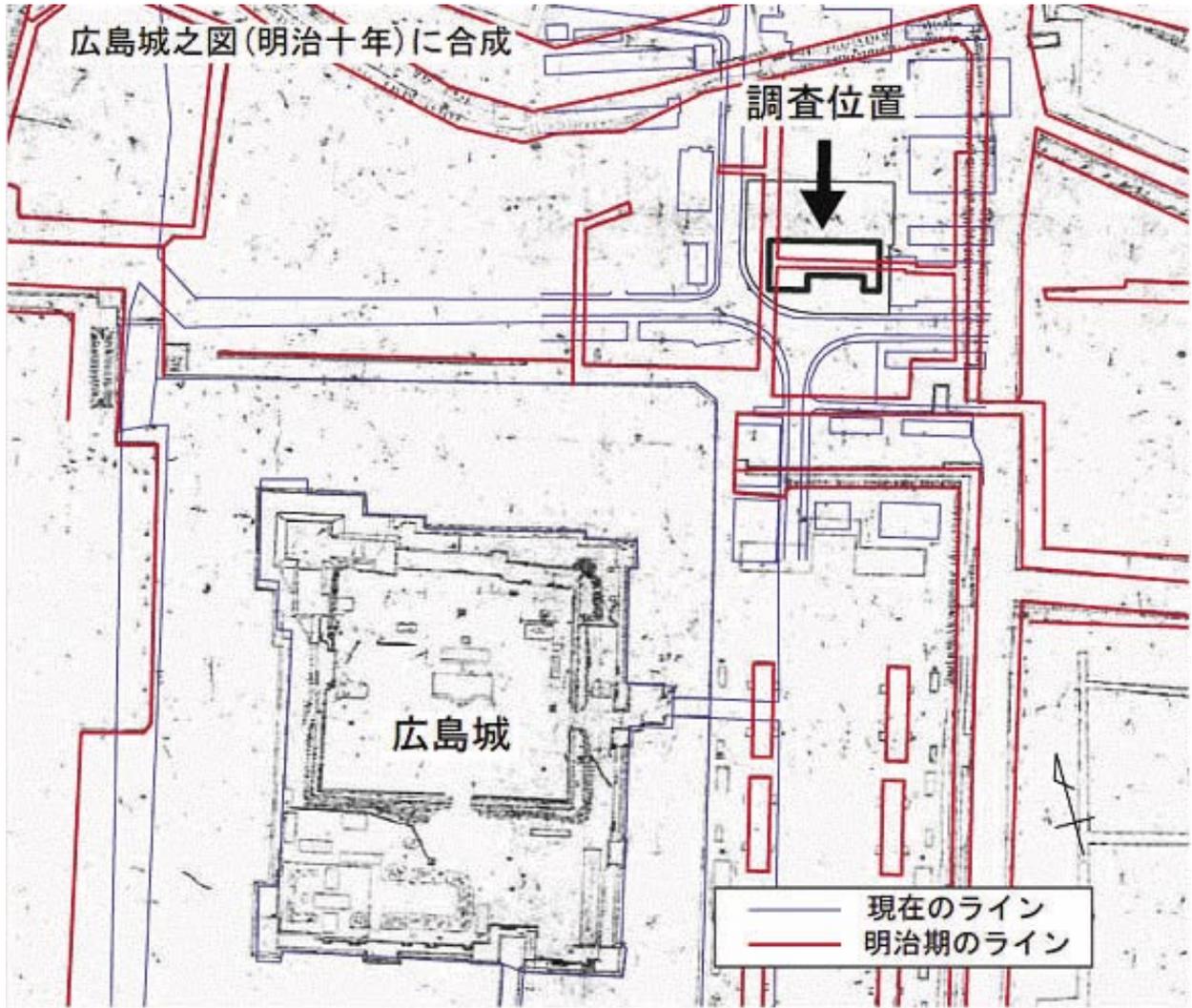
(1) 明治期の調査地点の位置

広島城およびその周辺は原子爆弾投下以後、戦後の復興整備が進められ町並みも大きく変化している。そうした中で江戸時代当時の広島城の縄張り、あるいは屋敷地などの区画を残しているのは広島城本丸・内堀など、数少ないのが現状である。今回、江戸時代における調査地点の位置を検討するにあたって、広島城を示した地図の中で最も精度が高いと考えられる、明治十（1876）年の陸軍による測量の『広島城之図』¹⁾を基準とした。理由は“北の郭”²⁾部分の区画の配置が『家中屋敷割図』³⁾などの幕末期前後の絵図と比較的大きな相違が認められないことから、『広島城之図』は幕末期の様相を示している可能性が高いと判断したためである。第 80 図の上段は『広島城之図』と現在の地図⁴⁾を合成したもので、現在の地図は青いラインで、『広島城之図』は赤いラインで示している。これをみると調査地点の位置は、広島城内堀の北東隅部“北の郭”東側にある南北方向の旧道と東西方向の旧道が交わる T 字路部分に示されている。

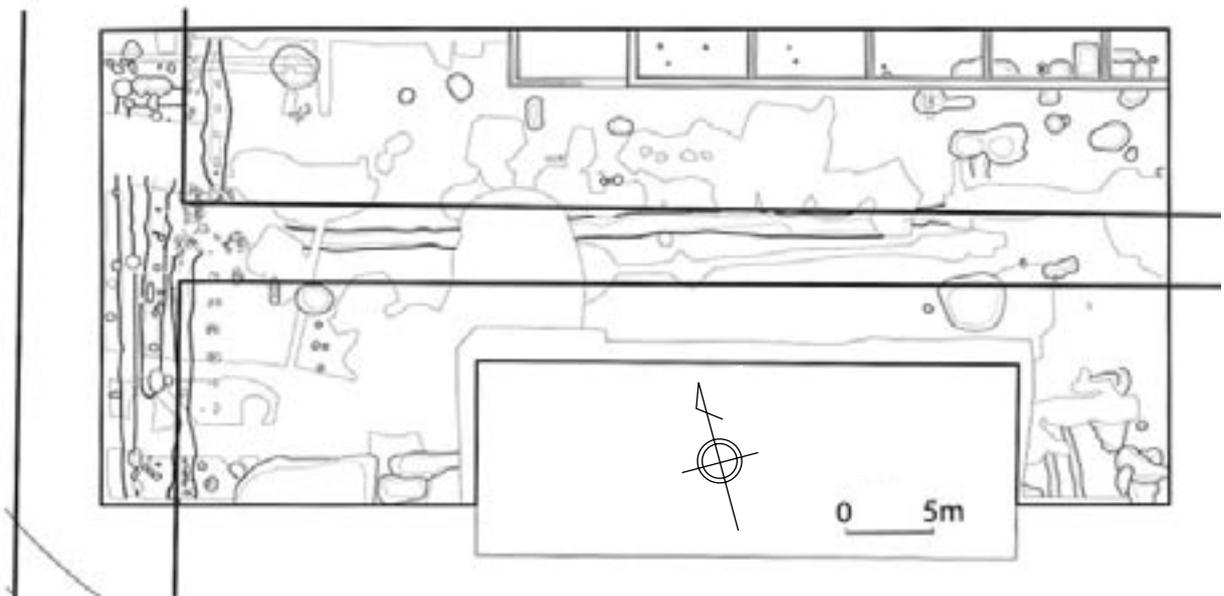
第 80 図の下段は調査範囲部分を拡大したものである。ただし、この図は基本的な遺構の配置と旧道位置を示すことを主眼とした図であるため、詳細は各種遺構図を参照されたい。

図では南北方向の旧道（以下、「南北旧道」と仮称）に対して建物跡の SB3 と SB4 とほぼ同じ線上にあり、遺構のラインと「南北旧道」の位置は一致している。

東西方向の旧道（以下、「東西旧道」と仮称）では、建物跡の SB5 と SB6 の南側に近接しており、「南北旧道」の道幅のラインは各建物跡の礎石に対して実測値で約 0.8m 程度、南側にズレている。SB5・SB6 間の実測値は約 4.5m で、『広島城之図』の「東西旧道」の道幅も同じく約 4.5m であることから、SB5 と SB6 が実際の「東西旧道」の道幅を示していると考えられる。ズレが生じたのは当時の測量精度の差、あるいは合成段階での誤差によるものであろう。また、「東西旧道」には溝状遺構の SV4 が同じ軸線上に位置しており、ここで記した各遺構の配置は『広島城之図』の旧道の T 字路の区画とほぼ合致している。



「広島城之図」との合成図



調査位置拡大図

第 80 図 「広島城之図」との合成図

(2) 江戸時代の調査位置の推定

江戸時代の調査位置を推定するにあたって広島城に関連する絵図の比較をしたい。「位置と歴史的環境」でもふれたが、毛利氏時代の絵図では調査地点にあたる範囲は松原となっていることから対象とする絵図は“北の郭”を整備した福島氏時代以降とした。また、調査で得られた成果でも16世紀代の遺構は確認されていないことから17世紀以降の絵図を比較しながら調査地点のおおよその位置を仮定したい。

比較する絵図は『寛永年間広島城下図』から『家中屋敷割図』・『広島城之図』（第80図）⁵⁾までの調査地点周辺の部分図である。個々の絵図では表現に違いはあるものの、慶長十六(1611)年の「武家諸法度」の発布以降、城郭に関連する新規の増改築は事実上禁止されていたことから「切小路」・「切道筋」と呼称される小路・道筋などの基本的な大枠の区画と、それらを含む“北の郭”には、ほぼ変化はないと想定している。

絵図上で変化がみられるのは区画内の「屋敷割」であり、『寛永年間広島城下図』から『家中屋敷割図』までをみて行くと「屋敷割」が徐々に細分化されている様子がみてとれる。ただし、『家中屋敷割図』では、屋敷を撤去して「火よけ地」を設けるなど、区画の枠内での屋敷の割付などは自由に行われていたようである。さらに時代の下った『御家中屋敷絵図重宝記』と『家中屋敷割図』では「火よけ地」部分に練兵場としての「松原講武所」を設けているが、これは幕府の影響力が低下した幕末の動乱期の絵図であることを考慮に入れておく必要がある。しかし、こうした状況化でも屋敷地の変更は基本的な区画の枠内で行われていた様子が窺えられ、“北の郭”と大枠の区画にはほとんど変化はないようである。

調査地点付近に絞ってみると、幕末前後になって“搦手の外堀”⁶⁾側の「屋敷割」が細分されているが、内堀の北東隅部分（内堀側）では『寛永年間広島城下図』から『家中屋敷割図』まで、基本的な屋敷割に変化は認められない。『家中屋敷割図』の約8年後に作成された『広島城之図』が、その当時の区画を正確に測量した図であるならば、少なくとも調査地点の「屋敷割」は“北の郭”に屋敷地を区画してから以降、明治の初頭段階まで大きな変更もなく踏襲されてきたと考えられるのである。

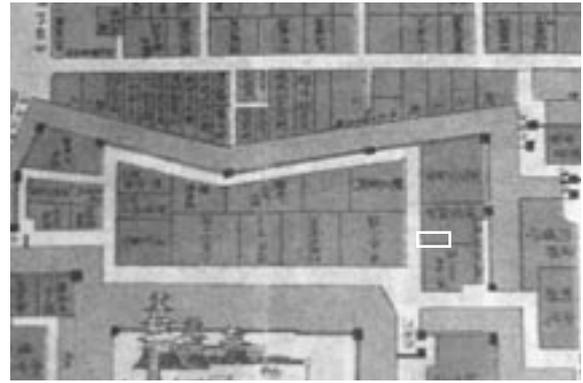
このことから、合成図に示されている「南北旧道」は絵図上の「切小路」や「切道筋」に、「東西旧道」は屋敷地間の「屋敷割」に相当すると考えられ、江戸時代の調査位置は第81図で示した白線部分に推定される。絵図からみる各時期の変遷は以下のとおりである。

17世紀代

絵図では『寛永年間広島城下図』と同図と同じ系統と云われる『寛永年間広島城下絵図』があり、いずれの図にも「屋敷割」がみられる。調査地点にかかる区画の中には屋敷地が4箇所配置されており、調査部分に推定される範囲の居住者は本丸寄りの南側に「長谷川久太郎」、北側には「浅野平十郎」の名が記されている。少し時代が下った正保三(1646)年の『安芸国広島城所（絵図）』いわゆる『正保絵図』では屋敷地には個人名ではなく「侍町」のみの表記になっているものの、調査地点にあたる西側の「南北旧道」部分に「切小路門口（不明）九十三間」とあり、道筋が約169mであったことが記されている。ちなみに『広島絵図（元和五年御入国之砌御城下絵図）』



寛永年間広島城下図 部分
寛永2（1625）年から同9（1632）年



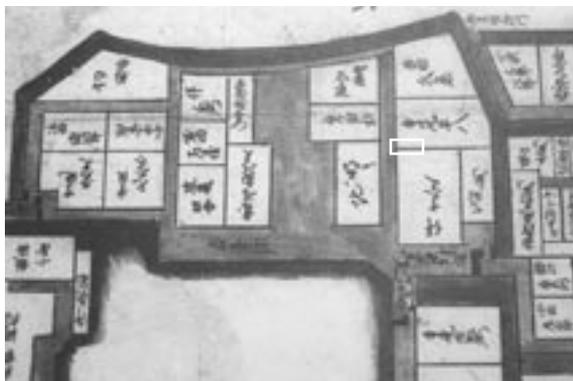
寛永年間広島城下図 部分
寛永年間広島城下図と同系統



広島絵図（元和五年御入国之砌御城下絵図）
部分



安芸国広島城所（絵図）部分
正保3（1646）年



家中屋敷割図（現代の加筆の仮題） 部分
寛保3（1743）年から宝暦4（1754）年頃



御家中屋敷絵図重宝記 部分
元治元（1864）年頃



家中屋敷割図 部分
明治2（1869）年頃



広島城之図 部分
明治10（1876）年

第 81 図 調査地周辺の絵図（□は調査地周辺部分）

にも同地点には「切道筋九十三間」と記されており『正保絵図』と同様であった。

18 世紀代

絵図では『家中屋敷割図』がある。“北の郭”の中央部の表松原の侍屋敷が撤去され「火よけ地」となっている。調査地点にかかる区画の中には屋敷地が4箇所配置されており、調査部分に推定される範囲の居住者は、本丸寄りの南側に「伴十太夫」、北側に「寺尾平八」の名前がみられる。

19 世紀代幕末まで

絵図では『御家中屋敷絵図重宝記』と『家中屋敷割図』がある。“北の郭”中央部の「火よけ地」が「松原講武所」となっている。調査地点にかかる区画の中は4箇所だった屋敷地の北側が分割され6箇所に増えている。調査部分に推定される範囲の居住者は『御家中屋敷絵図重宝記』では本丸寄りの南側に「浅野左織」、北側に「弓削熊之介」、『家中屋敷割図』では「浅野左織」・「浅野昌克」の名前がみられる。

近現代以降

『広島城之図』では、この段階で既に軍の練兵場が設置されていた理由からか区画のみの表記になっている。区画自体は『家中屋敷割図』と比較しても大きな変化は認められないが、調査地点部分に本稿で仮称している「東西旧道」が記されている。

(3) 土地利用と遺構・遺物の分布

ここでは調査で出土した遺構と遺物の分布から区画と屋敷地を検討したい。

『広島城之図』との合成図から、明治十年段階の旧道と屋敷地の区割は、幕末から近代以降のものと考えられる遺構とほぼ合致したことは前述したとおりで、遺構は道・屋敷地等の土地利用に応じた、あるいは土地利用を反映した配置となっている。基本的には公共性の高い旧道部分には建物跡・溝状遺構など、境界・側溝に関連する遺構がみられ、私的な要素が高い屋敷地部分では土坑・廃棄土坑などの廃棄処理に関連する遺構の比率が多いなど、相応の出土傾向を示している。合成図で示された「南北旧道」・「東西旧道」と南北の屋敷地が江戸時代の初期段階から続く区割・屋敷割を記しているのであれば、各時期においても同様の傾向を示すはずである。

第82図は時代ごとの遺構分布をグラフ化したものである。対象とした区割は『広島城之図』との合成図から確認された「南北旧道」・「東西旧道」と東西旧道の北側部分の「屋敷地（北）」（以下仮称）・南側部分の「屋敷地（南）」（以下仮称）の4箇所で、遺構はピット・溝状遺構・建物跡・土坑（遺物無）・土坑（遺物有）・井戸・柵列を主な項目とした。この中で溝状遺構など複数箇所にもたがる場合は、遺構の主たる範囲を含んでいる箇所にカウントしている。また、土坑については出土遺物の有無で分け廃棄土坑の定義は設けていない。

以下に時期ごとにグラフデータと遺構の概略を記する。

17 世紀代

「南北旧道」では遺構は検出されていない。「東西旧道」では溝状遺構3基・ピット2基・土坑（遺物無）1基の順位である。「屋敷地（北）」ではピットの22基・土坑（遺物無）9基・土坑（遺物有）6基・柵列2基・井戸1基の順位である。「屋敷地（南）」ではピット20基・土坑（遺物無）6基・

土坑（遺物有）3基・溝状遺構・柵列が各1基の順位である。

全体では土坑（遺物有）は「屋敷地（北）」と「屋敷地（南）」に集中し、「南北旧道」では遺構そのものが認められないなど分布の差が明確に現れており、区割に応じた棲み分けが認められる。個別の遺構では、「東西旧道」の溝状遺構のSV8等と柵列のSA1は、いずれも「南北旧道」の手前で終息しており、明確な西方向への延伸は確認されなかった。ただしSA2の西側には近現代の攪乱があり、同柵列の礎石が検出される深度とほぼ同等の深さまで到達していたことから、攪乱によって失われた可能性も考慮する必要はある。出土遺物のほとんどは、「屋敷地（北）」・「屋敷地（南）」からの出土である。

18世紀代

「南北旧道」ではピットの26基が最も多く、続いて土坑（遺物無）14基・溝状遺構1基の順位となっており、土坑（遺物有）は検出していない。「東西旧道」ではピット1基が確認されている。「屋敷地（北）」ではピットの11基・土坑（遺物有）10基・土坑（遺物無）8基の順位である。「屋敷地（南）」では土坑（遺物有）11基・ピット6基・土坑（遺物無）3基・溝状遺構2基の順位である。

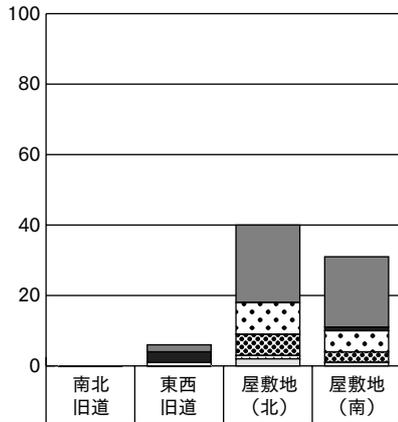
全体では土坑（遺物有）は「屋敷地（北）」と「屋敷地（南）」に集中し、「東西旧道」では遺構が極端に少ないなど、分布の差が明確に現れており、区割に応じた棲み分けが認められる。個別の遺構では「南北旧道」のピットの26基は溝状遺構の周辺に集中していることから溝に伴う建物跡の可能性も考えられる。また、直接的な検出遺構ではないが「東西旧道」には「17世紀代」でも、後述する「19世紀代幕末まで」でも、ほぼ同じ位置で溝状遺構が確認されている。このことから当該時期にも「東西旧道」には溝状遺構が存在していた可能性が考えられる。出土遺物のほとんどは、「屋敷地（北）」・「屋敷地（南）」からの出土である。

19世紀代幕末まで

「南北旧道」ではピットの7基が最も多く、続いて土坑（遺物無）4基・土坑（遺物有）1基の順位となっている。土坑（遺物有）はSK32のみで、出土遺物は陶磁器を含め総数5点である。「東西旧道」では溝状遺構1基が確認されている。「屋敷地（北）」ではピットの15基・土坑（遺物有）12基・土坑（遺物無）2基・建物跡1基の順位で、建物跡は「南北旧道」に近接するSB5である。「屋敷地（南）」では土坑（遺物有）6基・建物跡2基・ピット1基の順位で、建物跡は「南北旧道」に近接するSB4・SB6である。

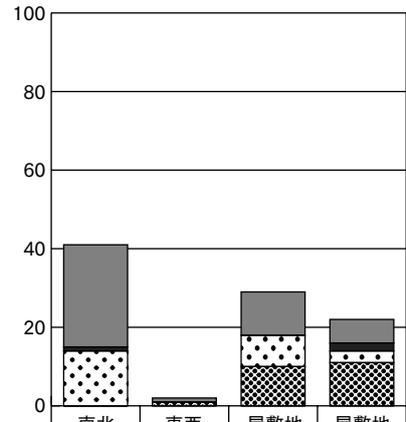
全体的には、土坑（遺物有）は「屋敷地（北）」と「屋敷地（南）」に集中している一方、「南北旧道」・「東西旧道」では合わせても1基（SK32）の検出となっており、この時期でも分布の差が明確に現れ区割に応じた棲み分けが認められる。個別の遺構では、各「屋敷地」から検出している建物跡のSB5・SB6については、いずれも「南北旧道」との境界に近接するものであり土地利用を反映した配置となっている。出土遺物のほとんどは、「屋敷地（北）」・「屋敷地（南）」からの出土である。

17世紀代



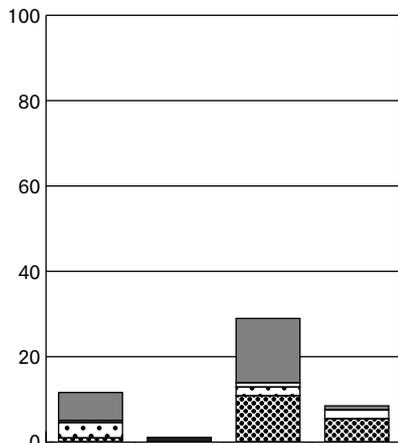
	南北旧道	東西旧道	屋敷地(北)	屋敷地(南)
■ ピット	0	2	22	20
■ 溝状遺構	0	3	0	1
□ 建物跡	0	0	0	0
● 土坑(遺物無)	0	1	9	6
■ 土坑(遺物有)	0	0	6	3
● 井戸	0	0	1	0
■ 柵列	0	0	2	1

18世紀代



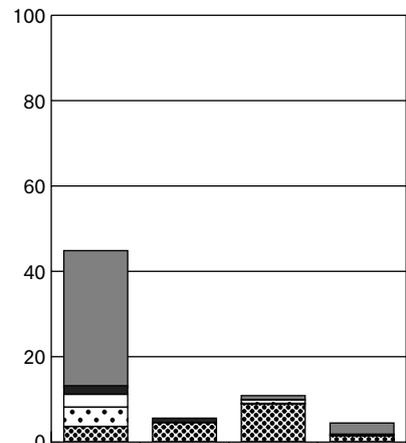
	南北旧道	東西旧道	屋敷地(北)	屋敷地(南)
■ ピット	26	1	11	6
■ 溝状遺構	1	0	0	2
□ 建物跡	0	0	0	0
● 土坑(遺物無)	14	0	8	3
■ 土坑(遺物有)	0	1	10	11
■ 柵列	0	0	0	0

19世紀代幕末まで



	南北旧道	東西旧道	屋敷地(北)	屋敷地(南)
■ ピット	7	0	15	1
■ 溝状遺構	0	1	0	0
□ 建物跡	0	0	1	2
● 土坑(遺物無)	4	0	2	0
■ 土坑(遺物有)	1	0	12	6

近現代以降



	南北旧道	東西旧道	屋敷地(北)	屋敷地(南)
■ ピット	32	0	1	3
■ 溝状遺構	2	1	0	0
□ 建物跡	3	0	0	0
● 土坑(遺物無)	5	0	1	0
■ 土坑(遺物有)	4	5	10	2

第 82 図 遺構と遺物の分布

近現代以降

対象時期が明治・大正・昭和を含む近現代以降であり、どの段階まで『広島城之図』時代の区画が踏襲されていたのかは不明である。このため、遺構分布の傾向が直ちに明治・大正期の近代の土地利用を反映しているとはいえないが、少なくとも終戦以前までの様相を呈している可能性が高いと考えられる。

グラフでは「南北旧道」はピットの32基が最も多く、続いて土坑（遺物無）5基・土坑（遺物有）4基・建物跡3基・溝状遺構2基の順位となっている。土坑（遺物有）4基中の3基はSK1からSK3の人頭大の石を充填した土坑であり、廃棄土坑（ゴミ穴）的な性格を持ったものではない。「東西旧道」では土坑（遺物有）5基・溝状遺構1基の順位となっている。土坑（遺物有）が最大値となっているのは、昭和二十（1945）年の終戦以後と考えられる焼土土坑群（溝状遺構含む）が入り込んでいることによるもので、それ以外では溝状遺構のみの検出となっている。「屋敷地（北）」では土坑（遺物有）が10基・土坑（遺物無）・ピットは各1基で同数となっているが、これも焼土土坑群の影響によるものである。「屋敷地（南）」ではピット3基・土坑（遺物有）2基の順位である。

全体的な傾向としては、SK1～SK3・溝状遺構を含む焼土遺構群（総数13基）を除くと各土坑の合計数量は、この時期が最も少なくなっている。これは明治八（1874）年以降、終戦まで広島城周辺は軍用地であったことから、屋敷地と比較すれば、はるかに公共性の高い地域であったことが要因と思われる。個別の遺構では焼土遺構群が溝状遺構であるSV3を廃棄の南限にしていることは、焼土が廃棄される時期まで「東西旧道」部分に溝や暗渠などの境界が存在していた可能性を窺わせるものである。

(5) 小結

グラフをもとに各時期について遺構の分布と区割に応じた棲み分けを比較してきた。

結果としては「南北旧道」・「東西旧道」の旧道部分と考えられる範囲には建物跡・溝状遺構など境界・側溝に関連する遺構が多く、遺物を含む土坑は極端に少ない。対照的に「屋敷地（北）」・「屋敷地（南）」の屋敷地部分と推定される範囲では土坑・廃棄土坑などの廃棄に関連する遺構の比率が多い。といった傾向が、いずれの時期でも認められた。

このように、区画によって遺構の分布と遺物の出土に偏り、あるいは棲み分けが認められるのは、それぞれの区画に性質があり、それに応じた土地利用が行われていたと捉えられる。「南北旧道」の範囲に溝状遺構・建物跡が多く、廃棄土坑がほとんどみられないのは「公道」や、それに付随する「側溝」などの、公共性の高い土地空間であったことを示しており、「東西旧道」の範囲が、ほぼ溝状遺構で占められているのは「暗渠」や「区画溝」・「屋敷割の溝」など、屋敷地を区分する境界であったと考えられる。対照的に「屋敷地（北）」・「屋敷地（南）」で廃棄土坑などが集中するのは、その区画が「屋敷地」などの、私有地あるいは私有地的な要素が高い土地空間であったことが窺え、『広島城之図』の合成図で示された区画や江戸時代の絵図の変遷と矛盾するところはない。こうした傾向がいずれの時期でも認められたことは、少なくとも調査地点においては17世紀代から明治初頭の段階まで「南北旧道」・「東西旧道」・「屋敷地（北）」・「屋敷地（南）」の区画や屋敷割

に大きな変化がなかったことを物語っていると考えられる。

(川田)

注

- 1) 坪井欣也氏所蔵
- 2) 本丸の北側に位置する郭について、財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀西白島交差点地点』1993、財団法人広島市文化財団『広島城跡西白島地点』2005 で便宜上、呼称された仮称を用いている。
- 3) 広島市中央図書館編『広島城下町絵図集成』1990
- 4) 坪井欣也氏所蔵の『広島城之図』と地形図を合成した部分図
- 5) 1)・3) 所収の絵図を部分図で列記している。
- 6) 2) と同様に本丸の北側に位置する堀について、財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀西白島交差点地点』1993、財団法人広島市文化財団『広島城跡西白島地点』2005 で便宜上、呼称された仮称を用いている。

2 広島城跡国保会館地点 SK65 出土の美濃「高田徳利」について

(1) 土坑の概観と出土遺物

SK65 は調査区の西側南部から検出された。南壁に接しており、推定される規模のほぼ半分近くは調査区外に遺存していると推定される。さらに、東側を既設埋設等の攪乱で寸断されており、実際に調査された範囲は現存する規模の50%以下と予想される。しかしながら遺物の総出土点数は磁器315点、陶器265点、焼締め25点、土師質瓦質土器269点、瓦140点以上、金属製品3点、石製品1点、貝16点、その他漆喰など23点の計1057点とSK51に次ぐ出土点数となっている。出土遺物から本土坑の廃棄年代は19世紀の前半までと考えられる。

出土資料

SK65 から出土した「高田徳利」は灰釉の5合瓶で、胴部には屋号と考えられる「○に石」字（石丸屋号？）が「クギ書き」で書かれている。確認されたものは当該遺物の1個体分のみで、同種の徳利は細片でも出土していない。編年・分類は田口昭二氏の¹⁾ 連房IV-b期～V-a期、長佐古真也氏の²⁾ II期1～2段階、池田悦夫氏の³⁾ III-2類～III-3a類に相当し、年代は19世紀前半～中葉に比定されている。

(2) 美濃「高田徳利」

「高田徳利」の概要

「高田徳利」は主に美濃高田地方を中心に生産された徳利である。高田徳利と呼称されるようになったのは幕末から明治時代にかけてであると推測されており、江戸時代は主に「貧乏徳利」と呼ばれていた。⁴⁾ 東京都内の近世遺跡の発掘調査では、大げさでなく必ずといって良いほど出土する遺物である。このため高田徳利については編年や用途など様々な研究が行われており、釉薬から「灰釉徳利」、形状から「寸胴型徳利」、用途から「通い徳利」などの名称でも呼ばれているが、いずれも17世紀後葉頃から明治期にかけて形態変化を遂げていく一過程または一段階を示した呼称であ

る。主に、酒の小売容器として使われていたものと考えられ、大きさは3合、5合、7合、1升と容量に合わせて作られている。胴部や底部には「クギ書き」「墨書」などによって店の屋号が書かれたものも多く見受けられる。

出土例からみる江戸と他の都市の様相

「高田徳利」は東京都内の近世遺跡の発掘調査で、ほぼ必ず出土する遺物であることは前述しているが、実際的な数量などを比較した研究は以外に少ない。そのなかで、消費地の調査から池田悦夫氏が江戸の近世遺跡から「高田徳利」の出土比率をデータ化し数量的増減などを割り出している。⁵⁾ それによれば陶磁器（焼締め含む）製の徳利全体に占める「高田徳利」の割合は17世紀末葉～18世紀前葉で51.6%、18世紀中・後葉で72.5%、18世紀末葉～19世紀初頭で89.5%、19世紀前・中葉で86.7%、19世紀後・末葉で71.4%になり、ピーク時のシェアはほぼ「高田徳利」の独占状態であったことを述べている。この数値は都内の近世遺跡の調査に携わった担当者にとっては実感できるもので、選択するサンプルによって数値の増減はあるだろうが、東京都内の近世遺跡における「高田徳利」出土傾向を表したものであろう。

このように江戸東京において圧倒的なシェアを誇る一方、その他の都市での「高田徳利」の報告例はあまりみられない。こうした出土の地域差について井汲隆夫氏は、江戸と生産地に最も近い中核都市の尾張とを比較して考察しており、⁶⁾ 実際の出土例と文献史料から検討を試みている。実際の出土例では『名古屋城三の丸遺跡(1)』をはじめ名古屋城・名古屋城下に関連する遺跡調査での出土例が2例のみであり、瀬戸・美濃地域の直近にあたる尾張にあつて出土例が極端に少ないことを挙げている。⁷⁾ 文献史料では『多治見市史 窯業史料編』⁸⁾ の「土岐郡五ヶ村産出の諸品調上書」に書かれてある

一 酒徳利 壺升入より五合・三合迄

是は九分通り江戸表え売捌来候、壺部通りは近国え売捌来候

の一文から、「一略一「貧乏徳利」(「高田徳利」)のほとんどが「江戸表」に向けての「輸出品」であったと解するしかない。」とし、「「通い徳利」(「高田徳利」)は、少なくとも東日本においては江戸独自のものであり、農村にないばかりか、他の都市でもほとんどなかったのではないか。」と論じている。また、長佐古真也氏も「高田徳利」の出土分布などの研究成果から「江戸中～後期を通じて徳利が多量に検出されるのは江戸市中の特徴であつて、一略一小口需要が大市場を形成するという特殊な環境をもつ江戸にのみ、貸し容器としての陶製徳利が発達するようになったと解釈するべきである。」⁹⁾ と指摘しており、現在の認識としては「高田徳利」は酒屋側が顧客用に用意する小売用の容器と捉えられている。

出土資料の検討

SK65から出土した「高田徳利」は胴部に屋号と考えられる「クギ書き」が書かれてあり、器形の特徴などから「通い徳利」として使用されていたものと考えてよいであろう。前述した論考を前提とした場合、広島城下での「通い徳利」は出土する筈の無いものである。統計的に実証するのは困難だが、少なくとも現段階では広島城下での「高田徳利」の大量出土の事例も「通い徳利」が出土した報告例もない。モノの廃棄という側面から判断すれば、この事実は広島城下での酒の販売

は江戸のように「高田徳利」で小売する商業形態ではなかったことを示唆しており、研究者の論考を補完する事例といえる。個体資料としては「土岐郡五ヶ村産出の諸品調上書」に書かれていたように9対1の割合で江戸以外へ流通していた残りの一割である可能性も残すが、前述したようにSK65出土の「高田徳利」は「通い徳利」として使用された形跡があることから、その可能性は少ないであろう。

比較資料が少なく、また、出土事例が確認されていないという、いわばネガティブなデータをもって検討を行うこととなったが、少なくとも現段階では広島城下でも、江戸城下のような酒販売の形態をとっていたと解釈できるような積極的な資料は見出されていない。これらを勘案すれば本土坑から出土した「高田徳利」は江戸表から持ち込まれた可能性が高いと考えられる。

(川田・安田・結城)

注

- 1) 田口昭二 1994「美濃の徳利」『瑞浪陶磁資料館研究紀要』第6号
- 2) 長佐古真也 1992「近世『徳利』の諸様相－瀬戸・美濃産灰釉系徳利をめぐる形式学的考察－」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編 吉川弘文館
- 3) 池田悦夫 2005「美濃『高田徳利』の形成過程」『法政大学大学院紀要』第55号 法政大学大学院
- 4) 1)と同・喜田川守貞『守貞漫稿』室松岩確編 1928『類聚近世風俗史』文潮社書院
- 5) 池田悦夫 1999「近世都市江戸の『通い徳利』について」『法政考古学』法政考古学会
- 6) 井汲隆夫 2001「近世遺跡出土の磁器・陶器・炆器・土器の器種組成－尾張と江戸－」『考古学フォーラム』13 考古学フォーラム編集部
- 7) 6)と同
- 8) 天保八(1837)年「土岐郡五ヶ村産出の諸品調上書」1976『多治見市史 窯業史料編』多治見市編
- 9) 長佐古真也 2001「VI江戸の生活文化 飲酒2 徳利」『図説江戸考古学研究辞典』江戸遺跡研究会[編] 柏書房

3 成果と課題

広島城国保会館地点の区画と変遷について、いくつかの項目に分けて述べてきた。明治期の調査地点の位置では『広島城之図』が、これまでの調査成果から精度が高いと考えられていることは本遺跡から検出した遺構の配置と『広島城之図』の区画がほぼ整合したことで、改めてその精度の高さが検証されたものといえよう。また、調査地点の区画・屋敷割は江戸時代を通じて踏襲されていたことが、絵図など史料の比較から推定した江戸時代の調査位置と、土地利用を比較した調査資料のデータの両面から得られ、文献史料と調査資料とで矛盾しない結果が得られたことは調査成果を検証する上でも有効であったと思われる。また、西日本では比較的なじみの少ない「高田徳利」について資料紹介も兼ねた出土遺物の検討を行うことができた。今回は比較資料が少ない現状での検討となっており、あくまで断片的な様相を示したものであろう。今後の課題としては、広島県

下での酒の販売形態などの流通形態を明らかにする上でも、近県も含めた今後の出土資料の増加を
まっぴ文献史料との両面で再検討を行う必要があるだろう。

(川田)

広島城国保会館地点
発掘調査に伴う遺物科学分析 報告書

広島城跡国保会館地点出土の脊椎動物遺体

阿部常樹

本調査地点では、9分類群47点(破片数)の脊椎動物遺体が出土した。以下に種名を記す。

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

硬骨魚綱 Class Osteiithyes

スズキ目 Order Perciformes

スズキ科 Family Serranidae

スズキ属 *Lateolabrax* sp.

タイ科 Family Sparidae

マダイ亜科 Subfamily Pagrinae

マダイ *Pagrus major*

両生綱 Class Amphibia

カエル目 Order Anura

科属種不明 fum,gen et sp.indet

爬虫綱 Class Reptilia

カメ目 Class Testudines

科属種不明 fum,gen et sp.indet

鳥綱 Class Aves

カモ目 Order Anseriformes

カモ科 Family Anatidae

属種不明 gen. et sp. indet.

キジ目 Order Galliformes

キジ科 Family Phasianidae

属種不明 gen. et sp. indet.

哺乳綱 Class Mammalia

齧歯目 Order Rodentia

ネズミ科 Family Muridae

属種不明 gen. et sp. indet.

食肉目 Order Carnivora

イヌ科 Family Canidae

イヌ *Canis familiaris*

ネコ科 Family Felidae

ネコ *Felis catus*

1. 魚類

分析方法は樋泉(2003)に準拠する。資料から主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨を抽出して「同定用資料」とし、それ以外の部位は「同定対象外資料」とする。しかし、分類群によって、「同定用資料」以外に同定可能な特徴的な部位を有するものは、それらも適宜、同定に用いる。また、本報告で同定できなかったものに関しては、標本がなかったことなどの要因から同定するに至らなかったものを「未同定」、残存状況が悪く、同定することが不可能であったものは「同定不可」とする。

本調査地点からは、18点の魚類遺体が出土しており、その内、2分類群9点が同定することができた。内訳は、タイ科(マダイ・マダイ亜科)が8点、スズキ属が1点である。タイ科はすべて頭部の部位である。しかし、兜割りなどの調理痕は観察されなかった。

2. 鳥類

鳥類の計測定義は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター(2005)に基づく。

本調査地点からは、5点の鳥類遺体が出土しており、その内、2分類群4点が同定することができた。SK75からはカモ類の左手根中手骨が1点出土している。その他は、同定することのできなかった右手根中手骨も含めてすべてSK51から出土している。なお、同定できた資料はすべてキジ科である。さらに、これらはSK51においてはニワトリのものではない。

3. 哺乳類

イヌの計測定義は、茂原(1986)とDriesch(1976)に基づく。

本調査地点からは、22点の哺乳類遺体が出土しており、その内、3分類群20点が同定することができた。最も多いのがイヌで15点、その他にはネコとネズミ類が1点ずつ出土している。

イヌに関しては、同一個体と考えられるものが出土している。以下、検討をおこなう。

1面ベース層からは、16点の哺乳類遺体が出土しており、そのなかにおいて、イヌは、ほぼ一体分のものと思われるものが含まれており、さらに、左側上腕骨がもう1点含まれている。しかし、左右下顎骨に関しては、全体の大きさはほぼ、同じぐらいであるものの、各計測箇所のサイズが異なることから別個体であると考えられる。第3及び第4前臼歯の近遠心径がほぼ同じであるのに対し、具体的には、第2前臼歯の近遠心径が1.2mm、第1後臼歯の近遠心径が2.4mm、右側の方が大きい(図1)。また、下顎体は高さと同幅共に左側の方が大きい。以上からこの左右の下顎骨は、異なる個体のものであると判断される。

唯一2点出土している左上腕骨は、東側南壁付近から出土したものが、東側から出土したものよりも骨幹が太く、両骨端が欠損しているため実際のサイズは不明であるが、東側のものよりやや長い感がある。

東側から出土した右前肢骨部分(上腕骨、橈骨、尺骨)はそれぞれ関節部分が合致し、右後肢部分も右寛骨臼と大腿骨骨頭部分が合致する。以上ことから、右側の前・後肢それぞれが同一個体であることが推測される。さらに、骨質や形質が似ている上、山内忠平(1958)の式でそれぞれの部位の全長から推定した体高が40～43cmの間に収まること(表2-2)から、前肢部分と後肢部分に関しても同一個体の可能性が推測される。

以上から、1面ベース層からは、最小で2体分、最大で4体分(左右下顎骨共に四肢骨と同一個体でなかった場合)出土していることになる。さらに、SK68からイヌの左第2中足骨が出土していることから、本調査地点からは、3～5体分のイヌが出土したことになる。

なお、本調査地点から出土したイヌのほとんどは、長谷部言人(1952)のサイズ分類では中小～中級、現生では小型にあたり、柴犬ぐらいの大きさである。

4. その他の脊椎動物

以上のほかには、カメ類の右上腕骨1点とカエル類の左腸骨が1点出土している。共に2面盛土層より出土している。

補遺 広島城跡国保会館地点出土の貝類遺体について

本調査地点より出土した貝類遺体については、同定のみを以てされた。同定の結果、11種の貝類遺体が出土している。以下に種名を記す。同定の結果は、写真①・②を参照されたい。なお、依頼されたもので写真を掲載しなかったものは、SK51出土のアカニシのみである。

さて、同定を依頼されたマガキは、左右各2点であった。観察の結果、左・右殻それぞれ同様の箇所に同様の破損が認められた。まず、左殻の後縁に、径約4mmの円形の破損が見られた。その円形の破損は、殻の内面の縁に剥離がみられることから、錐状の器具を外側から内側に向かって刺した際に付いたものと推定される。それに対して、右殻の内面後縁に剥離痕が見られた。左殻と右殻の破損の位置は、合わせたときにほぼ同じであることから、剥き身作業をおこなった際についたものと推定される。つまり、錐状の道具で左殻から刺し入れて、蓋である右殻を押し上げてはずした作業によって付いたものと推測される。

謝辞

本報告を行うにあたり、国立歴史民俗博物館及び同館の西本豊弘先生をはじめ、樋泉岳二、江田真毅、太田敦子、小林園子の諸氏には有益なご指導と多大なる御協力を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表したい。

参考文献

茂原信夫 1986 『東京大学総合研究資料館所蔵 長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ』東京大学総合研究資料館

樋泉岳二 2003 「明石町遺跡の魚類遺体群」『東京都中央区 明石町遺跡』明石町遺跡調査会 (p.172-180)

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2005 『埋蔵文化財ニュース 120 環境考古学5 鳥類骨格図譜』

長谷部言人 1952 「犬骨」『吉胡貝塚』文化財保護委員会 (p.145-150)

山内忠平 1958 「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第7号, 鹿児島大学農学部 (p.125-131)

Driesch 1976 A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University.

出土場所	分類群	部位	同一性	左右	数	備考
SK51	硬骨魚	同定対象外	硬状鱗棘		2	
SK51	硬骨魚	同定対象外	—		1	鰓弓部分。中型魚類のもの。
SK75	硬骨魚	同定対象外	—		1	鰓弓部分
SK75	硬骨魚	マダイ亜科	前上顎骨	右	2	共に完存。顎長(近遠方向):①44.01mm, ②27.69mm
SK75・78	硬骨魚	同定対象外	—		2	鱗、鰓破片。
SK75・78	硬骨魚	マダイ	前頭骨		1	全長:50±mm
SK75・78	硬骨魚	マダイ	上後頭骨		1	
SK75・78	硬骨魚	マダイ亜科	主上顎骨	右	1	後端部欠損。全長:40±mm
近世遺構1ベース層(東側)	硬骨魚	タイ科	主鰓蓋骨	右	1	
近世遺構2ベース層	硬骨魚	スズキ属	方骨	右	1	
近世遺構2ベース層	硬骨魚	タイ科	口蓋骨	左	1	
近世遺構2ベース層	硬骨魚	同定対象外	硬状鱗棘		1	
近世遺構2ベース層	硬骨魚	同定対象外	—		1	破片資料。
近世遺構2ベース層	硬骨魚	同定不可	角骨	右	1	関節部分などが欠損しているため、同定不可。
近世遺構2ベース層	硬骨魚	マダイ亜科	主上顎骨	右	1	完存。全長:34.38mm。
近世遺構2ベース層	硬骨魚	同定不可	腹椎		1	表面の摩滅が顕著なため、同定できず。フサカサゴ科のものに近似。椎体長:3.61mm

出土場所	分類群	部位	同一性	左右	数	備考
近世遺構2ベース層	爬虫	カメ類	上腕骨		1	
近世遺構2ベース層	両生	カエル類	腸骨		1	

出土場所	分類群	部位	同一性	左右	数	備考	
SK51	鳥	キジ科	橈骨	D	右	1	完存。ニワトリではない。
SK51	鳥	キジ科	尺骨	D	右	1	完存。ニワトリではない。
SK51	鳥	キジ科	足根中足骨	D	右	1	完存。ニワトリではない。
SK51	鳥	同定不可	手根中手骨		右	1	両骨端が欠損しているため、同定不可。中型鳥類。
SK75・78	鳥	カモ類	手根中手骨		左	1	近位端部欠損。

出土場所	分類群	部位	同一性	左右	数	備考	
SK50	哺乳	ネコ	脛骨		右	1	近位から骨幹中央まで欠損。遠位端最大幅:11.70mm
SK68	哺乳	イヌ	第2中足骨		左	1	遠位端欠損。
SK69	哺乳	同定対象外	四肢骨		1	破片資料。骨幹部分。	
SK90	哺乳	同定対象外	大腿骨		1	破片資料。中型。	
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	下顎骨	A	左	1	下顎枝部分欠損。(×××××P234M1×)※右下顎骨とは別個体。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	下顎骨	B	右	1	犬歯から第1後臼歯までの下顎体が残存。(////×P234M1/)※左下顎骨とは別個体。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	肩甲骨	A/B?	右	1	
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	上腕骨	A/B?	左	1	完存。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	上腕骨	A/B?	右	1	近位部分欠損。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	尺骨	A/B?	右	1	ほぼ完存。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	橈骨	A/B?	右	1	完存。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	橈骨	A/B?	左	1	近位から骨幹中央までが欠損。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	第5中手骨	A/B?	右	1	遠位端欠損。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	寛骨	A/B?	右	1	腸骨から寛骨臼までが残存。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	大腿骨	A/B?	右	1	遠位端欠損。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	踵骨	A/B?	左	1	完存。
近世遺構1ベース層(東側)	哺乳	イヌ	肋骨	A/B?		1	
近世遺構1ベース層(東側南壁付近)	哺乳	イヌ	上腕骨		左	1	両骨端が欠損。
近世遺構1ベース層(東側南壁付近)	哺乳	同定不可	上腕骨		右	1	近位から骨幹中央、さらに遠位端部が欠損しているため同定不可。シカ標本に近似。
近世遺構1ベース層(西側北壁付近)	哺乳	同定不可	肩甲骨		1	1	肩甲骨の一部とその周辺のみ。中型哺乳類。イヌ?
近世遺構2ベース層	哺乳	ネズミ類	歯		2		

表1 出土脊椎動物遺体一覧

近世遺構1ベース層 イヌ

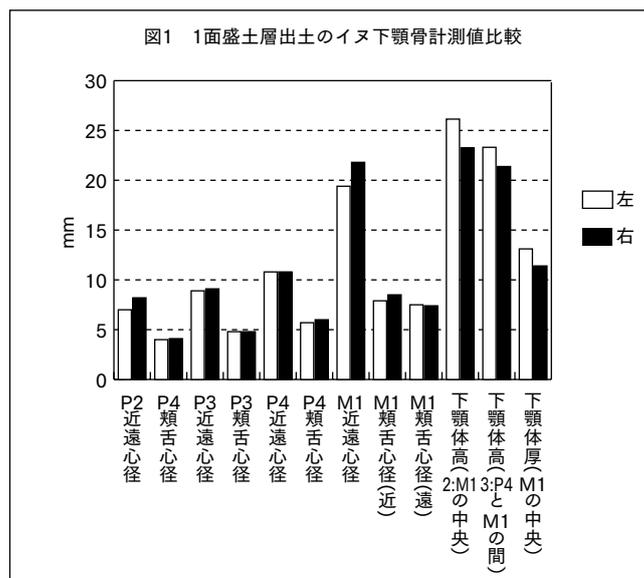
◎歯式及び歯冠計測表

◎下顎骨計測表

左/右	計測項目・等	I			C	P				M			計測箇所	計測値(mm)
		1	2	3		1	2	3	4	1	2	3		
左	歯式	/	/	/	×	×	6	7	8	9	×	/	下顎体高(1:M2の後)	27.52
	近遠心径						7.0	8.9	10.8	19.4			下顎体高(2:M1の中央)	26.14
	頬舌心径(M1:近)						4.0	4.8	5.7	7.9			下顎体高(3:P4とM1の間)	23.31
	頬舌心径(M1:遠)									7.5			下顎体厚(M1の中央)	13.11
	所見	P2とP3の歯間が4.08mm、P3とP4の歯間が1.09mmそれぞれ開く。また、P4の後端とM1の前端が重なる。												
右	歯式	/	/	/	/	/	6	7	8	9	×	/	下顎体高(2:M1の中央)	22.25
	近遠心径						8.2	9.1	10.8	21.8			下顎体高(3:P4とM1の間)	21.38
	頬舌心径(M1:近)						4.1	4.8	6.0	8.5			下顎体厚(M1の中央)	11.40
	頬舌心径(M1:遠)									7.4				
	所見	頬側のP4からM1の前半分の下顎体に極めて軽微であるが、歯周症による退縮が認められる。P3とP4の後側が頬側にずれており、さらに、P3の後端とP4の前端、P4の後端とM1の前端がそれぞれ重なっている。												

アラビア数字(例:4):永久歯あり, ×:歯脱落、歯槽は開放されたまま、/:顎体自体が欠損

表2-2 1面盛土層出土のイヌ下顎骨の歯式及び計測値



出土位置	部位	左右	計測箇所	計測値 (mm)	推定体高 (cm)	サイズ分類 (長谷部 1952)	備考	
近世遺構 1 ベース層一括 (東側)	上腕骨	左	全長	GL	135.1	43.09	中小~中	
			近位端最大幅	Bp	26.0			Driesch(1976)
			遠位端最大幅	Bd	22.6			茂原(1986)
			中央最小幅		10.5			
			中央最大幅		13.3			
		右	遠位端最大幅	Bd	27.2			
		中央最小幅		10.4				
		中央最大幅		12.7				
	橈骨	左	遠位端最大幅	Bd	19.0			
			遠位端最大矢状径	Dd	10.5			
		右	全長	GL	132.4	41.78	中	
			近位端最大幅	Bp	15.1			
			近位端最大矢状径	Dp	9.7			
			遠位端最大幅	Bd	19.2			
	遠位端最大矢状径	Dd	10.7					
	中央横径		9.7					
	中央矢状径		6.7					
	尺骨	左	全長	GL	141 ±	40	中小	
			近位幅	DPA	18.8			
			切痕中央矢状径		11.7			
寛骨	右	寛骨臼最大径	LA	18.5				
		腸骨最小幅		15.8				
		腸骨厚(最小幅位)		6.8				
大腿骨	右	全長	GL	143 ±	43	中小		
		近位端最大幅	Bp	30.6				
		中央横径		11.2				
		中央矢状径		11.0				
近世遺構 1 ベース層一括 (東側南壁付近)	上腕骨	左	全長	GL	137 ±	43		
			中央最小幅		13.0			
			中央最大幅		15.0			

表 2-2 近世遺構 1 ベース層出土のイヌ四肢骨計測表



① 貝類遺体(近世遺構 2 ベース層以外)

1. サザエ(無棘型)SK65 2. アカニシ SK120 3. イタヤガイ(右殻)SK65
4. イタヤガイ(左殻)SK75 5. アサリ(左殻)SK47



② 近世遺構 2 ベース層出土の貝類遺体

1. マガキ(左) 2. マガキ(右) 3. サルボウガイ(左) 4. シオフキガイ(左) 5. カガミガイ(左)
6. ハマグリ(左) 7. オキシジミ(左) 8. オオノガイ(左)



③ 魚類・両生類・爬虫類・鳥類遺体

1. スズキ属 方骨(右) 2. マダイ前頭骨 3. マダイ上後頭骨 5・6. マダイ亜科前上顎骨(右)
 7. カエル類 腸骨(右) 8. カメ類上腕骨(右) 9~11. キジ科(9. 尺骨(右) 10. 橈骨(右)
 11. 足根中足骨(左) 12. カモ類 手根中手骨(左) 13. 同定付加手根中手骨(右) 14. ネコ脛骨(右)
 1・7・8. 近世遺構2 ベース層 2・3・4・12. SK75・78 5・6. SK75 9・10・11・13. SK51
 14. SK50



① 近世遺構1 ベース層出土のイヌ遺体

1. 下顎骨(左) 2. 下顎骨(右) 3. 寛骨(右) 4. 肩甲骨(右) 5. 上腕骨(右) 6・7. 上腕骨(左)
 8. 尺骨 9. 橈骨(右) 10. 橈骨(右) 11. 大腿骨(右) 7. は東側南壁付近 それ以外は東側より出土

小泉 好延⁽¹⁾、原 祐一⁽²⁾、石原 道知⁽¹⁾

(1 武蔵野文化財修復研究所、(2 東京大学埋蔵文化財調査室

第1章 砥部焼の編年と特徴

1. 砥部における磁器生産

砥部町では、須恵器の窯跡が発見されており、古くから焼物の生産が行われていたことが知られている。「砥部焼」という呼称が文献に初めて見られるのは、元文五年（1740）に編纂された、大洲藩藩士、人見甚左衛門栄智の「大洲秘録」である。大洲藩政下の江戸時代、肥前から唐津系の製陶技術が取り入れられたとされる。昭和二十四年（1949）に行われた北川毛古窯跡から、陶製の徳利、茶碗、皿、鉢等が出土している。これらの陶器の文様はすべて鉄絵で描かれていることから、唐津系陶器との技術的な関連が指摘されている。砥部における磁器生産の開始は、明治二十八年伊達幸太郎著『愛媛県伊予国下浮穴郡砥部磁器業誌』の記載から、安永四年（1775）磁器生産開始、同六年（1777）、磁器焼成成功をもって磁器生産の創業とされてきた。昭和二十四年（1949）に行われた上原窯跡の発掘調査で、「安永九」銘の磁器片が出土したことから、創業年代が裏付けられたとされる。創業当時、磁器の素地は、外山産の伊予砥石の屑を材料として用いたが、後に、川登陶石の発見、素地改良により窯数が増加したとされる。山本典男氏は砥部焼（磁器）の時代区分とその特徴を、4期に区分している^(註1)。

第一期 創業期の砥部焼。

肥前の陶工が入り、砥石屑を原料として使用した磁器生産が開始される。

碗の形状特徴

- ① 高台の比較的小さく、厚手で蛇の目の重ね焼跡のある深型碗（タイプB）
- ② 高台の上が角が付いている碗（タイプE）
- ③ 平たく深い八高台になっている碗（タイプA）
- ④ 平たく広がっている高台の小さい碗（タイプC）
- ⑤ 高い高台の広東碗（タイプD） など。

第二期 幕末量産期の砥部焼。

川登陶石を発見、素地改良、窯数が増加。

碗の形状特徴

- ⑥ 小降りの反り型の小碗の形（Fタイプ）

高い高台の広東碗⑤に加えて、⑥が次第に主流になってくる。

第三期 明治初期～中期の砥部焼

旧来の天然呉須に対し、明治七・八年（1874・1875）頃より、西洋コバルトがドイツから導かれる。

松前の唐津船によって西日本各地に販売。

第四期 明治中期～昭和初期の砥部焼



資料 1. 上原窯出土碗



資料 2. 広島城跡国保会館地点出土碗



資料 3. 上原窯出土碗



資料 4. 広島城跡国保会館地点出土碗



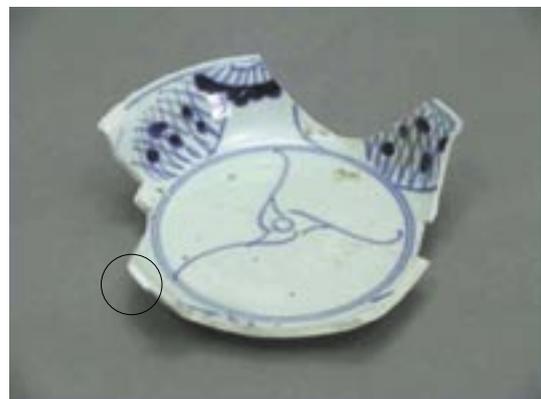
資料 5. 越智窯出土碗



資料 6. 広島城跡国保会館地点出土碗



資料 7. 越智窯出土皿



資料 8. 広島城跡国保会館地点出土皿

写真 1 出土資料とサンプル位置



資料9. 久谷窯出土碗



資料10. 広島城跡国保会館地点出土碗

写真2 出土資料とサンプル位置

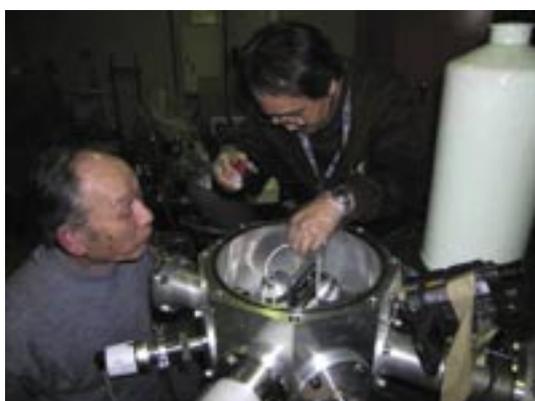


写真3 PIXE分析チャンバー

表1 分析試料一覧 () 復元値、計測値は最大値

資料 番号	出土地点・ 遺構	器種	分析試料 番号	口径	底径	器高	備考
1	上原窯	碗	上原窯 碗 1	-	3.9	6	変形大
2	広島城跡 HKHS SV2	碗	広島城跡 碗 1	(10.5)	(4.1)	5.7	
3	上原窯	碗	上原窯 碗 2	-	-	-	
4	広島城跡 HKHS SV2	碗	広島城跡 碗 2	-	4	5.3	釉薬は白色に変色。釉薬を除いた染付 の色は、青色。
5	越智窯	碗	越智窯 碗 3	-	3.9	5.8	変形大
6	広島城跡 HKHS SV2	碗	広島城跡 碗 3	-	-	-	
7	越智窯	皿	上原窯 皿	(13.8)	6.8	4.8	染付の発色は他の遺物に比べ青みを帯 びる。
8	広島城跡 HKHS SV2	皿	広島城跡 皿	(13.6)	6.6	4	染付の発色は他の遺物に比べ青みを帯 びる。
9	久谷窯	碗	久谷窯 碗 4	11.1	4	5.9	帯状の轆轤線は、黒ずんだ青の発色。
10	広島城跡 HKHS SV2	碗	広島城跡 碗 4	-	-	-	

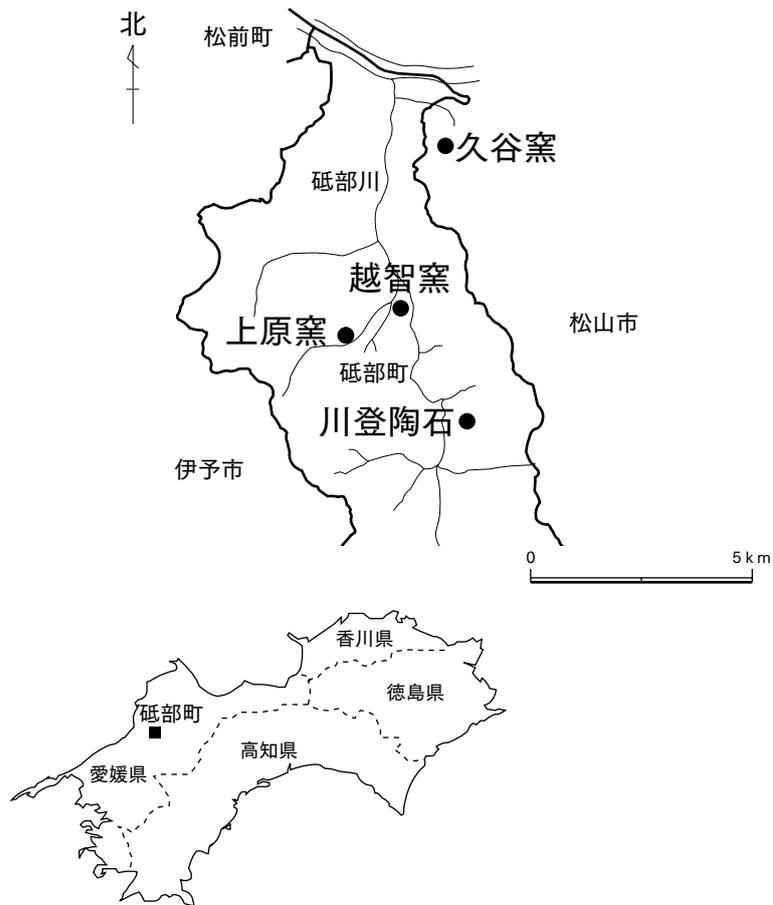


図1 上原窯・越智窯（砥部町）、久谷窯（松山市）の位置
 砥部市教育委員会編1969『砥部焼の歴史』砥部焼歴史研究会発行 掲載図p.57・60、
 山本典男1989『砥部焼の歴史研究シリーズ第一報 砥部七折窯の研究』
 砥部焼伝統産業会館 掲載図p.2 他より作成。

肥前から型紙絵付け技法導入。中国東南アジア向けの貿易品製造。

2. 分析資料（写真1・2、表1、図1）

分析資料は、砥部の染付磁器で、器種は碗8点、皿2点である。碗は端反碗で、「⑥小降りの反り型の小碗の形（Fタイプ）」である。碗の外面には、轆轤線の間、幾何学文様、草花文が描かれている。資料5の見込みは、蛇ノ目釉剥がされている。皿は口縁部が端反る。高台は、蛇の目凹形高台である。分析資料の製造年代は、「第二期 幕末量産期の砥部焼以降」の製品と考えられる。

a. 広島城跡国保会館地点出土資料

出土した磁器5点は、広島城跡国保会館地点、SV2溝状遺構から出土した。溝状遺構は、江戸時代の武家屋敷跡地に構築された溝である。出土資料は、溝に一括廃棄された遺物で、他の出土磁器のほとんどは砥部製磁器であった。遺物の年代は、幕末から明治時代と推定される。調査地点が位置する周辺部に、明治八年（1875）6月、陸軍の「練兵場」が設置されたことから、SV2は、「練兵場」に関連する遺構と推定される。

b. 窯跡表採資料

分析を行った資料は、上原窯・越智窯（愛媛県伊予郡砥部町）久谷窯（松山市）、各窯跡の表採資料である。分析資料5点は、広島城出土磁器と同一器種、同一文様の資料を抽出した。以下に各窯について述べる^{（註2）}。

・上原窯（現砥部町）

五本松、上原の大登窯。磁器生産窯では砥部最古で、安永六年（1777）、砥部磁器創始者の杉野丈助が磁器生産に成功するまでは大洲藩窯で、磁器焼成に成功すると、門田金治が藩から窯を拝領、民営となった。拝領窯と呼ばれた。拝領後も大洲藩より歴代藩の保護奨励を受け、藩の調度品、贈答用磁器も生産していた。昭和四年（1929）廃業。

・越智窯（現砥部町）

大南村の庄屋越智家が開いた大登窯。創業は御旅窯（寛政十二年（1800））と同時代と推定されている。越智家は明治になって事業を拡大したが、明治十八年頃廃業。

・久谷窯（現松山市）

享保頃、砥部に隣接する久谷村窪野で陶器が生産されたという。幕末には同村出口において磁器が焼かれた。出土資料には上原窯初期の染付け磁器に似た碗、皿がある。砥部岩谷口村旧庄屋日野家の唐津役所の記録に檣灰、絵薬などを砥部から久谷に出荷した記録がある。

第2章 広島城跡、上原窯・越智窯（砥部町）久谷窯出土磁器の成分分析

広島城跡、上原窯・越智窯（砥部町）久谷窯（松山市）出土の染付磁器10試料の成分分析を行った。分析方法は非破壊のPIXE分析を用いた。分析において注目した点は染付に用いられた絵具の成分を明らかにすることである。中国では青花、日本では染付と呼ばれ、白磁の釉下に青、紺青色の文様が描かれた磁器である。染付絵具は呉須と呼ばれ、コバルト、マンガン、鉄などを主成分とする。呉須に天然鉍物を用いたとすれば、コバルト濃度が高くマンガン濃度に低いコバルト鉍物と、

マンガン濃度が高く、コバルト濃度が低いマンガン鉱物の2種類が存在する。いずれも鉄成分を含有する鉱物である。分析した広島城跡出土の染付磁器の製造年代が明らかでないことから、近代の精製技術によって作られた絵具が使用された可能性も否定できない。これらの点も留意して分析を行った。分析はPIXE法による非破壊分析のため表面の各試料の釉薬を部分的に剥離、あるいは薄く研磨し、素地、釉薬、染付部別に分析を行った。

1. 分析方法

非破壊分析法であるPIXE分析法を使用した。この分析法は荷電粒子励起X線分析、Particle Induced X-ray Emissionを略してPIXE分析法と呼ばれている。加速器により陽子や α 粒子を高エネルギーに加速し、分析試料に照射して、試料の含有元素から発生する特性X線のエネルギースペクトルを半導体型放射線検出器で測定する非破壊分析法である。PIXE分析法の特長は試料破損が無く放射線による着色が少ないこと、多元素を同時に分析できることにある。

本分析では加速器による照射エネルギーと粒子が3MeVのプロトン、照射ビーム径は2.0mm、照射電流値は0.5～1ナノアンペア(nA)、照射電荷量200～1000ナノクーロン(nC)である。X線検出器は高純度Si半導体検出器とCZT半導体検出器の両者を同時に使用し、特性X線のエネルギースペクトル(PIXEスペクトル)解析から各成分の同定を行った。用いた標準試料はNBS-611,621,1411などである。

2. 分析試料と前処理

試料の前処理は、広島城出土 碗4、皿1、上原窯 碗2、越智窯 碗1皿1、久谷窯 碗1(表1、写真1・2)から染付部分を含む10mm×15mmサイズを採取し試料とした。各試料片は素地、釉薬、染付絵具の分析のため、染付の無い部分の釉薬を完全に剥離し、染付部分の釉薬表面を薄く研磨した。試料はエタノール:蒸留水 1:1の溶液、超音波洗浄器を用い、3分間洗浄の後、エタノール液で流し洗浄、真空乾燥を経て、PIXE分析ホルダーに装着した。試料の詳細は1章に示した通り、広島城跡出土の染付碗、皿と上原窯、越智窯、久谷窯から出土した類似した器形、絵文様をもつ碗、皿である。

3. 分析結果と考察

分析の結果、得られた高純度Si半導体検出器とCZT半導体検出器のPIXEスペクトルを図2～5に示した。PIXEスペクトル図には検出された主な元素を各ピーク上に記した。横軸は各元素が示す特性X線エネルギー、縦軸は指数で表示された計数値である。

分析結果は各試料の染付部、釉薬、素地別に組成の相対濃度として表2～4に示した。素地、釉薬は素地、釉薬のみを採取して粉碎均一化を行っていないため相対濃度としたが、比較的均一と考えられること、分析が径2mmで行われたことからかなり定量値に近いと思われる。絵具の呉須によって青、紺青色を呈する染付部は、文様であることから絵具の濃淡があり、さらに素地と釉薬、絵具の呉須が溶融したもので均一ではない。そのため染付部の分析値は絵具と釉薬と素地が混入し

た相対濃度である。なお、釉薬の影響を少なくするため染付部の表面釉薬を薄く研磨した部分と釉薬を全く研磨しない場合の両方の分析も行った。釉薬を研磨しない場合は表面釉薬の影響を受けたため、釉薬を研磨した場合のみ相対濃度を示した。

4-1. 染付部

表面釉薬を研磨した染付部分の相対濃度表 2 と Si 半導体検出器の PIXE スペクトル図からわかるように、広島城跡出土の碗 1.2.3 と上原窯、越智窯、久谷窯出土碗の染付部は、MnO（マンガン酸化物）、Fe₂O₃（鉄酸化物）、CoO（コバルト酸化物）の濃度比較では、いずれも素地や釉薬に比べて MnO 濃度が高い。CoO 濃度は広島城跡出土の碗 4 がやや高い値を示したが、それ以外の試料では CoO 濃度が MnO 濃度の 3～8 パーセントである。したがって、染付絵具の呉須はコバルトを少量含むマンガン鉱物系が使われていると考えられる。

一方、広島城跡出土皿と越智窯出土皿の染付部は MnO、Fe₂O₃、CoO の濃度比較で、いずれも MnO 濃度が低く、CoO 濃度が極めて高い。CoO/Fe₂O₃ 比は碗が 0.05～0.21 に対し皿では 0.74～1.0 となった。また、皿染付部の MnO 濃度は釉薬や素地に含まれる値に近い。これらに結果から皿の染付に用いられた呉須はマンガン鉱物系では無く、MnO 濃度の低いコバルト鉱物系かあるいは精製されたコバルトが用いられたと思われる。なお、極めて微量であるが CoO 濃度の 10% 前後の NiO が検出された試料と微量の As（砒素）が検出された試料もある。

4-2. 釉薬

当然のことであるが釉薬は着色に影響を与えるマンガン濃度は低く、コバルトは検出限界値以下であり、CaO（カルシウム酸化物）濃度は 7.8～10.6wt% と高い。近年の磁器に熔融しやすくなるためにバリウム（Ba）が用いられる場合があるが、検出された Ba、Sr は極微量であり、いずれも Ca の同類元素であることから CaO 成分の不純物であろう。

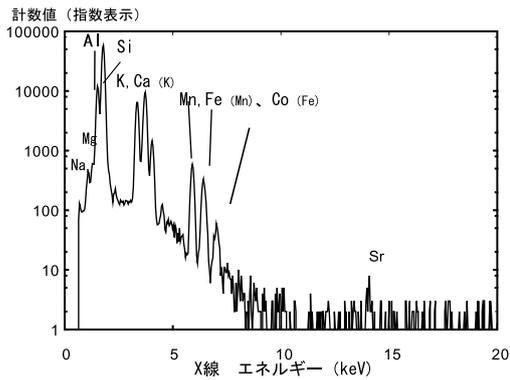
4-3. 素地

主成分である SiO₂、Al₂O₃ の合計相対濃度は 92.2～94.4 である。広島城跡出土と上原窯、越智窯、久谷窯の碗、皿、共に大きな濃度の差異は無い。Fe₂O₃ も多くは 1.5 前後である。着色に影響を与える MnO は低く、CoO は検出限界値以下である。

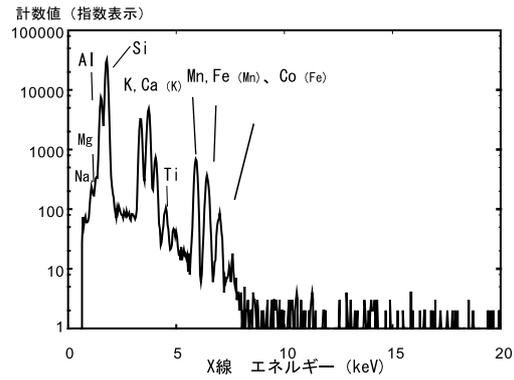
5. 結論

広島城跡、上原窯、越智窯（砥部町）久谷窯（松山市）出土の染付磁器 10 試料を分析した結果、広島城跡出土碗と各窯出土碗でいずれも染付絵具である呉須にマンガン、鉄に少量のコバルトを含むマンガン鉱物系が使用されている。また、広島城跡出土皿と越智窯出土皿はいずれもコバルト濃度が高く、鉄、コバルトを主成分とするコバルト鉱物系、あるいは精製されたコバルトが用いられたと思われる。

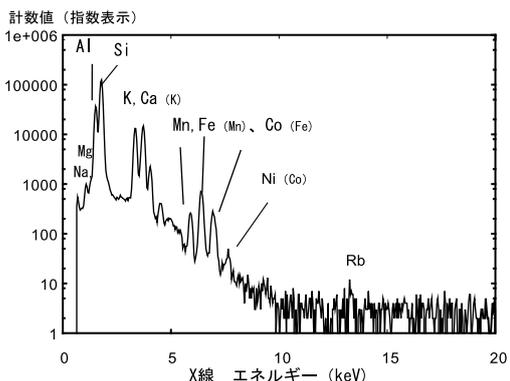
素地、釉薬では広島城跡出土と各窯出土碗、皿の成分組成に大きな差異が無く、染付絵具の呉須



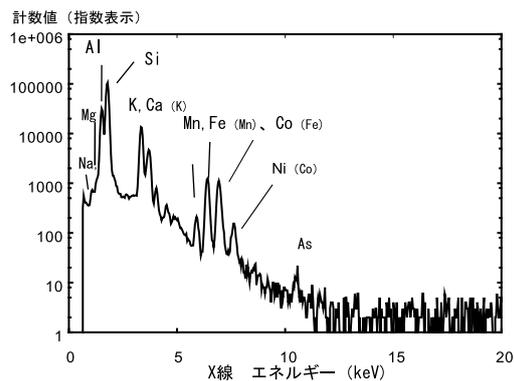
広島城跡 碗1 (試料番号2) 染付部 (釉薬研磨)



上原窯 碗1 (試料番号1) 染付部 (釉薬研磨)

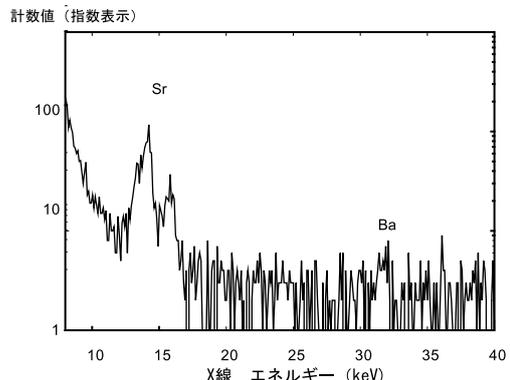


広島城跡 皿 (試料番号8) 染付部 (釉薬研磨)

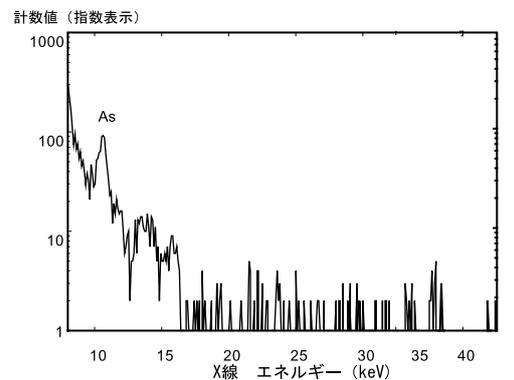


越智窯 皿 (試料番号7) 染付部 (釉薬研磨)

図2 PIXEスペクトル 染付部分 Si検出器

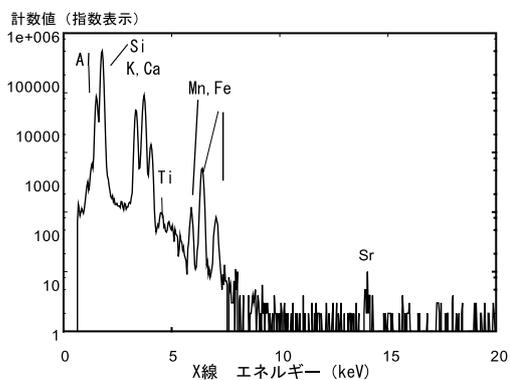


広島城跡 皿 (試料番号8) 染付部 (釉薬研磨なし)

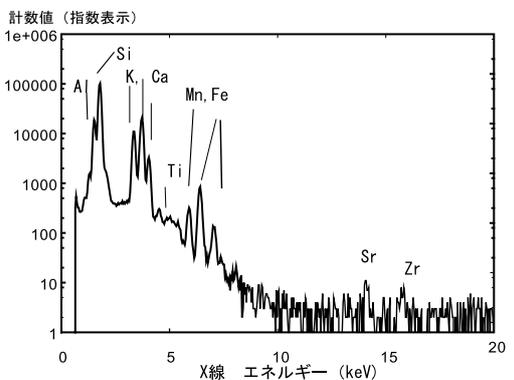


越智窯 皿 (試料番号7) 染付部 (釉薬研磨)

図3 PIXEスペクトル 染付部分 CZT検出器



広島城跡 皿 (試料番号8) 釉薬 (染付無)



越智窯 皿 (試料番号7) 釉薬 (染付無)

図4 PIXEスペクトル 釉薬部分 Si検出器

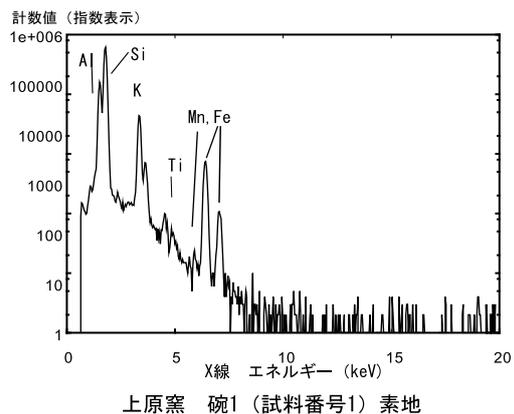
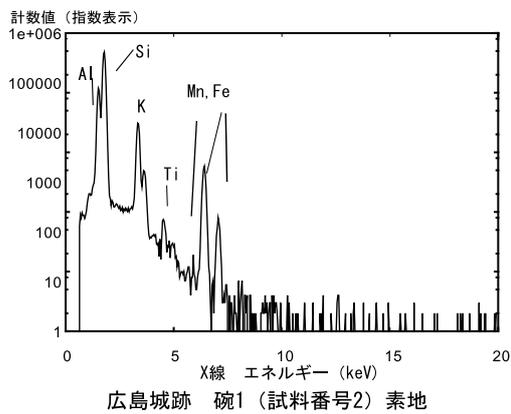
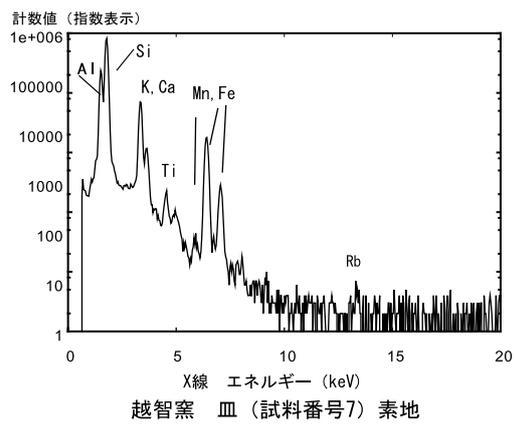
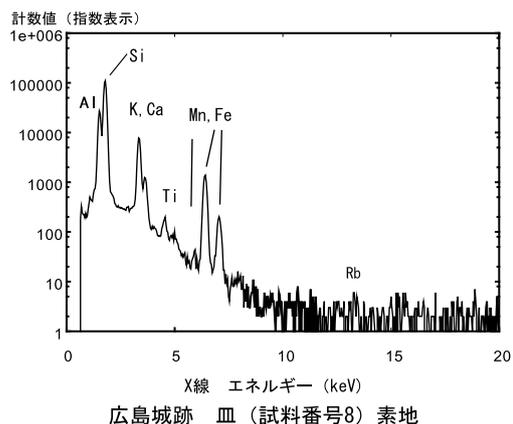


図5 PIXEスペクトル 素地部分 Si検出器

表2 広島城跡出土磁器と砥部焼磁器(上原窯・越智窯・久谷窯)の染付部分 定性分析(相対値)

試料名	試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	NiO	MnO/ Fe ₂ O ₃	CoO/ Fe ₂ O ₃	CoO/ MnO
広島城跡 碗1	2	1.4	1.0	13.9	69.0	5.0	8.3	0.05	0.94	0.53	0.03	n.d	1.8	0.05	0.03
広島城跡 碗2	4	0.8	1.1	14.3	58.9	5.1	12.2	0.13	5.08	1.91	0.39	0.04	2.7	0.21	0.08
広島城跡 碗3	6	1.3	0.8	14.8	63.6	5.4	3.3	0.34	6.60	3.46	0.41	0.01	1.9	0.12	0.06
広島城跡 皿	8	1.1	0.6	18.9	67.6	4.6	5.7	0.14	0.16	0.58	0.59	n.d	0.3	1.00	3.69
広島城跡 碗4-1	10	0.8	0.9	13.1	67.8	4.2	10.3	0.09	1.61	0.75	0.30	0.02	2.2	0.40	0.19
広島城跡 碗4-2	10	1.2	1.1	13.5	67.3	4.2	9.7	0.11	1.73	0.82	0.41	0.04	2.1	0.50	0.24

上原窯 碗1	1	1.2	0.9	15.3	67.4	4.4	7.5	0.19	2.03	0.89	0.13	n.d	2.3	0.15	0.06
上原窯 碗2	3	1.6	0.8	15.0	69.8	5.5	4.3	0.05	1.88	1.04	0.15	n.d	1.8	0.15	0.08
越智窯 碗3	5	1.0	1.3	14.0	64.0	4.8	10.1	0.12	3.21	1.24	0.23	n.d	2.6	0.19	0.07
越智窯 皿-1	7	0.5	0.4	19.8	69.3	5.8	1.6	0.09	0.15	1.26	0.93	n.d	0.1	0.74	6.42
越智窯 皿-2	7	0.8	0.8	19.8	68.7	5.6	1.7	0.16	0.14	1.26	0.98	0.01	0.1	0.77	7.07
久谷窯 碗4	9	0.6	1.2	15.4	59.4	5.0	6.7	0.20	8.21	2.88	0.39	0.07	2.9	0.14	0.05

表3 広島城出土磁器と砥部焼磁器(上原窯・越智窯・久谷窯)の釉薬 定性分析(相対値)

試料名	試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	MnO/ Fe ₂ O ₃
広島城跡 碗3	6	1.1	1.1	13.2	70.2	5.3	7.8	0.10	0.20	1.1	n.d	0.18
広島城跡 皿	8	0.9	1.1	11.6	71.0	4.6	9.4	0.07	0.16	1.2	n.d	0.14
広島城跡 碗4	10	0.7	0.6	13.3	70.4	4.9	8.6	0.10	0.14	1.2	n.d	0.11

越智窯 碗3	5	1.8	2.0	13.2	66.1	5.0	9.1	n.d	0.35	2.4	n.d	0.15
越智窯 皿	7	0.5	1.4	12.1	69.4	4.8	10.6	0.07	0.26	0.8	n.d	0.33
最大値		1.8	2.0	13.3	71.0	5.3	10.6	0.1	0.3	2.4	-	0.33
最小値		0.5	0.6	11.6	66.1	4.6	7.8	n.d	0.1	0.8	-	0.11

表4 広島城跡出土磁器と砥部焼磁器(上原窯・越智窯・久谷窯)の素地 定性分析

試料名	試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	MnO/ Fe ₂ O ₃
広島城跡 碗1	2	1.0	n.d	18.0	76.4	3.1	n.d	n.d	n.d	1.4	n.d	-
広島城跡 碗2	4	0.4	0.5	17.5	76.4	3.4	0.04	0.08	n.d	1.5	n.d	-
広島城跡 碗3	6	0.8	0.7	19.4	74.0	3.4	0.02	0.06	n.d	1.7	n.d	-
広島城跡 皿	8	0.6	0.5	18.0	75.8	3.4	n.d	0.07	0.02	1.5	n.d	0.01
広島城跡 碗4	10	0.7	n.d	16.7	76.6	4.0	0.04	0.06	0.02	2.0	n.d	0.01
最大値		1.0	0.7	19.4	76.6	4.0	0.04	0.08	0.02	2.0	n.d	0.01
最小値		0.4	n.d	16.7	74.0	3.1	n.d	n.d	n.d	1.4	n.d	-

上原窯 碗1	1	0.9	n.d	18.9	75.2	3.4	0.02	0.08	0.02	1.5	n.d	0.01
上原窯 碗2	3	0.9	0.6	21.2	72.2	3.6	0.04	0.09	0.02	1.3	n.d	0.01
越智窯 碗3	5	0.7	0.6	17.7	75.8	3.7	0.02	0.08	0.03	1.5	n.d	0.02
越智窯 皿	7	0.4	0.7	19.6	72.6	3.9	0.03	0.17	0.03	2.6	n.d	0.01
久谷窯 碗4	9	0.6	0.6	17.8	74.9	3.6	n.d	0.06	0.02	2.5	n.d	0.01
最大値		0.9	0.7	21.2	75.8	3.9	0.04	0.17	0.03	2.6	n.d	0.02
最小値		0.4	0.6	17.7	72.2	3.4	n.d	0.06	0.02	1.3	n.d	0.01

n.d= 検出限界値以下

も碗にマンガン鉱物系、さらに皿にはコバルト鉱物系あるいは精製コバルトが用いられていることから、広島城跡出土の染付磁器はこれらの窯で製作された可能性が高いと思われる。なお、皿に用いられた呉須は、精製されたコバルトが明治初期に外国からもたらされたことが明らかであること、皿の製作された年代が明らかでないことから、天然鉱物のコバルト鉱物系か精製されたコバルトかの判断は出来ない。今後、染付皿の製作年代が明治初期以前であることが確定されれば染付にコバルト鉱物系が用いられたことが明らかとなる。

註

1. 山本典男 1995「特別寄稿 砥部焼製品の歴史の変遷とその特徴について」砥部焼文化研究会編『古砥部陶片文様集』pp.6-9
2. 砥部町教育委員会編 1969『砥部焼の歴史』砥部焼歴史研究会発行 pp.66-68、87-88、51

参考文献

- 工學會 1925「第八章 窯業、第一節 陶磁器、第一 地方略誌、(九) 四国地方」『明治工業史 化学工業篇』pp.365-366
- 伊予陶磁器協同組合 1977『砥部』
- 加藤唐九郎編 1980『原色陶器大辞典』(第13版) 株式会社淡路交社
- 山本典男 1986『砥部磁器史(上)』里の会発行
- 砥部焼伝統産業会館編、資料提供 山本典男 1997『砥部焼歴史資料(第一集)』砥部焼伝統産業会館発行
- 砥部町教育委員会 1898『砥部焼のしおり』砥部町発行
- 角川書店 2002『角川日本陶磁大辞典』
- 佐々木達夫 1985『元明時代窯業史研究』吉川公文館発行
- 大西政太郎 1988『陶工の技術』理工学社発行
- 田賀井秀夫 1974『入門 やきものの科学』共立出版発行

圖 版

図版 1



a. 近現代以降 全景（西より）



b. 近現代以降 全景西側（北より）



a. SB2・3 検出状況（南より）



b. SB2・3 検出状況（北より）

図版3



a. SK1 礫検出状況（西より）



b. SK1 東西断面（南より）



c. SK2 礫検出状況（西より）



d. SK2（東より）



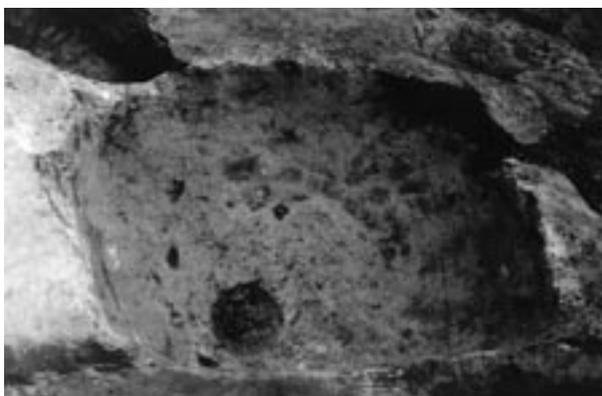
e. SK3 礫検出状況（西より）



f. SK3（南より）



g. SK4（南より）



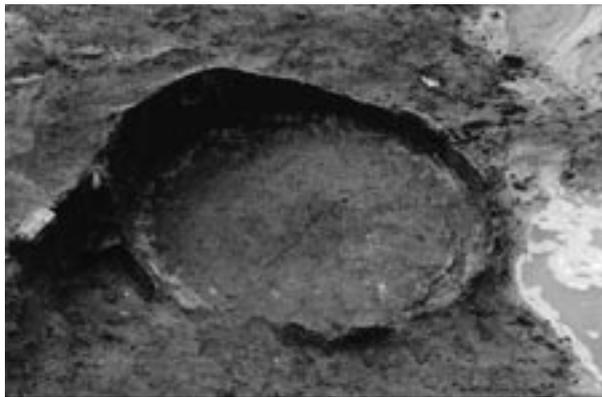
h. SK15（南より）



a. SK17 検出状況 (東より)



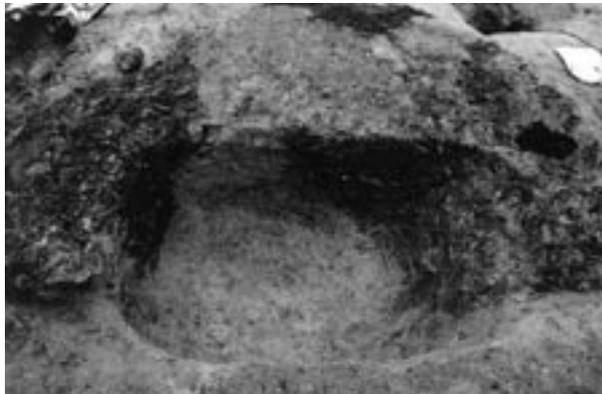
b. SK17 南北断面 (東より)



c. SK17 (東より)



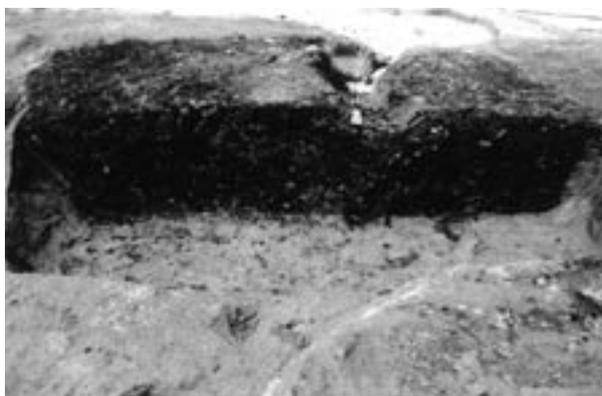
d. SK18 (南より)



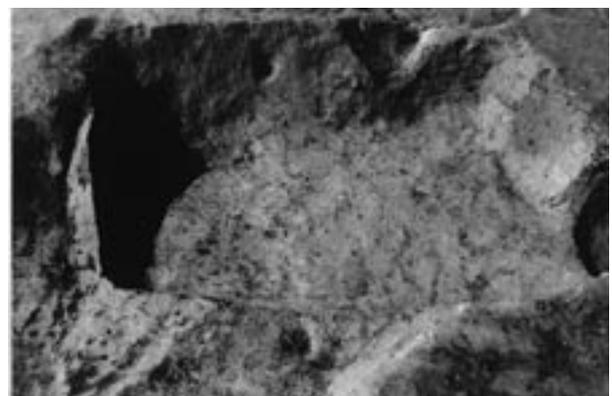
e. SK8 (南より)



f. SK10 (南より)



g. SK11 東西断面 (南より)



h. SK11 (南より)

図版 5



a. SK12 (南より)



b. SK14 東西断面 (北より)



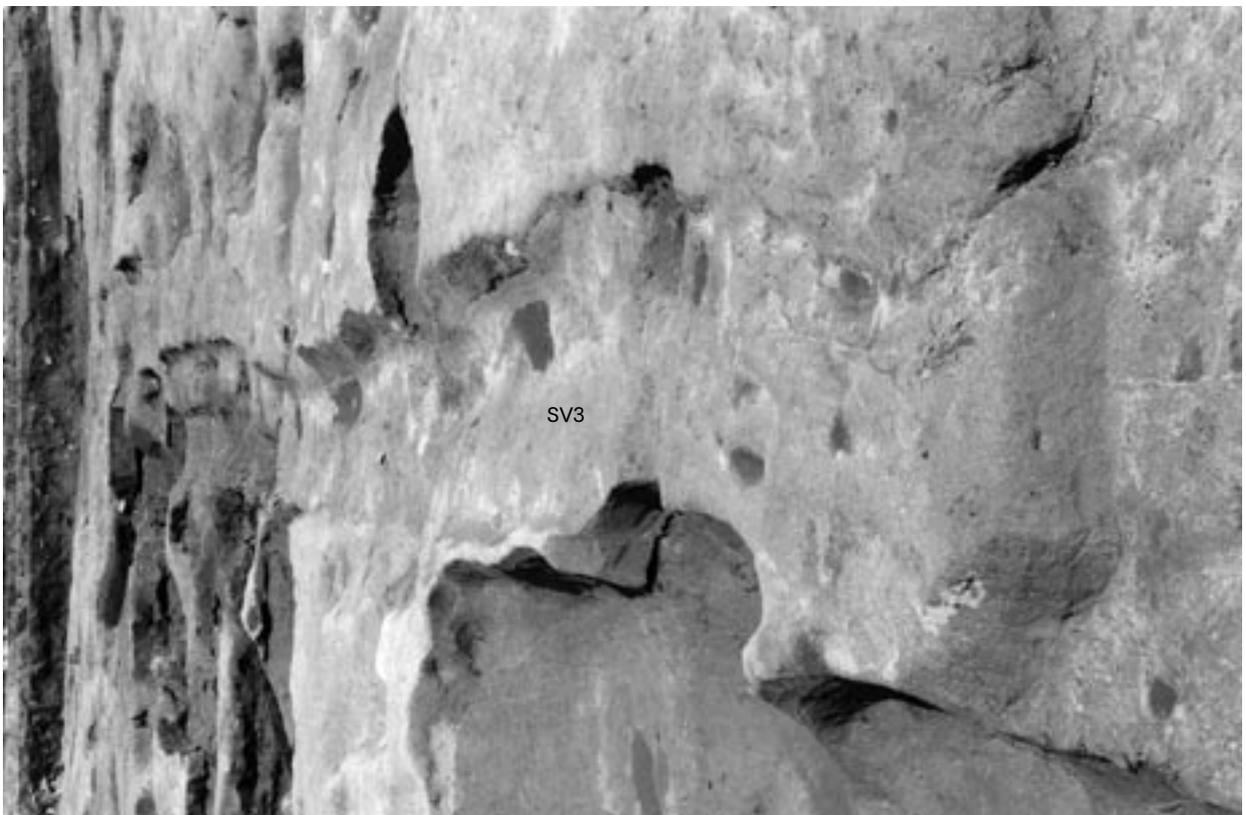
c. SK14 (南より)



d. SK20 (西より)



a. SK21 南北断面（東より）



b. SV3 西部（西より）

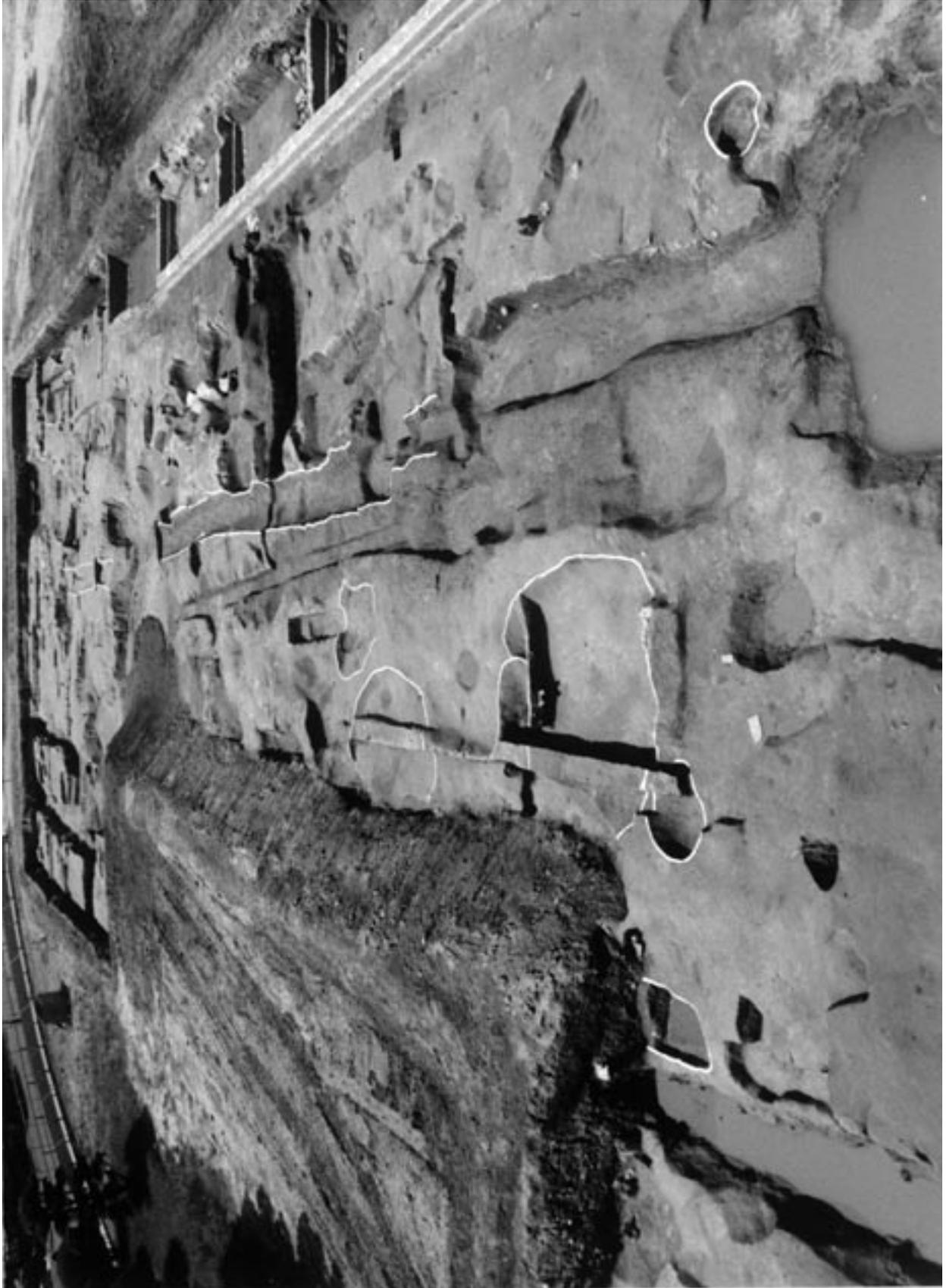
図版 7



a. SV1・SV2 (北より)



b. SV1・SV2 (南より)

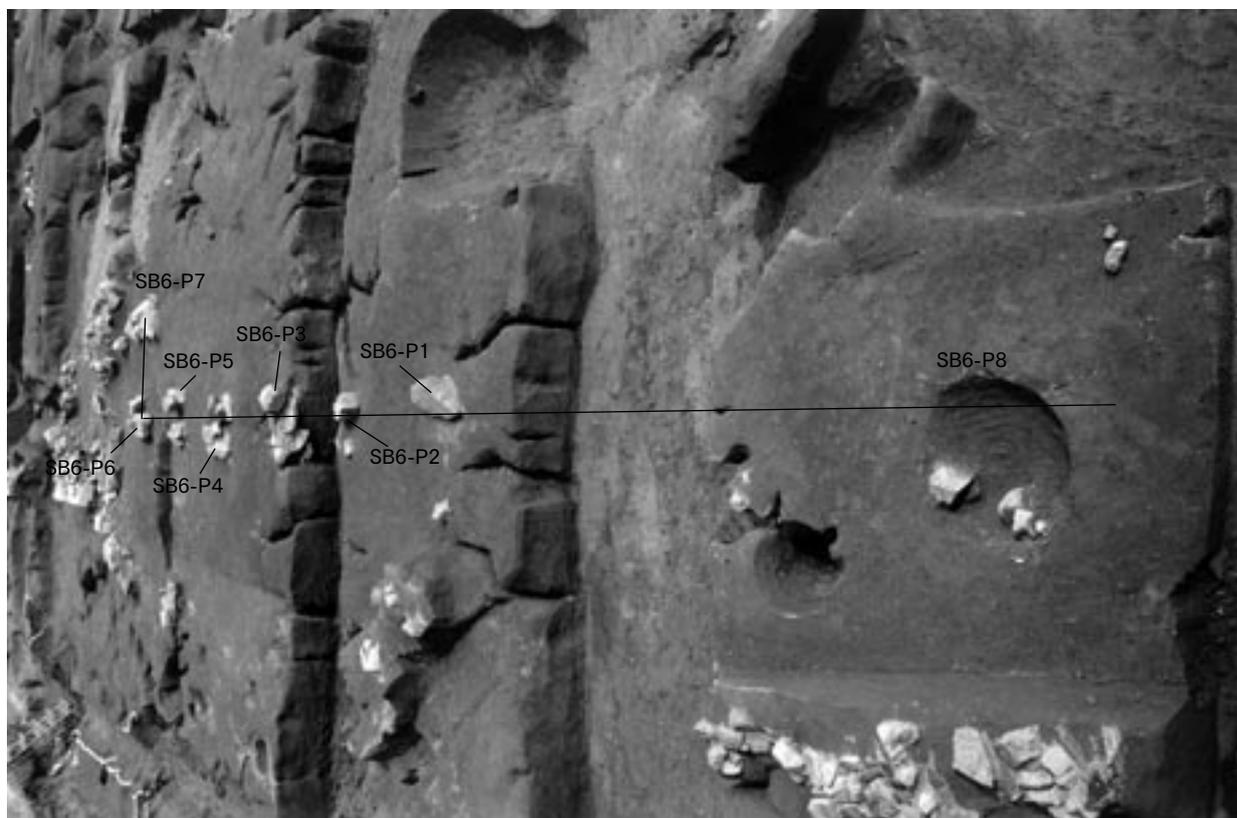


近世遺構 1 全景（東より）

図版 9



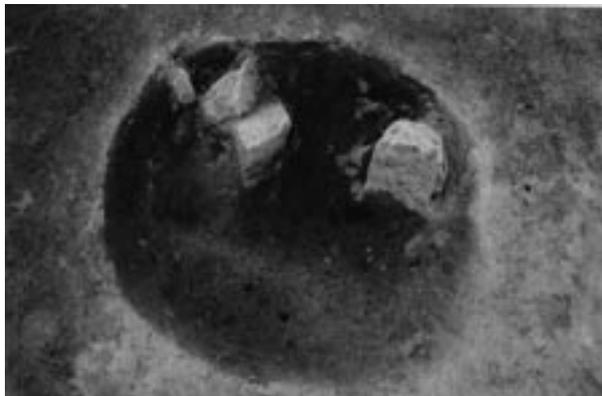
a. SB5 (北より)



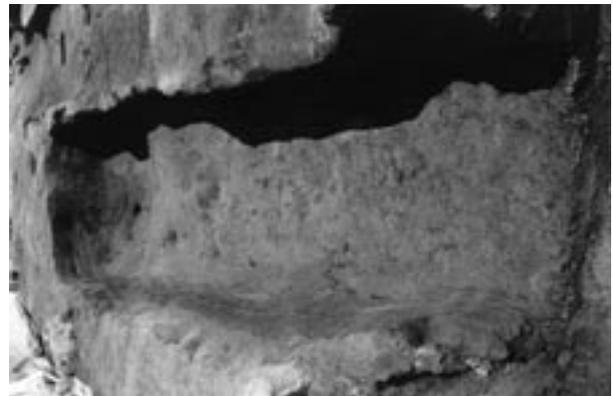
b. SB6 (南より)



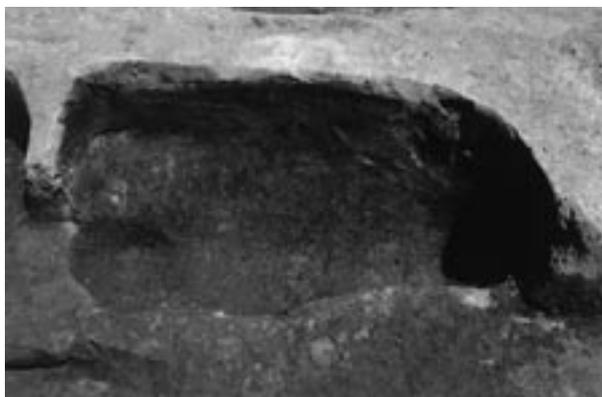
a. SB5・6 (北より)



b. SB6 - P8 (東より)



c. SK26 (南より)



d. SK28 (西より)



e. SK29 (南より)

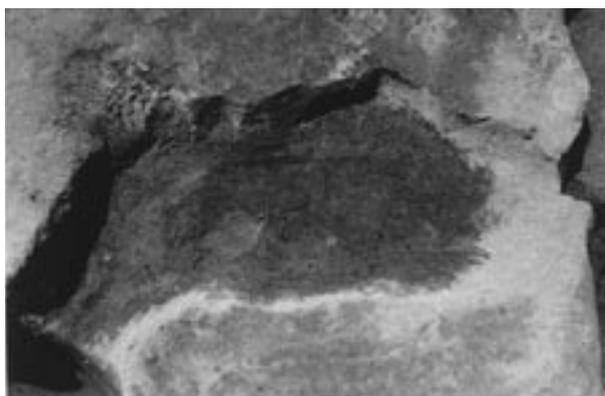
図版 11



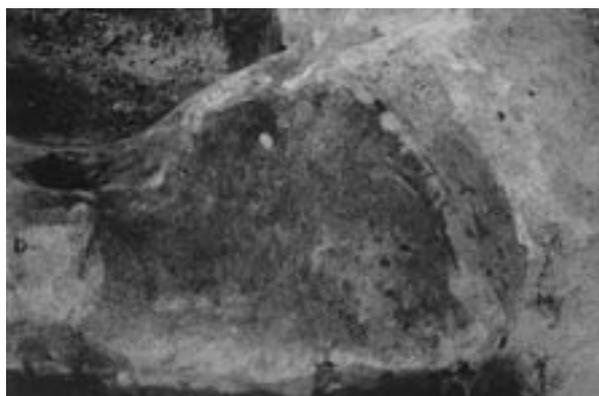
a. SK30 (南より)



b. SK31 (西より)



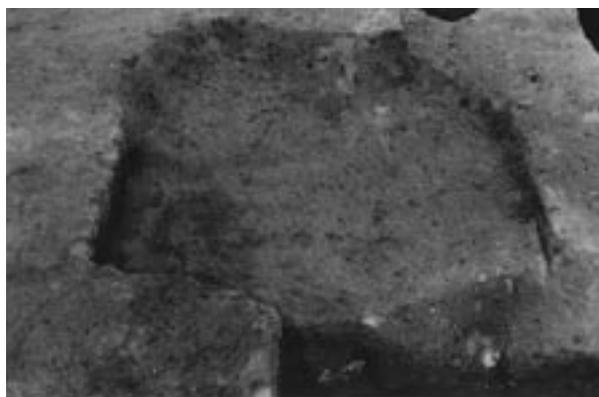
c. SK32 (東より)



d. SK33 (南より)



e. SK34 (南より)



f. SK35 (東より)



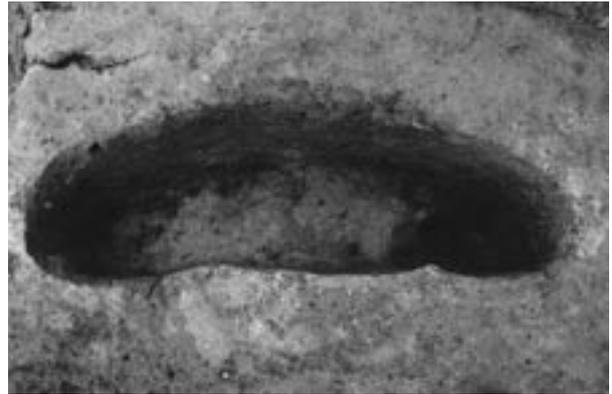
g. SK36 (東より)



h. SK37 (北より)



a. SK39 (北より)



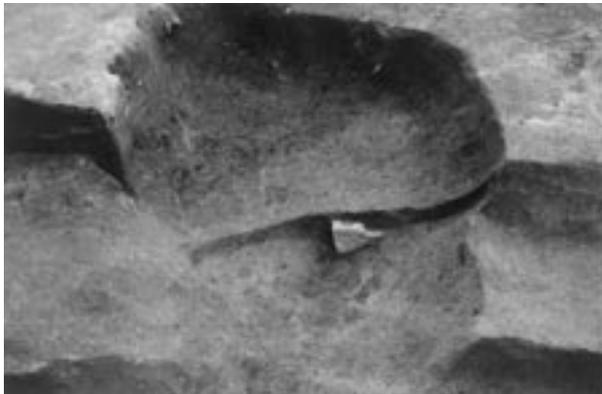
b. SK40 (南より)



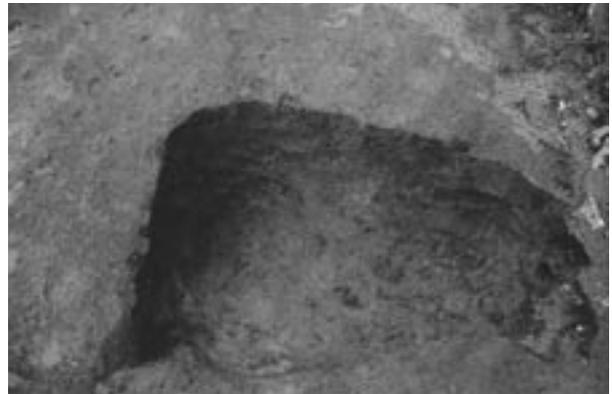
c. SK41 (西より)



d. SK42 (西より)



e. SK44 (北より)



f. SK46 (南より)



g. SK47 (北より)



h. SK48 礫検出状況 (北より)

図版 13



a. SK51 東西断面（北より）



b. SK51（南より）



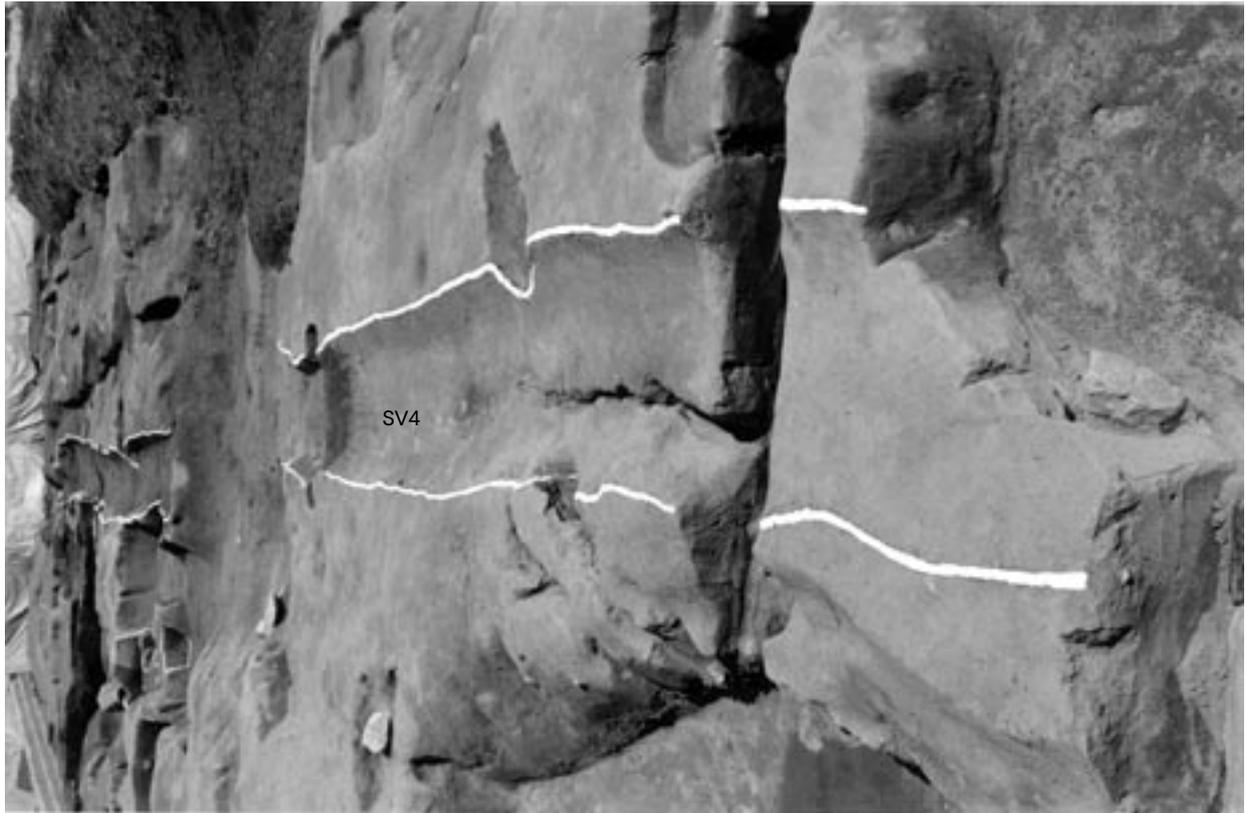
c. SK52（北より）



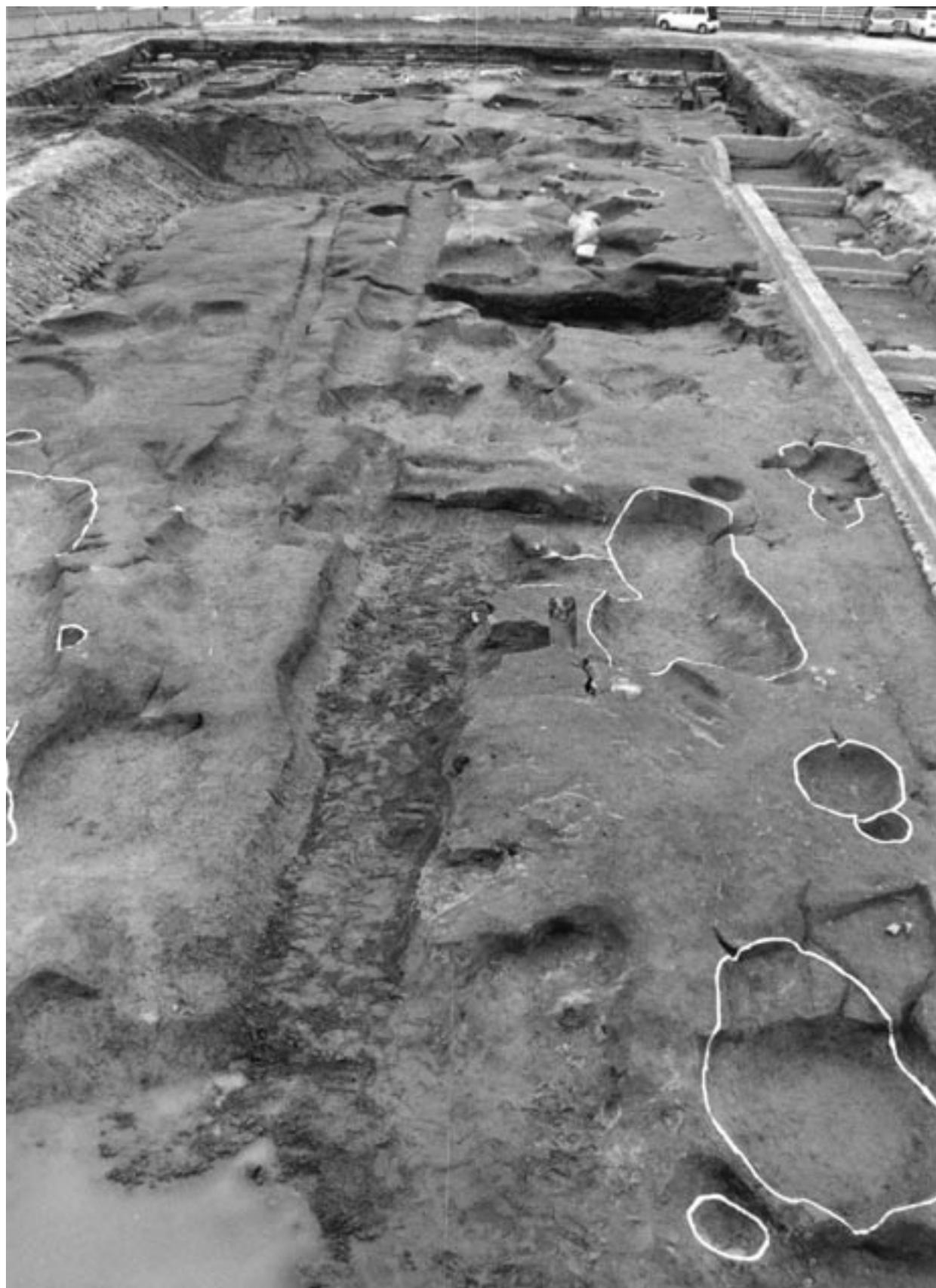
d. SK53（北より）



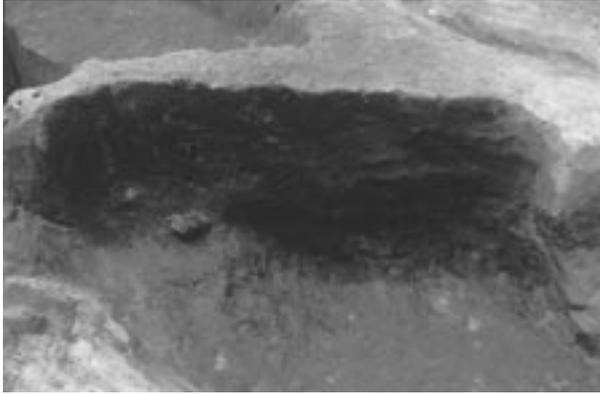
e. SK54（東より）



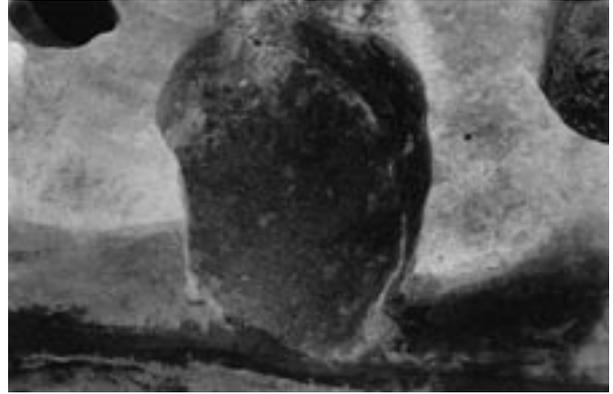
a. SV4 (西より)



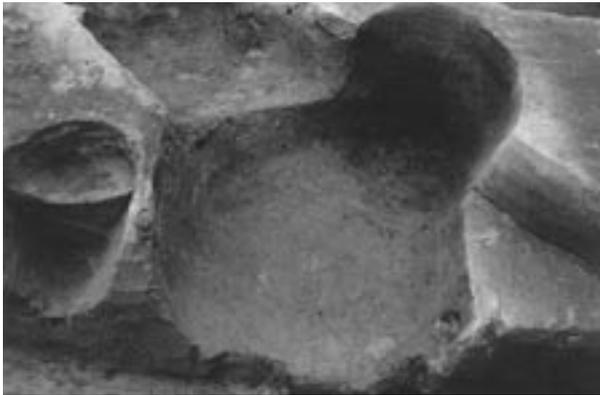
近世遺構 2 全景（東より）



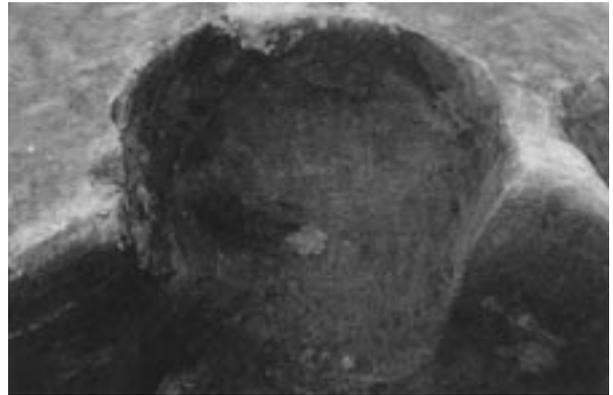
a. SK55 (東より)



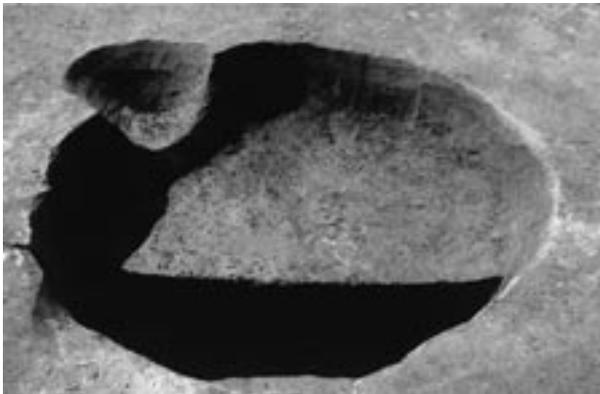
b. SK57 (北より)



c. SK59 (北より)



d. SK61 (南より)



e. SK62 (東より)

図版 17



a. SK63 (東より)



b. SK64 (北より)



a. SK65 (北より)



b. SK65 遺物出土状況 (北東より)



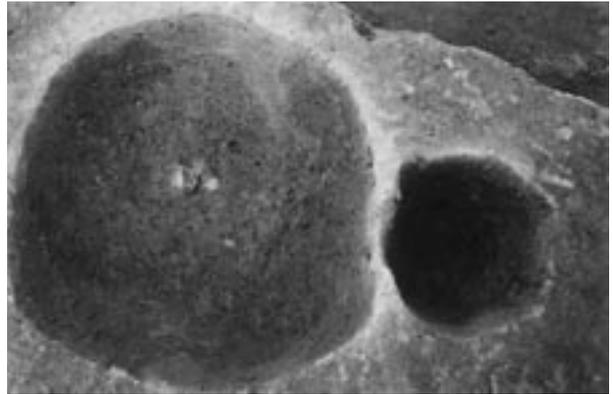
a. SK65 (東より)



b. SK65 (西より)



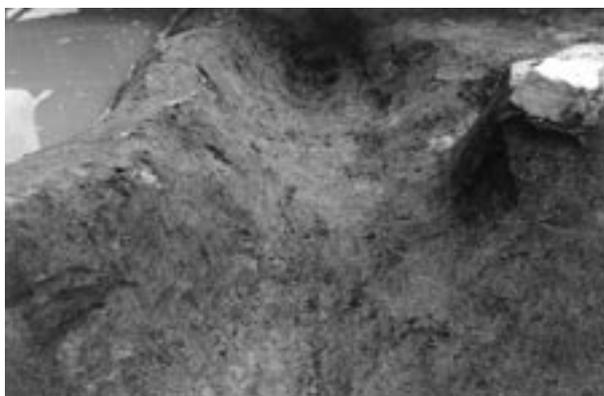
a. SK66 (東より)



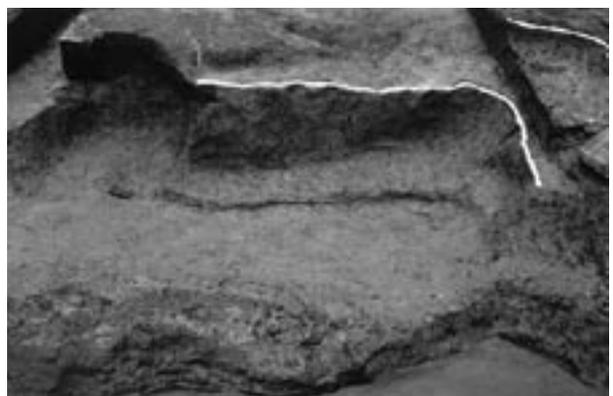
b. SK67・P81 (南より)



c. SK68 (南より)

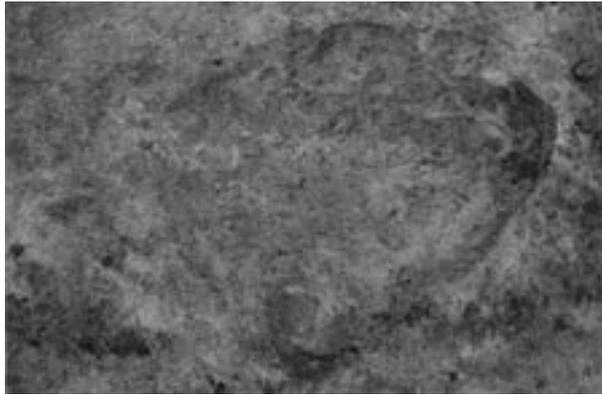


d. SK69 (西より)



e. SK70 (南より)

図版 21



a. SK71 (南より)



b. SK72 (北より)



c. SK75 (東より)



d. SK76 (北より)



e. SK77 (東より)

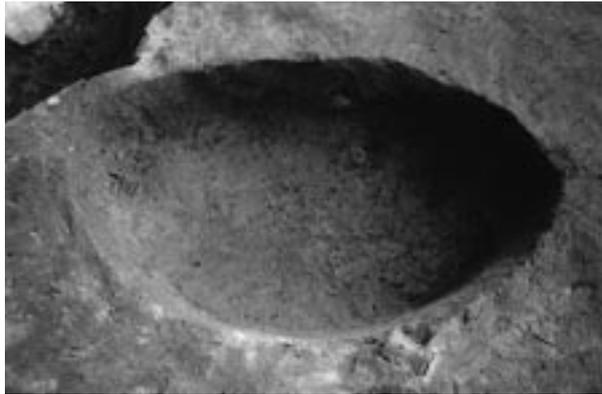


a. SK79 東西断面（北から）

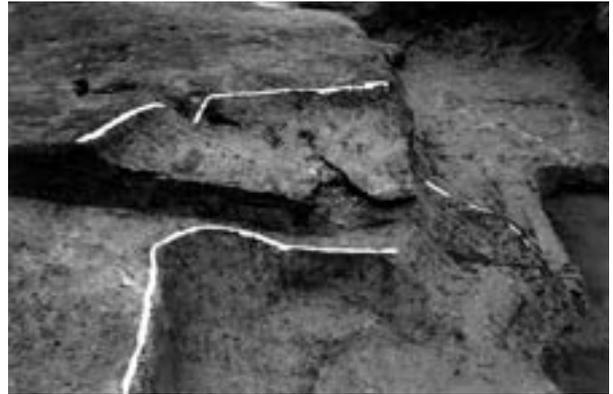


b. SK80・81・82（北より）

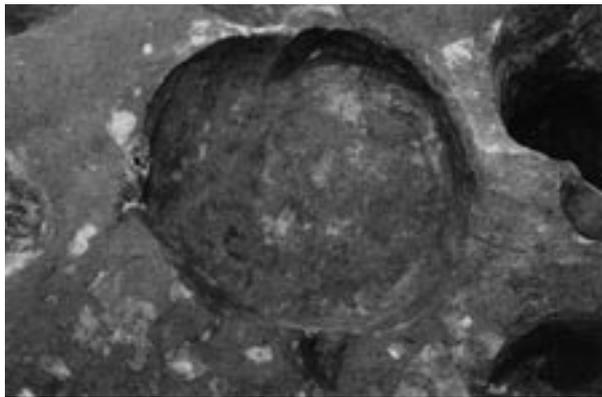
図版 23



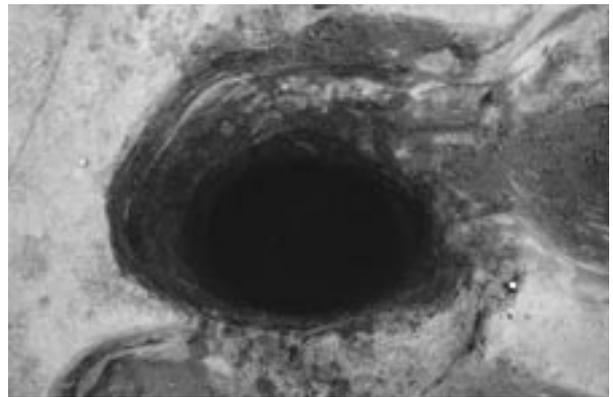
a. SK84 (北より)



b. SK90 (西から)



c. SK91 (西より)



d. SK92 (西より)



e. SK94 (南より)



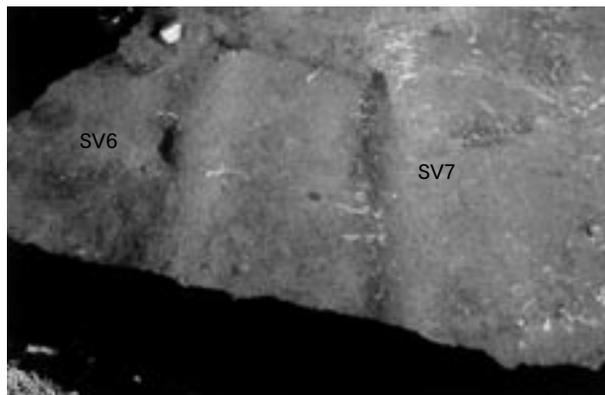
f. SK95 (西より)



g. SK96 (北より)



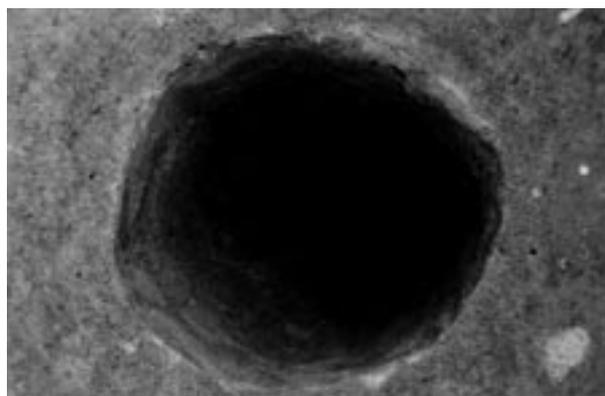
h. SK97 (南より)



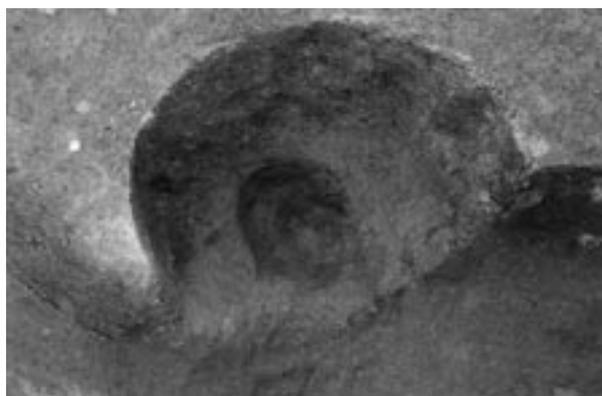
a. SV6・SV7 (南より)



b. SE1 上部分 (東より)



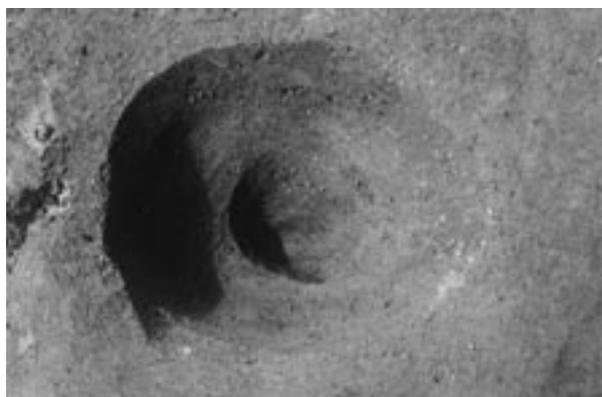
c. P73 (北より)



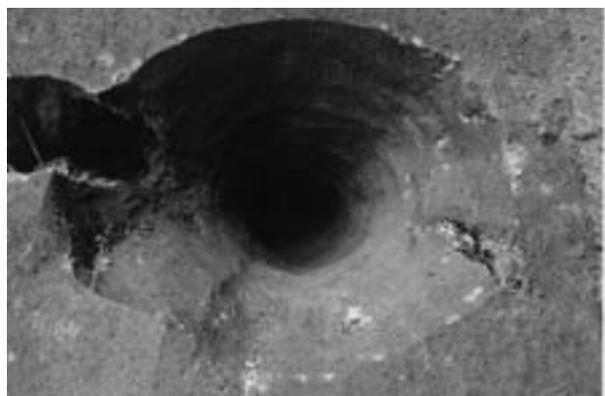
d. P74 (北より)



e. P93 (東より)



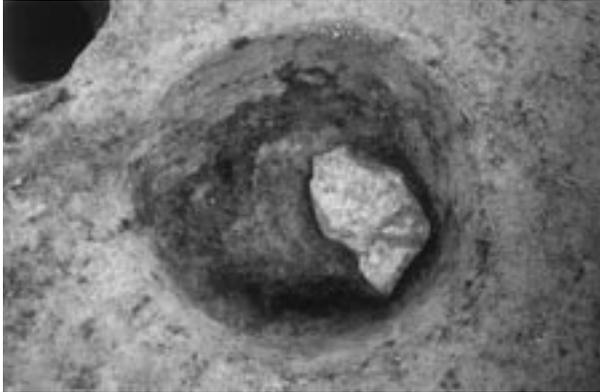
f. P94 (北より)



g. P102 (北より)



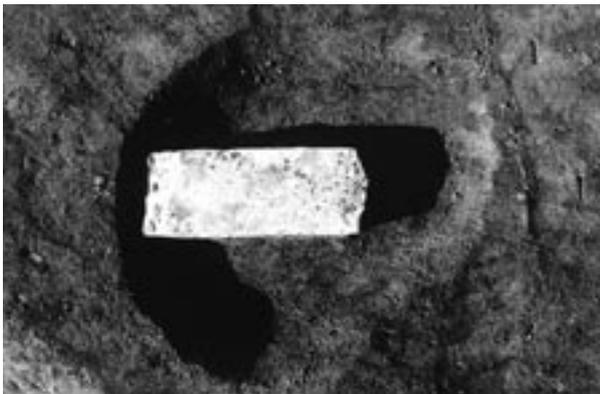
近世遺構 3 全景（東より）



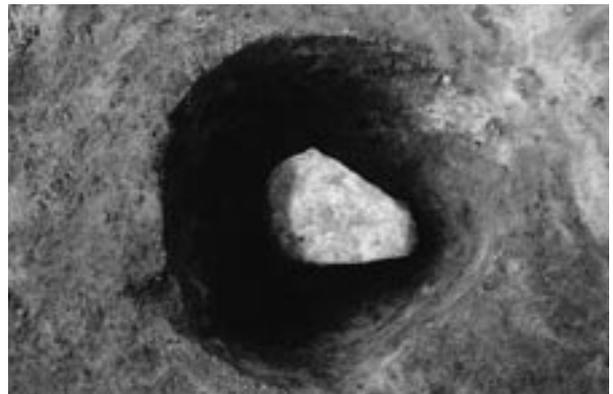
a. SA1 - P1 (南より)



b. SA1 - P2 (南より)



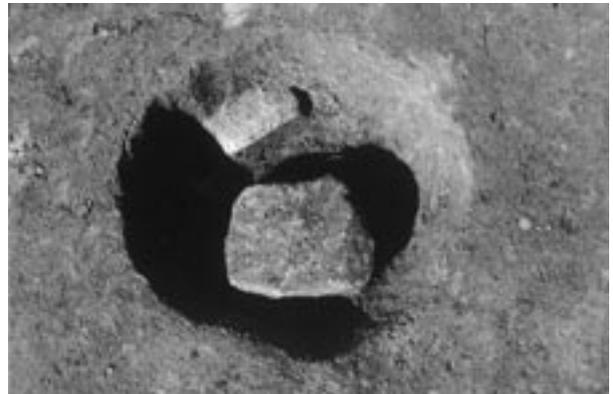
c. SA1 - P3 (南より)



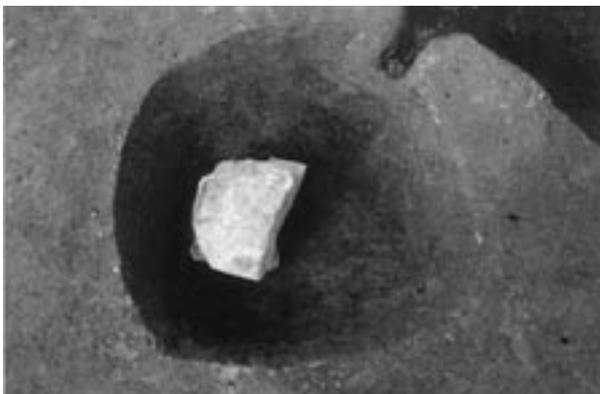
d. SA1 - P5 (南より)



e. SA1 - P6 (北より)



f. SA1 - P12 (南より)

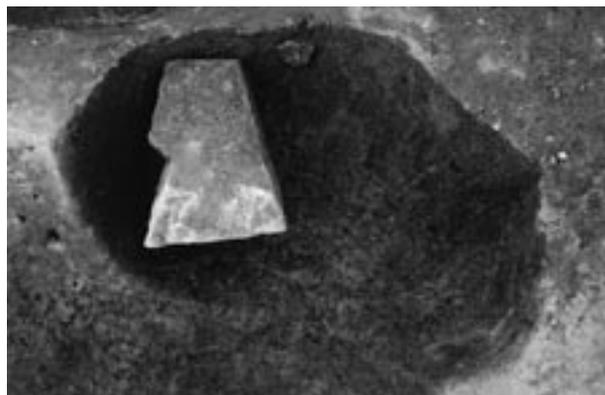


g. SA1 - P13 (南より)

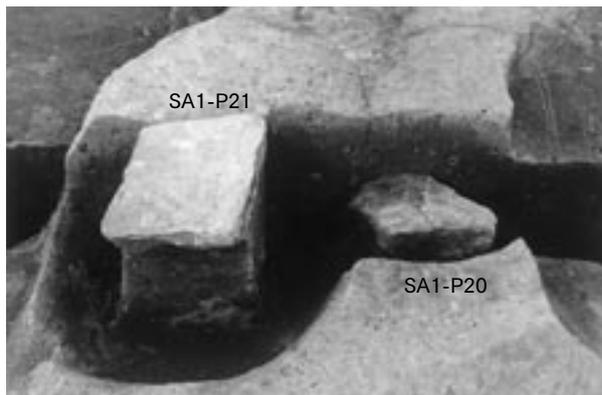


h. SA1 - P14 (南より)

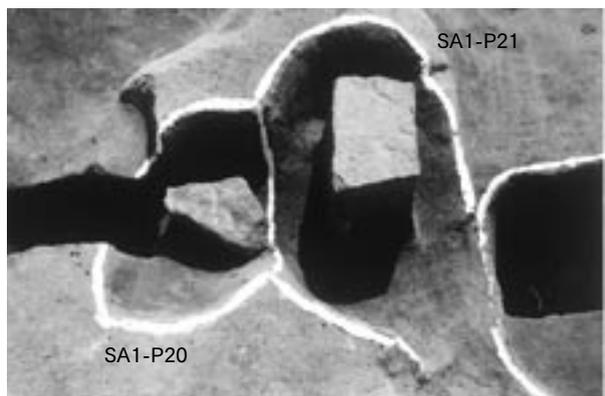
図版 27



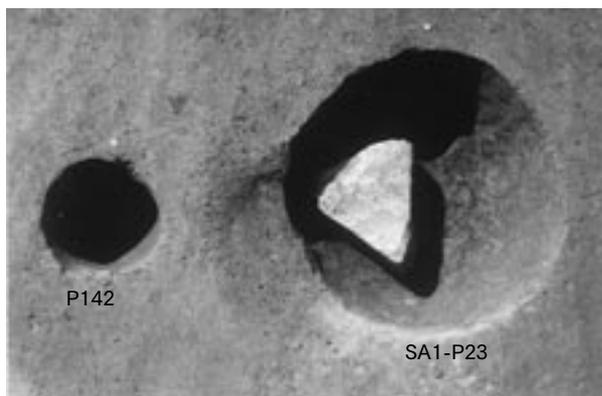
a. SA1 - P17 (南より)



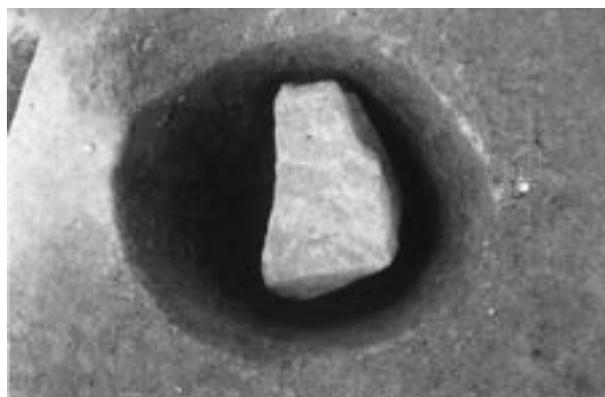
b. SA1 - P21・P20 東西断面(南より)



c. SA1 - P21・P20 (北より)



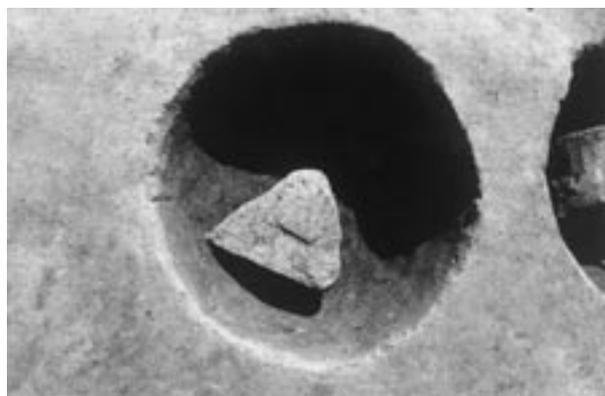
d. SA1 - P23・P142 (東より)



e. SA1 - P24 (南より)



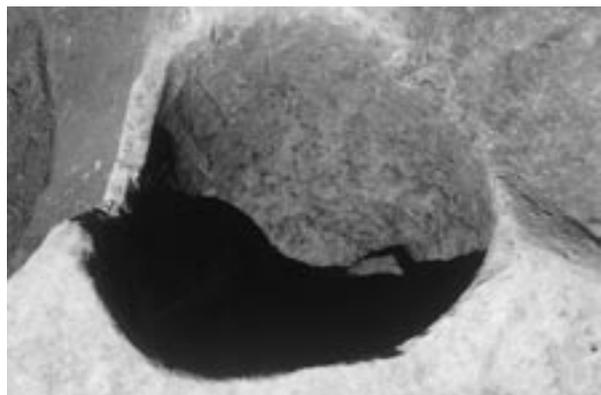
f. SA1 - P25 (北より)



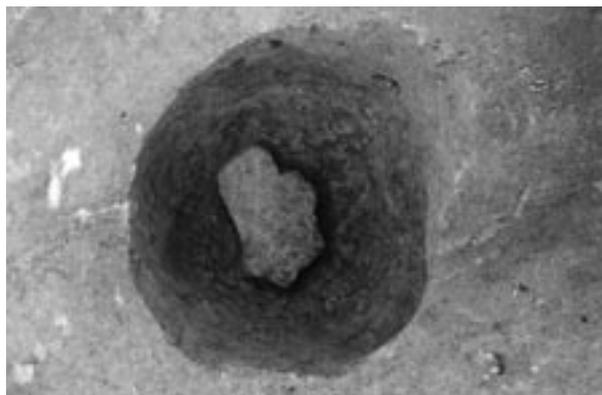
g. SA1 - P26 (北より)



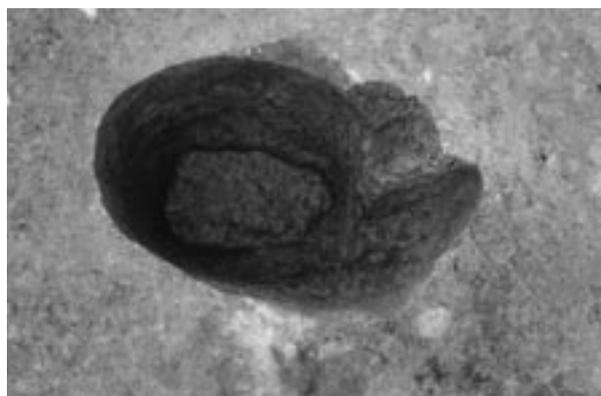
h. SA1 - P27 (北より)



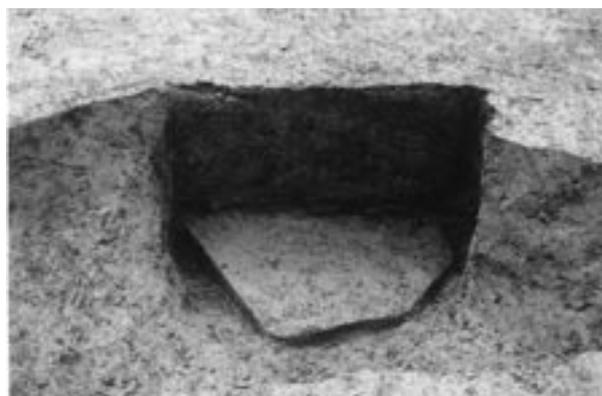
a. SA1 - P28 (南より)



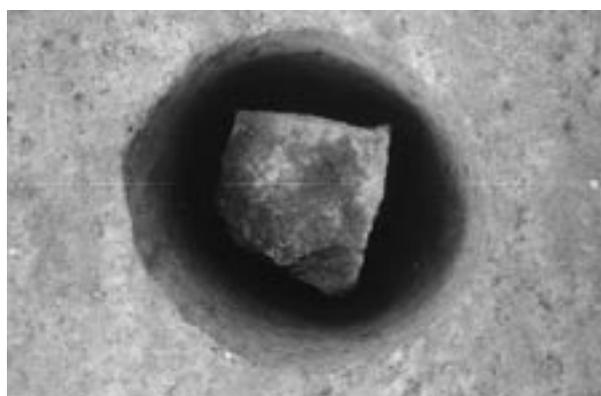
b. SA1 - P29 (南より)



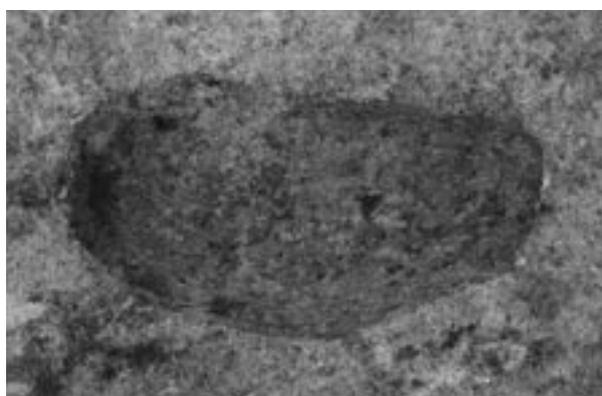
c. SA1 - P31 (南より)



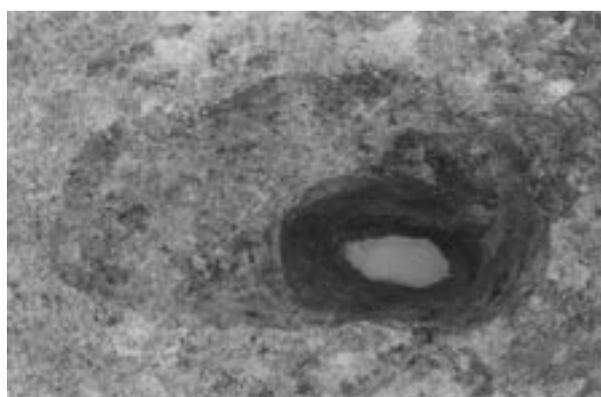
d. SA2 - P1 東西断面 (北より)



e. SA2 - P2 (南より)



f. SK102 (南より)

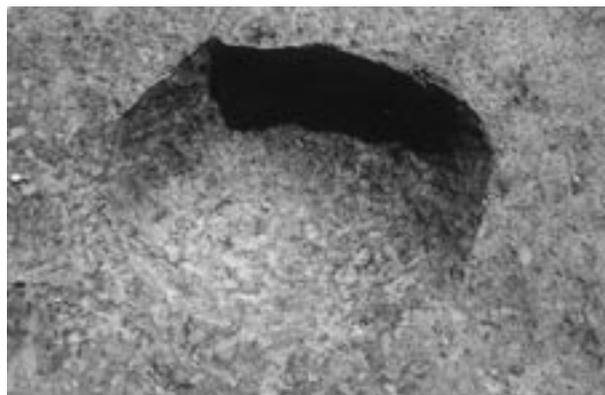


g. SK103 (南より)

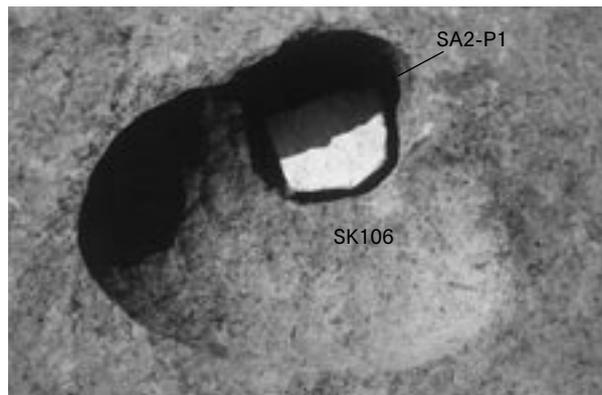


h. SK104 (東より)

図版 29



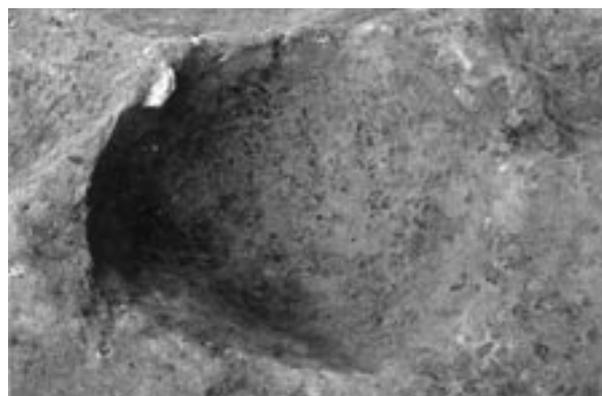
a. SK105 (北より)



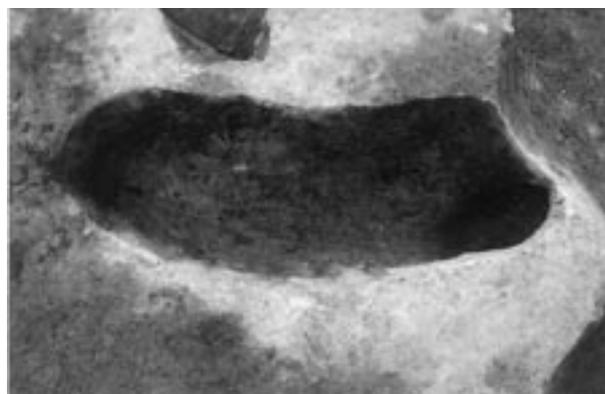
b. SK106・SA2 - P1 (北より)



c. SK107 (西より)



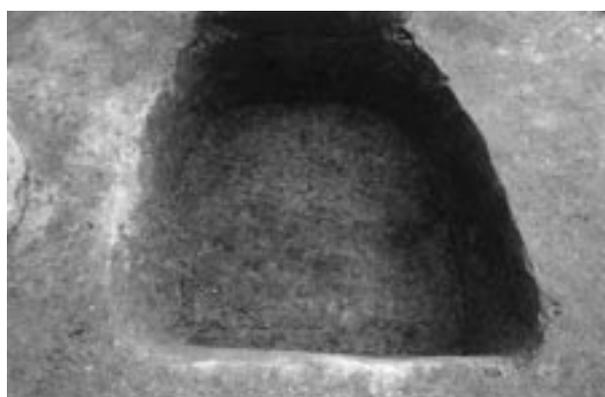
d. SK108 (南より)



e. SK109 (東より)



f. SK110 (南より)



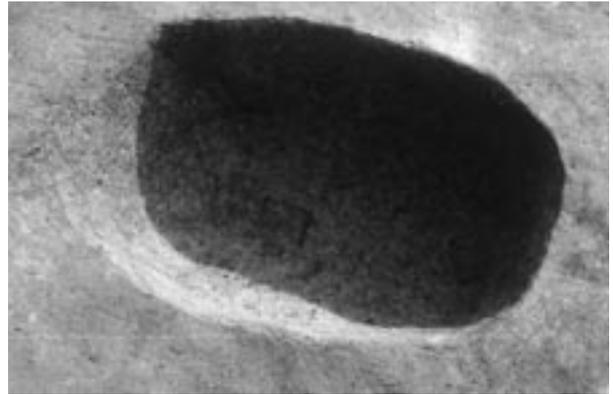
g. SK111 (北より)



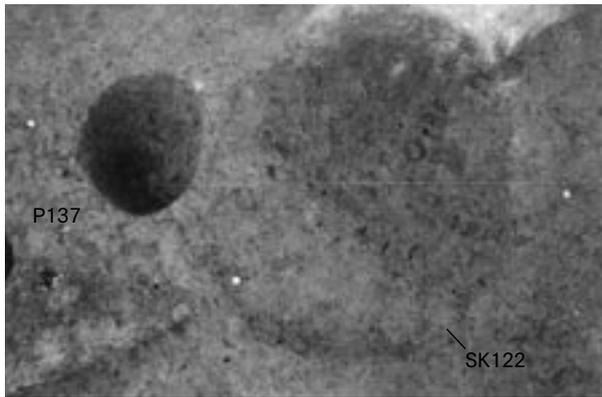
h. SK112 (北より)



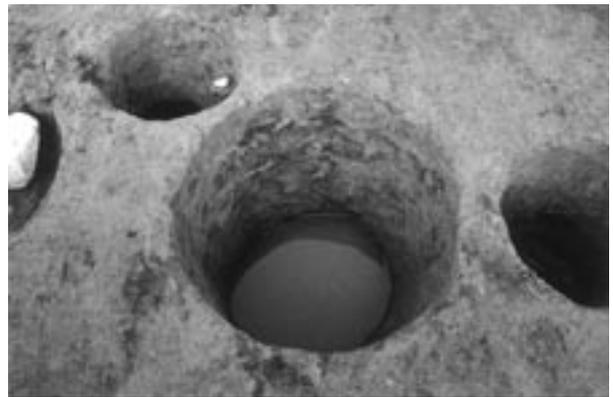
a. SK113 (南より)



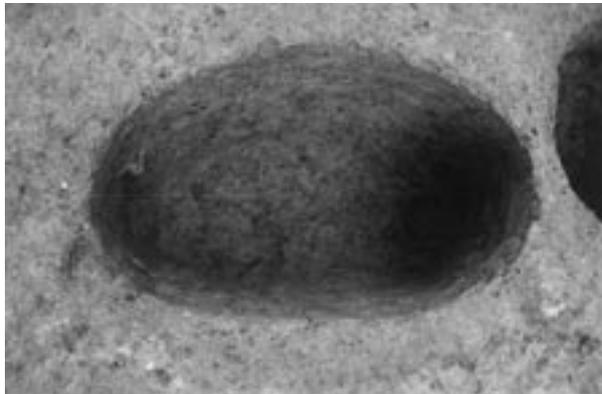
b. SK115 (北より)



c. SK122・P137 (南より)



d. SK123 (東より)



e. SK125 (南より)

図版 31



a. SK117 礫検出状況（西より）



b. SK117（北より）

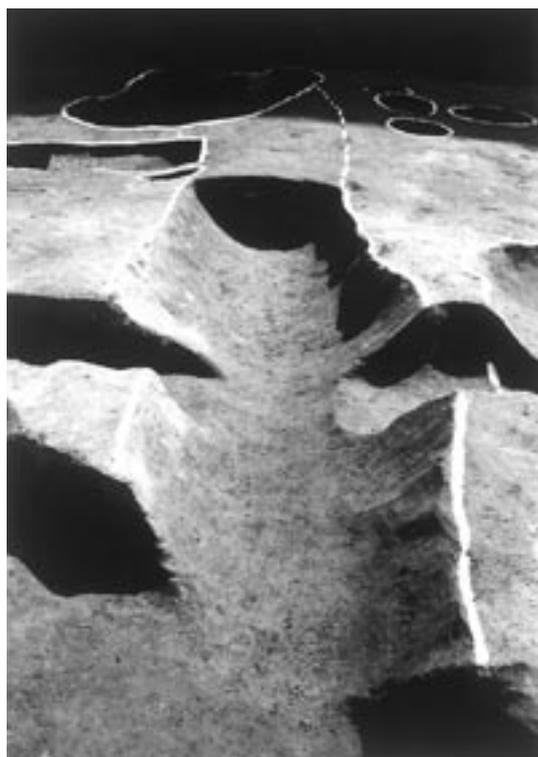


a. SK119 東西断面（北より）



b. SK119（北より）

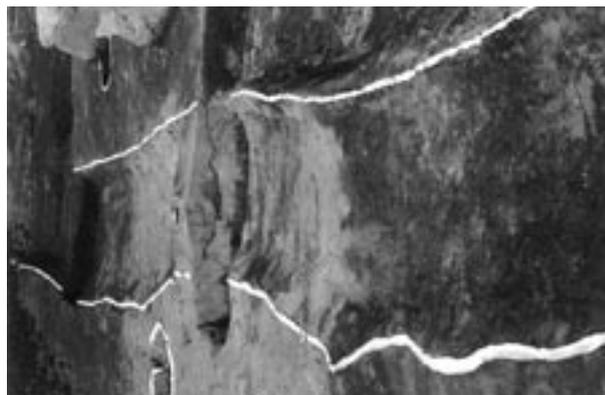
図版 33



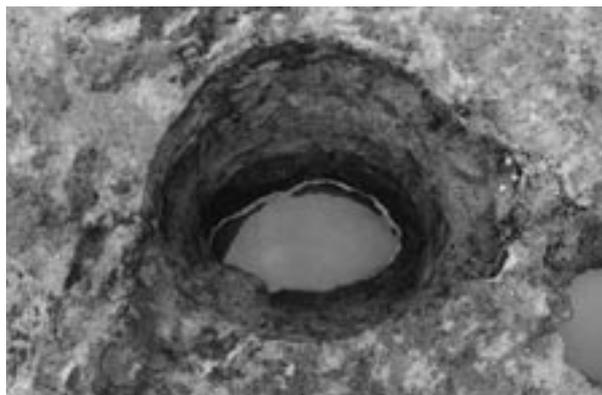
a. SV9 (西より)



b. SV10 (東より)



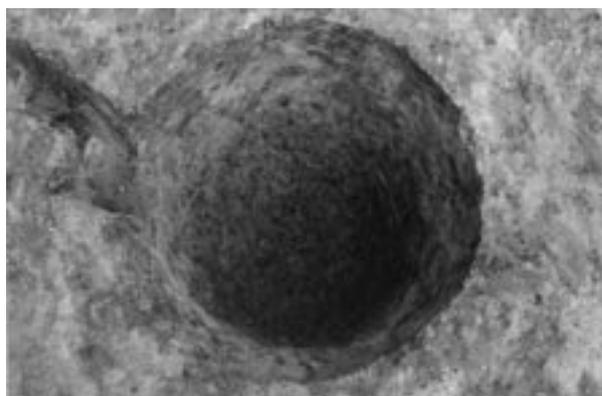
a. SV11 南北断面 (東より)



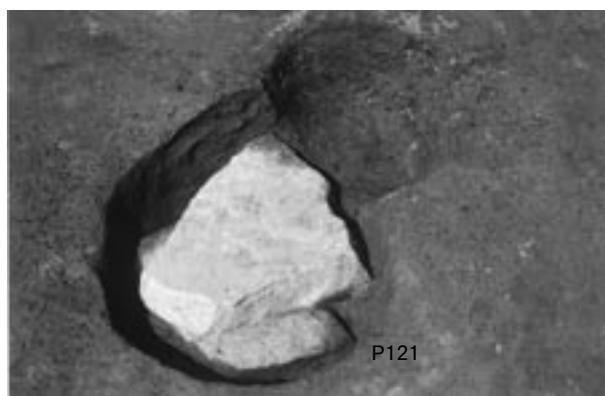
b. P105 (南より)



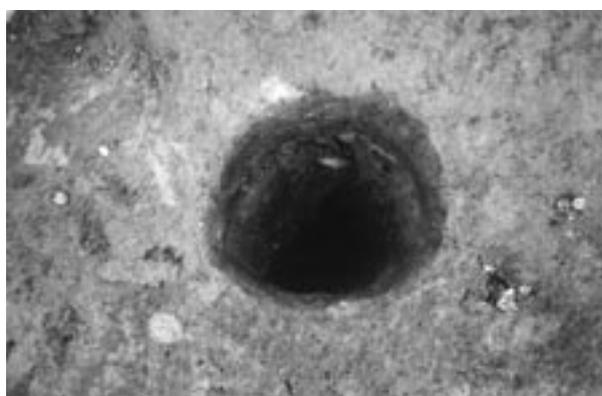
c. P110 (南より)



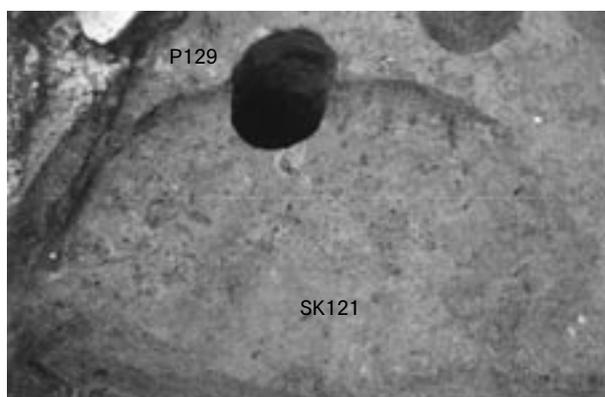
d. P111 (南より)



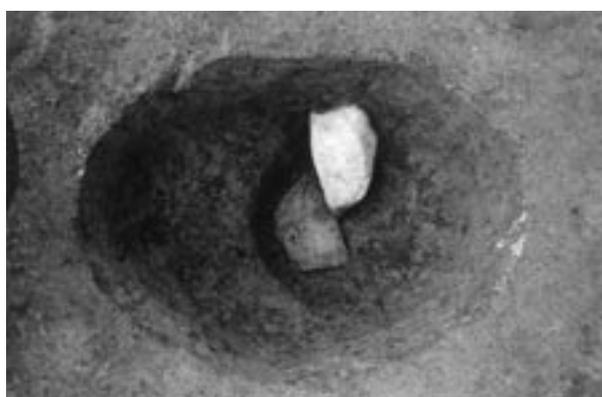
e. P120・P121 (東より)



f. P129 遺物出土状況 (南より)

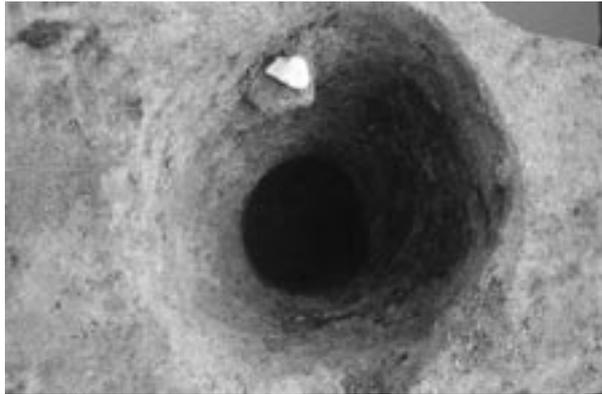


g. P129・SK121 (南より)

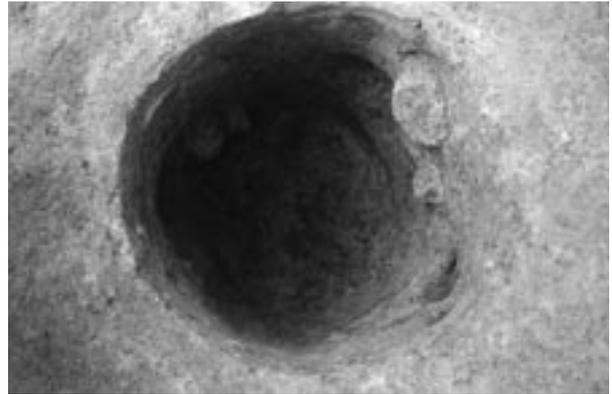


h. P136 (北より)

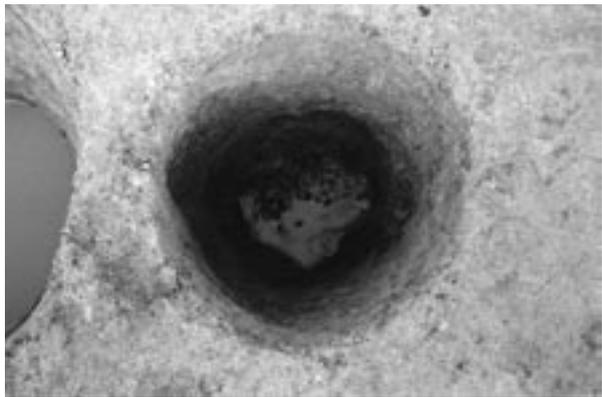
図版 35



a. P138 (南より)



b. P139 (北より)



c. P141 (東上り)



d. P143 (南より)



e. 調査区東壁面 1 (西より)



a. 調査区東壁面 2 (西より)



b. 調査区東壁面 3 (西より)

図版 37



a. 調査区西壁面 1 (東より)



b. 調査区西壁面 2 (東より)



a. 調査区西壁面 3 (東より)

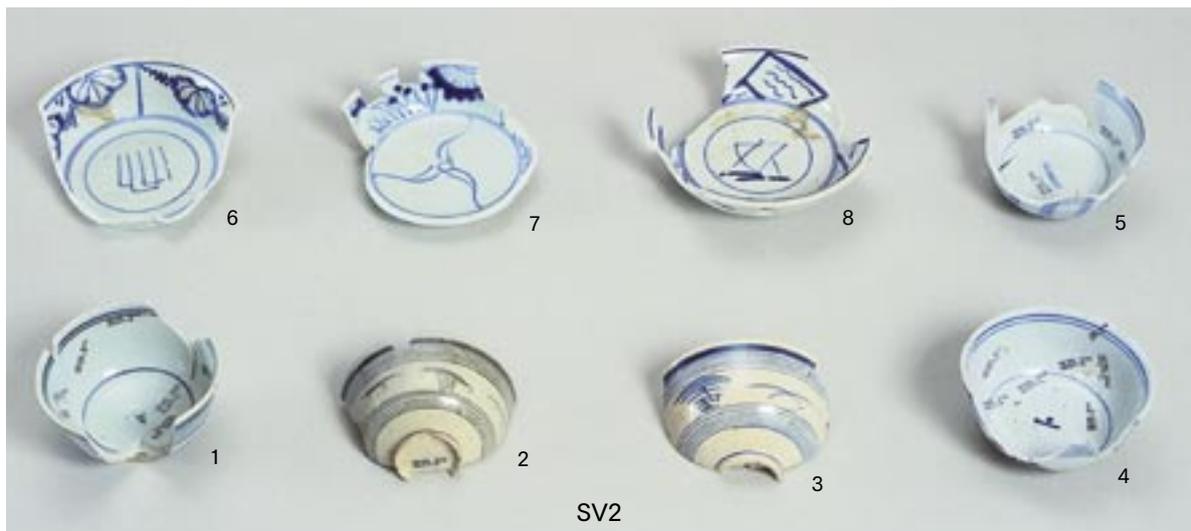


b. 調査区北壁面 1 (南より)

図版 39



a. 調査区北壁面 2 (南より)



图版 41





SK51



SK51

図版 43





图版 45



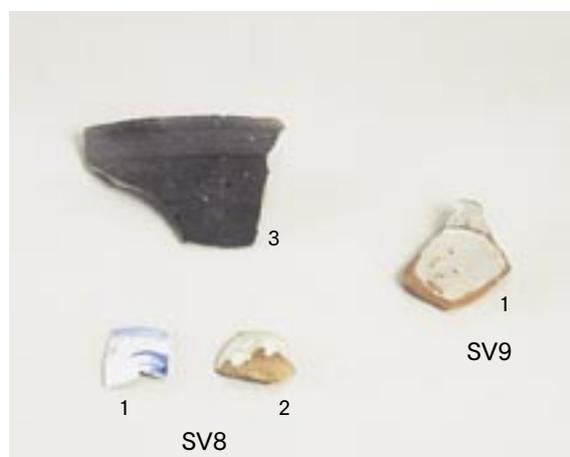
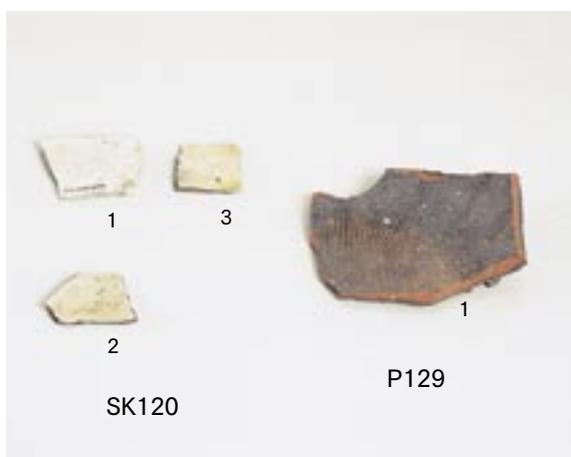
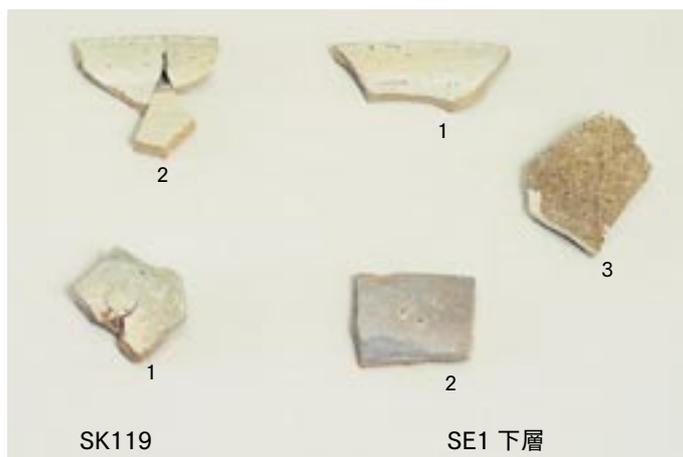


图版 47





図版 49





SK11

SK16

SK44

近世遺構 1 ベース層一括

報告書抄録

ふりがな	ひろしまじょうあとかくほかいかんちてん —ひろしましなかくひがしはくしまちょうしょざい—							
書名	広島城跡国保会館地点 —広島市中区東白島町所在—							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	川田 秀治							
編集機関	株式会社 島田組							
所在地	〒 581-0034 大阪府八尾市弓削町南3丁目20番地2							
発行年月日	西暦 2007年6月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ひろしまじょうあとかくほかいかんちてん 広島城跡 国保会館 地点	ひろしまけん 広島県 ひろしまし 広島市 なかくひがしはく 中区東白 しまちょう 島町19-15	34101	—	34° 24' 12"	132° 27' 45"	20060601 ～ 20061006	1320 m ²	国保会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
広島城跡 国保会館 地点	武家屋敷地	江戸時代	建物跡	9基	陶磁器・土師質瓦 質土器・瓦・金属 製品・銭貨など		旧道・区画割を検出	
			井戸	1基				
			廃棄土坑	126基				
			溝状遺構	11基				

広島城跡国保会館地点

— 広島市中区東白島町所在 —

2007年6月

編集発行 財団法人広島市文化財団
株式会社島田組

印刷 株式会社 旭成社
〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町1丁目5番9号
TEL 078-222-5800